山岳

LXVIII

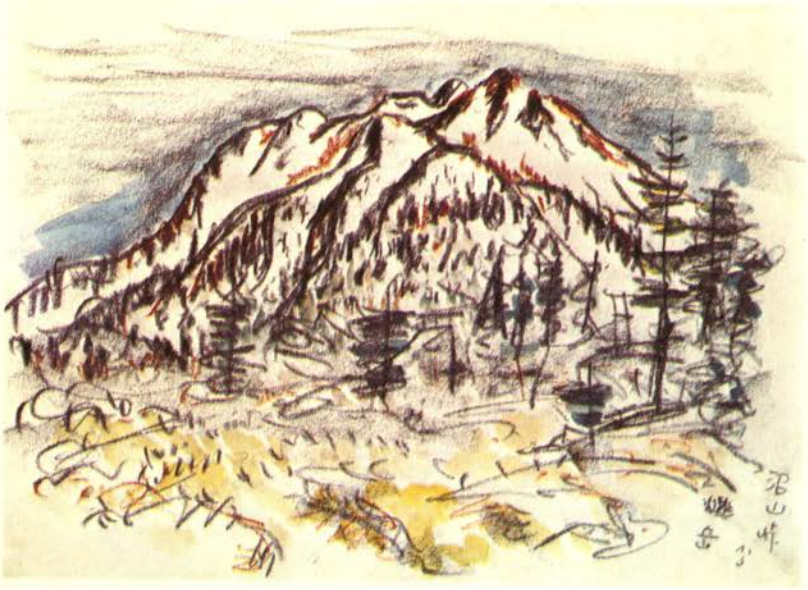
山とスキー専門店

好日山荘

好日山荘

■東京店　☎03(561)3600・(567)9031
東京都中央区銀座3-5-7 〒104
スキーショップ　☎03(561)0966
■吉祥寺店　吉祥寺近鉄５Ｆ
東京都武蔵野市吉祥寺本町1-19-1
☎0422(21)3331(代)内線3318

■大阪店　☎06(364)0933(代)
大阪市北区曽根崎上1-47 〒530
登山プロショップ　芳沢ビル１Ｆ
スキープロショップ　マルビル１Ｆ
豊中市千里中央"セルシー1F"　☎06(833)0123
■福岡店　☎092(281)3440
福岡市博多区須崎町1-4 〒812



沼山峠から燧岳　　川喜田壯太郎画

山岳

第六十八年

山岳　第六十八年　目次　（一九七三年度）

ヤルン・カン初登頂（一九七三年）……樋口明生　一
ナンパ初登頂（一九七二年）……松島静吾　三
ガンガプルナ（一九七一年秋）……清水澄　三六
コルディエラ・レアル（一九七二年）……川久保芳彦　四六
秩父宮殿下の思い出……アーノルド・ラン　成瀬岩雄訳　五四
アルプスのあの日あの時……佐藤久一朗　五八
スイス・赤毛布の旅……成瀬岩雄　七〇
伊藤孝一氏の足跡……上田竹三　一〇〇
［付］積雪期北アルプス縦走の新資料……山崎安治　一〇六
石井鶴三先生のこと……小野幸　一〇七

追悼

鳥山悌成氏（松本善二）　田部重治氏（茶谷東海）　佐々木健太郎氏（佐藤テル）　山下一夫氏（渡辺公平）　小平潔氏（藤島敏男）　川喜田壮太郎氏（藤島敏男）　足立源一郎氏（松本熊次郎）　荒巻広政氏（福田文二）　諸岡一次氏（小野幸）　三井松男氏（百瀬舜太郎）　木津誠一氏（若林啓之助）　岡村精一氏（山崎安治）　井本貴子氏（須田紀子）　垣内政彦氏（山崎安治）……一三一

『遥かなる未踏の尾根』（中島寛）　『マナスル西壁』（松永敏郎）　『山の思想史』（辻荘一）　講座『探検と冒険』（渡辺興亜）　『ヒマラヤ関係図書目録』（松田雄一）　『ザイルを結ぶとき』（阿部和行）　"Travels amongst the Great Andes of the Equator"　……一六八
"Ney Elias"　"Antisuyo-The Search for the Last Cities of the Amazon"　"Vilcabamba-Last City of the Inca"（吉沢一郎）

図書紹介

会務報告（一九七二年七月～一九七三年六月）……一九三

日本山岳会定款および細則……二〇五

英文梗概……巻末　一

写真

ヤルン・カンに関するもの　五枚（内折込一枚）
ナンパに関するもの　五枚
ガンガプルナに関するもの　三枚
コルディアル・レアルに関するもの三枚
「アルプスのあの日あの時」に関するもの　五枚（本文中）
「伊藤孝一氏の足跡」に関するもの　三枚（本文中）
［追悼］名誉会員鳥山悌成氏、名誉会員田部重治氏、石井鶴三氏、佐々木健太郎氏、山下一夫氏、小平潔氏、川喜田壮太郎氏、足立源一郎氏、荒巻広政氏、諸岡一次氏、三井松男氏、木津誠一氏、岡村精一氏、井本貴子氏、垣内政彦氏

地図・図版

沼山峠から燧岳　川喜田壮太郎画（巻頭色刷）
ヤルン・カン周辺図
ヤルン・カン登頂ルート図
ナンパ近傍図
ガンガプルナ　スケッチ図
コルディアル・レアル近傍図
石井鶴三画　カット、はがきなど　九点

表紙カット　山里寿男

ヤルン・カン初登頂（一九七三年）

樋口明生

はじめに

京都大学学士山岳会は、一九七三年五月十四日、ネパール・ヒマラヤにある未登の最高峰ヤルン・カン（八五〇五メートル）の初登頂に成功した。概要を述べる。

京都大学学士山岳会（AACK）とヤルン・カンとの具体的な関わり合いは十年前にさかのぼる。もっとも、ヒマラヤの八千メートル級の高峰に登りたいという願いは戦前からあり、古い先輩達は果し得ぬ夢に熱中していた。戦後、ネパールの鎖国が解けて間もなく、一九五二年に会員の一人西堀栄三郎は、長年の夢を果すためにいち早くネパールを訪れ、王族をはじめ政府高官と親しく接し、その可能性を調べた。その成果としてマナスルの登山許可を取得し、同年秋には今西錦司を隊長とするマナスル踏査隊が派遣され、北側からのルートを見つけてきた。しかし、当時のAACKにとって、マナスルは大物すぎるということもあって、この計画は日本山岳会に譲られる結果になった。

その後、われわれの目は西の方に向けられ、カラコラム、ヒンズークシュで活躍していたが、一九五八年チョゴリザ（七六五四メートル）、一九六〇年ノシャック（七四九〇メートル）、一九六二年サルトロ・カンリ（七七四二メートル）と、三

回連続初登頂の記録を作ったＡＡＣＫの中には、いよいよ念願の八千メートル峰を試みる機運が漲っていた。たまたま一九六四年の夏、アンナプルナ南峰初登頂をめざして、京都大学山岳部が派遣した隊の隊長としてカトマンズに居た私は、ネパール政府から、翌年プレ・モンスーン期のヤルン・カン（当時はカンチェンジュンガ西峰と称した）への登山許可証を入手することができた。ところが十月になって、その登山許可が取り消されたため、当時の隊長予定者であった舟橋は、ただちにネパールに飛び、再考慮を促したが果せず、登山を終えてカトマンズに戻った私がその後を引き継ぎ、デリーに出てから交渉のためシッキムへの入国許可申請をしたが、これもとうとう時間切れで果たせなかった。その後、毎年登山許可申請を繰り返すとともに、機会あるごとに会員の誰かがネパールを訪れ、計画の早期実現を願っていた。

ネパール政府は一九六五年以来、全面的登山禁止令を敷いてはいたが、山麓の旅行（トレッキング）は可能であった。京都では木曜会と称して、毎週木曜日に熱心な若手連中がルームに集まり、議論を重ねていたが、登山禁止令の中で、手を束ねて待っているだけではつまらないので、許可取得を兼ねた偵察隊を出そうということになり、一九六七年四月、私と松田との二人の偵察隊がネパールに向った。結局、許可は得られなかったが、せめて偵察だけでもしておこうということで、トレッキングの許可を取り、ヤルン氷河に入り、ルートの偵察を行なった。その結果、ヤルン・カンの西稜から派生して、ハンプに続く尾根を通って登れそうだという結論に達した。

それまでに、何度か糠喜びをさせられてきたわれわれは、昨年の夏に、いよいよ許可が出そうだという話を聞いた時にも、またか、と思っていた。ところが、今度はどうも今までとは様子が違う。どうやら本物らしいということになり、早速、申請書を再提出し、井上をカトマンズに派遣し、十月九日には正式の許可証を手にすることができた。

出　発　ま　で

手にしたのは一九七三年のプレ・モンスーン期の登山許可であるから、逆算すると年内には装備・食糧等の船積みを完了せねばならない。十年来の計画とはいうものの、実際の準備というのは、いざ許可が出てから始まるのが現実である。正式の許可証を手にしてから、船積みまで二ヵ月半しかない。隊員決定、装備、食糧、資金の調達、酸素の手配、シェルパのアレンジ等々、出発までにしなければならないことは山ほどある。それからというものは、大車輪であった。

早速、理事会が開かれ、実行委員会が結成され、実行委員会は隊員選考委員会、募金委員会、および各自の分担を決めた。最終的には隊員は十五名になった。

装備、食糧については、調達期間が短いこともあって、特筆するような新しいものは用意しなかった。資金面では諸先輩をはじめ方々でお世話になった。酸素は、日本製一一〇本、フランス製二四本を用意した。実際には、カトマンズでフランス製九本を手に入れ予備として持って行ったから合計一四三本ということになる。シェルパについては、昨年秋許可取得のためにカトマンズに出向いた井上が、カルマをサーダーにするようアレンジしてきた。

結局、船の都合で多少遅れたが、本年一月七日に船積みを行ない、先発隊四名は荷受けのために一月二十四日羽田を発った。残る十一名の隊員は、二月七日伊丹から出発した。

隊の構成

最終的に決定した隊の構成は、つぎのとおりである。

隊　長　西堀栄三郎（六九歳）
登攀隊長　樋口明生（四三歳）
医　師　斎藤淳生（四三歳）

隊　員　田附重夫（三八歳）富田幸次郎（三三歳）吉野熙道（三二歳）松田隆雄（三一歳）神山義明（三〇歳）上田豊（二九歳）浅野潔（二八歳）井上治郎（二七歳）甲斐邦男（二五歳）森本陸世（二四歳）高木真一（二三歳）松沢哲郎（二二歳）

連絡将校　ダマン・ナラシン・ラナ（二三歳）
サーダー　カルマ（三九歳）
コック　アン・ギャルツェン（三三歳）
シェルパ　ミンマ・ツェリン（三九歳）ニマ・ノルブ（二三歳）アン・ハクパ（二八歳）ピンゾー（三二歳）ナワン・チョンビー（三八歳）ミンマ・ノル（三〇歳）パサン・ダワ（三二歳）ラクパ・ギャルー（二二歳）ニマ・ドルジ（二二歳）
ローカル・ポーター　プル・テンバ（二五歳）以下十五名、キッチン・ボーイ　二名、メール・ランナー　四名

キャラバン

カトマンズで必要な手続を終え、空路ビラトナガールに着き、カルカッタから陸送された荷物とともに、陸路キャラバン開始地であるダラン・バザールに到着した。キャラバン中に必要な現地食を加えると、荷物の重量は十二トンを超えた。

ポーターの都合で隊を三つに分け、二月二十日、隊員十二名、ポーター三百五十名余りの第一隊がダランを出発した。シェルパ一名とポーター約五十名からなる第二隊は翌日出発、次の日には第一隊に合流した。第三隊は隊員三名、ポーター約五十名で、二十二日に出発、八日目にタプレジョンで全員合流した。

ダランを出ると、すぐ登りにかかり、峠を越えて一旦河原に降り、二日目には、この地方の中心地、ダンクタに着く。道はここからアムール河とタムール河とを分ける稜線沿いを走る。二千メートルの尾根道のキャラバンは快適で

ある。五日目の朝、シトワの先で尾根を回りこんだ所から、初めてヤルン・カンが見えた。隊員一同感激する。エベレスト、マカルー、チャムランも見える。そのあたりから尾根道と別れ、タムール河寄りの中腹を行く。

登り降りの多い道を通って、二月二十八日キャラバン開始後九日目に、タムール河の本流にかかる吊橋を渡り、タプレジョンに着いた。第三隊は尾根通しに飛ばしてきたため、吊橋の所まで来ていた。翌日タプレジョンの町を通り抜け、尾根に出た所で全員合流した。ここでポーターが寒いから帰りたいと云ってもめ出し、夜遅くまで不穏な空気がただよった。結局一部は解雇し、新しいポーターを傭い、ここから最奥の村ヤンポディンまでは、隊を三つに分けて荷物を運ぶことになった。三つの隊は翌日から、一日ずつ遅れて出発し、それぞれ三月五日、六日、七日にヤンポディンに着いた。

ここから先の輸送が問題である。峠を二つ越えてシンバ・コーラに入り、ツェラムからヤルン氷河を通ってベース・キャンプという順である。朝テントから顔を出すと、まわりの山は雪で真白である。峠はさぞかし雪が深いことだろう。三月八日に神山と浅野が先行して、道をつけに出かけた。翌日、松田は連絡将校とともに、氷河上の輸送用のポーターを確保するために、グンサ、ワルンチュンの方に出かけた。ヤンポディンからの輸送第一隊は、十日に出発、途中二泊して中継基地ツェラムに着いた。三五〇〇メートルの峠は案の定深い雪におおわれていた。ポーターに貸与する靴が百二十足しかなかったので、リレー式に荷上げをし、終了したのは十九日である。

一方、ツェラムから上部の偵察は十六日から開始され、十八日着いたワルンチュンのポーターを含めて、十九日から荷上げが始まった。中継キャンプを三つ設営し、ピストン輸送の末、二十九日にはヤルン氷河上、五二一〇メートルの地点にベース・キャンプが出来上った。四月二日には西堀、田附を除く全員が、ベース・キャンプに集結した。

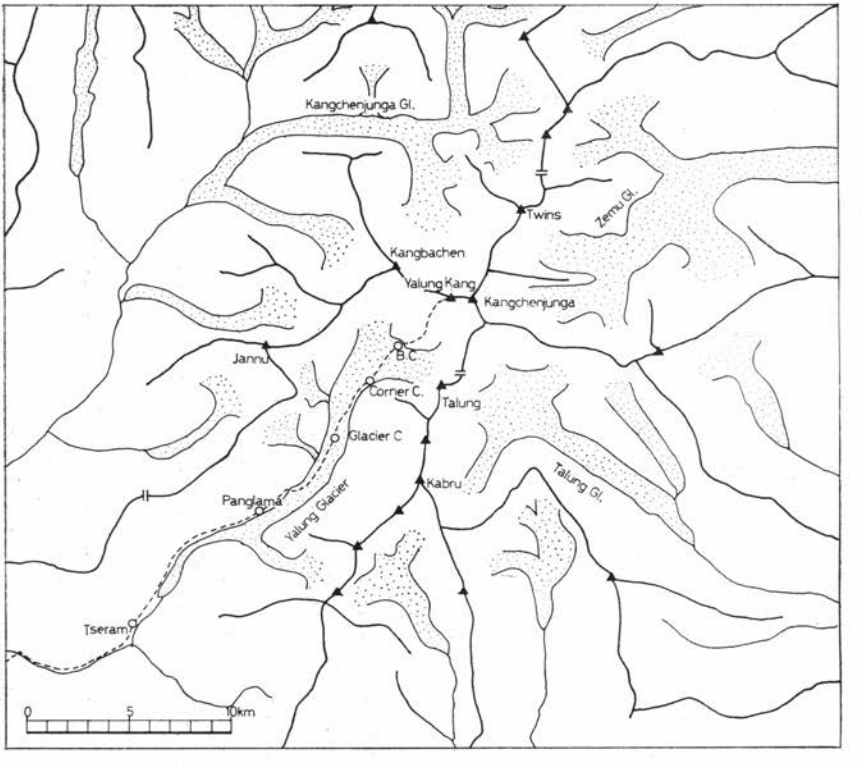
登　攀

京都で立てた登攀計画はつぎのようである。すなわち、ルートは偵察隊が探してきた西尾根ルートをとる。その場合、ベースから上に前進キャンプを六つ作る必要がある。登攀期間を二期に分け、前期は実動三十一日でC5まで作って、C6の位置を決定するまでとし、その後いったんBCに降りて数日間の休養をとり、後期に入ってからC6を作り一気に頂上に達する。後期の実動日数は十四日である。酸素は隊員はC4以上、シェルパはC5以上で使用することとし、標準使用量は行動中は毎分二リッター、睡眠中は一リッターとする。C6以上ではフランス製を用いる、というのである。

BCから上の偵察は、すでに三月二十八日から始まっていた。この日には、松田と神山がハンプにかかる雪面の上部に達し、三十日には、そこから小さい氷の滝を越えて尾根の上に、C1予定地の旗が立った。ハンプの雪面の下半分はクレバス地帯で、小さいものは、またぎ、大きいものにはジュラルミンの梯子をかけた。ヒドン・クレバスも多かった。日が経つにつれてクレバスが広がることを予想して、ツェラムから架橋用の丸太を上げさせることにした。結局その後十日間ほどで三十本の丸太がBCに届いた。

二日間のルート工作ののち、四月二日からC1への荷上げが始まった。クレバスには橋がかけられ、必要な所にはロープが固定されていた。二日の夕方には、ツェラムに滞在中の西堀隊長を除く全員がBCに集結し、前途を祝して乾盃した。その夜はシェルパも一緒になって火を囲み、輪になって踊った。

翌三日には、予定通りヤルン・カン西稜から派生する尾根の上、標高五九五〇メートルの地点にC1を建設し、神山、浅野が入った。次の日からC2への偵察を始めた。C1からC2へは、尾根沿いに登るのであるが、そこの氷の状態は一九六七年の偵察の時と較べると、非常に悪くなっていた。ここは年層の露出した氷壁が幾重にも重なり合っ



キャラバン・ルート Caravan route

ている所で、後の荷上げのことを考えて、なるべく直登を避けて、右に左に氷壁をかわしながらルートが着けられた。C2直下の氷壁には、ジュラルミンの梯子とワイヤー梯子が固定された。四月九日にC1からの荷上げが始まり、十三日に標高六四七〇メートルの尾根上にC2が建設され、吉野、浅野が入った。ここはハンプとのジャンクションのあたりである。

この間、四月九日にシェルパが一人、C1で急性肺炎にかかったため、酸素を吸わせて待たせておき、斎藤ドクターは夜中にBCから上って手当をした。次の日、一日中酸素を吸わせて様子を見たが、よくならないので、十一日には寝袋に入れて梯子にくくりつけてBCまで降した。このため登山活動は丸二日停止した。

一方、四月六、七、八の三日間、私と上田とはBC付近で測量を行なった。その結果によると、ヤルン・カンは八五〇五メートルであり、南峰より一四メートル高いことがわかった。またルート上の必要な地点の標高も求めた（詳細は付録参照）。

C2からC3へは尾根沿いに直登せず、西の方、カンバチェン側に迂回するルートを取った。この間の氷の状態が悪かったからである。三回にわたる偵察とルート工作ののち荷上げを行ない、十九日には六九九〇メートルの地点にC3を建設、富田、甲斐が入った。計画にはなかったが、初めてC3に入った隊員は最初の晩だけ睡眠中、毎分〇・五リッターの酸素を吸うことにした。

丁度この日、ツェラムから四日がかりで西堀隊長がBCに着いた。田附とダマンが一緒に来た。その夜は隊長を囲んで乾盃し、メス・テントの中では夜遅くまで話がはずんだ。隊長は三日間BCに滞在し、最後の晩にトランシーバーで上部キャンプに激励の言葉を放送して、再びツェラムに下った。

C3から二回上部の偵察を終えた富田、甲斐に代って、二十二日には松田、森本がC3に入り、偵察を続けた。二十三日は朝から雪であった。二人に代って二十四日にC3に入った吉野、浅野は二十六日、七四四〇メートルの地点

にC4を建設して泊った。C3からC4へは尾根沿いに直登するが、この辺りになると勾配が相当きつくなり、目の前に見えても、なかなか行き着けない。

二十七日の午後は雷がひどく、トランシーバーによる交信は中止した。この日は夕方から大雪となり、C2では二十センチの積雪があった。このため翌日には各所で雪崩が発生した。

二十八日にC4に入った上田、甲斐は、翌日C4から尾根沿いに直登し、七七〇〇メートル付近から東にトラバースを始め、七九三〇メートルの地点に達した。ここは後にC5を建設した所である。その後をうけて松田、森本は五月一日に、C4から偵察に出たが、天候が悪く先の地点まで到達できなかった。

予定通りC5を作るところまで行かなかったが、後期のことも考えて、C5予定地を決めたところで一応前期を終了し、全員BCに下って休養をとることにした。休養期間は人によって異なり短かい者は一日、長い者は五日であった。BCでこれまでの荷上げ量を調べたところ、予定していただけ荷物が上っていないことが明らかになった。これはC1、C2間の氷の状態が、かなり悪くて、荷上げに手間どったことと、一般にシェルパとローカル・ポーターが期待していたほど強くなかったためである。

前期で、予定通りの荷が上らなかったので、休養中に作戦を練り直すことになった。京都ではアタックを三回試みる計画を立てていたが、これを二回に減らし、必要最少限の軽装備にして、できるだけ早く登る。あまり期待はできないが、もし可能なら、期間短縮ができるかもしれない稜線ルート（C5からまっすぐ稜線に出て、これをたどる）も考慮する。C6建設のため全力を注ぐが、間に合わなければC5からのラッシュもあり得る。第一次攻撃隊員は松田、上田の二名とする。というようなことを全員に発表した。

後期は五月三日から始まった。まず、前期に腹痛のためC3までしか上っていない神山が、高度順化のため三日にBCを出発した。続いて四日には浅野が、五日には富田と甲斐がBCを発った。シェルパも順次上った。彼等は火を

焚いて、その煙で身を清めてから出かけて行った。六日には残りの隊員七名が出かけ、翌七日には斎藤ドクター、井上がC1に上ったため、BCには私一人が残るはずであったが、実際にはこの日、会員の中尾がBCを訪れたので二人になった。午前中、ジャヌー東面を一気に二千数百メートル落ちる大雪崩があり、BC付近はそれを受けて真白になった。

五月八日、C4に入る予定の神山は、再び腹痛をおこして途中から引き返し、ドクターのいるC2まで下った。前期にC1でたおれたミンマ・ノルも、C3から荷上げの途中おかしくなって引き返し、酸素を吸って静養した。

五月九日、C4から出た浅野、甲斐は、強風のため難渋し、C5予定地まで到達できずに引き返した。ミンマ・ノルは高木に付き添われてC2に下りた。夕方の交信でC4の富田から、今朝は非常に風が強かったので、偵察隊の出発が遅くなった。現在も風が強くてテントの外に出られない。この分だと明日C5まで行けるかどうかわからない、と云って来た。一応明日の予定として、富田、森本がシェルパ二名、ローカル・ポーター二名とともにサポートし、浅野と甲斐がC5に入るよう指示した。この頃には日本から日々の天気予報が入るようになっていたが、それによると今年はモンスーンの到来が例年より少くとも十日は早く、十二日から十四日の間が、登頂のラスト・チャンスになるかも知れない、ということであった。

翌十日、案の定朝から風が強くてなかなか出られず、C4を出たのは九時半になってからであった。彼等は七七〇〇メートル付近からトラバースにかかり、C5予定地に達しようとしたが果さず、途中に荷物をデポして引き返した。この日、神山はC2からBCに下って来た。翌十一日、再び荷上げを試みたが、午後から天気がくずれ、浅野と甲斐は前日のデポ地点より一時間程先まで達したが、帰路のことを考えて引き返し、帰り道でフィックス工作をしながらC4に戻った。この分では十四日に間に合わないかも知れない。明日はどうしてもC5を作らなければならない。京都で立てた計画では、シェルパ達はC5以上で酸素を使うことになっていたが、C5ができなければ話にならい。

ルート図　Skech of the climbing route

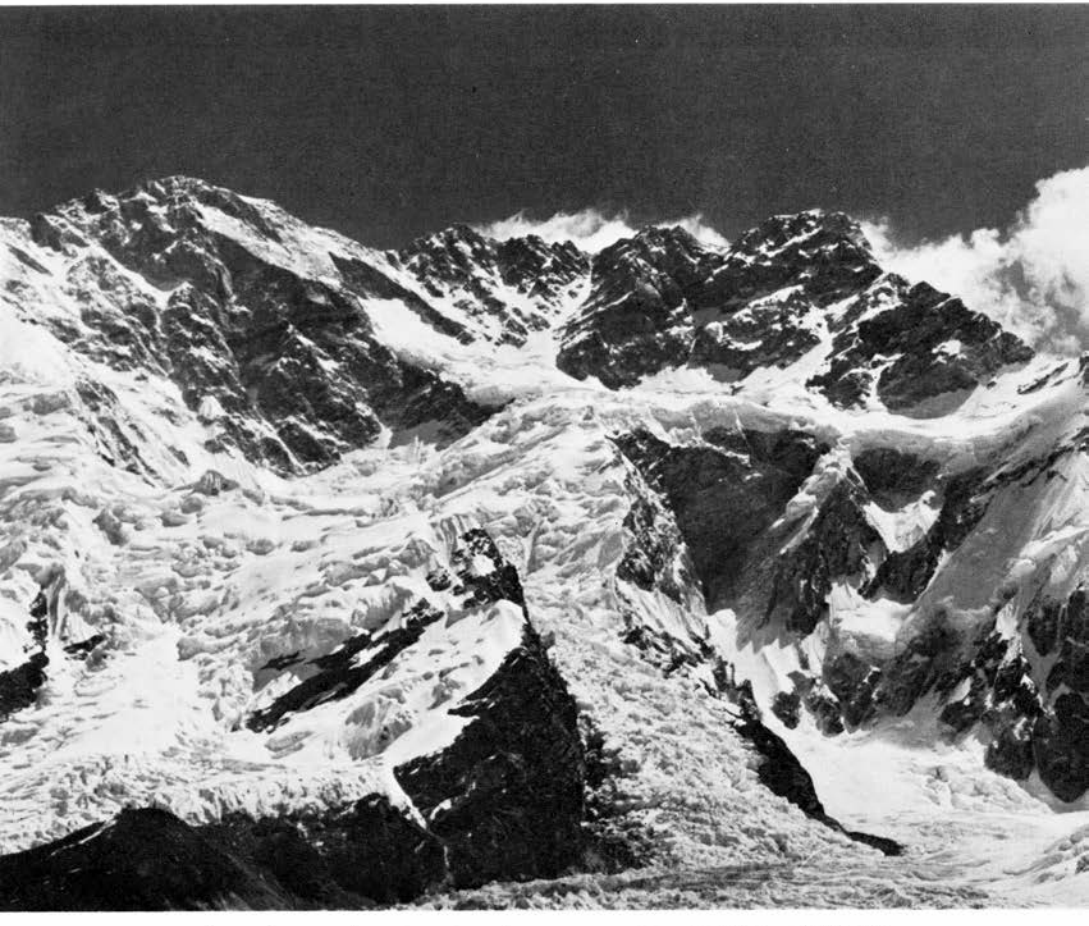
ない。よし、明日はシェルパにも酸素を吸わせよう。一方、可能性は少ないが、稜線ルートもまだ棄て切れない。C5からトラバースする雪面の上端の最低鞍部のヤルン・カン側にある、あのネズミ色の岩を裏側から、うまく乗り越えることができれば、案外早く頂上に行けそうな気もする。トラバース・ルートよりずっと早いかも知れない。

その夜の交信で、今後の作戦を練った。明日はシェルパを主力に、酸素を吸わせてこれまでのデポを回収してC5を建設する。登頂隊員は明日は酸素を吸いながらC4で休養し、十三日にサポート隊と共にC5に入り、十四日にサポート隊に支援されながらC5からラッシュで頂上に向う。なお稜線ルートの可能性を調べるために、二名は明日偵察に上ることが決った。

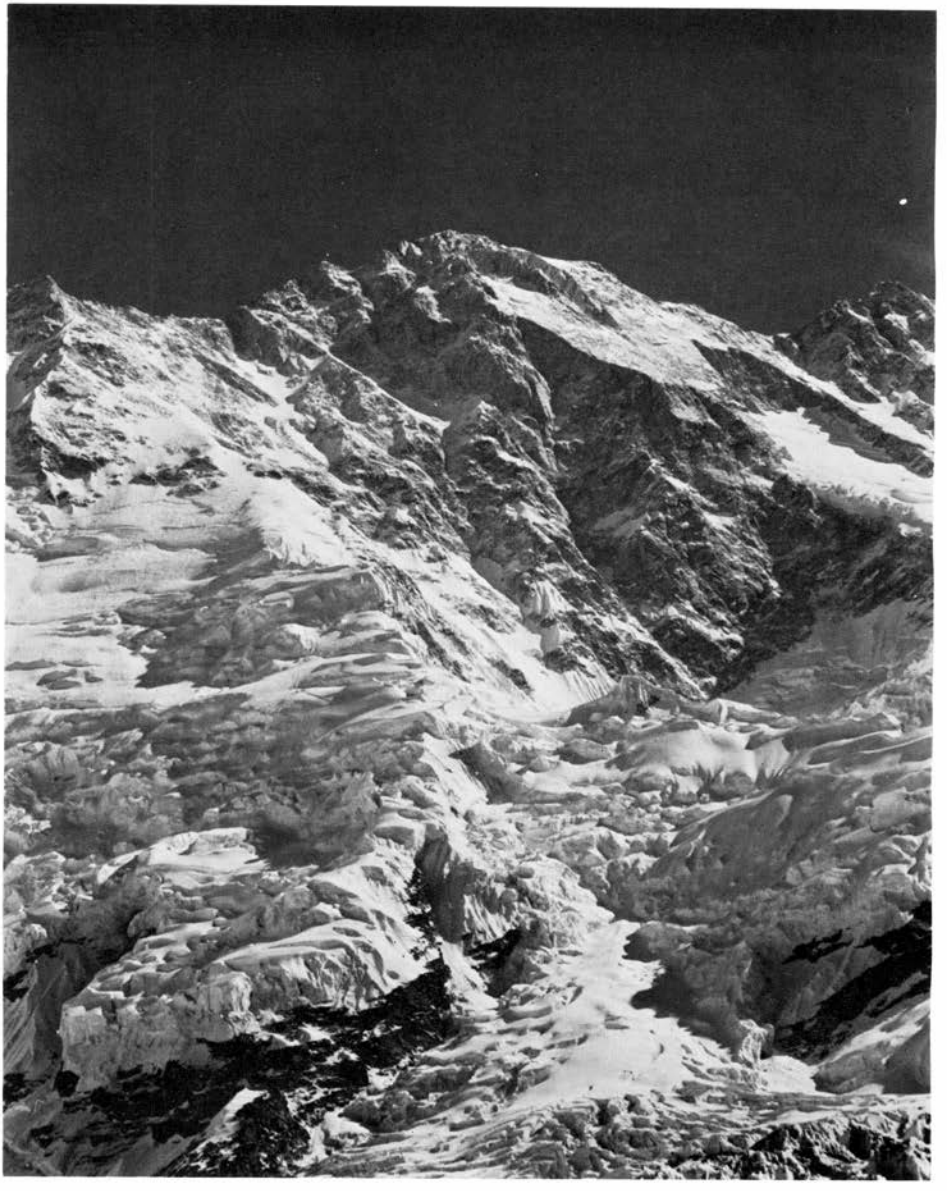
翌十二日、高木に率いられた四名のシェルパは、酸素を吸いながら、これまでのデポを回収して無事C5予定地に達した。甲斐、森本の二名は、C4から出て稜線に達し、稜線ルートの偵察を行なったが、結果はネズミ色の岩だけではなく、それから先の前衛峰の登りも絶望的ということであった。これで稜線ルートは放棄することになり、最終的に一九六七年の偵察の結果とほとんど同じルートをとることに確定した。ボッカ隊と偵察隊はC5に集まり雪の中をC4まで戻った。その日入った天気予報は、十四日はチャンスである。モンスーンの前線は北緯二十度を北上中で、十六日頃に影響を与えるであろう。しかし、十八日頃再び回復する可能性はある、というものであった。いよいよ残り少なくなってきた。夜の交信で、明日隊員四名がC5に入り、明後日サポート隊に支援されて頂上を攻撃することを打ち合せた。

五月十三日、登頂隊員松田、上田、サポート隊員吉野、浅野、カルマの五名は、C4を出発した。C3に居る富田からは、十一時の交信で、いままでになく好天で、風も穏やか、と云って来た。午後三時には吉野から、後三十分位でC5に着けるだろう。天気はよいが時々下から上ってくるガスがかかる。全員快調、と云って来た。C5に着いた彼等は、三時間ほどかかって整地してテントを張った。天気予報は十四、十五日にヤルン・カン付近を気圧の峰が通

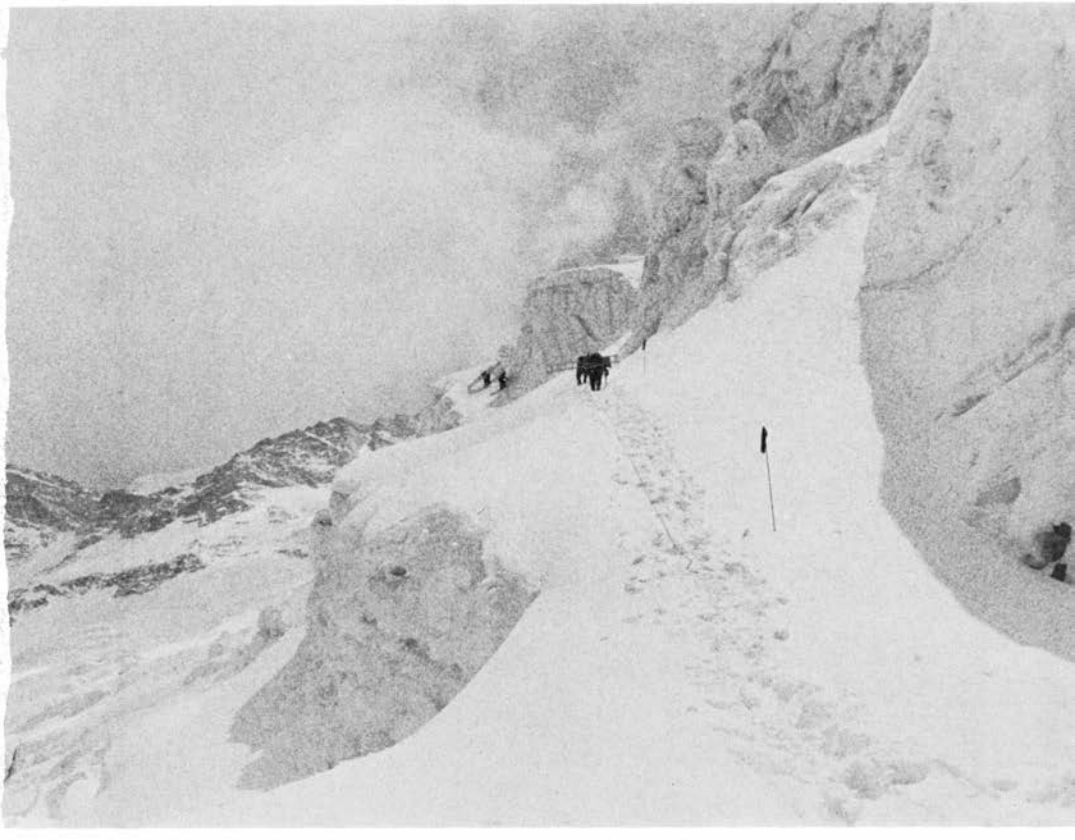
ヤルン・カン頂上における松田隊員（撮影・上田豊）
T. Matsuda on the summit of Yalung Kang (8505m)
on may 14, 1973 (by Y. Ageta)



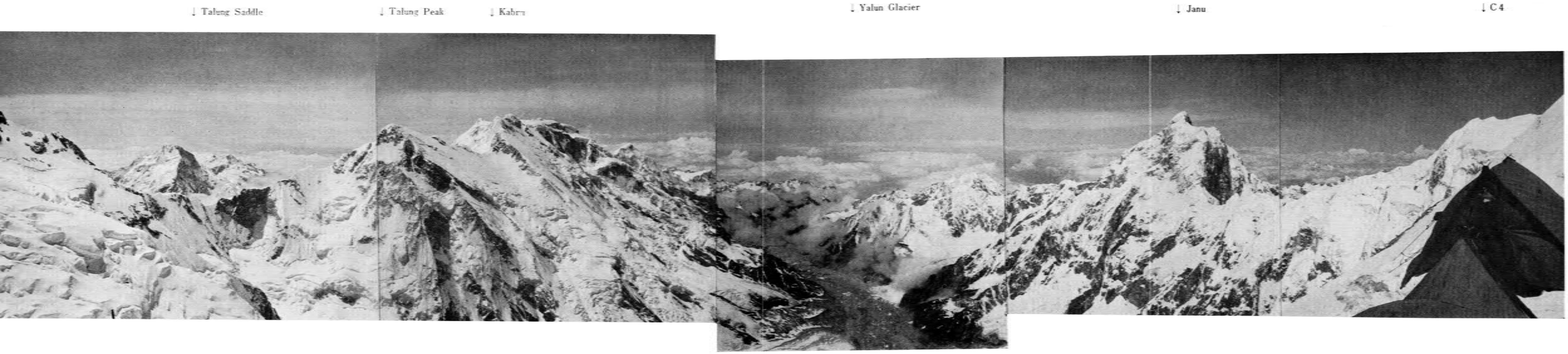
コーナー・キャンプから見たカンチェンジュンガ山群（撮影・森本陸世）
Kanchenjunga Massif seen from Corner Camp (by R. Morimoto)



コーナー・キャンプから見たヤルン・カン（撮影・森本陸世）
Yalung Kang seen from Corner Camp (by R. Morimoto)



C 1からの荷上げ（撮影・森本陸世）
Transport from Camp 1 (by R. Morimoto)



C 4 （7470m）からの展望（撮影・高木真一）
Panoramic View seen from C 4 （7470m）(by S. Takagi)

過する。十六日には次の気圧の谷が来る、という。

登　頂

五月十四日、いよいよ攻撃の日である。六時二十分にC5を出た松田と上田は、快調なピッチでトラバースを終え、雪稜で一休みして、そこから左上に伸びる浅いルンゼを登って行った。アタック隊のために午前三時から炊事をしていた吉野らは、彼等を送り出してから食事をとり、少し遅れて出発した。トラバースの終る頃、浅野の酸素が切れ、彼はここから引き返した。浅野の持っていた荷物を分担し、吉野とカルマはアタック隊の後を追った。午後一時、浅いルンゼをつめた所（八四一〇メートル）で、サポート隊から新しい酸素ボンベを受け取ったアタック隊は、それまで吸っていた酸素ボンベをそこにデポして頂上に向った。サポート隊はアタック隊の降りのためにルート工作をしながらC5に下った。

この日は予報通り朝から快晴で、風も弱く、絶好の登頂日和であった。上部での動きはBCから望遠鏡で手にとるように見えた。アタック隊からは、時折トランシーバーでルートの指示を求めて来た。彼等は相変らず快調なピッチで上に向っている。デポ地から小さい雪面を抜けて、前衛峰の下の大きい逆三角形の雪面に入り、これをトラバースして、そこから右上に走る岩棚を上っていった。午後二時半頃ルートの指示を求めてきた彼等に、その岩棚をできるだけ右上に登るように伝えた。岩棚の上部には岩壁があり、その岩壁には右の端近くに登れそうな所があることは、一九六七年の偵察のときにわかっていた。彼等がその地点に達する頃からガスとなり、BCからは見えなくなってしまった。午後三時五十分上田から、只今、前衛峰とのコルに出た。風はヤルン谷の方から、かなり強く吹いている。薄日がさしている。これから先のルートは必ずしも歩けばよいというものではない、と云い、代って出た松田は、ここから頂上まであと高度差百五十メートルぐらいだ。あと一時間はかかるだろう。酸素はまだ百気圧残っているか

ら、行ける所まで行って見ると云って来た。そこから先は尾根の向う側を通ることになるから、交信はできないかも知れないが、窓のような所に出たら、できるだけ交信するように、ではがんばって下さい、と彼等を送り出した。

午後六時、ポコポコ、ポコポコと、トランシーバーの呼び出し音が聞えた。時間から察すると丁度頂上に着く頃である。BCから何度呼んでも答えはない。いたずらにポコポコが繰り返されるだけである。彼等のトランシーバーが故障してしまったのである。

彼等にはまだ酸素も残っているし、下りには節約して使えば何とかデポ地まで戻れるであろう。万一の場合にそなえてビバークの用意もしている。彼等のことだから、きっと安全確実に下ってくるに違いない。BCのトランシーバーはずっと受信状態にしてあったが、何の連絡もないまま夜になった。

救　援

翌十五日、夜明けとともに望遠鏡で上を見ていた神山が、デポ地の右上五十メートル位の所で行動中の二人を発見した(六時十分)。そこは往路に使った雪面より一段上の、袋小路のような雪面である。上田が先に岩の所に着き、松田が丁度追い着く所であった。彼等はその後、その雪面から降りようとしたり、元の岩の所に戻ったり、また別のルートを探したりしている。

この時刻にここまで下ってきているのだから、無事登頂はすませたに違いない。また、あれだけ近くまで帰っているのだから、間もなくデポ地に達するに違いない。幸い晴天で彼等の行動が手にとるように見え、交代で監視を続ける。もし交信さえできれば、すぐにも彼等をデポ地に誘導できるのにと、もどかしい思いである。

その頃、C5には前日サポートをし、疲れ切っている吉野とカルマ、それに体の不調で動けないが浅野の三人が居た。C4からの荷上げで、シェルパに酸素を吸わせたため、手持ちは少なくなっていた。このような状態で、第二次

アタックの可能性を残すと、酸素量から考えて、C5に多数の人を上げておくわけにはいかない。そういう理由で大多数の要員はC4に待機している。BCで立てた救援計画は、つぎのようである。まず甲斐、森本が先行し、松田と上田にデポの酸素を吸わせる。シェルパ二名は新しい酸素をもってルート工作をしながらデポ地まで上る。ところが実際には、ミンマ・ツェリンの体調が悪く、とても上には行けそうにないので、やむを得ず三名一組の第一次救援隊となった。彼等は午後二時過ぎC5を通過して上に向った。

一方、上田は午前十一時四十五分、さきの袋小路からやっと抜け出て、デポ地に続く雪面に達した。そこからわずか三十メートルも下ればデポ地である。これでやっと酸素が吸える、と安心したのも束の間、彼はその雪面を横切って左側の岩場に達し、そこから左上に稜線に向って登りはじめた。これは大変なことになった。彼等にはまったく自分の居場所が判っていない、ということがはっきりした。何とか彼等と連絡する方法はないか。せめて彼等が困っていることをBCでは知っていて、必要な手を打っているということを知らせ、安心させてやらねばと思案し、その結果、煙の出そうなものをかき集め、のろしを上げた。しかし上田はそれに気付いた様子はない。

上に向った上田は、今度は左下に下り始め、C5からのトラバース道の真上の絶壁の上に達し、そこで昼寝を始めた。

午後三時五分、救援隊がその真下を通った直後、五十メートルほど後に、上田のザックが落ちて来た。C5からの報告を受けてBCではトランシーバーが故障したので、通信文を入れて、救援隊めがけて落してよこしたのかも知れない、と考えた。直ちに引き返させて、中を改めさせたが、それらしいものは見当らない。救援隊は再び上に向った。彼等は午後五時、雪稜に達し、ここから上田にコールをかけると、上田からコールが返ってきた。救援隊は勇躍して登り続けた。結局、彼等はデポ地の左方百メートルぐらいの所で上田と会った（午後七時半）。

「只今、上田に会いました。彼は元気で、魔法瓶のふたを自分でとって、茶を飲んでいます」と云って来た。やが

て上田の声で、登頂には成功したこと、松田と別れたときの様子、今晩中に松田に酸素を届けてやりたい、というようなことを云ってきた。上田に酸素を吸わせ、ゆっくり休ませたのち、デポまで連れ戻した。つぎは松田の収容である。

上田を落ちないようにロープで確保し、ニマ・ノルブに番をさせておいて、甲斐、森本は松田の収容に向う。途中、少し道を誤まり、登頂隊が往路に通った雪面にふみ込み、そこで松田のピッケルのシャフトの折れた先端部を発見した。暗がりの中をヘッドライトで周辺を見回したが、他にそれらしいものはない。再び彼等はデポ地に戻り、ベース・キャンプからの誘導で上に向う。

上田の話では、今朝十時頃、松田が岩蔭（今朝二人を発見した付近）で、もう動くのが大儀だから、自分はここで待っている、と云った。それでは上田が酸素を取りに行ってくると云い残し、松田の側に三ツ道具を置いて別れたというのである。たとえ折れたシャフトが見付かっても、元の岩蔭に松田が居ないとは云い切れないから、やはり力の許す限り捜索を続けることにする。

甲斐、森本は再び上に向ったが、間もなく岩場に突き当った。その頃には彼等の酸素ボンベも空になってしまう。松田の居場所（さきの岩蔭）まで僅か二十メートルぐらいの所である。彼等は大声で繰返しコールをかけたが、応答はない。すでに夜の十時も過ぎている。この高さ（八一六〇メートルぐらい）で、酸素なしの、夜中の岩登りはきわめて危険であり、断念せざるを得ない。彼等はもう一度コールをかけ、上田を連れてC5に戻ることにした。

上田は救援隊と会ったとき、すでに片方のアイゼンを紛失していた。恐らくザックを落した頃になくしたのであろう。デポ地の酸素は、明日松田に吸わせるために残しておいてやらねばならない。上田だけが酸素を吸い、他は酸素なしの苦しい下降となった。午後十一時十五分、デポ地を出発した四名は、翌午前四時無事C5に戻った。（彼等はそこで一休みし、その日のうちに斎藤ドクターの居るC3まで下った。）

十六日午前六時過ぎ、前日の夕方C4から上って来た富田、高木が第二次救援隊としてC5を出て上に向った。彼等がデポ地に着く頃にはガスで、ベースからは何も見えなくなっていた。天気が悪くなることを予想して、あらかじめ現場付近の詳細なスケッチが作ってあり、地形についてはC4の松沢と十分打ち合わせてある。デポ地から先は、このスケッチによってトランシーバーで彼等を誘導する。

昨日、上田が袋小路から抜け出て横切った雪面から、逆向きに現場に到達した救援隊が発見したのは、岩蔭にある上田の残した三ツ道具だけであって、松田の姿はなかった。その付近には似たような岩蔭が多いので、彼等はその辺りの岩蔭をくまなく捜した。が、松田はいない。

少し前に救援隊の酸素もなくなった。思い残すことのないよう、残り十分の時間を与え、下るよう指令した(午後四時四十分)。昨晩の救援活動のための睡眠不足もあって、彼等は相当疲れている。二重遭難を起こさず、無事C5に戻ってくれなければならない。酸素をもって迎えに行くか、それとも、その酸素を使って明日もう一度救援隊を出すか、判断のむつかしいところである。

C5には松田が自力で歩けない状態で発見された場合のことを考えて、二人のシェルパを待機させてある。それと浅野が居る。酸素は残り五本だ。C5の浅野は不調であり、C4にも元気な隊員はいない。かりに浅野とシェルパ一人がでかけるとしても、明朝C5には新しい酸素は二本しかない。これでは全然予備がなくなり、危険性が高いばかりでなく、第一、松田に吸わせる分がない(デポ地の分は使ってしまった)。松田が例の岩蔭に居らず、折れたシャフトが真下の雪面で発見されていることから考えると、上田と別れたあと岩蔭から出て、何かのはずみに滑落したとしか考えられない。これまで三日続いた好天も、そろそろくずれてモンスーンの到来する気配である。二重遭難は何としてでも避けねばならない。深追いは危険だ。救援活動はこれで打ち切ろう。最後の酸素は疲労のはげしい第二次救援隊に吸わせることにする。

C5から出た浅野とプル・テンバ（ローカル・ポーター）は雪稜付近で第二次救援隊を迎えた。新しい酸素を得た彼等は、午後十時四十五分、無事C5に戻った。救援活動はこれで打ち切られた。その夜C5では、二本の酸素を五人で吸って寝た。

翌十七日、C5、C4を撤収、十八日にはC3以下を撤収して、全員BCに下った。シェルパともども全員で火を囲み、登頂を祝しつつも松田の死を悼んで盃を乾した。

ヤルン氷河の対岸、ヤルン・カンが一番美しく見えるコーナー台地に、チベット風の石碑を築き、二十二日に別れを告げた。

おわりに

西堀隊長は十八日ツェラムからヘリコプターでカトマンズに戻った。樋口、田附は凍傷の上田とともに、二十九日同じくヘリコプターでカトマンズに飛んだ。他の隊員は、一部はグンサ経由で、残りは往路と同じ道をダラン・バザールまで歩いた。

念願通りヤルン・カンの初登頂に成功したとはいえ、この計画遂行の中枢的人物であり、よき山仲間であった松田を失なったことは、まことに惜しまれてならない。

なお遠征中、氷河、気象、地質、植生、高所医学、装備、食糧、高分子製品、建造物などについて、学術調査を行なったが、これについては別の機会に報告する。

付録（ヤルン・カンの標高について）

四月六、七、八の三日間、BC付近からウィルドT2型のセオドライトと、同サブテンス・バーを用いて、カンチ

エンジュンガ山群の各山頂と、登攀ルート上の重要地点の測量を行なった。

まずサブテンス・バーを使って、BC付近の氷河上に水平距離六六・六一メートルの基線1を作った。つぎに基線1を底辺として、ほぼ対称形に両側に三角形を作った。この二つの三角形の頂点を結ぶ線は九〇七・九八メートルで、これを基線2とする。この基線はヤルン氷河上、標高約五二〇〇メートルの所にある。氷河の流動はきわめて緩慢であるから、氷河流動により生ずる誤差は無視できる。基線は各山頂から五ないし六キロメートルの所にあり、これと山頂を結ぶ三角形は二等辺三角形に近い。

各山頂の標高は、主峰との高度差から算出した。主峰との高度差は、ヤルン・カンはマイナス九五メートル、南峰は同一〇九メートル、中央峰は同一二二メートルであった。測量誤差はプラス・マイナス五メートルである。

主峰の高さには諸説あり、たとえば八五八五、八五九八、八六〇三、八六一六メートルなどと云われている。また南峰は、八四七四、八四七六、八四八〇メートル、ヤルン・カン（西峰）は、八四二〇、八四三三メートルと云われている。これらの値の信頼性を判断するのはむつかしいので、主峰の標高として平均値八六〇〇メートルを採用した。そうするとヤルン・カンは八五〇五、南峰は八四九一、中央峰は八四七八メートルとなる。

従来、南峰の方がヤルン・カンより高いと云われていたが、われわれの測量では順序が逆になる。直接測量によりこれを確かめるために、頂上までクリノメーターを持って上ったが、登頂時には視界悪く果せなかった。

ナンパ初登頂（一九七二年）

松島静吾

はじめに

青森県にはさして高い山はない。しかし冬のそれは非常に厳しいものがある。海外遠征の話が最初に出たのは、青森県山岳連盟が一九六八年の厳冬期、八甲田縦走（旧第五連隊雪中行軍予定コース）に成功した時である。

その翌年には海外遠征委員会が設けられ、目標としてアラスカが選ばれた。八甲田を中心に、日頃行なっているスキーと雪洞を使っての登山形式を、そのままアラスカの山に試みようとしたのである。しかし第一目標のオヂルビー山脈は、調べれば調べるほどわれわれの旨とする登山形式からは、外れた地形であることが分ってきた。そんな中でネパール・ヒマラヤ解禁のニュースが入り、必然的にわれわれの目はヒマラヤへ、そして西部ネパールの処女峰ナンパ（六七五四メートル）へと向けられた。

県下から二十三名の候補隊員が集まり、研究会、強化合宿が続けられ、最終的に五名のメンバーが選ばれ、一九七〇年十一月には日本山岳協会の推薦状を獲得、いよいよナンパへの道が拓かれたのであった。

ナンパは、当初われわれがアラスカに考えた、スキー使用の登山など考え得べくもない峻峰であるが、雪の中に生

まれ、育ち、鍛えたものが必らずヒマラヤに通じるという、基本的信条と成算のもとに計画は実行に移された。

隊編成は次のとおりであった。

隊　長　松島静吾（三六歳）総括・医務
副隊長　小宮山鐸郎（三一歳）渉外
隊　員　木村福寿（二八歳）装備　沢田之（二四歳）食糧　高橋進（二三歳）会計・記録
シェルパ　ソナ・イシ（二七歳）サーダー　ンガティ（二二歳）カルサン・チレ（二八歳）
リエゾン・オフィサー　K・B・ラナ（三三歳）
コック　アン・ナムギャ（三〇歳）　キッチン・ボーイ　ニマ・ヌルブ（二二歳）　メール・ランナー　オン・チュー（二二歳）　プルテンバ（二一歳）

アプローチ

この年、ネパール政府からは登山許可の正式発表がなく、隊への許可通知もついに届かなかった。もうこれ以上遅れたら、登山計画に支障をきたすというタイム・リミットぎりぎりの一月十八日に、在ネパール日本大使館から日本外務省に許可内定の電報が入った。しかしこれは、あくまで日本大使館からの情報であってネパール政府当局からの直接の回答ではない。そこで二月十七日に松島が先発としてカトマンズに行き、登山許可の取得、およびその他の渉外上のマネージメントを済ませることになった。アナ・カンの荷物（八五〇キロ）は松島と一緒にカトマンズ空港に到着した。

この年のプレ・モンスーンの登山隊としては一番乗りであったためか、登山局長のG・B・シャー氏はまだのんびり構えていたらしく、直接パターンの彼の自宅を訪ねた翌々日二月二十二日になって、やっと彼を外務省でつかまえ

ることができた。口頭で登山の許可をとり、二十四日には輸入許可、通関等を済ませた。

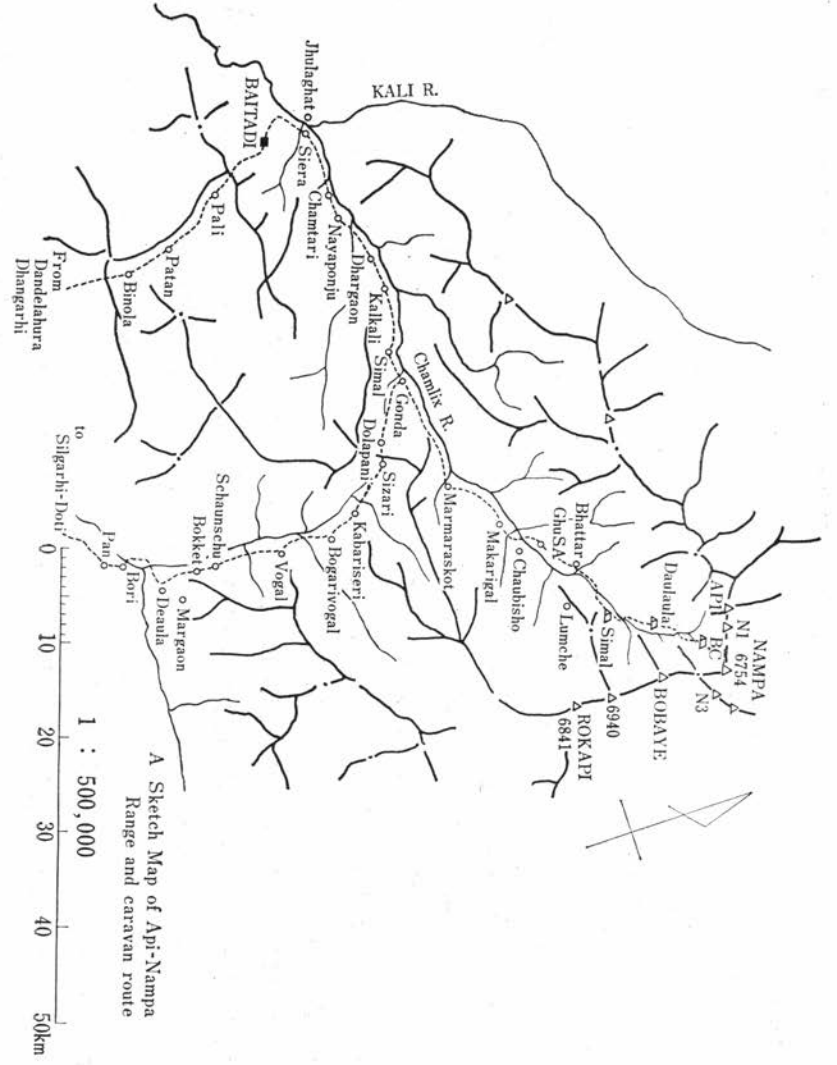
二月二十六日、小宮山ほか三名が羽田を出発、翌二十七日全員がカトマンズに集結した。

カトマンズからダンガリーへは、R・N・A・CのDC3を一機チャーターし、隊員五名、リエゾン・オフィサー、シェルパ三名、コック一名計十名と荷物一・五トンを積んで、三月三日快晴のパノラマを楽しみながら、二時間で飛んだ。途中カンジロバ・ヒマールらしい山群を遠望してからは、グレート・ヒマラヤ山脈はどんどん遠のき、期待のアピ・ナンパ山群はその片影すら見せずに、遥かテライのジャングル、海抜わずか一八〇メートルのダンガリーへと着陸した。キッチン・ボーイ一名とメールランナー二名は、インド周りで三日かかってダンガリーへ到着した。

キャラバン・コースは当初の計画ではシルガリドーティ経由の予定だったが、食糧事情が極度に悪く、餓死者も出ているということであったので、コースを変更し、ダンデルドゥラ、バイタディ経由とした（このコースは一九七一年、松本登高会アピ隊のとったコースと同じである）。しかしそれでも食糧の入手は非常に困難であったし、ポーターの雇用もダンガリーからダンデルドゥラへの自動車道路（D・D・ライン）の建設中のためか、思うようにはいかなかった。

三月七日、ダンガリーを出発、猛暑の中、長いキャラバンが始まった。インコの舞う田園風景の中を、のどかな楽しい旅ではあるが、このインド平原から四〇〇〇メートルのベース・キャンプまで、いったいどれだけ歩いたら行き着けるのだろうか、ほんとに計算どおりに行くのだろうか、とふと考えたくなるほど気の長いキャラバンである。しかし三月十二日、二五七〇メートルの峠からアピ・ナンパ山群を目の前にし、そしてダンデルドゥラからナンパの偉容をハッキリと確認した時、目標のヒマラヤがもう手の届く所に近づきつつあるのをひしひしと感じた。

バイタディから先は食糧事情が更に悪いため、食糧係の沢田はリエゾン・オフィサーと一緒にインド側のジュラガットまで行き、ポーター用の食糧も含めて購入し、行く先で彼等に売り渡す方法をとらざるをえなかった。そのため



A Sketch Map of Api-Nampa Range and caravan route

ポーター数は予定よりかなり増えて七十五名になった。

バイタディを三月二十日出発、翌日からはいよいよアピ・ナンパ山群の氷河を溶かして流れるチャムリア・コーラ（原地では別名チャウラニ・コーラとも呼ぶ）沿いの道に入った。道は徐々に険しくなる。水は冷たかったが、それでもダイナマイトで大きな魚も捕れたし、水泳を楽しむこともできた。

三月二十六日、マカリガルにて二隊に分れ、木村、沢田、ンガティ、ニマ・ヌルブの四名はチャウビショへ向わせた。四九〇〇メートル峰へのトレーニングと、アピ・ナンパ山群の偵察がその目的であった。本隊はその日チャムリア・コーラの左岸から右岸へ急流の橋をロープを固定して渡り、凄い絶壁の道をたどってグサに到着した。グサは人間の住み着ける限界ギリギリの急斜面にへばりついた部落である。中央広場にテントを設営すると、例によって見物人の大歓迎を受けたが、注目の中でわれわれは小便をするのにもひと苦労であった。ここでパンチャヤットに完全な形で保管されている松本登高会隊のデポ装備をチェックし、酸素ボンベ、ハーケン類を借用した。

三月二十七日、本隊の松島、小宮山、高橋はグサからカワ・レク方面へトレーニング山行を楽しんだ。木村隊はチャウビショから四九〇〇メートル峰方面へのトレーニングと偵察を終え、午後七時三十分グサに到着した。

翌二十八日、再びキャラバンを開始、ベース・キャンプへの旅は最後の段階に入った。グサを出て、とある崖の縁を回り込むと、突然思いがけなくも目ざすナンパが目の前にあらわれた。この瞬間の感動はとても言葉では言いつくせない。谷の奥に、もう随分前からわれわれを待っていたかのように、美しい姿を快晴のもとに見せてくれた。足元からは数百メートルもあろうかと思われる崖が切れ落ち、見えない谷底には朝靄が急流の轟ろきの中に立ちこめていた。その険しさは予想通りであったし、隊員達はそこであらためて決意を固め、ファイトを胸に秘めたのであった。長い旅を一緒に続けて来たポーター達の感動もまたひとしおのようであった。ただ、シェルパ達は幾分ナンパの急峻さの前に気おくれがしたようで、その事がちょっと気にかかった。

夕方、バタ部落（最奥の部落）の下にテントを設営していると、ポスト・ランナーのプルテンバが一人で到着、厄介な問題をかかえて来た。もう一人のオン・チューがジュラガットでインド側に捕まったのだと云う。航空会社の手違いで、バンコクからカイロへ向ってしまった高橋のザックがダンガリーへ届き、それを持って来て通関できなかったのだ。カメラ、その他の内容品から、特に厳重を極めるジュラガットで、スパイ容疑にかけられたとしても不思議ではない。直ちにネパール外務省、日本大使館へ善処要望の電文を書き、それをリエゾン・オフィサーとプルテンバに托し、翌早朝ジュラガットへ向わせた。しかし結局この問題は彼等がジュラガットへ行って難なく解決し、その後のメール・ランナーの通関、通行には特に支障はきたさなかった。

なお、リエゾン・オフィサーはのちにベース・キャンプの下まで来て引き返し、マルマラスコットに下りて滞在、優雅な生活を楽しんでいたようである。

三月二十九日（晴れのちにわか雨）、谷底の道、山が見上げる高さになると雪渓が現れる。薪は豊富である。シマール泊。

三十日（曇り時々晴れ、夜雪）、この日、ベース・キャンプ建設地設定のため、小宮山、高橋、ンガティ、ニマ、ポーター一名計五名は先行し、ナンパの谷に入った。本隊はポーター達に用意してあったズック靴を貸し与えダウラウラに到着した。

その夜、あれほど従順だったポーター達も、さすがに前進を拒みはじめた。無理も無い。この雪の中でわれわれでも寒いのに、彼等は着のみ着のままで体を寄せ合って寝ているのだから。しかし、ここで帰られたら登山行動に大きな遅れを余儀なくされてしまい、決定的打撃を蒙りかねない。大いに困り果てたのだったが、事は思いがけなくも幸運に運ぶこととなった。先発の小宮山隊が金庫を背負い上げていたからである。やむなくポーター達は、最終日のみ日当十五ルピーというプレミアムつきで、難なくベース・キャンプに入ることとなった。

三十一日（曇のち雪）、早朝N1が谷の奥に肩を朝日に光らせていたが、やがてまた曇ってしまった。ダウラウラを出発して小川を渡りモレーンに登ると、広いきれいな雪に覆われた草原に出た。晴れていたらどんなに素晴らしい所だろう。一歩一歩長い間夢に見た場所に近ずく感動は抑えることができない。もう一つの川を、けなげにもポーター達は裸足で渡渉し、写真で見馴れたナンパからのモレーンにぶつかり、雪の中を更に登ってベース・キャンプ地に到着した。

まわりの山は残念ながら吹雪に掻き消されて全く見えない。

寒さに震えるポーター達をシートに収容し、ベース・キャンプを建設、ポーター達への賃金の支払いは午後四時過ぎまでかかった。彼等に貸し与えた靴は登山終了後の下山にもまた使うことを考慮して、取り上げなければならなかった。聞くも涙、語るも涙の物語である。心を鬼にして木村、沢田、高橋がこれにあたる。

私の考えでは彼等の下山にも靴を貸し、ダウラウラまで隊員、シェルパ数人が一緒に下りて、そこでタバコと交換しようと思っていた。しかしシェルパの言うのに、賃金を支払ったあとではそれは不可能だし、喧嘩になり非常に危険だと云うので、致し方のない処置となった。

それにしても良いポーター達に恵まれて幸わせであった。ダンガリーからベース・キャンプまで、一ヶ月近くも一緒に歩き通したポーターは二十四名もいたし、この雪の中をよくもまあ文句も云わず、ここまで登ってくれた。賃金を受け取った後、握手をし「ナマステ」を云い、ニコニコしながら雪の中を裸足で駆け下る彼等の後ろ姿を見ながら、ついホロリとなってしまった。遠征隊ずれしていない彼等の気持を大切にしたいものである。

ベース・キャンプの標高は三九八〇メートル、左手にN1、正面にナンパを見、そして右手はナンパからの南稜に囲まれたモレーンの上である。ダンガリーを出発して二十五日目であった。

登山活動

四月一日（雪）、ベース・キャンプ整理作業。

二日（快晴）、ナンパ南稜へ登りルートの偵察を全員で行なった。ベース・キャンプから頂上までの標高差は約二八〇〇メートルある。登攀ルートとしては日本で考えていた通り一九七〇年英国隊（この報告はA.J. No. 321, 1972 に John Allen によって記されている）と同じ西稜以外は、余りにも絶望的であった。西稜までのルートとしては次の三つのコースが考えられた。

一、英国隊と同じくN1の下部をトラバース気味に登り、アイスフォール地帯の上部に出てクーロアールからナンパ・コル（英国隊命名）に抜ける。

二、アイスフォールを正面から抜けて、クーロアールからナンパ・コルへ出る。

三、アイスフォール下部からナンパ・コル上部のスノーピークへ直接向う。

以上のコースについて検討した結果、一のルートはN1からの落石、雪崩の危険が大きいこと、三は西稜直下のハンギング・グレーシアの崩壊と雪崩の危険が大きいことにより放棄し、アイスフォール地帯を突破する見通しのついた、二のコースを取ることに決定した。

三日（快晴）、木村、ソナ・イシはルート工作、松島、小宮山、沢田、高橋、ンガティ、カルサンは荷上げをし、四八〇〇メートルのアイスフォール地帯にC1予定地を決定した。

四日（快晴）、C1建設、木村、ソナ・イシはC1へ入り、続いてアイスフォールを突破してクーロアールの下、五〇二〇メートルまで達した。他のメンバーはC1への荷上げをし、先ずは順調なすべり出しとなった。

五日（雪）、木村、ソナ・イシは雪の中を昨日の最高到達点まで往復し、標識をセットした。他のメンバーはBC

停滞。

六日（快晴）、木村、ソナ・イシはクーロアールのルート開拓へ向ったがラッセルに時間をとられ、ルートは先へ延びず、この日BCへ下った。小宮山、高橋C1入り。

七日（快晴）、小宮山、高橋ルート工作し、クーロアール基部五一五〇メートルに達する。松島、沢田C1入り。

八日（曇）、小宮山、高橋がルート工作をし、松島、沢田がこれをサポート、ルート整備を行なった。クーロアールは堅氷の上にガサガサの頼りない雪が乗っていて、なかなかの難物である。この雪を騙しながら慎重に高度を上げ、この日小宮山、高橋は五二五〇メートルまで達したのちBCへ下った。木村C1入り。荷上げも順調に渉った。

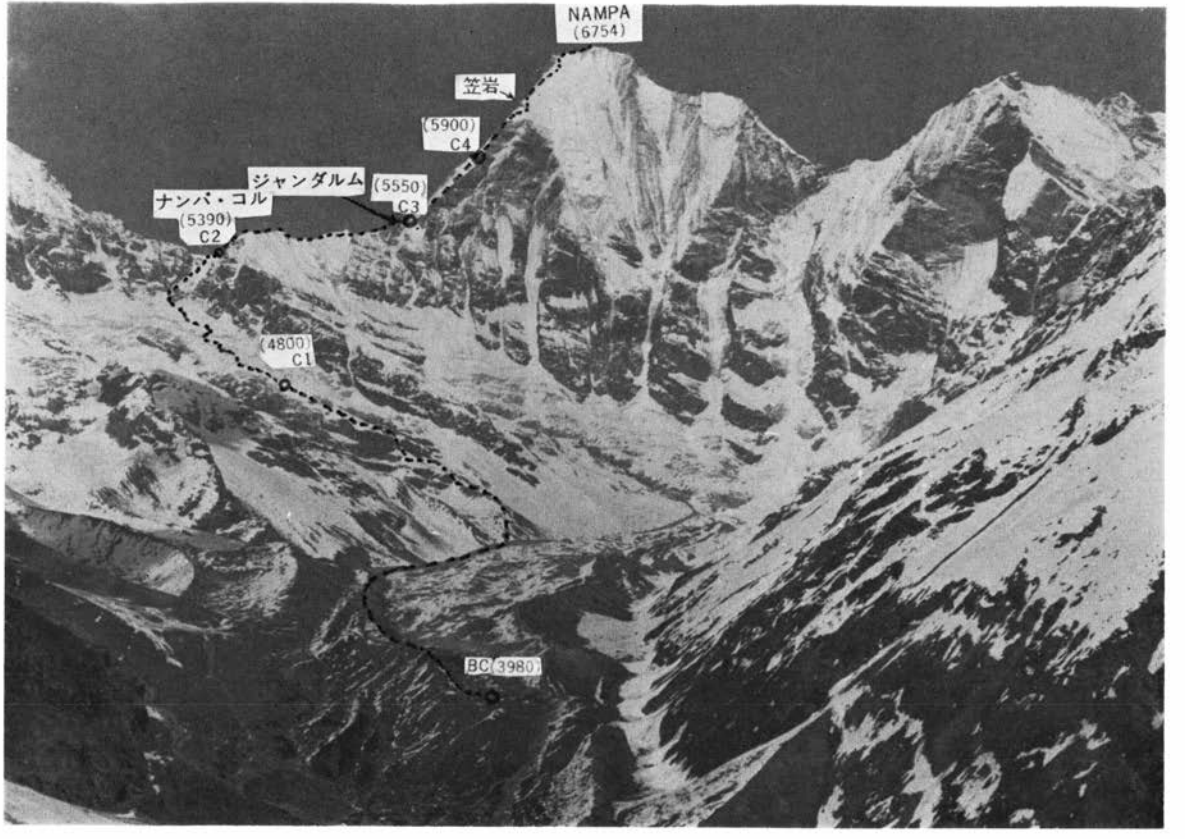
九日（雪）、終日雪が降り続く。午後一時、少しの晴れ間を見て木村と沢田がトレール付けに出たが、雪崩をかぶり直ぐに引き返した。雪崩の轟音が絶えず、C1も午後になってあおりを一発喰らった。しかし、このC1の上には大きな露岩があって、そこで雪崩が左右に分れて流れるらしく、アイスフォールの中にありながら、最適の場所にあるようだ。この日、BCも停滞した。

十日（雪）、悪天候のため行動できず。午前七時頃また雪崩のアオリに襲われてテントが引きちぎられそうになったが、幸いデポ荷物も被害皆無であった。新雪は一メートルを越え一日中テントの掘り出し作業が続く。

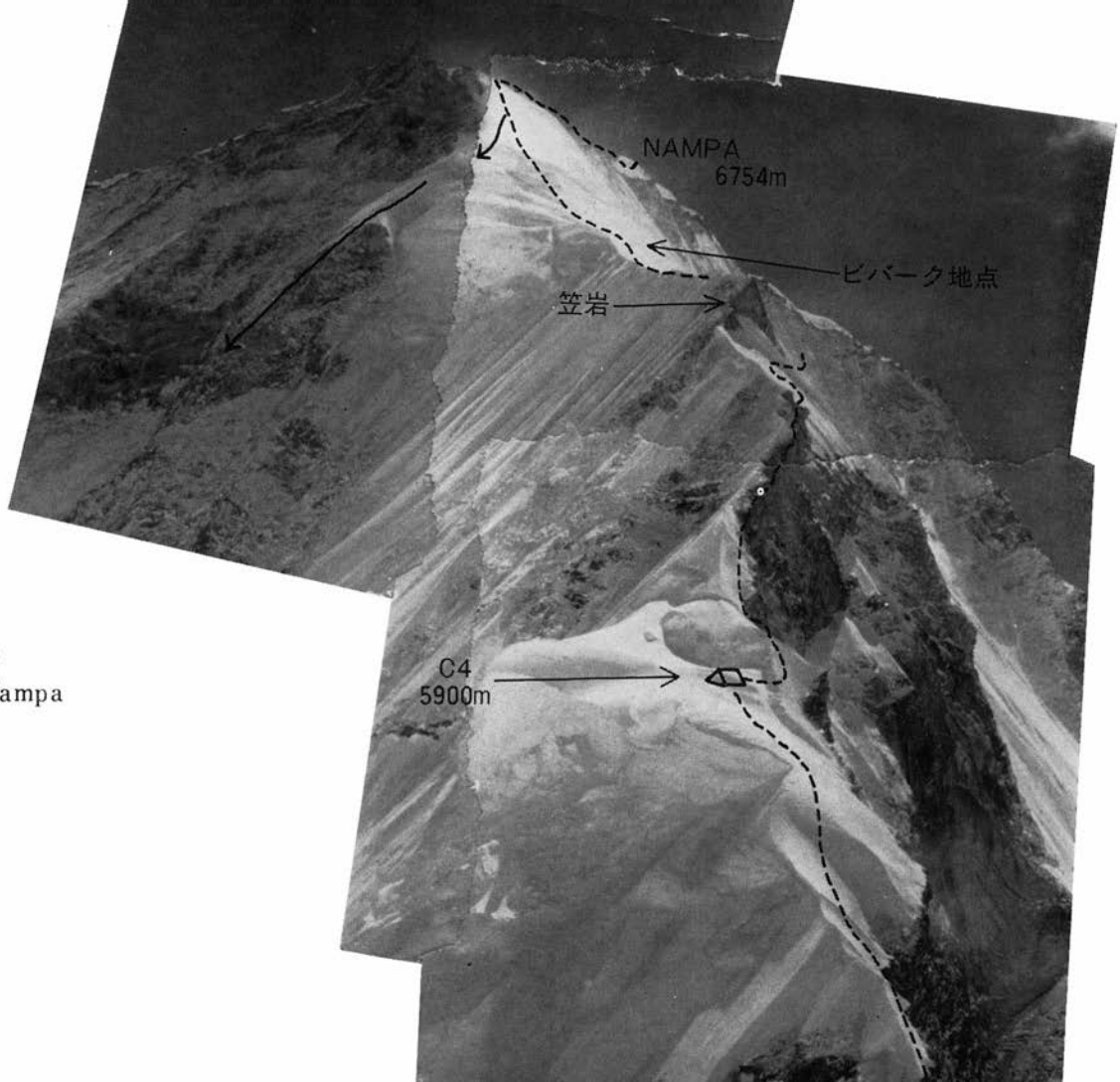
十一日（晴れのちガス）、C1、BCともにトレール付けに出たが、C1からは五一〇〇メートルまで、BCからもアイスフォールの下までしか達せず。気はあせり、トランシーバーのやりとりも荒っぽくなるが、胸までのラッセルでは致し方のないことである。

十二日（快晴）、松島、木村は今日こそはと張り切ってC1を出たが、前日に引き続いてのラッセルにルートはあまり延びず、五三〇〇メートルまで達して引き返した。小宮山、高橋C1に入り、沢田BCへ。

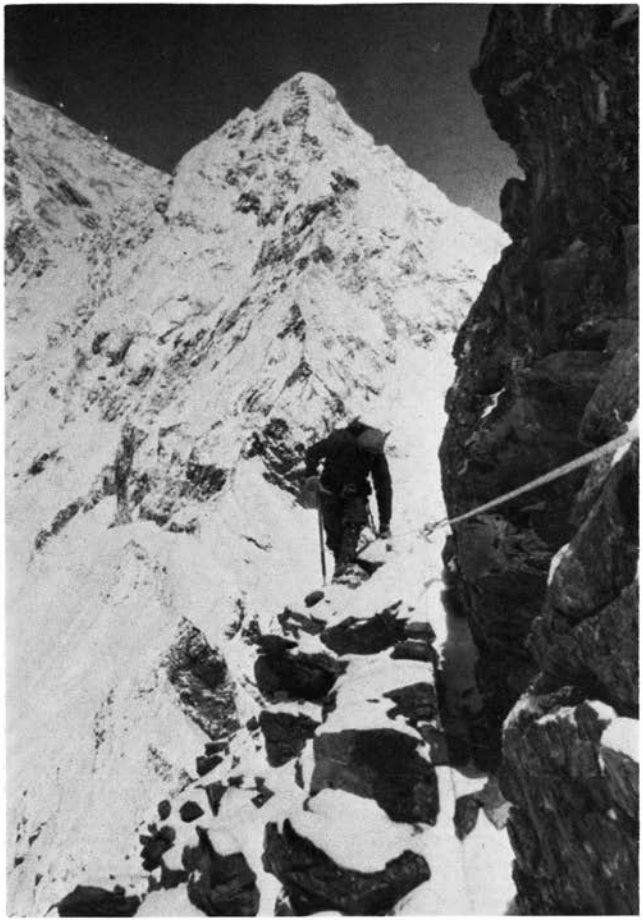
十三日（快晴）、松島、木村はルート整備しBCへ。小宮山、高橋はこの日遂にナンパ・コル（五三九五メートル）に



ナンパ登攀ルート　Climbing route of Nampa



ナンパ登攀ルート
Climbing route of Nampa



ジャンダルム南面を登る
Climbing up the south face of rock gendarme

C3 5550m
ジャンダルム

傘岩をこえて頂上へ向う
The attack members between the summit and Kasa-iwa

C 3, 5550m

達し、久し振りにトランシーバーに明るい声が響き渡った。彼等はコルの少し上、五三九〇メートルにC2テント地を決めてC1に戻った。ンガティ、カルサンC1入り。

十四日（晴れ）、C2建設。小宮山、高橋待望久しくC2入り。沢田BCからC1へ。やっとC2が建設され全キャンプとも久し振りに明るい空気に包まれた。クーロアールは最大斜度五五度、平均五〇・七度で、悪天候にも災いされてそのルート工作は困難を極めた。C1建設以来十日間の日数を費やしてしまったことになる。

ナンパ・コルの状態は、英国隊（ポスト・モンスーン）の写真で見たのとはかなり違い、雪庇が五十メートルほども北側へ張り出していた。

サーダーのソナ・イシはBC休養中にテント近くまで来た大雪崩にショックを受け、七日以来不調でC1にも登って来ていない。しかし、他の隊員の体調は良好、食欲も非常に旺盛で食糧係は頭をかかえ込んでいる。

喜びに包まれた一日であったが、この日ラジオはマナスルの韓国隊の大量遭難を伝えていた。安久一成氏の安否が気ずかわれる。

十五日（晴れのち小雪）、小宮山、高橋はC2から上のルート工作を行なった。C2を出るといきなり六〇メートルの青氷の壁になっていて、C2を足元に見下ろしながらの登攀を強いられる。最後に小さな雪庇を越えると広い雪稜に出て、そこから初めて西稜上部の全容を目のあたりにすることができる。

この日、沢田はC1からC2へ入り、松島、木村はBCからC1に入った。

十六日（晴れのち風雪）、今日は小宮山、沢田、高橋の三名でC3からのルート工作を行なう。雪稜はやがてナイフエッジに変り、更に屏風を立てたような浮石だらけの狭い岩稜となって、C3予定地のロック・ジャンダルムへと続いている。この間多少の登り降りはあっても全体としては標高差はあまり無く、いわば水平の登攀である。小宮山

隊は雪稜のルート工作を完成し、風雪の中を休養のためC1へ下った。

続いて松島、木村、ンガティはクーロアールのシャワーの洗礼を浴びながらC2に入り、サーダーのソナ・イシは久し振りに復調しC1に入った。

C2は夜にかけ強風雪となる。

十七日（風雪）、午前中からの風雪模様をついて、松島、木村は予定どおりにルート工作に出た。前日の小宮山隊のデポ装備が新雪に埋って見つからず時間をロス。新雪の雪庇が大きく崩れてN2谷へ音も無く落下。荒天時の行動の難しさを痛感。ルートを八十メートル延ばしてC2に戻った。沢田、ンガティはC1からC2へシャワーをかぶりながらも元気に到着。夜、息もつかず強風雪荒れる。

十八日（風雪）、全キャンプとも停滞。C1で六十センチの積雪。C2も今にも飛ばされそうな天候。

十九日（快晴）、松島、木村はC2から上のルート工作、沢田、ンガティはC2から下、クーロアールまでのルート整備、小宮山、高橋、ソナ・イシ、カルサンはC2からクーロアール下部までのラッセルと荷物デポを行なった。快晴ではあったが風は身を刺す冷たさであった。

二十日（快晴）、松島、木村のルート工作隊は、この日ジャンダルムのわずか手前まで達した。途中、小さなクーロアールをトラバース中に、トップの松島が足元から発生した雪崩とともに約二十メートル滑落、木村のハーケン、ビレーで止ったが胸を痛めた。しかし続けて行動し、岩稜までルートを延ばした。沢田隊はクーロアールからC2へ逆ボッカ、小宮山隊はC1からC2へ荷上げを行なった。

二十一日（快晴）、松島、木村はジャンダルムまでのルート工作を行なった。ジャンダルムの手前には英国隊のビヴァーク地があり、アメ、砂糖、塩、スノーバー、マッチが残っていた。またジャンダルムの残置ロープはハーケンが抜けて使用不能だったが、中段から南面の垂壁をトラバースするすばらしいルートにわれわれを導いてくれた。

帰路に着く頃から松島は前日痛めた胸の痛みがひどくなり、咳をすると立っていられない程度になった。長時間の行動後七時十五分にC2に帰着した。夜になって発熱と激痛、肋骨々折の疑い。小宮山、高橋C2入り。

二十二日（快晴）、木村、高橋はジャンダルムを越えた岩稜上に英国隊のキャンプ・サイトを発見、そこをC3地に決定した。他は荷上げ、松島はC2にて休養。カルサンはヒドン・クレバスで腰を打ち元気なし。

二十三日（C2風雪、C1雪）、ソナ・イシ、カルサンはC1よりC2へ荷上げをした。今日こそはC3建設と張り切ったが、生憎の荒天にC2は停滞となった。しかし登山行動に入ってはじめて久し振りに全員が顔を揃えたので、C3建設以後の行動について協議をしたあと、松島、ソナ・イシはBCへ下った。

二十四日（晴れのち小雪）、C3建設。木村、高橋が入った。C3は岩稜上のわずかの雪庇を利用し、万一に備えてロープで岩に固定し、テントの端がN2谷側へはみ出した状態で建設された。C2建設をしてから十日目、標高は五五五〇メートルだった。

小宮山隊はC3への荷上げの帰路、カルサンがアイゼンを片方落して行動不能となったため、ステップ・カットして下降したが、その途中小宮山が膝を強打して負傷、午後六時十五分C2に帰着した。貴重な戦力を失なうことになった。

二十五日（晴れのち雪）、木村、高橋C3よりルート工作、C3を出ると狭い岩稜上に三つの岩峰があるが、これを巻くルートはとれず忠実に稜線上をたどって、いよいよ西稜上部の登りになった。ここからは平均斜度四十五度を越える急なナイフ・エッジと岩のルートになる。堅雪にアイゼンの出っ歯とアイスメスが小気味よく効いてくれた。十センチほどの堅雪の下はアイゼンの爪を受けつけないカチカチの氷であった。

この日BCとルート工作隊の交信中に、大きな雷鳴と同時に突如ルート工作隊のトランシーバーが故障してしまった。連日午後になるときまって雷が鳴り、背負子やアイスバイルが電気を帯びて鳴り出すことが多い。

二十六日（快晴）、木村、高橋ルート工作、C2は強風のためC3への荷上げを見合わし、松島、ソナ・イシはBCからC1へ入った。

二十七日（晴れのち雪）、木村、高橋は好調にルート工作を進め、五九〇〇メートルの北側に引っかかっている懸垂氷河上に達した。沢田、ンガティ、カルサンは荷上げ、松島、ソナ・イシはC2入り、小宮山はC2に踏みとどまって休養した。

二十八日（快晴）、木村、高橋C3にて休養、松島、沢田、ソナ・イシC3入り。隊員の食欲は旺盛で食糧不足の恐れがあるため、この日ンガティ、カルサンは食糧荷上げのためBCへ下ろした。

トランシーバーがほとんど故障してしまったので、頂上アタックに際しては松島か小宮山がアタック・キャンプに入り指揮をとる必要がある。小宮山は膝の傷が思わしくなく、行動不能であり、松島の胸の痛みは我慢できる程度になっていたので、松島がアタック・キャンプに入ることに決定した。

二十九日（晴れのちガス）、C4、アタック・キャンプ建設。標高五九〇〇メートル、木村、高橋がアタック・キャンプへ入り、更に六〇〇〇メートル地点迄のルート工作をした。遠くチベット方面にはグルラ・マンダータが偉容を誇り、カイラス峰が特徴ある山体を見せている。背後にはN1、アピが控えじっとわれわれの行動を見守っているかのようである。

三十日（晴れのちガス）、アタック・キャンプから頂上までは標点差八五〇メートルある。しかもルートは依然として平均斜度四十五度の厳しい稜線がつづいている。そこでアタック態勢に入る前に笠岩の上までのルート工作を済ませ、そのうえ、ひと晩のビバークを覚悟しなければならない。

木村、高橋は笠岩の下六二〇〇メートルまでのルート工作をした。

五月一日（晴れのちガス）、木村、高橋は不安定な岩稜を笠岩の下に達し、そこから南面のヒマラヤ襞を約二〇〇

メートル、トラバースした。極端に固い青氷とガサガサの雪の急斜面を、足元に二〇〇〇メートル下の谷底を見下ろしながら、極度のバランスを強いられつつトラバースし、再び岩と雪まじりの浅いルンゼをいくつか越えて、彼等はこの日ついに笠岩の上部六三五〇メートルに達した。

松島がアタック・キャンプに入り、小宮山とシェルパ二名はC2、沢田とソナ・イシはC3に、そしてアタック隊は絶好調の木村、高橋両隊員に決定し、頂上攻撃の態勢ができ上った。

明日は休養日とする。

二日（雪）、全キャンプとも休養、停滞。木村、高橋は一日中アイゼンとアイスバイル、アイスメス研ぎに余念がない。

三日（雪のちブリザードのち晴れ）、各キャンプとも停滞。テント掘りに明け暮れた。アタック・キャンプも三度ほど小さな雪崩をかぶり、一時は完全に埋まってしまった。しかし夕刻には晴れ上り、木村、高橋は明日のアタックに備えてファイト満々である。

四日（快晴）、注意事項確認のうえアタック隊は五時三十分にキャンプを出発した。彼らは慎重に高度を上げていった。しかしフィックス・ロープの終点、笠岩の上六三五〇メートルから上は、思いのほか深雪になやまされて時間を費やし、頂稜の下、青氷の壁の基部に着いた時はもう午後になっていた。松島からの指示によれば、帰りにビバークの予定だったが、彼らはその日の登頂を不可能と判断しビバーク・サイトに戻った。この日は今シーズン最高の快晴無風で、夜には月が煌煌と山々を照らした。

五日（快晴）、昨日に引きつづき絶好のアタック日和となった。アタック隊はビバーク・サイトを六時三十分に出発、前日セットしたフィックス・ロープにユマールを通して頂上への行動を開始した。頂稜直下の青氷の壁は一五〇メートル、斜度約五十度、アイゼンの歯を受けつけないので、ステップ・カッティングしながら徐々に高度を上げ、

中程から左手の岩稜に移り十一時に頂稜に達した。頂稜は幅約三〇メートルで、そこから一〇〇メートル先に頂上があった。この間、またまた思いがけなくラッセルを強いられたが、丁度十二時に遂にアタック隊は頂上に立った。写真撮影、スケッチをし、旗を埋め、嬉し涙も乾かぬまま午後一時に彼等は下山を開始した。

頂稜から青氷の下降に入った時、悲劇が待ち構えていた。まず木村が八〇メートルの懸垂下降をし、つづいて高橋が下降を開始したのだが、五、六メートル下降してから突然大声を発しあおむけに滑落して来たのだ。アンザイレンしていたはずなので木村はとっさに構えると同時に、なかば観念したのだったが、高橋は木村の数メートル左を北面へ転落していってしまった。その時木村にはほとんど衝撃もなく、ザイルはそのまま残っていた。何らかの理由でアンザイレンの仕方がおかしかったか、高橋側の結び目が解けたと思われるが、その実情は不明のままである。

この状況は、アタック・キャンプからは松島が、C2からは小宮山が目撃している。沢田とソナ・イシはサポート隊としてアタック隊と合流すべく登攀中であったが、笠岩の陰にいて目撃しなかった。

木村は直ちに確保地点からロープの許す範囲で北面を捜したが、六十メートルくらい下の地点で、バンドが切れて堅雪にささっているアイスバイルが見つかっただけで、高橋の姿を見つけることができなかった。そこから下は三〇〇メートルほどの岩壁と、それにつづく北面の壁が二〇〇〇メートル近くも切れ落ちていた。沢田とソナ・イシはその直後現場に到着、木村とともに下降、途中六二五〇メートルで松島とも合流した。ビバークの用意はしていたが、これ以上木村が衰弱した場合、この急峻なルートでわれわれにはもはや彼を無事に救出する余力はなかったかもしれない。危険極まりない下降をつづけ、その日の午後九時十五分にアタック・キャンプに戻った。

われわれは次の理由により、それ以上の捜索を断念せざるをえなかった。

一、高橋隊員は北面の壁を二〇〇〇メートル近くも落ちてしまったことは間違いなく、生存の見込みは全くない。

二、登山活動も最後の段階だったので装備、食糧とも底をついてきていた。
三、北面の谷（N2氷河）は全く未知の谷で、そこに入るにはさらにもう一つの登山をするだけの総合力が必要である。
四、それにもかかわらず、もし捜索、遺体収容作業をすれば、さらに何人もの犠牲者の出ることが目に見えている。

そのため、残念ながら捜索作業は断念して、各テントを撤収、BCに下山した。
その後、BCの下、英国隊のBC地に高橋のためにチョルテンを建設、石にチベット語で「オン・マニ・ペメフム」日本語で「ナンパに逝きし若き霊よ安かれ」と彫り、初七日の供養をした。
休養と隊員の復調を兼ねて、ナンパ、N1、アピ、ボバイエの地形を探査し、十九日にBCを撤収した。
私事ではあるが、高橋進君は私がリーダーを務める、むつ山岳会で、登山のイロハから教えた後輩であり、その成長ぶりから私が最もその将来を期待していたメンバーの一人であった。その彼の遺体すら持ち帰ることもできず、断腸の思いでナンパを後にすることとなった。
遭難の原因については充分に検討し、反省して今後に備えたいと思う。
御助言、御協力いただいた多くの方々に感謝の意を表するとともに、御心配をおかけしたことを謝し報告を終らせていただく。

ガンガプルナ（一九七一年秋）

清水澄

出発まで

純粋に登ることの興味で、憧れのヒマラヤへ行ってみたい。それには大きな山が理想だが、最初から背伸びは出来ない。七〇〇〇メートルの未登峯か、バリエーションで、金のかからない所を目標にし、その経験の上で次に大ものをやりたい。この発端のもとにガンガプルナを選んだのは、その西にわれわれがアサプルナと名付けることになった七一〇六メートルの未登峯があり、そこからガンガプルナへの縦走という素晴らしい計画が、われわれの心をとらえてやまなかったからである。マルシャンディ渓谷のマナン部落の動静などから、南面を接近路とすることにした。

その南面に登路があるか偵察してから申請書を出そうということになって、一九六九年の暮から新年にかけて踏査隊を送った。踏査隊は清水澄他三名で、三週間のあわただしい日程で行なわれた。天候などの関係で充分山懐に入ることは出来なかったが、ガンガプルナとアサプルナの登路を一瞥し、附随する調査と折衝を行なって帰国した。

本隊出発に先立つヒマラヤ遭難は、長野県山岳協会事情を悪くし、縦走の計画はなかば否定されたが隊員の士気は衰えなかった。国内隊荷一・四トンは七月三十日空路をカトマンズに向い、先発隊二名は、煩雑な諸手続きや挨拶まわり、通関などの任務を帯びて、八月十二日羽田を出発して行った。

隊員およびシェルパなどは次の通りである。

隊長	清水　澄	三五歳	原山岳会　渉外
副隊長	小林　一智	三一歳	蒼稜山岳会　写真・記録
隊員	宮坂　尚樹	三三歳	諏訪山岳会　装備
	小木曽　巌	二九歳	飯田山岳会　輸送
	塩原　明	二八歳	岳友会ライフ・アンド・マウント会計
	木下　洋亮	二八歳	飯田山岳会　梱包
	赤羽　武士	二八歳	松本登高会　渉外・食糧
	若林袈裟登	二七歳	山幸グルッペ　装備
	笹川　広平	二五歳	岳友会ライフ・アンド・マウント医療

箱山　益夫　二二歳　蒼稜山岳会　食糧
サーダー　ギルミ・ドルジ　三五歳　クンデ
コック　ヌルブ　三五歳　クンデ
高所ポーター　ペンバ・ヌルブ　三六歳　クムジュン
アン・ヌルブ　三八歳　パンボチェ
アン・ギャルゼン　二八歳　ナムチェ
アン・ペマ　二九歳　クムジュン
ハクパ・ツェリン　二六歳　クンデ
ローカル・ポーター　アン・ヌルブ　二七歳　ボルチェ
パサン・テンバ　二三歳　クムジュン
ドルジ　三〇歳　クンデ
キッチン・ボーイ　タルパ・ギャルゼン　二九歳　ミリンゴ
ナワン・チョタ　二四歳　クンデ
メイル・ランナー　パサン・リタ　四二歳　ボルチェ
リエゾン・オフィサー　ドラブ・バハドール・プラダハン
二四歳　警部

他にウッド・ポーター四名（内一名はメイル・ランナー兼）をBCで雇傭した。

行動記録

本隊は八月二十日、ネパールに入った。ポカラへの空輸はチャーターせず、普通の航空貨物として増発便で送る方法を見出し、残余を定期便によった。航空会社の手違いから二、三日の遅れをみたが、経費の節減にはなった。八月二十八日、総隊荷四トンは一二〇人のポーターの背に預けられて、蒸し風呂のようなポカラを脱出した。

モンスーンの雲が切れて、神々しいばかりのアンナプルナやマチャプチャレの連山が姿をみせ、全員の歓声と士気が上る。道はポカラから西進しビレタティでモディ・コーラに沿って遡るもので、ノイス以来すでに多くの登山隊になじんだ道である。折からモンスーンの雨は、出発の日を除いて連日降り続き、山蛭の猛攻は容赦なかった。水田ではグルン族の娘たちが、除草の共同作業で陽気にはしゃいでいた。激流逆巻くモディの流れに釣糸を垂れてみたが、全然収穫はなかった。野菜が買えず食糧係は苦しんだ。それは道中随一の大村落ガンドルンでも変らなかった。村人は田畑の近くに、仮小屋住いで作業にいそしんでいるらしく、白壁の大きな家には年寄りや子供しかいない。とうとう笹川ドクターまで診療の代償に野菜を売れと援護射撃をしたが、成果はさっぱりであった。ポスト・モンスーンには野菜が出まわるという調査をよいことに、キャラバンはモンスーン中であることを配慮しなかった間抜けさを、思い知らされた。

ヒマラヤン・ソサエティのポカラ支店というケサン・アムドがアレンジしたポカラ・ポーターは、統制よく強く従順であっ

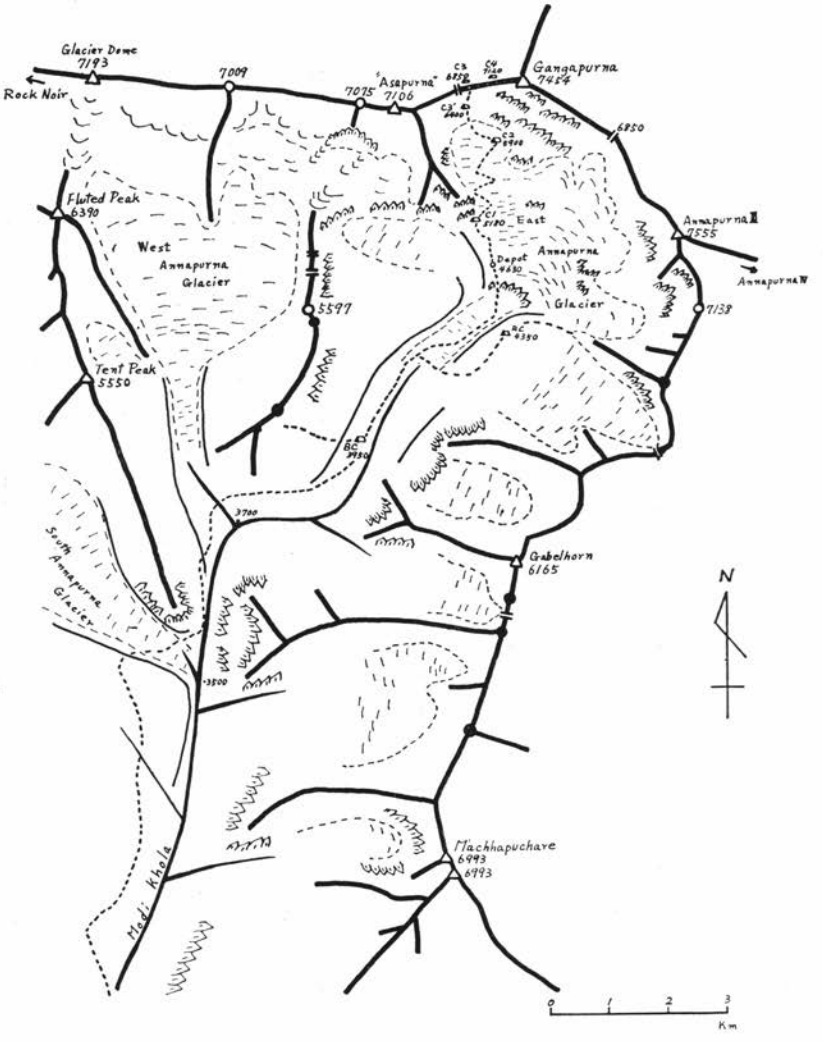
たが、最奥の村チョムロンのポーターはそうはいかなかった。そこから奥には泊り場がないと煽動して、半日でキャラバンをやめてしまった日もあり、隊員の憎悪を買った。けれども奥へ入るにしたがってよく働き、とりわけ帰路には雪の中をよく頑張って汚名を返上した。彼等は陽気で精悍なグルカ兵上りであった。

九月四日、南アンナプルナ氷河末端に予定より一日多く費して到着、三〇名のポーターを残して解雇した。以後三日間のピストン輸送を行ない、東アンナプルナ氷河の終堆石の円丘、高度三九五〇メートルの地点へ隊荷を集結。七日、ベース・キャンプを設営した。モンスーンの雲が上ってみると、そこはガンガプルナの南壁が圧倒的な迫力でせまり、アンナプルナⅢ峯からマチャプチャレへの稜線にとり囲まれた、厳しくも美しいヒマラヤの真只中であった。

登山活動は九月九日から開始された。小林、小木曽、木下らで登路を探りに、明けやらぬモンスーンの雲の垂れ込める中を、見当をつけていた上部に向った。グランド・キャニオンと呼んだ堆石崖が両側に屹りたつモレーンを被った氷河を進むと、つき当りは高距三〇〇メートルほどの岩壁となり、その上部は氷瀑となっている。ここに、ギュンター・ハウザー隊の美しい写真で期待していた氷河湖があったのだが、今は底が抜けてすでにない。両岸の堆石崖も正面の岩壁も、常に落石が見舞う。岩壁の左の崩れやすいリッジを登ると、やがて快適な岩登りとなり、氷瀑から流れ出る水流を越えて、小広い岩の台地となる。そこをデポと定め、翌十日から荷上げを始めた。

十一日、初の好天。清水、小林はガベルホルン側のグランド・キャニオンに登り、かねてから懸案のアサプルナ東南稜をつぶさに観察し、またC1へのルート工作を行なっている小木曽、木下へ無線機でルート指示をあたえた。側堆石が東南稜に消える岩壁直下の氷瀑に面した、高度五一八〇メートルの地点をC1と定めた。アサプルナの頂上附近から東南に派生する雪稜を、われわれは東南稜と呼び、南面からの直登ルートと目していた。しかし、観察の結果はみかけよりも困難であり、縦走を前提とした荷上げルートのみならず、単にアサプルナへの登頂ルートとしても絶望であった。われわれは東南稜からの縦走の夢を捨て、コルから両峯を攻略することにした。十五日、C1を設営し隊員五名とシェルパ四名が入った。また、コルへのルート設定と氷瀑の通過を助けるため、グランド・キャニオンの上に偵察キャンプを出した。この頃になるとモンスーンも明けたのか、午前中は快晴、午後雲が湧き上り、ガスとなって時には雪も降るが、夜間は晴れるという状態が繰り返されるようになった。

五日間で氷瀑のルート工作を終り、二十二日、南壁に近い雪原にC2（五九〇〇メートル）を設置した。ここからコルに至る



Sketch Map showihg climbing route of Gangapurna and Gangapurna region
(original: German Expedition 1965, arranged by K. Shimizu)

開いたクーロアールは、巨大な氷のインゼルを抱え、東南稜側は複雑な小岩稜から絶えず落石を発し、南壁側は急峻なヒマラヤ襞に守られて、難攻不落を誇るかのようであった。何よりもその高度差が一〇〇〇メートルにもおよぶことが、事をむつかしくしていた。インゼルの三つの大きな氷壁を下から第一、第二、第三ステップと呼んだが、その一つ一つの突破が登攀の鍵であった。落石に阻まれたり、降雪に足止めされたりして、進捗は遅々としていた。登攀は特に第一、第二ステップが時間がかかり、交替作戦で多くの人員が投入された。第一ステップ上に危険を承知の仮キャンプ（C3'六四〇〇メートル）を作ったりして粘った。

クーロアールの作戦が長引くにしたがい、十月早々に登頂出来るという楽観論も消え、物資の消費状況が検討されたところ、特に燃料消費が過大であることが判った。ポカラから灯油を補給するとともに、C1で薪を使用するなどの対応策がとられた。クーロアールは十五日の日数と三四人の登攀労力、一一〇〇メートルにおよぶ固定綱を要して、突破された。

十月七日、小木曽、赤羽は初めて稜線に達し、北面を覗きみた。ティリツォの水が青く美しく、その遥か遠くにはダウラギリの肩をいからせた姿が聳えていた。コルからアサプルナへの稜線は、ナイフ・エッジと雪庇の連続で、登攀は不可能に近いことを示していた。コルに達すれば楽勝という考えは改めさせられた。われわれは先にガンガプルナに登ることにした。なぜ未登峯を捨てたか。縦走計画の当初から、そこは一つの通過点として考えていたことが、大きく作用したといわざるを得ない。こうして結果として、われわれは縦走も初登も失なうことになった。

九日、コルの近くの稜線上にC3（六八五〇メートル）を設け、小木曽、赤羽、清水とシェルパ三人が入った。下を見下ろすと一気にC2まで転げ落ちそうで、常に体をロープに繋いで行動する。このような高所でも昼間の濡れ物が、夜間テントの外におくだけで乾いてしまっていた。十日、十一日とガンガプルナ西稜に氷を切り、フィックス工作を行ない、六三〇メートルの固定綱を張る。スノー・バーが足りなくなり、下方のものは梯子の横材を埋めたりして代用し、先端に送り上げた。最高到達点に恰好なテント場を発見、C4の場所にすることにした。今まで見えなかった頂上が、針のように尖って夕日に金色に輝いて望まれた。まだ遥かな感じである。

十三日、C4を設営した。高度七一二〇メートル。風邪のため休養していた小木曽は回復せず、かわって清水がアタックに加わることになる。この日から強風が吹き出し寒気を増したが、冬の到来には早すぎるようで、高所に登ったせいと思っていた。デポした食糧は鳥に食い荒され、雪上に散乱していた。

十四日、ルート工作。ショルダーから先は少しは容易になる

だろうとの期待に反し、一層痩尾根と雪庇で厳しくなり、そこにある小ギャップは越えられるかどうか判らない。頂上は手前のピークに隠れて、あたかもそれが頂上であるかのようであった。すべてが明日に賭けられた。終始東に望むアンナプルナⅢ峯は、牛の背のような尾根がだらだらと頂上へ高まり、羨望の念を禁じ得ない。C4は二人用天幕を張り加え、ギルミ、ペンバ、アン・ヌルブの三人が待っていた。C3へは小林、木下、若林が入り、小木曽は逆にC2へ下った。西稜で天幕を張れる場所は、後にも先にもこのC4の地点しかなく、しかもそこに二つの天幕が張れたことは、幸いであった。

十五日、アタック。シェルパは午前二時から朝食の用意を始め、四時四〇分、清水、赤羽、ギルミは頂上へ向けて出発。ルート工作の終点までは非常に早く達したが、それからは痩尾根、ギャップ、氷壁と極端に時間を食う。手がかり、足場刻みの作業を交替で続けながら、蝸牛のようにのろのろとした歩みで進み、九時過ぎ陽の当るニセ頂上と呼んだ地点に出る。下部キャンプではアタック隊の姿をとらえ、終日開局の無線機がしばしの間賑かに鳴り響いた。リエゾン・オフィサーのプラダハンは、熱心に頂上までの残距離を計算して知らせた。

そこからも雪と氷の痩尾根は変らず、北側には雪庇が張り出していた。勾配は頂上まで変ることなく、緊張の連続であり、足場刻みは息切れぱかりして少しも捗どらない。近づかない頂上を見上げて歎息し、苦しい咽喉をぜいぜいいわせながらピッケルを振るい続ける。痩尾根の急傾斜から逃れるために、尾根の背に近づくことは、雪庇に乗る危険があった。近づかない頂上、同じ作業、あたかも時が止っている感じであった。もう今日は頂上へ辿り着けないのではないかと思われた。長い時間。漸くにして、本当に漸くにして、足場刻みから解放され、歩いて進めるようになり、終りの時がやって来た。

頂上は雪の丘だった。東西に細長く十人が同時に立てるほどの、雪のテーブルである。午後二時十五分。われわれのガンガプルナは終った。充実感も感激も不思議となない。無線の報告も、旗を持って頂上に立つことも、写真撮影も、価値のあることには思われない。なぜだか判らない。とにかく仲間のためにそれをしたのだという気持と、早くあの下に見える谷間へ無事に降りたいという気持であった。

そんな気持にそぐわない、喜びの声が各キャンプから伝わる。西方のダウラギリの堂々とした姿、アンナプルナの鋭いピラミッド、東方にはマナスル、ピーク29、ヒマルチュリの山山、チベットの山なみ、皆美しく気高い山容を誇って、われわれの目に映じる。マチャプチャレはもう眼下になり、BCも湧き上った雲の間に遥かあのあたりかと思われた。一時間滞在した後、頂上を後にした。

登りに苦しんで切った足場や手がかりが、下りのスピード・

アップに役立った。しかし、ニセ頂上あたりから全く突然に猛烈な風雪に見舞われ、なにも見ることの出来ない乳白色の世界になった。急激な天候の変化であった。ルートを外れないよう、暗中模索の懸命な下降を続ける。ニセ頂上からは、木下、若林、ペンバらの張った固定綱に助けられた。途中から二者合同となり、暗くなった風雪の稜線で悪戦苦闘、午後七時、C4に転げ込んだ。アタック隊は遅くなろうともC3まで帰投する予定であったが、この嵐では論外。C4は五人分のスペースに七人が寝た。寝袋も二つ足りなかった。

豪雪、雪崩、遭難

十六日、吹きつのる風雪はますます勢力を増し、収まりそうもない。第二次アタック中止。C3への撤退を試みるも、立っているのさえ困難で行動不能。どのキャンプも雪との闘いが始った。風の強いC4でも三〇分もすれば風下は雪で埋り、除雪はやりきれず、体で押えて空間を潰されまいと確保する。C2以下のキャンプでは昼ごろ、すでに天幕よりも雪の方が高く積もり、総出で除雪を繰り返しても、もう雪の捨て場がない。BCでさえも除雪のアンバランスで、天幕のポールが折れてしまった。C1やC2は守りきれずに潰された天幕は放棄して、全員が一つの天幕に入っていた。C3は一人だけであるため保守も出来ず、午後四時頃には雪の中に没し去り、小林はクロス・ポールとフレームの空間にようやく耐えていた。

十月中旬というのに、この天気はどうしたことか。せいぜい一日も降れば止むと思ったのに豪雪はつのるばかりだ。こんなに降れば斜面という斜面は、持ちこたえられなくなって、雪崩を誘発するに違いない。各キャンプとも安全の限界だ。早く嵐が収まることを願う。想像を越える降り方なのだ。

無線は定時交信のたびに各キャンプの状況を知らせ、互いに励ましあいながら、相手の状態がわかるのは、特にありがたいことであった。午後も深まるにしたがい、C2の緊迫した状況が伝わってきた。最善の場所と思いながらも、「どこかもっと安全な場所はないか」と呼びかけずにはいられない。C2は答える。「雪崩の音は皿峯側で盛んに大砲を打つようだ。またアサプルナ側からクーロアールの入口にかけても出ている。南壁は静かだ。南壁の中心が最も静かだが、ここも同様に安全だ。上にある小山が雪崩を二分する恰好になるので、もし来ても安全で優秀な場所だ。今動くことは却って危険と思う」。

午後六時、定時交信。「雪はまだ降り続き雪崩も激しく出ているが、C2は大丈夫だし必ず守る。ここのことを上の者が心配してもどうにもならない。下のことは下の者に任せて頑張って下って来てくれ。どんな状態になって辿り着こうとも、後はわれわれで必ずBCまで送り届けてやる。それでは明日の朝六時、またトランシーバーで会いましょう」。これがC2からの

最後の消息になるとは、誰が思ったであろうか。笹川の言葉は今でもわれわれの耳に焼きついて離れない。

十七日、朝六時、C2は応答しない。たちまち不安が襲う。故障か、雪崩か。嵐は少しも衰えない。しかしC2では何か異常事態が発生したに違いない。事情を知るためには少しでも下へ下りたい。幸いC3までの間はほとんど固定綱がある。何とか行き着くことは出来るだろう。C4の七人は、足元さえ定かに見えぬ猛烈な風雪の中を、C3目指して出発した。何も見えないため、雪面か空間か判らない。固定綱は風に吹き上げられて、北のマナン側の空をのたうちまわっている。手で雪面を探ぐり、空中に重心を移さぬよう気を使う。それでも先を歩く者は度々その失敗をした。

ふと気がつくとアン・ヌルブがいない。彼は指の冷たさに耐えかねて、雪穴を掘りビバークしようとしていた。無理もない。見れば軍手だけしかしていないではないか。彼はタイガー・バッジを二個も持つ優秀なシェルパなのに、これはどうしたというのだ。不幸にも彼は、両手の指七本を失う顛末となってしまった。途中から私は幻覚に悩まされた。二月の北アルプスにいるようで、岳樺がまばらにあり、小屋が現われたりした。焦燥の念と精神的負担が、その原因であったかどうか。

わずか六三〇メートルの距離を六時間四〇分もかかって、C3に辿り着いた。天幕は掘り出しても使いものにならず、雪洞を掘る。仲間を迎えて小林は孤独から救われた。

ところがサーダーのギルミは、今日のうちにもっと下まで下ると云い出した。「何を云うか、馬鹿な。行けば死ぬ、絶対だめだ」。しかし何を云っても彼の考えをひるがえらせることは出来ない。彼は忠実なペンバを連れて下り始める。仕方ない。燃料と食糧を持たせ、C3から三〇〇メートルほどの上部クレバスに泊るよう念を押す。これがこの秀れたシェルパたちとの永遠の別れになってしまった。もっと強く引き止められなかったかと今でも心が痛む。

十八日、嵐は相変らずで、行動不能。ギルミは上部クレバスから「C2はない。C3へ戻る」と伝えた。午前八時ごろである。その後彼らは登ることは不可能だったためか、さらに下りC1のシェルパに「水と食糧を持って迎えに来い」と呼びかけた。「雪が背丈以上もあり不可能」と返答したという。何分にも空中の状態が悪く、会話はシェルパ語で、われわれの意志が伝わったかどうか。現在位置も充分確認出来ぬまま、午後一時四十五分、ギルミ・ドルジとペンバ・ヌルブは永久に連絡を絶った。

十九日、ようやくに天候回復。C3では下山を始めた。しかし体はふらふら、雪は深く登りの倍も時間を食う。固定綱を何とか掘り起して使えることがありがたい。C2を見下ろせる場所まで来た。一面、雪崩の跡。悲しくもC2はやられたと認め

なければならない。どこかに避難していることを、空しくも祈った。

心と体の脱力で行程は意外に捗らず、この夜はC3′にデポしてあった高所用天幕を掘り出し、それと不完全な雪洞で過す。沈む陽に照らし出された美しい夕景がやりきれない。

二十日、C2に近づくことは恐ろしかった。深雪に手こずりながらもその時が来た。真先に下った若林が現場に着くなり、声を上げて泣き出した。堰をきって皆も泣く。そこは一瞥しただけで、C2の全滅を物語っていた。捜すことなど徒労であると思い知らせる厚いデブリ。地形も変り、なにも発見できなかった。われわれは完全に打ちのめされた。

六人の仲間、小木曽、笹川、箱山の三隊員、アン・ペマ、アン・ギャルゼン、ナワン・チョタの三人のシェルパの安らかな冥福を祈るほか、われわれに出来ることはなかった。そして、ギルミ・ドルジ、ペンバ・ヌルブの行方も知れない。八人が手をとりあって、永遠に平和に、ヒマラヤに抱かれて眠れと祈った。

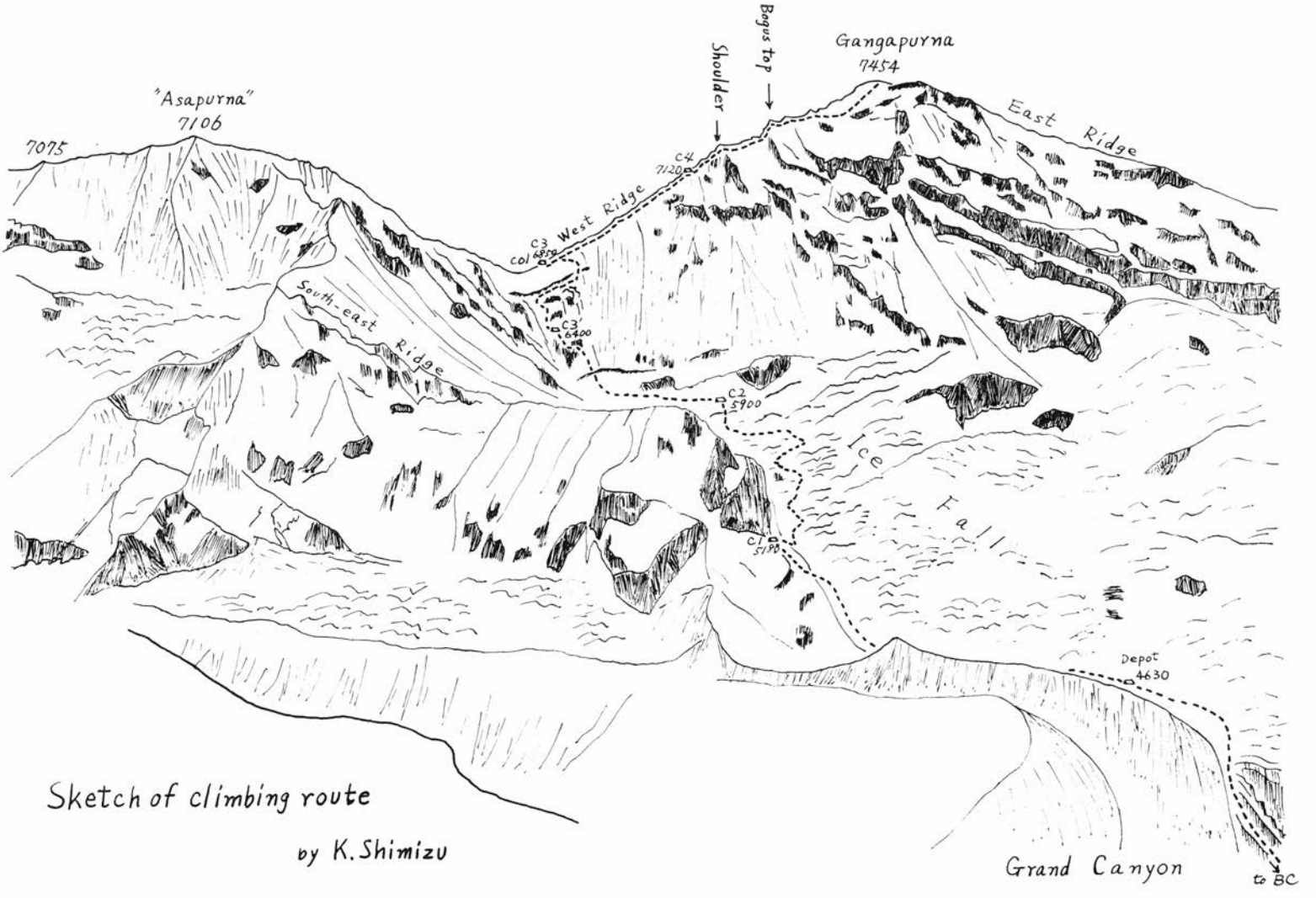
以後、塗炭の苦しみを味い、とにかく生きてわれわれはBCに辿り着いた。二十二日である。どんな辛酸も死と比べたら軽いものである。地形の変化と空腹と疲労との闘いであった、とだけ記しておく。

山々はジェット気流が吹き始めたのか、ガンガプルナの頂上から高々と雪煙が上る。その風が時々東アンナプルナ氷河にも下りて来て、グランド・キャニオンの土砂を舞い上らせた。天気は寒くなったが、われわれの心の中はもっと寒々としていた。捜索に引き返す考えは実情が許さなかった。人里に出るとシェルパたちはロキシーに酔い痴れて歩いたが、彼らもそれで悲しみを紛らわそうとしているのかと思うと、隊の統制が乱れても、それを制止することは出来なかった。チャンドラコットで、ガンガプルナに最後の別れをしたわれわれは、もう何も思うまいとして歩いた。

検討

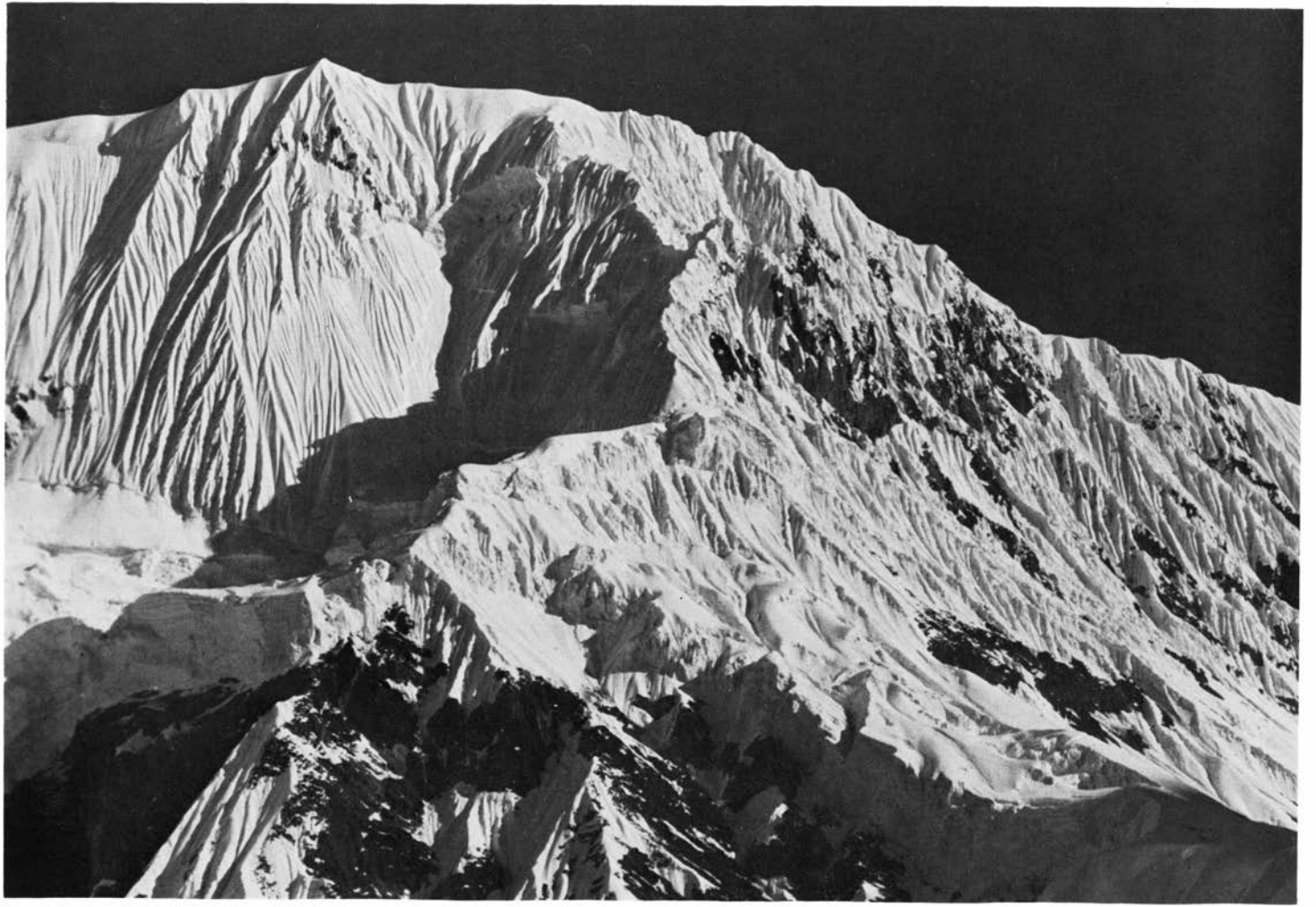
遭難の原因は予期せぬ時期の異常なる降雪であった。十月中旬という時期に、三昼夜にわたって間断なく雪が降り続き、しかも時間当りの降雪量が、全く想像を絶する多さであった。過去にこれほどのデータは見出せない。

地球の南北熱交換によって勢力を維持する偏西風は、ヒマラヤの位置する緯度あたりを南限として卓越するが、夏の高温により季節的に幾分北に後退をする。そこへ、ベンガル湾の高温によって暖ためられた湿潤な空気が押し寄せ、ヒマラヤにぶつかって多量の雨を降らすことになる。これがモンスーンであるが、モンスーンと偏西風の勢力が均衡を保つ時期が、登山に適するプレ・モンスーンとポスト・モンスーンの天候安定期にな



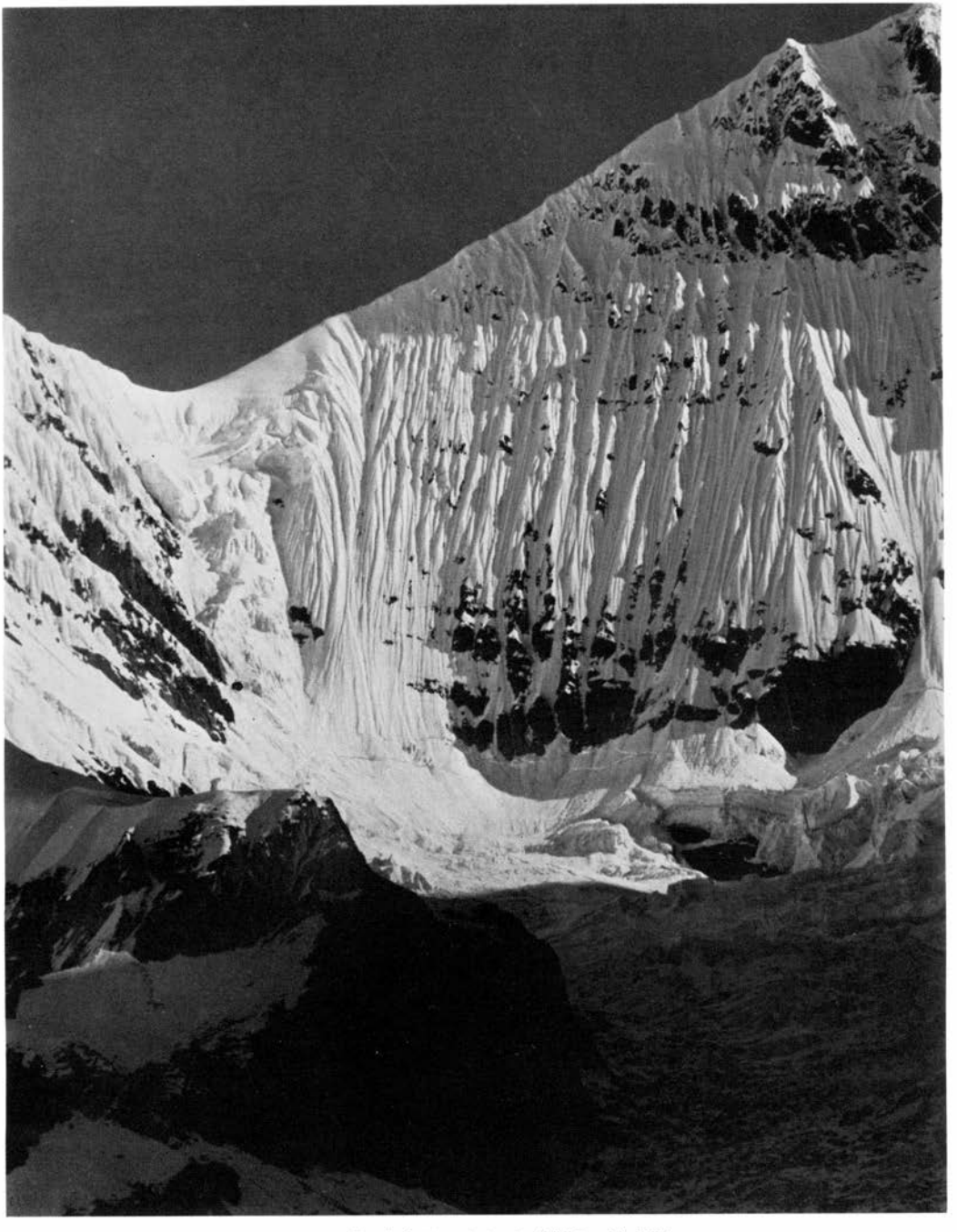
Sketch of climbing route

by K. Shimizu



アサプルナ（7106m）とその東南稜（撮影・清水澄）

グランド・バリエールとティリツォ湖，左後方はダウラギリIII，IIとツクチェ・ピーク（撮影・赤羽武士）
Grand Barier, Tilitso and Tilitso Peak with Dhaulagiri III and II, Tukuche Peak in left background seen from the point 7000m high on West Ridge of gangapurna. (by T. Akahane)



ガンガプルナ南壁の左部分（撮影・清水澄）
The left part of Gangapurna South Face. (by K. Shimizu)

るわけである。それは例年かなり一定していて、ポスト・モンスーン後ふたたび偏西風が勢力を盛り返して南下すると、寒い冬となる。ポスト・モンスーンはほとんど十月一杯で終るといわれる。

われわれが遭遇した悪天候をデータによって分析するならば、素人見解ではあるが、偏西風の消長のいたずらといえる。

この年の場合、夏が短かかったのか偏西風が勢力を盛り返す時期が非常に早く、そのためにモンスーン明けは九月中旬となっている。しかもその勢力が強大で、主軸がずっと南に下ったため、九月中は非常な好天となった。ところが、あまりにも早く押し返されたモンスーンの気団と、九月中の好天による中央アジアの暖気は強いものとなり、この両者の相乗作用により、十月中旬に低気圧を作るとともに、一時偏西風を北に押し上げた。この間隙に充満していた南の湿潤な空気が押し寄せ、何日間もの荒天となったもので、いわば小モンスーンのような形になったと理解している。これは全く異例のことであり、あまり早く明けるモンスーンは注意しなければならないと考える。

次に重要なのは、キャンプ位置である。C2は、登攀の進捗と地形的安全の面から検討し、決定した。一時その位置が悪かったとの考察をしたこともあるが、現在は異なる。あの場所に設営したことはそう悪くない。問題は、その際の検討に気を許し、安全であると信じて、安全にも限界のあることに気づかなかった点にある。

C2はわれわれの考えた悪天降雪の危険の、二倍程度には耐えたとみられる。しかし、どんなに危険が増大しても、安全だというものでないことを意識していたら、きっと避難して遭難せずにすんだであろう。逆説的に云うならば、危険な場所であったなら直ちに移動避難して、安全を確保したはずである。

戦術上、悪天などによる危険を過大に考えすぎれば、安全ではあるが、登攀は不可能になる。適当な危険負荷を想定しなければならないことは論を要しない。それと共に安全容量をよく見きわめ、危険に対処してゆかなければならない。想定危険負荷に関係なく、絶対的安全容量の少ないキャンプなどには、人員、資材とも集結すべきでない。

われわれ長野県山岳協会ガンガルプナ登山隊は、こうしてヒマラヤ登山史に一つの汚点を印してしまった。われわれの義務は、この経験を登山界に役立てることと、故人らの前に思う。この遠征で、数えきれないほど多くの人たちに暖かい御心配、御援助をいただき感謝の言葉もない。厚くお礼申し述べる。

「アサプルナ」の命名は、有能だった八人を記念して行なった。文中、これを使わせていただいたことを諒とされたい。

コルディエラ・レアル（一九七二年）

＝イヤンプ峰登頂と高所医学研究＝

川久保芳彦

はじめに

最近、私ども日本大学医学部ＯＢ山岳会に対し海外遠征隊から医師の派遣を依頼されるようになり、その都度医師を派遣するようにつとめてきたが、その度に私共医学部単独の遠征の夢も次第にふくらみ、一昨年のＯＢ山岳会の総会で、その夢が実現される運びとなった。

この遠征の目的は、第一に、六千メートル以上の高度を一人でも多く経験させることである。このことは、海外遠征隊から医師派遣依頼があった場合、六千メートル以上の山の経験者を派遣し、医師として十分活躍できるようにしたいと思ったからであった。

第二には、医学部の特徴を生かし、高所医学研究を行なうことであった。

第一と第二の目的を達成するためには、一人でも多くの希望者を隊員とし参加させることであり、特に高所医学研究の場合には隊員が一人でも多い方が有利である。従って、総勢十四人の大部隊になったわけである。

これらの目的に従って、当初はヒンズー・クシュ方面に的がしぼられたが、印パ紛争のあおりでパキスタンは全面登山禁止となり、第二案のボリビア・アンデスのコルディエラ・レアル山塊に転進した。

最初のワイナポトシ峰の登山は高所医学研究と高所順応のための登山であり、イヤンプ峰は日本初登頂を目的とした。

いっさいの準備を終え、先発隊三名が六月二十三日に、本隊は三十日にそれぞれ出発した。

ワイナポトシ峰については、本誌にすでに関田氏によって報告されている（『山岳』第六十三年）ので省略し、イヤンプ峰と高所医学について若干報告したいと思う。

なお、ワイナポトシ峰登頂の記録は左記のごとくである。

ワイナポトシ峰（六〇九四メートル）

七月十一日　ラパス発　ＢＣ建設（四六〇〇メートル）
七月十三日　Ｃ1建設（五二〇〇メートル）
七月十五日　Ｃ2建設（五五〇〇メートル）

七月十七日　第一次アタック隊
　山口、水野、山岸、大野隊員。
七月十八日　第二次アタック隊
　小川、三好隊員　直登ルート
　片山、矢作隊員　北側ルート
　柴田、末次隊員　南峰ルート
　頂上にて集結。

イヤンプ峰登頂（六三六二メートル）

私どもは、ワイナポトシ峰の登頂と高所医学研究を終え、一週間の休養兼準備期間を置き、BC建設までのポーターとして、二名のアイマラ語のできるインディオを雇用し、七月二十七日早朝、イヤンプ峰めざしてラパスの町を出発した。

リャマやアルパカの放牧されている荒漠としたアルティプラノを、トラックは砂塵を立てて突走る。途中のソラタは標高二六〇〇メートル、シュロの樹が繁茂する情緒豊かな町である。

この町から眺める、雪を頂いたイヤンプ峰とアンコーマ峰は痛いほどの鮮烈な印象である。やがて、車は五二〇〇メートルの峠を喘ぎながら越え、リオ・グランデにそったアンコーマ部落に着いた。時刻は午後七時であった。

翌朝インディオの騒々しい声で目がさめた。八〇〇キロの荷物をリャマ一二頭、カバリョ七頭、ポーター八人で運ぶことになり、キャラバンは開始された。

リオ・グランデの支流にそい、サボテンの花のある潅木帯を進む。インディオ達は足ばやに歩くかと思うと、三十分もたたないうちに休む。そしてお喋り。彼等はしきりにコカの葉を口の中に入れ噛みしめていた。コカは麻薬でもあり、彼等はよっぽど慢性麻薬中毒患者とみえる。

アンコーマ氷河よりの沢が流れているクエバス・カリエンテスを過ぎ、第一・第二の滝を左に巻くと、小さな窪地となり、ここにBCを置く。そこは、東と西を高度差約三〇〇メールの岩壁にはさまれた幅約一〇〇メートルの湿原で、海抜四五三〇メートルである。地塘が散在し、モレーンの間からナキウサギがヒョッコリ顔を出すなど、ワイナポトシ峰の殺伐としたBCよりも気分が良かった。

アンコーマ氷河に入る

偵察の結果、東側の岩稜は二五〇～三〇〇メートルの標高差をもってストンとアンコーマ氷河に落ちこんでおり、空身ならともかく、荷があればとても下ることは不可能とわかった。

一方、別の偵察隊の報告により、この東側の岩稜を左に巻いて、なんとか氷河の末端に出られそうであることがわかった。

七月三十一日、C1の建設を開始。

BCより東の岩稜を約一〇〇メートル直上、BCからの眺望

ではかなりの角度を示していた壁があり、また一部にオーバーハングを認めたので、相当な難度と予想されたが、何ら問題なくスムーズに行動ができた。そこからやや下り気味にこの壁を左に巻いた。眼下には、北アルプスの高天ヶ原に似たクエバス・カリエンテスが広がり、草を喰む黒牛、リャマが点在していた。

BCより一時間半で、アンコーマ氷河末端のサイドモレーン地帯に出、ここから氷河の右のモレーンにそって高度をあげる。途中、岩壁の小さなテラスにコンドルの巣を発見したり、また水晶や錫、ブロンズの原石を見つけ、皆、にわか仕立ての博物学者に変身したりした。

結局、C1はさきほどの岩稜をはさんで、ちょうどBCと反対側に建設した。ここは四九七〇メートルの高度にあり、アンコーマ氷河の向うにイヤンプの北峰が、一四〇〇メートルの壁を誇示するかのようにそびえ、その偉容に圧倒される。この位置から主峰（南峰）は北峰の右肩にかくれてみえない。

C2へはまず、氷河にそったモレーンを上部につめ、そこよりクレバス帯を行くことになる。ところどころ底なしのクレバスが無気味な口を開けているが、天候も安定しており、確実に高度がかせげる。ワイナポトシ峰の時のようにニエベ・ペニテンテに悩まされることがなかったのは、僥倖というべきだろう。

クレバス帯を行くこと三時間で、西コル直下の大雪原に出る。ここは東は主峰から西コルへの稜線、西はピコ・シュルツェに囲まれた、ほとんど無風の地帯である。落石は西コル右側の岩稜と北峰付近より絶えずあったが、途中のクレバスに落ち込み、天幕に届く心配はなかった。

八月二日、ここにC2を建設した。

西コルへのルート工作

いよいよ難関の西コルへのルート・ファインディングを開始。

C2から見た西コルへのルートは四五～五〇度の雪壁で、約四〇〇メートルの標高差があり、壁の基部には長大なクレバスがザクッと切れ込んでいる。まず、このクレバスの突破が当面の問題と思われた。

コルに向かって左側はクレバスの状態が悪くて近寄れず、右側は上部雪壁にもかなりの小クレバスを認めたため、これもあきらめ、とどのつまりコルに向かって最短距離の直登ルートを選んだ。

C2より緩傾斜の雪面を歩くことわずかで、雪壁の基部に至る。クレバスの幅は二メートルで数ヶ所のスノー・ブリッジがかかっていたが、最も頼り甲斐のある部分の手前にスノーバーを打ち込み、確保する。ブリッジは一足ごとに軋み、あまりい

い感じではなかった。ここから途中二ヵ所岩稜の露出部を含んで、コル直下まで四六〇メートルのあいだにロープを固定した。

基部より四時間で西コルへ到達した。コルの南側は雪庇が張り出し、アンコーマ峰とは大雪原を隔てて一〇〇〇メートルの標高差で対峙している。

主峰へつづく稜線のアンコーマ氷河側をトラバース気味に進む。間もなく広い雪稜となり、わずかな窪地を見つけてC3を設営した。ここの高度六〇九七メートルである。

イヤンプ峰登頂

八月五日、七時四十五分、C3を出発。温度計は零下十六度を示し、ややガスが濃く、ほとんど無風の状態。コンティニュアスで雪稜を行くこと二時間弱、山頂に続く最後の雪壁をスタッカットで登攀し、九時二十九分、イヤンプ峰の頂上に立った。第一次アタック隊は、山岸、小川、大野、三好各隊員である。

頂上は平らであるが、一人立つのが精一杯の幅である。そのため交代で頂上に立ち、部旗、日の丸、ボリビア国旗を振り回し、登頂成功を喜んだ。そしてBCとの交信を行ない、全員で元気よく歌を合唱した。

翌八月六日にも第二次アタック隊、和地、国吉隊員が頂上を踏んだ。頂上にはボリビアの国旗、日の丸、部旗を埋めてきた。おりしも、この日はボリビアの革命記念日であった。

なお、私共の登頂よりも数日前に、二人のパーティーによって登頂されているため、日本初登頂にはならなかった。

ピコ・シュルツェ峰登頂（五九三三メートル）

ピコ・シュルツェ峰は、C2から見ると、アンコーマ氷河をはさんでイヤンプ峰と相対してそそり立っている。頂上からは扇状の雪の斜面がアンコーマ氷河に広がり、その下部に真一文字に大きなクレバスが口を開けている。さらに左手は西コルへと稜線がつづき、右手には頂上直下より氷河へと岩稜が落ち込んでいる。

イヤンプ峰の頂上に立った和地、山岸、国吉、三好の四人の隊員は八月七日午前八時二十分、C2を出発した。

真一文字のクレバスに向かって右手を進み、クレバスを避けて急な雪面を登る。やがて、頂上直下より氷河に落ち込んでいる岩稜に取り付く。イヤンプ峰に入って以来、初めての岩登りである。緊張して交互に確保を繰り返して進む。

十二時、岩稜を抜け、頂上の斜面を一気に登りつめる。ニエベ・ペンテンテが三〇センチ以上にも成長し、非常に歩きづらい。

頂上には十二時四十分に着いた。日本隊としては初登頂であ

る。C2を出発してから四時間三十分の行動であった。ふり返ると、真正面にイヤンプの南峰と北峰がそびえ、私共の登った南峰のほうが北峰よりはるかに高いのが確認された。

ガスで見えかくれする景色を眺めて昼食をとり、十三時二十分、下山を開始する。次第にガスが濃くなり、雪がチラチラ降り始め、イヤンプ峰に入ってはじめての降雪である。下りを急いだが、ガスのためルートを外れてしまい、四〇メートルの懸垂下降を余儀なくされた。風雪の中をC2に帰りついたのは、十七時二十五分であった。

八月八日、全員BCに集結し、地酒でささやかな乾杯をし、無事を祝った。

八月十一日、BCを撤収。前夜より思いがけず降雪を見、一面の銀世界であった。装いをあらたにした純白のイヤンプ峰に別れを告げ、山を下った。

高所医学研究について

今回の遠征中、私共は登山活動を通して得られた高所医学研究のデータから、専門的興味を除き、実際の登山活動に役立つと思われる結果を要約して述べてみたいと思う。

私共の研究の特徴は、比較的高所の影響のみをとらえた時期と、登頂活動を通しての高所の影響との時期とに分けて、データが得られたことである。

つまり、ボリビアの首都ラパスは高度三八〇〇メートルとも云われ、私共は空港（四〇一〇メートル）におりた時から急激に低酸素の影響を受けたことになる。

ラパス滞在三日目に第二回目のテストを行なっている。この時期を急性期と名付けた。

その後、チャカルタヤ峰へは高所に慣れるために、車で二度行っているが、登山活動ほどの労作は行なってはいない。

自覚症状の消失から判断して、急激な低酸素の影響から回復できたと考えられる時期に、第三回目のテストを行なっている。ここまでの時期を第一次適応期と名づけた。この時期は登山活動という激しい労作なしに、比較的日常生活に近い状態で、急激な低酸素の影響から順応して行く状態をみようとしている。

その後、ワイナポトシ峰での登山活動が開始され、終了するまでの時期を第二次適応期と名付けた。この時期は、登山活動を通して低酸素の影響を徐々に受けている時期であり、この間C1（五二〇〇メートル）と、C2（五五〇〇メートル）、BC（四八〇〇メートル）でテストを行なっている。

研究テーマは、自覚症状の調査、運動負荷テスト（ステップテスト）、クレペリン精神作業検査、高所での薬物の影響の四つである。

結果について

私共の研究は、身体的な機能と精神活動とを同時に見ようとしたのであるが、テストに表われた結果は、複雑な機能のごく一側面をとらえたに過ぎない。従って、これから述べる結果は、全ての高所影響について述べているわけではないことを、あらかじめお断りしたい。

一、高所での自覚症状の出現とテストの結果とは必ずしも一致しない。

急性期では、自覚症状も出現し、またステップテストの運動後心搏数の回復率が悪くなるのは当然の事といえよう。

しかし、問題は第一次適応期である。

この時期では、全隊員の自覚症状が消失しており、平均値的にも安静時心搏数が減少しているにもかかわらず、運動負荷後の回復率があまりよくなっていない点である。

また第二次適応期での五五〇〇メートルの結果は、自覚症状を多く訴えているにもかかわらず、ステップテストの成績は、第一次適応期のそれとあまり変っていない。

このことは五五〇〇メートルでの低酸素の影響を考えた時、循環機能の回復がより悪くなっているとは限らない。

またクレペリンテストの休憩効果率も、ステップテストの結果とほぼ同じ傾向を示している。従って、自覚症状が消失し、主観的に元気になっても、循環機能や精神活動が高所の影響から回復しているとは限らない。

このような結果から、高所での自覚症状の消失から、ただちに生体が順応できたと考えることは慎しまねばならない。

私共の隊員中、高度の影響を強く受け、活動中止となった五人は、一時期または全期を通して、いずれも自覚症状の出現がないにもかかわらず、ステップテストの成績、特に回復率が悪かった隊員である。

二、起床安静時心搏数の変化は、必ずしも高度に比例して増加するとは限らない。

通常、高所の影響をみる場合、起床安静時の心搏数の増加が、主要な指標と考えられている。私共もそのような考え方をしていたが、実際データを調べてみると必ずしもそうとは云えない場合がある。

高度による影響として心搏数が増加していない事は、必ずしも循環機能の良さを示してはいない。このことは循環機能の代償作用が限界にきている場合もあるからである。

また逆にわずかな高度差で増加した場合、循環機能が悪いとは限らず、低酸素における生体反応の活発さを示している場合もあるからである。

要は、低酸素状態での労作に対する生体反応の回復が問題となってくる。

これをみるためにも、ステップテストを行なうことが有効であろう。

医師のいない場合には、次のような簡単な方法でも、ある程度、循環機能を調べることができる。

それは、東京にて膝を曲げる運動を一定時間行ない、その前後の心搏数を測定し、その記録を山に持って行き、登山活動中、朝の準備体操前に東京と同じ条件で行なってみることである。運動後〇・五分、一・五分、三分後と心搏数を測定し、その回復程度をみれば良いわけである。

その方法は簡単であり、誰でも場所があれば施行できる。従って、医師がいなくても、比較的判定しやすく、この結果、回復の悪い場合はその日の活動を制限し、要注意として扱える。そうすれば、表面に表われない循環機能の低下からくる障害を防ぐことも可能となろう。

実際、私共の先に述べた高所影響が強く出現し、行動を一時中止したある隊員は、自覚症状もないのに循環機能の低下を来たしており、激しい労作により、登頂を終え、BCに戻った時休養をとらざるを得なかった。

三、年齢が若いからといって無理はできない。

私共の隊は、高年齢層から若年齢層までの三段階の年齢層に分けられる。テスト結果から、高年齢層の回復率が悪いのは、ある程度理解出来るが、しかし、一番若い年齢層四人共に強い自覚症状のため、活動を一時中止している。このことは、高年齢層が楽をして、若年齢層がより強い労働をしいられていたわけではない。特に急性期から第一次適応期での行動は、高年齢層も変わりがなく、むしろ高年齢層の精神的負担の方が大であった。従って、若年といえども充分な注意が必要であろう。

四、精神的疲労が主観的に体験されていても、必ずしも精神活動が低下しているとはかぎらない。

つまり、主観的に疲労を感じたり、または自覚症状が多く出現していても、クレペリンテストの作業量、休憩効果率の低下をきたしてはいない。このことは、ステップテストの回復率が五五〇〇メートルにもかかわらず、悪くなっていない点と同じである。

従って、意欲、思考力の低下を主観的に感じていても、緊張することにより、ある程度精神活動の低下を補うことができよう。

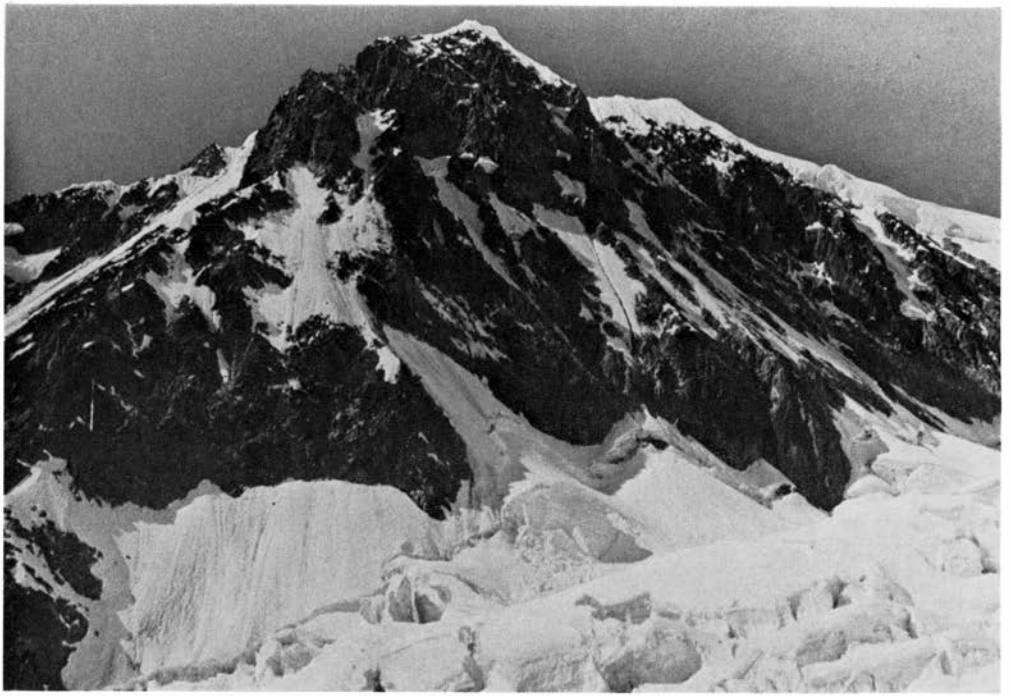
それ故、登山活動中、かなり疲労が強く出現する場合もあるので、精神的強さの持続性が要求される。

しかし、何が何でも頑張ろうとする異常亢奮は、かえってマイナスになるだろう。

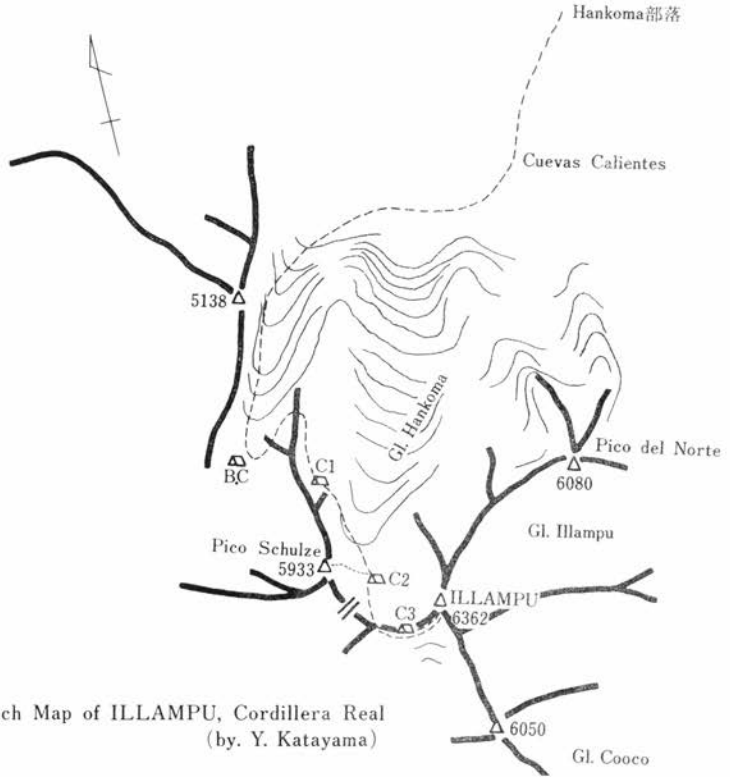
ある隊員は、クレペリンテストの休憩後の曲線に異常緊張がみられ、その後強い自覚症状を訴えて一時行動中止となっている。この事から、精神的疲労もまた高度の影響に加重されるものと推測される。

以上が私共の研究データの分析から得られた結果の概要であ

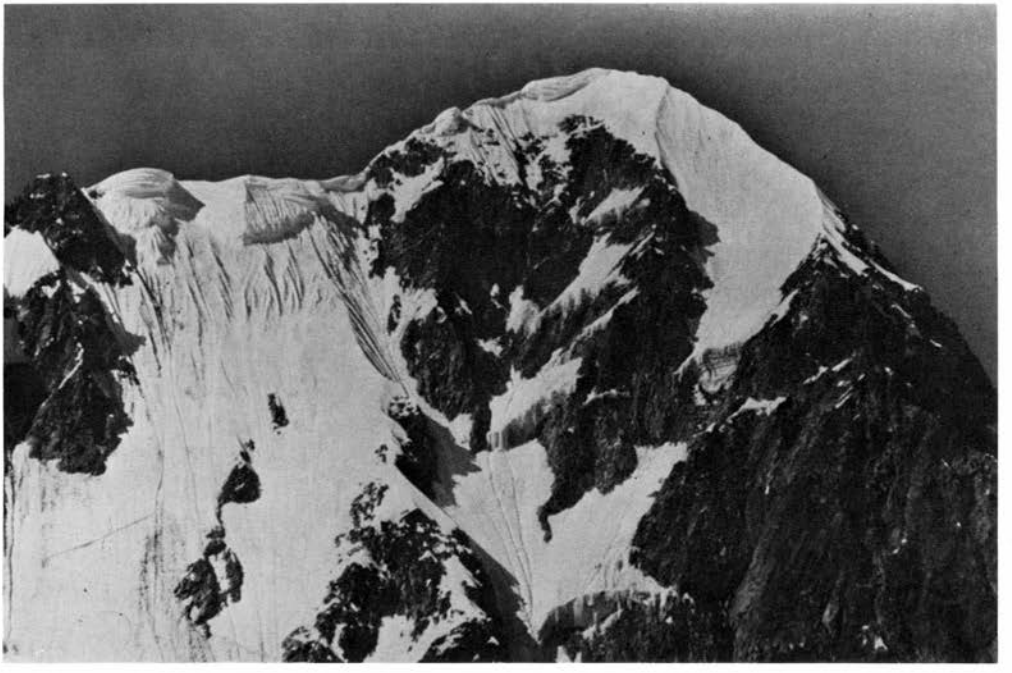
North Peak↓ ↓South Peak



アンコーマ氷河から見たイヤンプの北峰と南峰（主峰6362m）
Illampu (North peak and South peak) seen from Gl. Hamkoma.



Sketch Map of ILLAMPU, Cordillera Real
(by. Y. Katayama)



C 1から見たイアンプ北峰
North Peak (Illampu) seen from Camp 1.

↓Pico Schulze

西コルから見た Pico Schulze (右)
Pico Schulze seen from west col.

る。

私共は不充分なデータから、複雑な高所順応について触れることの危険性を感じながらも、この報告が今後の登山活動の参考になればと思い筆をとった次第である。

おわりに

私共の遠征は初回であったにもかかわらず、無事に終了したことは幸いであった。当初の予想としては、イヤンプ峰の方が難しいと考えていたが、技術的なことは別として実際はワイナポトシ峰の方が苦労した。これは恐らく高所順応の問題があったものと考えられる。

イヤンプ峰の場合、C2から頂上に立つことはもちろん可能であった。しかし、あえて私共は頂上につながる稜線上にC3を建設した。このことは、極力ビバークを避け、より安全に登頂したかったからである。この結果が、イヤンプ峰の頂上でアタック隊全員による元気な歌声となって表われたものであろう。

私共は、登頂をかねての医学研究のむずかしさを、肌で知ることができた。あらかじめ、種々の報告により、かなり困難であることを知り、実際現場での研究テーマをしぼったわけである。それにもかかわらず、十分なデータが得られないばかりか、隊員の負担が意外と大きかった。

また私共の登山活動は、ワイナポトシ峰にせよ、イヤンプ峰にせよ、いずれも十数日前に行動していた二人のパーティーと、結果的には同じような行動になってしまった。このことについて、吉沢一郎氏が『岩と雪』三十号で「あまりにも芸がないような気がする」と批判をしているが、しかし、芸がないどころではなく、六〇〇〇メートル以上で実際に高所の影響を経験し、高所で十分活躍できるような医師および医師の卵を一人でも多く育成できたこと（実際、両峰を通して登頂したのが十一人に及ぶ）、また次回の遠征の際、行なわれる高所医学研究の基礎となる、研究データが、不十分ながら得られたこと等、当初の目的が達せられ私共は満足している。

附記　日本大学医学部ボリビア・コルディエラ・レアル遠征隊のメンバーは次のとおりである。

隊　長　川久保芳彦（四一歳）
登攀隊長　柴田健一（三三歳）　隊員　小浜卓司（三九歳　渉外主任）　山口岱三（三四歳　医療主任）　和地健市（三三歳　食糧主任）　水野敏彦（二七歳　装備主任）　山岸和夫（二五歳　輸送主任）　末次哲郎（三三歳　研究）　小川郁男（二五歳　渉外）　片山容一（二二歳学生　資料）　大野　勉（二二歳学生　会計）　国吉和重（二一歳学生　器材）　矢作隆（二二歳学生　食糧）
特別参加　三好勝彦（二六歳　日大山岳部OB）

秩父宮殿下の思い出

アーノルド・ラン

私は秩父宮殿下には一九二六年一月に初めてお目にかかりましたが、その時はオックスフォードで一寸知っていた、侍従長の松平子爵が殿下の副官として御一緒でした。

殿下はスキーがお好きですが、本当は登山の方が大好きだとのことでした。滑降と回転などのアルペン競技を振興し、これを国際的に認めさせることを目的として創設されたカンダハー・スキー・クラブの発祥の地であるミューレンは、当然滑降専門のスキーヤー達に人気がありました。殿下が、そのようなダウンヒル・オンリーのスキーヤーでなかったことが、私がスキーにお供した最初の日にはっきりと判りました。私は、このミューレンで昼食前の一滑りにと…… 快適なスキー行を計画していました。それは、一般コースの一番上に殿下を御案内して「殿下……ここから降りにかかりましょう……」と申上げたところ、殿下は「もっと上まで行きたいですね……」と仰しゃったので「でもここで降りにかからないと昼食に間に合う電車を逃がしてしまいますから……」と申上げたところ、殿下は「電車をミスしてもいいですよ……」と仰しゃいましたので、なお上へ登って行きましたところ、案の定、電車に乗り遅れてしまいました。

スキーヤーがカンダハー・スキー・クラブの会員に選ばれるには、かなり高水準のスキー技術を体得していなけれ

ば入会することは許されないのです。殿下はスキーヤーとして、この入会資格は十分に備えておられましたし、そのスキー技術で資格を得られて、通常会員として入会されることを、皇族としての資格で名誉会員になられるよりも強くお望みになりました。これは立派なことだと私達は感じた次第であります。

殿下はカンダハー・スキー・クラブに立派な賞杯を御寄贈下さいました。このクラブはその兄弟分の間柄であるスイス大学スキークラブと共に、日・英・スイスの三国人が合同参加する秩父宮杯の争奪競技会を催し、この計画が実現の暁には日本とミューレンとで交互にこの競技会を開催することになるよう、計画されていたのです。

一九二七年、殿下はアルプスにお出掛けになり、私は殿下をハイ・アルプスにおける氷河のスキー行のお楽しみに御案内申上げる光栄に浴したのであります。このスキー行はグリンデルワルトのグリュンホルンとかビーリゲル・リュッケのトラバースなどという、何れもスキーでは初登頂のスキー登山でありました。この二つのスキー登山では、何れも途中、ある個所では岩登りもやらなければならないような所なのです。

殿下は第二次大戦が始まる迄、登山を続けておられました。殿下の亡くなられる少し前に私は、拙書、*"Mountains of Memory"* をお送りしましたが、この書にはかつて殿下にお供して登った時のことが記してあるものでしたが、それ以来遂に殿下にはお目にかからずになってしまいました。殿下は「最も気の重い時に貴著を読んで、どれほど嬉しく感じ、また心を慰さめられたかわかりません。登山とスキーに関する本はブリティッシュ・スキー・イヤー・ブックを含めて、空襲の際に私の東京の家が焼失したとき全部失ってしまいました。一九二六年の春、貴方と行を共にした忘れ難いアルプスのスキー行の記録を、貴書の中に見出して特に嬉しく思いました」と私にお手紙を下さいました。

かの高名な小説家イヴリン・ウォーはかつて、彼の同時代の人々は、ヴィクトリア王朝時代の我々の曽祖父たちが性について自己意識が強かったと同程度に、階級ということについて自己意識が強かった（社会的地位の上下）と述

べています。この階級の上下を重視するということだけが、社会的身分を決する唯一の要素ではないのだということもまた、注意に値することなのです。登山家であるばかりでなく、山岳の美しさを讃美する人達というものは、一つの特別な、相互に親しい間柄の階級に属するもので、社会的相違などということは殆んど問題にしないような階級に属する人達なのです。多年、私はグリンデルワルトのフリッツ・アマヘルという男と山登りもし、スキー行もやりました。我々二人の間柄は散々苦労して登ったことや快適なスキー行をやったこと、また時には危険にさらされるような登山もやった数々の思い出によって、親しく結ばれているのです。曽て、山好きの私の英国の友人とグリンデルワルトを歩いて居ました時に、フリッツにパッタリ会ったことがありました。この友人に私は、これは私の友達フリッツ・アマヘルだと紹介すると、フリッツは、さも批難げに「唯の友達じゃない。あなたの大の仲よしの一人ですよ」と言いましたが、けだし彼の言った通りです。

フリッツはグリンデルワルトの、あるホテルのエレベーターボーイ、ポーターだったのです。秩父宮殿下は天皇陛下の弟君でありますが、御両人共山がその最良を与えた登山家の仲間に属する人達であります。秩父宮殿下ほど山を熱愛された方は少ないでしょう。殿下が最初に読まれた英語の本は *"The Mountain of Youth"* でした。殿下の語られたところによると、この本で殿下の御心を捉えたのは単なる個々の登山の記述ではなく、山の持つ神秘の示唆であったと私は思っています。確かに皇族の間に回覧された一雑誌の中で、山を愛する人々の所感として次のようなことを、殿下は表現されています。「山そのものは久遠の生命であり、大聖哲である」と。

〔**成瀬岩雄** 訳〕

訳者後記

今夏、たまたまスイスに旅行する機会に恵まれたので、この機会に以前から考えていた、故秩父宮様が、その昔、スイスでスキーや登山を楽しまれた時にお供したアーノルド・ラン氏に「殿下の思い出」を『山岳』に執筆を依頼したところ、快く引受けてく

れ、早速前記のような原稿を送ってくれた。これで私としても今度のスイス旅行の目的の幾分かを果し得たことを、内心喜んでいる次第である。

アーノルド・ラン氏は現在はサーの称号を持ち、英国山岳会の名誉会員でもあり、また数多のスキーや山岳に関する著者があり、本会々員諸兄の比較的老年の方々は、その名もよく御承知であろうと思う。一九二五、六年頃、未だスキーに関する本が少ない時代にはダウンヒル・スキーの創始者としてスキー界にも聞こえ高く、われわれもその頃は彼の著書を盛んに愛読したものである。若い時にスコットランド地方の岩登りで怪我をしてから片方の足が短かくなり、彼独特の金具を使ってスキー登山をやっていることも有名な話である。それに、秩父宮様に対しては衷心より尊敬を抱いていたことは、数々の事実が物語っていることであるが、彼ももう八十歳を越す老齢に達しており、今はミューレン・グリンデルワルトの別墅で静かな余生を送っているようで、是非一度日本にも来ないかと交信の度毎に勧めていたのであったが、取敢えず今回早速執筆を快諾してくれ、本会としてもここに感謝の意を表したいと思うのである。こんなことで日本山岳会の育ての親ともいうべき英国山岳会と日本山岳会との間も尚一層緊密になれば、誠に幸甚の至りと思考する次第である。

尚、この原稿が同時に秩父宮妃殿下のお手許にも、ラン氏より直接届いた由、妃殿下も大変お喜びであり、早速礼状を書かれると仰せられていたこともここに併記しておく。

（一九七三年十二月三日）

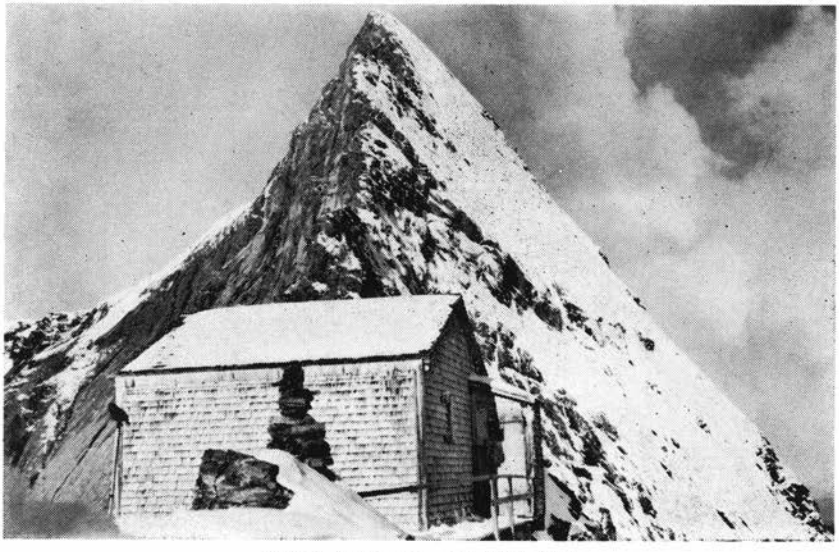
*アーノルド・ラン氏は、一九七四年六月二日、逝去された。主著『登山百年史』。（編者注）

アルプスのあの日あの時

佐藤久一朗

草鞋が日本の山を登るはきものであった頃、先輩たちはヨーロッパに渡り、アルプスに登るみちを開き、後進はその恩恵に浴しながら、道幅をひろげて来た。かつて先輩たちが野宿をしたあたりに、避難小屋が建ち、生死をかけた悪場には、固定ザイルが下っていた。いろいろの施設や、山道具の進歩で、アルプスは登りやすくなったが、手を加えてやさしくしたことを残念がる人も少くない。けれども天候の烈しさは今も昔も変りなく、山の犠牲をほしがるようである。わたし（一九〇一年春生）が、いくつかの山頂に立つことの出来たのは、みんなが組み立てた足場を登り、手が届かないと若い仲間の強い肩車にのり、そして好天に恵まれたおかげであった。

よく晴れた夏、テオドール・パスの山荘から小さなクライネ・マッターホルン（三八八三メートル）に登った時、陽のあたる下の氷河で、半分裸で夏スキーをたのしむ人がいるのに、頂上の遭難者の碑にはしずかに雪が降りかかっていた。この頂上から仰ぐマッターホルンは、ツェルマットから見るのと様子が変り、袴をぬいで浴衣にでも着替えたような親しみを感じ、登る機会をうかがうようになった。同じ夏、アイガー東山稜の槙先生が寄贈した資金をもとに、グリンデルワルトの山関係の人たちが、初登攀を記念して建てたミッテルレギーの小屋（三三五四メートル）に泊



アイガー東山稜のミッテルレギー小屋

ることが出来た。晴天がつづいた三日目であったが、夕方ふり出した雨はあられに変り、日が暮れると小屋の板張りも岩も、硝子をはったように凍って光った。一緒に泊ったガイドとポーターと三人のお客は、翌朝ためらうことなく、わたしたちのあとを追うように引き返した。逆層の岩も、固定ザイルも凍った朝の降りは、気を休めるひまもなかった。

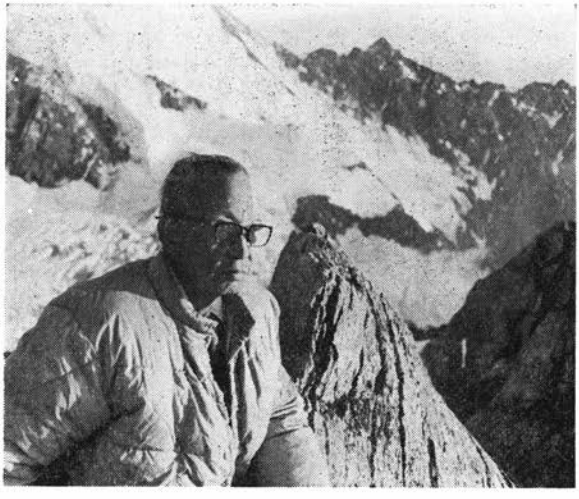
次の年一九七〇年の七月、再びアイガーを目指して羽田を立ち、近藤等先生や、毎年東山稜を登り、この年で七回目の大倉大八さん、写真関係の奥山章さん、三宅修さんを始め腕達者な若い仲間合せて九名にまもられ、わたしは小西政継と組んで登った。その日は素晴らしい登攀日和で頂上を越し、西壁を降ってボーデンワルトのホテルに帰るまで、風もない晴天がつづいた。ホテルの玄関をはいると人の気配がない。三階の部屋まで馳け上ってみると、身体に張りがあり足も軽い。間もなく上ってきた小西に「調子がいいから、もうひと山やって見たらどうだろう」と、物欲しそうな相談をもちかけると、別に反対はしなかった。キャンプ場の外人たちも登頂をよろこび、署名を求める老婆がいたり、野草の花束をく

れた女性が五つか六つの幼児であったり、アイガーを眺めながら、気分のよい夕食を済ませたとき、小西は「こんどのアイガーは吹雪にも逢わず、かすり傷もおわず、頂上を越して無事に降った。機会はきっと来るから今年はこの辺で一と、筋の通ったことをいうのであった。ところが、天気は老人をたしなめるように崩れはじめた。雷鳴とともに強い雨がふり、牧場から上は白い冬景色に変った。調子に乗って慾ばったことを口にしたのは、早過ぎたようであった。

雨がふると、風呂好きの小西は二階の大型バスに浸り、西洋の小唄など口ずさむと、なかなか部屋に戻らない。雨が小降りになると、二人は傘もささずに坂を登り、グリンデルワルトの街に出かけ、エミール爺さんの血色のいい顔をのぞいてからセルフサービスの店で、それぞれ好きなものを選んで食い、上のマーケットで小西は生ジュース、わたしはワインを、持ちにくい大瓶を求め、向い側の店の主人が「おれの親爺は、ヘル槙も松方さんも浦松さんも田口さんもよく知っていた」というベルネットさんの店にはいり、小西が図書部に足を留めると時間がかかる。わたしは地下の山道具の仕事場をのぞいてから、駅を通りこし、おかみさんが「今年もおいでなすったか」と声をかけてくれる雑貨屋に急ぎ、石油の豆ランプや、牧場の牛のシッポと別の牛のシッポをつなぐゴムバンドなど、使い途のあてもないものを求め、少し上の銅鍋屋をのぞいたりしていると、大きな紙袋をかかえ、頭の毛から雨滴を垂らした西洋乞食のような小西がおりて来て、ボーデンワルトの屋根うらに帰る。部屋にもどった小西が、横文字の本を手にしてごきげんなので、わけを聞くと、東京で探せなかった山の本を、あの店の本棚で見つけたのであった。その時、牛のしっぽのゴムバンドを持ち遊んでいたわたしは、四十も歳がちがうのに人間もさまざまだと思った。

四日つづいた雨が上り、朝日がアイガーの頂点を紅く染める頃、エンジンのひびきが近づき、窓から見える売店に車

がとまると、やきたてのパンや、チーズや、濃い牛乳や、イチゴや、菓子をおろして帰って行く。ここの標高は一〇〇〇メートル、朝夕は冷えこむのに小西は羽根ぶとんをずらし、パンツ一つで風も引かずによく眠っている。ふとんをかけてやっても間もなくはねのけるのである。エベレスト南壁に備えトレイニングをしていた頃、「雨がふり出したから丹沢へ行って身体を冷やして来ました」という小西を思い出した。よく晴れたその日は電車に乗ってユングフラウ・ヨッホに登り、新雪の山々を眺め、日本文字の落書署名で隈なく汚された廊下の壁の前は、肩身をせまくして急いで通り、シャイデックに降って日光浴をしながら、雪のついた北壁を、またこの間降った西壁を見上げた。二度懸垂で降りた岩壁は雪が凍りついて白く、アイガーの頂からメンヒの方に、真夏の雪煙が切れ目なく流れていた。



モンブランのテートルース小屋近くで

去年の七月二十五日、ギョーテの小屋（三八一七メートル）からモンブランに登った朝、アイゼンをつけて外に出ると、夜中に降った雪が目映ゆく光り、あわてて雪眼鏡をかけた。ひろい雪原の踏みあとをたどり、バロの小屋（四三六二メートル）のあたりを過ぎると雲がわき、晴れたり曇ったりの天気になったが、幸い頂上では四八〇七メートルの青黒い空を仰ぐことが出来た。この山行は高度順化が目的で、バロの小屋位までのつもりであったが、調子のよいのを見た二人は頂上までリードしてくれたのであった。雪稜の傾斜が急になると植村直巳は順位を替えてわたしの前に立ち、虫がはうようにゆっくり登り、小休止で煙草に火をつけよう

とすると、あのコブを越すまで我慢してといい、オレンジジュースのはいった重くて大きい硝子瓶をとり出し、一口でもいいから飲めとすすめる。今でなくともと思っても一度いい出したら、あとには引かない直巳である。その日の午後は厚い雲に下界はかくれたが、針峯群は雲海の上に浮び出て美しかった。その時刻に街では雷が鳴り、強い雨が降ったそうである。

マッターホルンについて記す前に、去年の二人の仲間にふれて見たい。一九七一年という年は、グランド・ジョラスに向った小西、植村の隊が、大寒波の襲来と共に消息を断った、という公電を知らせる電話で元旦を迎えた年であった。山学同志会の粒よりの隊でも、ことによったらと不吉な想像も頭をかすめた。男たちは陽の当らない、零下四十度の北壁で十夜を迎え、終りの三日は食糧もつきた。それでも岩と氷の垂直の登りに一歩も譲らず、遂に元旦の正午、山頂に立って十一日ぶりの陽光を浴び、荷揚げしておいた食糧をかみしめて、無事であったという確報を聞いたのは数日後のことであり、きびしい北壁や、登る人の根性に理解の深い土地の人も報道関係も、成功を祝しほめたたえたことも知ることが出来た。

かくて壮厳なものを体得した五人の内、植村をのぞく四君は、黒く凍傷した合計二十七本の指を、山の先輩、長尾、大森の両医の執刀で切り落すことになった。一足先に帰った小西と直巳は羽田から病院に送られ、一夜を明した無傷の直巳は、翌日下宿に帰る途中立寄ってくれた時、「小西さんは同志会からみればお客ぶんの僕に、フェルトの中靴をはかせてくれたんです」と語るのであった。小西が指を切ってからまとまった岩登りをしたのは、去年三人で登ったマッターホルンが初めてであった。直巳はあとから、平地を歩く時よりかえってくせがなく、滑らかに岩を攀じる小西を見て、「前と同じに登る。よかったよかった」とくり返しよろこんでいた。

小西が十一本の指に別れを告げてから、今野君とベッドを列べて治療をうけていたが、取材記者の来訪が多く、口にしたこともない文句が、「指は切っても執念はたたぬ」など大きな活字で見出しになったり、餡蜜より甘い同情の言葉を、我まんして聞いている病室に居合せたわたしは、「指を切り落してよかった。もう爪を切る面倒もなし、水虫にかかる心配もなくて」と壁に向っていったのも、その頃であった。取材記者といえば、地名や標高はメモ書きにし略図まで添えても、アイガーの頂上からミッテルレギーの小屋が真下に見えたり、西壁の氷河の上から裏側のグリンデルワルトの街の灯が宝石のように光っていたり、ざらめ雪の上を歩くとアイゼンがカチカチと音をたてたりする。また狭いマッターホルンの頂上に、フランス領の頂上を追加して三つにしたと思うと、ヘルンリ稜の下の方にツェルマットではなくてシャモニーがあり、そこのホテル・アストリヤのベッドの上で、その日の登攀を回想しているのもひどい。山以外の記事も疑い深く判読すべきことを教えているようである。

モンブラン頂上にて（左から佐藤久一朗，小西政継，植村直巳）

小西が十一本の指と別れたことは、小西のザイル仲間で、均整のとれた女性クライマーとの結婚を早め、新婦の看護が傷の回復を早めた。

直巳は小西に代る伊藤礼造君と、国際エベレスト隊に参加し、高所に滞留した時間でも原地の人と親しく暮した日数でも、ヒマラヤの山の体験にも一段と優れている彼は、「小西さんの分も働

いて来ます」と出発し、選ばれた本分をはたした様子は、ピーター・スチール隊員が、「日本人隊員は私たち全員の称賛の的であった。期待を裏切ることなくイギリス人ペアを支援しつづけた。直巳は自分の酸素を使わず、第六キャンプまで二回酸素を荷上げしてくれた。にこにこ笑っていた小男の東洋人、利己主義とは正反対の愛他主義とでも言おう、この人と友人であったことを誇りにしている」（丹部節雄君訳）と記している。

直巳はエベレストの頂上に立って帰国した時、コルから上の登りのことをたずねると、「ああもズバズバ酸素を吸わせてもらったら、身体は軽いし、ヤバイところといえば、斜めにからむところが少しばかり」というのであった。カトマンズから「南壁をあと五〇〇メートル残して下山しました。各国の登山隊を知り、大変勉強になりました。南壁で死んだバフグナ（印度隊員）のお宅を訪ね、墓参をしてから帰ります」という絵葉書が届くと、まもなく帰国した。列車にゆられて遠いインドの遺族を訪ね、更に山の関係者や、政財界の人たちに実情を伝えた隊員は、直巳ひとりだったそうである。他人の心配や苦労を、手を拱いて見ていられない仏心豊かな男なのである。五大陸の高い山々をひとりで登り、アマゾン六〇〇〇キロをひとりイカダで降ったのも、その仏心がにこやかに滲み出て、原地の人と親しくとけ合うのに言葉はいらず、みんな直巳の身方になってくれるのだと思った。山やふもとで、小西と直巳と一緒に暮していると、老人のさもしい根性に気がつき、残念に思うことがたびたびである。

直巳はエベレスト隊に別れて帰ると、南極横断の下地を固めるため、アルゼンチンに飛び、基地に物資を運ぶ輸送船に便乗し、更に砕氷船に乗り替えて、最南端の町に進出することなど、粘り強い東奔西走がつづいた。その頃小西とわたしは親しい山友達と、スリナガールからポカラから、またダージリンからヒマラヤを眺めるだけの旅をし、小西の足も好調に回復した。

去年の春、直巳はいよいよ橇を携え、北極に近いエスキモー村に向うことになったある日、小西と二人で遊びに来

マッターホルン頂上にて

て、馬鹿馬鹿しいお話で時を過していた時、マッターホルンを登る計画をしているのだと話すと、即座に「一緒に登りたい。夏のトレイニングをアルプスでやっても同じだから」と、いうのであった。

マッターホルンについては、委細かまわず近藤等先生の博識に頼って計画を進めた。

先生の博識には、毎年登攀を共にしているレビュファやコンタミヌや屈指のガイドたちの、老人に対する体験や注意が織り込まれており、言葉の自由な先生を介してでなければ、知ることの出来ない山のことを、仲間と共に遠慮なく学びとっていることが多いのである。

一九七二年の七月、ジャンボの故障で予定より二日おくれて羽田を立ったのは、近藤先生、小西夫妻と紀元節に生れた政継二世の四人半であった。シャモニーに着くと、フランスから勲章をもらった名誉市民の一年ぶりの御来遊とあって、訪れる人は山の仲間だけではない。ヒマラヤにいると思っていた芳野満彦さんが顔を見せたり、談笑はつきなかった。

直巳はグリーンランドの極地から、国際エベレスト隊に参加したノルウェーの友人が、ヒンズークシュに向う車に便乗して、ユーゴスラビヤで友人と別れ、そこでポンコツ自転車を手に入れると、天幕を始め衣食住の重い道具をつんで既にシャモニーに着き、わたしたちの到着が二日おくれたことは知るよしもなく、ペタルをふんでジュネーブに走ったが、空しく引き返していた。ホテルの前で、むらなく錆のまわったポンコツを見せてもらったが、重い荷物によく潰れなかったと敬服した。この自転車はブレーキが故障で、峠を登る時はよいが、降りはのばした足を前車のタイヤにかけ、靴の底で制動するのである。そしてシャモニーのどこにおいても、盗まれないのが取柄だというのであった。直巳の脚は、ユーゴの露天商から買った半ズボンがはち切れそうに筋肉がもり上り、太ももは陽にやけて粉をふいて皮がむけていた。「植村君というのは怪物ですね。この間天幕場を朝出てモンブランを日帰りし、夜の八時にはシャワーを浴びていたそうです。一人用の天幕で、ジャガ薯と玉ねぎの塩煮を喰って暮していました」と芳野満彦さんが話すのであった。

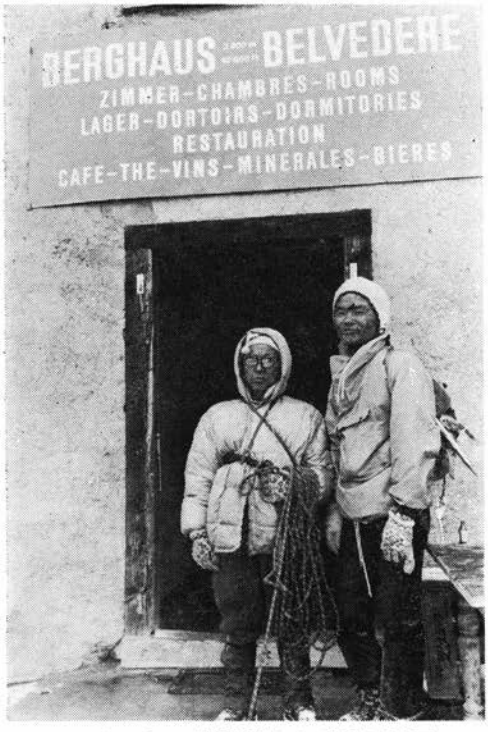
モンブランを登ってからの休日は、近藤先生の車でクールマイユールに遊び、モンブランの伊太利側の岩壁や、一年前小西や直巳たちを苦しめたジョラスの山群を眺め、ベニの谷を車で登った。

小西一家のワーゲンで、ツェルマットのホテル・バンホフに移ったのは七月二十九日であった。このホテルの女主人ビナーさんは、五年前の二月、小西たちがマッターホルンの北壁を目指して泊っていた時、山の危険を説き慈母のように心をいため、成功して下山の時はシュワルツゼーまで登って一行を迎えた。親切で信心深い主婦である。

二階の直巳とわたしの部屋のベランダからすぐ下に喫茶店が、それから上の方に駅前で客を待つ馬車が、日曜でも両替をしてくれる銀行のドアが、そして通りに列ぶ土産もの屋を追って見上げると、マッターホルンが聳え立ってい

るのだが、その東壁の雲は岩肌をかくして動かない。四日目の明け方、今日も駄目かとカーテンのすき間からのぞくと、雲一つなく晴れ渡り、マッターホルンは登りたければ、登って来いと、肩を張って見おろしていた。用意を急いだ三人は、夕方ヘルンリの小屋（三二六〇メートル）に着いて泊った。

翌八月二日、おだやかな天気が続き、アイガーとは岩の様子が違い、高山植物も多い東壁の大きな岩を攀じ、九時頃ソルベイ小屋（四〇〇三メートル）に着いてスープなど沸していると、北壁から頂上に登り、今降りて来た三人のクライマーが疲れた様子ではいって来た。そして煙草を一本ゆずってほしいという。小西と直巳はケント一函を呈し、パンやバターや、甘いものを分け与えると、初め遠慮していた三人は立ったままでそれを食い、段々身体も温まってくる様子であった。



マッターホルン登攀を終えて　吹雪の中を下山。ヘルンリ小屋にて（左より佐藤，小西）

小屋を出た直巳と私はザイルを結び、小西はフリーであとを追い、肩から上は固定ザイルを頼った。やがて頂上に着き腰をおろすと、北壁からも、ウィンパー隊の初登頂の時十九歳の青年ハドーが滑って三人の仲間を死に誘った絶壁のあたりからも、霧が舞い上り、頂上の十字架をかすめて強く流れ、今にも雪になりそうな陰気な山頂であった。降りで外人のパーティーに追いついても、固定ザイルを握り時間をかけて降るその組を追い越すことは出来ず、三人が

一ヵ所に集り長く待つことがあった。

二日前英人二人が墜死したと聞くソルベイ小屋の上の悪場に来ると、小西はルートから離れた切り立った絶壁を選んでザイルをおろし、懸垂で小西・佐藤・植村の順で降り、下の岩棚に立った。夏のルートを降る外人たちを右手に見て追い越したが、ふり返るとまだ上の方で用心深く動いていた。小西はこの方が早くてらくでしょうという。

翌日小雪の中をヘルンリの山荘に降る時も、老人をらくに降ろす懸垂をたびたび利用したのは、三人組だけのようであった。ザイルを太ももから肩に通す本格派はわたしだけで、小西と直巳は右うでにからんだザイルを背中から左手にまわし、絶壁をけとばしながら上からものを落すように滑って降るが早い。

ソルベイ小屋では三人がたがいちがいにねて、脚を抱いて温かく泊った。その夜半から吹雪になり外の便所の扉は粉雪の吹き溜りで半分埋っていた。朝の九時頃独乙の青年がはいって来て、もう登ったのかとたずね、小西と直巳のことを聞くので、エベレストの南壁のこと、真冬のマッターホルンやジョラスの北壁のこと、エベレストの登頂者であることなどを単語を列べると、素晴らしいパートナーだ、あなたの歳はいくつなのだと聞き、この天気では今年も登れないかも知れない、あなたはほんとに倖せだと、天気の回復を祈りながら淋しい顔でいうのであった。モンブランを登って一週間目に、この山を登ったわたしは恵まれ過ぎた、ねたましい老人に見えたはずである。風は弱まったが雪は止まず、小さな小屋から出て行く人はなく、溜まる一方で混んで来た。十時に降ることにすると、独乙の青年がうらやむわたしのパートナーは、小屋のほうきを持ち、床のものを大きなビニールの袋に掃き集めた。掃除を手伝った外人は一人だけで、立ち列ぶ人たちは黙って静かに見守るだけであった。

ヘルンリの山荘も近い乗越では、強い吹雪によろめき眼鏡も手袋も凍った。食堂のストーブで温まると、小西と直巳は濃いスープと肉、老人は肉を食わずにワインにした。わたしが飲みはじめると、二人は珍らしくビールをたのんで飲んでいた。ぬれたズボンやしめったものも乾き、身体の芯まであたたまると、小西はほっと安心したように居眠

りを始めた。わたしは又しても二人にかけた苦労の数々をふり返り、アルプスの運のよかった天候のことを思った。

ウィンパー隊が初登頂した降りの惨事は、今は固定ザイルが切れない限り起るまいが、その四日後リオン稜から第二登に成功した頑強なガイド、カレルは、晩年すさまじい夏の雪に逢い、小屋を脱出したリオン稜の降りでは眼にはりつく氷をはらい落しながら、仲間を牧場に近い安全な場所まで導きながら、遂に力つきて斃れたのは一八九〇年の夏八月、カレルは六十二歳であった。七十二歳のわたくしなど、まさに風前の灯である。

雪ぐもの中に姿をかくしたマッターホルンは、毎年、五、六十人の人の命を召し上げているそうだ。三人は人影のない山道を降り、シュワルツゼーで五時五十分の最終のケーブルカーに乗った。風もなく暖かいツェルマットの街は、二人の英人の遭難も、乗越の吹雪も、何んのかかわりもないように、観光客で雑沓していた。

スイス・赤毛布の旅

成瀬岩雄

ビン（Binn）

「今迄にこんな辺鄙な地を訪れたのは、旅行者としては恐らく私以外にはないだろうと思うのだが……。今度、再び一八九三年六月十二日、このビンにやって来た。ところが計らずも十五日、クーリッジさんがクリスチャン・アルマーを伴って、この地に現われたのである。クーリッジさんは生憎、身体の具合がよくないとのことで一日休養されるので、私は十七日アルマーと Pizzo Fizzo に登った。私はいつも全くの独りで歩くことが好きなので、実は以前此処に来た時にも二回はガイドレスで、一回は全くの独りきりで、この山に登っているのであったが、山としては大した山ではないのだが、頂上は広くて平坦な岩場になっているのだが、併しこの山容は南側から見ると下の方は岩場が飛出しているような割れ込みがあり、とても登れそうにもないような威赫的なものであり、Ritter Pass のイタリア側の岩場から見ても、素晴しい岩の割目が目を引くような山なのである。

後日、今度はクーリッジさんとアルマーと私とでCherbadung に登った。途中、とても手強い、氷に閉されたチムニーにぶつかったのであるが、アルマーのゲルマン独特の粘り強さと、緊張を交えた虎をも射るようなファイトを以て、時には息をはずませながら、この難所を切り抜けて行くのを眼のあたり見て、アルマーに向って『如何うかね……』と尋ねたところ、彼は極めて平然と落ついた口振りで『仲々手強いね……とにかく、一仕事……頑張る……』と言いながら彼の適確な判断によって、この難所を切り抜けたのには驚嘆の他なかった。

その晩われわれは、このホテルの地階で如何にも古風な、風変りのダンスを見たのである。愛人に抱かれた一人の娘は、回

転の都度一段と声高い口笛をはりあげて回転する、誠に奇妙な踊りをするのであった。私も他の娘を相手に踊った。クリスチャン・アルマーは召使の少女を相手に踊っていたのであるが、クーリッジさんはこれら若い女性のシャピロンでもあるかのように、壁に寄り掛って一同の踊るさまを、いかにも楽しげに眺めていた……。」

こんな書出しで始められた Walter Larden の *Recollection of an old Mountaineer* を初めて読んで、もう彼これ五十年近くにもなるだろうか……。そして何回読み返しただろうか……。爾来、心ひそかに、いつかはこのビンを訪れて見たいと思っていたので、今度のスイス旅行では何んとしても、ここを訪れるのが最大の目的であったのだ。

アルプスにかけては、その足跡の広いことで何人も異論のないクーリッジやアルマーに邂逅し、しかもクーリッジのお抱えみたいなアルマーを一日拝借しての登山を楽しみ、また、如何に最眉目に見たって、あの頑固親爺で通っていたヒゲモジャの、およそダンス等には興味など持っていそうにもないクーリッジが、どんな顔をして壁に寄り掛って chaperon よろしく眺めていただろう……等と想像さすだけでも、ラーデン Larden のこの著書は小生にとっては座右の書であり、家宝でもあったのだ。

ラーデンは一八九一年に初めて、このビンと言う村を訪れて以来、回を重ねるに従って、この異郷に来るといつもわが家に帰ったような気がして、何処の家でも温く迎えられ、時にはホテルの泊り客がタッタ彼一人であったこともあり、あちこちの民家を訪ね回り、こんな田舎には珍らしく完全な英語を話す娘と、スラングや危しげなドイツ語、フランス語を交えて語り合ったり、この娘のヴァイオリンを聞かして貰ったり、民謡を歌ってくれたりして、"This was the beginning of a very pleasant and also interesting friendship with a Swiss family." 等と言っているのを見ても、如何にこの僻村をも愛し、続けて訪れているかが判るのである。併し、一方ラーデンはクーリッジ程ではないとしても、一応オーバーランド、ワリス、シャモニー・エギーユ、その他一流の名だたるアルプスの山にも、足跡を拡げている隠れたる登山家であったことは確かで、犬も歩けば棒にあたるで、クーリッジに邂逅するようなことも、当然あるべくしてあったことなのである。

併し、このラーデンの十数回にわたるビン訪問は、一八〇〇年代から始まって一九〇〇年の初めに掛けてのことであるから、今度訪れて見てもいわゆる「観光の地」と化して、果して永年の夢をどの位果してくれるか……との杞憂も抱いて訪れたのであったが、この心配は全く裏切られ、言わば戦前の桧枝岐、信州の中尾村、会津の黒谷村みたいな平和な質朴な僻村として取残されているのには、誰に感謝の言葉を述べていいのか

判らないが、思わず「有難い……」と独りひそかに喜びを感じたのであった。

僅か三、四十軒しかないこの村には、百年近くになると言うホテルが村の外れに一つあるだけで、アトは窓辺に真紅の花の置かれてある昔の侭の木造の民家ばかりで、村の中心を流れる清流を挟んだこの地は、ラーデンの言葉をかりれば「古風な野趣豊かな村で、堆肥の積み重ねられた暗い曲りくねった路を通り抜けてホテルへ行くのは、むしろ汚ないとも言えるのだが、村全体としてはまるで絵のようで『古代』と言う感じだ。それに村の奥の遥か彼方には Ofenhorn の氷河が輝き、近くの丘陵には野鳥のさえずるモミ、落葉松が繁り、その一隅には千紫万紅の花に囲まれた教会の白い塔が一段と光彩を放つ、如何にも平和な風景にはむしろ聖地と言いたい処だ。いな、ここから一時間ばかりの Heiligkreuz と言う処に行って見たが、その名の如くここの礼拝堂は足の悪い人達が、ガンを掛けに来るのだろう……。曲った足の木型とマリヤ像の前に膝まづく片輪の参詣者の群れを描いた図幅が置かれ、氷河の山を背景にしたこのチャペルは正に一幅の絵でもある。そして扉には遠く一六六七年とかすかに見分けられる聖書の一句が彫り込まれ、如何にもこの村の古さを物語るものとも言えよう。」

ホテルでは日本の人が来たのは初めてだ、どうしてこんな処を知っているのか等とサロンや食堂で顔を合わす相客に愛想よく尋ねられ、中にはネパールに行ったこともあり、マナスルの話などする青年夫婦も現われて、忽ち皆さんと親しくなってしまった。現在のことだからマイカー族も来てはいるが、ここの清流をまたぐ唯一つの石の太鼓橋は苔蒸した昔の侭で、車もやっと一台がスレスレに通れる位の狭い橋で、小型のものだとこの頂点を越すには一回後戻りして、惰性をつけて登り直さなければ進めない車もある。夕刻、偶々附近の牧場からお帰りの牛にでも会えば、先ず牛様優先で、その間自動車は橋のタモトで列をなして持っている風景などは、如何にも長閑な風景である。村にはささやかな、食料を主としたマーケットと土産物屋が一軒ずつあるだけで至って閑静なもので、村の人達は一体どうして生計をたてているのかと、疑いたくもなるのだ。イタリア国境も程近いこの地は昔、密輸入者の往来はげしく、今でもこの地特産の水晶をめぐって、密輸が交換されているとの話も、アトで聞いた話であった。ホテルにしたってスティール・サッシュなど全く使っていないし、古風な木造の家具、日本でも余程田舎にでも行かなければ今では見られないような、荒削りの木造ベッドであり、窓の開閉なども薄ペラな木のカンヌキ式で、とにかくこのビンは内でも外でも「何も近代式観光地にならなくてもいい、少しでも昔の侭を残して置きたい……」と言う心遣いがはっきり各所に残されていると言う感じなのだ。この太鼓橋の傍に残されている鐘塔を見上げて驚いたことに

は、日時計の指針が古ぼけた侭残されているのであったが、今時、日時計を頼りにする人もないだろう……。これもその侭で自から古村を思わす、今となっては却って村の一つの風情ではないか……。聞けば家数も最近新築の家が数軒、村外れに出来ただけで、殆んど昔と家数は変っていないとのこと。ここに来る交通機関は一日に僅か数回の郵便定期バスだけで、道路も山裾を大回りして来なければならなかったのを、ツイ二年程前に漸く隧道を切開いてウント近くなり、同時に全道舗装されたと言うのだから、凡そいわゆる「観光地」には御縁のない別天地であるわけだ。従って、ここに来ているホテルの客も何れも中年、老年の夫婦者ばかりで、浮世の風が何処を吹く……と言うようなノンビリした雰囲気がただよい、一大家族のようなものでもあるのだ。何処に行ってもラジオやテレビの置いてある日本の観光ホテルとは凡そ大違いで、日頃、ラジオ、テレビの大嫌いな小生にとっては、正に理想境でもあったのだ。こんな処ならラーデンならずとも本当に幾日でもいたいと思うのであった。

翌日はこの谷を溯って五、六時間、イタリア国境に近い Alpbun と言う処のスイス山岳会の小舎に出掛けた。この小舎には小舎番もおり、食糧を持参する必要もないとのことを、此処に来るバスの中で知り合ったチューリッヒから来たと言う品のいい中年紳士から聞き、勇躍、出掛けたのである。親切そのもののこの紳士は、自分も先日泊って来たのだが、とてもいい処だから是非行ってらっしゃいと勧めるし、「スイス山岳会の小舎」なんて聞いただけでも、飛上りたくなるような話しだから、サブザックの軽装に、この紳士がこれを持って行きなさいと与えてくれた、彼の貴重な五万分の一の地図 *Nausen* を手に、未だ朝霧の立ち込めた小路を発ったのは八時前であったろうか。此処から此処までの路は、路傍の雑草にゾボンが濡れるからゲートルを忘れないように……、此処で初めて左岸に渡る木橋があるから……と、小舎に至るまでのルートを丁寧に鉛筆で地図上に示してくれ、あなたが日本山岳会から来たと言えば、小舎の宿泊費も無料か割引にしてくれるかも知れない等と、ユックリした英語で判るように、至れり尽せりの親切さで説明してくれるのであった。

実は聊か話は後に戻るのだが、この紳士については前日自分のような異国からの旅行者として凡そ、常識では考えられない懇切を極めた行為にあずかったことをここに記し、あらためて遥かに敬意を表したいのである。

それは、このビンに来る最終のバスの中で偶々隣りに坐ったこの紳士から、何処から来たのか……どうしてこんな処を知っているのか……ホテルの予約はとってあるのか……等と言う話しから始まって、早速ここに来るにあたって、この頃はゼロックスと言う便利なものの御厄介にあやかって、ラーデンの一章

を携えて来ているのを見せ、こんな本を戦前から読んでいて、今度 long cherished hope を果しに来たのだと言ったら「初めて見る本だ」と言いながら、実は今日は八月一日。スイスの開国記念日で、一年に一度の国をあげてのお祭り騒ぎの慶き日なので、恐らくホテルは予約なしでは難かしいかも知れない。自分はもう二週間も泊っているし、他にも古いペンションが一軒あるだけだからビンに今晩泊れるかどうか……。でも私が責任を以て泊れる処を探して上げようと、恰もいたわる如く親切に話し掛けて来るのであった。

八月一日が開国記念日であることは、かねて来よく知ってはいたのだが……。と言うのは、その昔、松方三郎さんがスイスから帰朝後、僕の生れた日はスイスの開国記念日で、スイスは僕のためにも誕生日のお祝をしてくれるのだと、満面笑みを浮べながら話して居られたのを判然覚えていたので、今は病床にあえぐ松方さん宛に、この前日「小生永年憧憬の地、貴兄曽遊の地、シャモニーよりモンブランの白雪を仰ぎ見ながら、貴兄のより早き健康回復を祈り、誕生日のお祝を申す」と、一筆を送ったばかりでもあるので、この古村で松方さんを思い、小生の五十年この方脳裏を去らなかったビンの一夜は何んとしても「是非」と、この親切な紳士を唯一の頼りにすがりつく衝動に駆られたのであったのだ。この紳士もビンがとても好きで既に何回も訪れているとのことで、今度はホテルには夫人、親戚の者、合せて数人も一緒に来ているとの話であった。

バスに揺られて約一時間。終点からホテル迄はなる程ラーデンの言う、堆肥の臭いのする石畳の暗い曲りくねった路を上って行くのであったが、こっちの重いトランクを逸早く手に取り上げて行ってくれる、この紳士の後について行くのであった。早速ホテルの主人夫婦と交渉にあたってくれたのであったが、案の定当夜は満員。では他のペンション、その他心当りの泊めてくれそうな処を、ホテルの主人と一緒になって八方電話で掛け合ってくれるのであったが、結局ビンではどうしても今夜は駄目とのことであったが、Fiesch の駅前迄戻れば一軒 Kloster ホテルの一室が空いている。但し地下室で冬期のスキー客相手の雑居部屋だが、それでもいいかとのこと。それにもうバスもないから、二十フラン出してタクシーを呼んで戻るより他ないが……と、至れり尽せりの親切な交渉の結果の報告であったのにはただただ、感謝の言葉と明日の再来を約して急ぎ引返すことにした。

ところが、ここで更に驚いたことには、この紳士は自分が責任を以て連れて来て約束を果せなかったのだから、タクシー代は私が負担するのだと言って、どうしても引下らないのには正直なところ一瞬呆然としてしまったのである。このせち辛い世の中に、こんなことが果して人間の世界にあるのだろうか。生憎、親切とか好意とかの言葉以上のものを思い出せないのは残

念であるが、凡そわれわれ俗人の常識ではおよびもつかないこの申出にはただ感謝、感激などと言う表現だけで済まされるものではないのだが、事実はこの紳士の一歩も退く様子も見せない態度には、この際好意に甘えるより他に、どうにもならない破目に陥ってしまったのである。

とにかく一応フィーシュ駅前迄引返すタクシーの中でも、この好意に対して未だに釈然としない思いに耽るのであった。そしてふと、今度スイスに来る前に更めて読み返した辻村さんの『スゥイス日記』の一節、遭難事故で身体の自由を失って車中で横になったまま、窓外の氷雪に輝く山々を眺めていると、通りすがりの、戦地（第一次大戦）から帰郷する見ず知らずの兵士達迄が、一人一人丁寧に見舞の言葉を掛けてくれたり、荷物を運んでくれたりして「故国ではとても味わえない悦ばしさに充たされた身体を、この室の中に横たえる事が出来た——中略——山を理解してくれる此の人達と物語るのは、たとえ汽車の響が絶えず疼痛を与えるにしても、私には非常な幸福と感ぜられた。趣味もなく、理解もない人を、同じ国民と呼び交わすよりも、むしろ国を異にし、語を異にし、また習慣にも何等の差あるにしても、今ここにある人々の間におることの、遥かに愉快なのを、私はついに忘れることが出来ない……」を思い出すのであった（この一文は松方さんも何かに引用されていた）。

ただ、美しい景色をツマに、土産物屋が軒を並べ、紙屑はそこら矢鱈に棄て放題で、観光国を看板とする我国とは事違い、総ての国民の一人一人が観光国たることを自覚してこそ、見も知らぬ私のような旅行者に迄、この紳士のような態度が生れて来るのではないだろうか……。

たとえ一人でも二人でもスイス国民の中にこのような紳士がいると言うことだけでも、私にとって観光を看板とするスイス魂とでも言いたい、この懇切な紳士とスイス国発展のために敬意を表せざるを得ないのであった。

この夜はフィーシュのホテルで一夜を明かすことになったのだが、果して夜半までこのホテルの食堂でも開国記念日を喜ぶ付近の人々が、男女各々古風な民族衣裳に身を固めて、ピアノやギター、アコーディオンに合せて杯をあげ、踊り回り、こっちにも仲間に入れと杯を差出すのであったが、ツイこのなごやかな雰囲気に引きずられて盃を重ね、更めて遥かに松方三郎さんの健康恢復を祈るのであった。外では少年少女達の焚火を囲んでのボーイス・ソプラノが夜半まで続き、誠に珍らしき慶き日に遭遇したのを喜んだ次第である。

翌日は早速ビンに引返してこの紳士に厚く礼を述べ、何かの時に役立つかも知れないと、持参におよんでいた木彫りのお盆を紳士夫妻に進呈したのであったが、これ位のことは俗人のする当然のことで、この紳士の好意に比べるにはあまりに勿体ない話でもあろう。月とスッポンの譬えみたいだろうが……。

この紳士はチューリッヒの近くの Frauenfeld と言う小都市で自家営業をやって居られ、その名は Meier さんとのこと。一見、学者風の温厚な容顔は今以て私の脳裏に判然と残って居り、将来共末永く文通やクリスマスカードの交換を続けて、ビンにおける楽しき旅の思い出の一端としたい気持にならざるを得なかったのである。余談はこの位にして、再びスイス山岳会の小舎行に戻ると……。

例の太鼓橋を渡って左折、Binnen Tal の右岸に沿う小路を進み、Giessen（一四五八メートル）の村を過ぎる頃、谷間も漸く開けて来ると、姿は見えないが牛の首の鈴の音がかすかに聞こえて来るのであった。正に桃源境と言いたい処だ。路傍の、マリヤ像を嵌め込んだ小塔は、日本で言えば道祖神と言うところだろう……。この前で先ずは一服と言うことにしていると、朝霧もすっかり晴れ上り、タンネの森の彼方にチューリッヒから来た小学生の群れのキャンプが見えると、今度は遥か谷奥にオフェンホルン（三一七二メートル）の氷雪に輝く頂上が大きく姿を表わして来る。路はこれを目指して真すぐに進めばよいのだ。足元は無数の赤、黄、紫の野花にさえぎられて足の踏み場もないくらい。露にぬれるからと教えられたのは、この可憐な花の群れかしらん……等と思いながら、右手を仰ぐと裾に雪のスカートを張りめぐらしたような Schinhorn（二九三〇メートル）、Albrunhorn（二八八五メートル）の山々が青空を切り込むナイフのようだ。やがて路は右、Halsen-see の小湖水、左、Ochsenfeld と言う指導標に従って左岸に移り、つま先上りの登りになって、一九五五メートルの地点でこの本流は左右二本に別れ、Ochsenfeld へは右の沢に沿う路を溯ることになる。路は割合広くなり、Ochsenfeld（二一九二メートル）に近くなると、その名の示す如く一面の広大な湿原となり、左側の小高い丘に登山小舎かと思わすような石室が遥かに望まれるのであったが、やがて耳に入って来たクラリオンの音で牛小舎であることがわかり、なる程、十数頭の牛の姿も目に入って来るのであった。オフェンホルンの氷河から流れて来る無数の細流の傍に腰を下して、一服、昼食としたのは正午近くであった。どうせ独り歩き。小舎迄はもうそんなに遠くないことは地図で見て判然したし、テルモスの紅茶とパン、冷肉に空腹を満たしてからクラリオンの音に夢うつつ、ユックリ華胥の国に遊ぶことにした。足元の細流は、まるで今しがた氷河の暗い穴から明るみへ開放されて、紫や黄の花に迎えられ先を競って喜び叫んでいるようだ。あるいはかげろうとなって青空にユックリ上って行くのもある。約一時間も夢の国に遊んだろうか……。この花の群れを過ぎると小滝に沿って急坂となりまた、広い草地の牧場地帯に出る。オフェンホルンの針塔も仰ぎ見るばかりに近くなり、その麓、かすかに赤地に白の十字架のスイス国旗のなびく、待望のスイス山岳会の小舎がポーと見えるではないか……。

「もう、しめた」とばかり先ずは安心と、もう一度、地図とサブザックを投げ出して緑のシトネに足を投げ出し、テルモスに残る最後の一杯をすすりながら四囲を見回して一休みしたものの、こうなると一刻も早く小舎に近付きたくなり、最後の登りを急ぎ足に進むのであった。微風に揺らぐ山岳会の旗は胸の中まで揺り動かして来る。遂に来た来た。時に午後三時少々前。丁度その時、小舎から表われた真紅のスェーターをまとった少女と薄緑の石小舎と、赤地に白十字の旗とのコントラストは何んと言ってよいか……。早速カメラを取り出したのだが、何しろここ十数年来、カメラは手にしたこともないのだが、今度ばかりはそう度々来られる処でもないと思って「馬鹿チョン・カメラ」を持って来たのだが、それでも自信がないのでシッカリと落付いて立て続けに三枚程シャッターを押した。入口に掲げられた「スイス山岳会、Delemont Section 所属の Binnental Hütte」と言うブロンズが眼に入ると、益々胸を波立たせるのであった。早速 Meier 氏の「日本山岳会の人」なる旨の紹介状の名刺を小舎番に提出におよんだところ、部厚な Hütten Buch を取出して署名を促されたのだが、永年憧憬のスイス山岳会の小舎にわが名を残す……、その嬉しさで胸が一杯と言うのが偽らざる告白であったのだ。小舎の内部は左側が調理台流し台、右側が蚕棚で二段ベッドになって居り、真中にストーブが据付られてその横に部厚いテーブルが置いてある、日本でも処々に見るものと変りはないのだが、何しろ場所が場所だから堪らない……。Meier 氏は先日この小舎に泊られた時には、十三人も泊って狭くて弱った等と言っておられたが、今日はどうやら自分一人のようだ。丁度、一足先に来たらしいお客は昨日ホテルで親しくなったネパールに行ったと言う青年夫妻であったが、計らずも、またここでの奇遇を喜びあうのであったが、彼等は日帰りで間もなく "Good Luck" と別れの握手を交わしてビンに引返して行った。もう一人、これも日帰りすると言うオランダから来たと言う中年の美しい婦人が独り居たが、この婦人はよくも日本からこんな処に来た……と愛想よく "Tea…or Wine…" 等と英語の通じない小舎番との通訳を買って出てくれるのであった。早速 Tea の注文を願ったものの、ウドン丼位の、大鉢みたいなのに部厚いレモンを投げ込んだ紅茶を出され、まるでレモンが中で泳いでるようで、これには胃が三分の一しかない小生は、思わず辟易せざるを得なかった。小舎番は女房と十五歳を頭に三人の少女で、この小舎を管理運営し、傍ら付近一帯が放牧地となっているので、牛乳も絞って酪農家へ供給もやっているのだとのこと。ひと先ず一服の後、ここ二四〇〇メートルの小舎から間近いアルブルン・パスへ腹すかしに出掛けて見た。僅か三十分で達するこの峠は二六〇〇メートル位。右にアルブルンホルン(二八五メートル)左にオフェンホルン(三一七二メートル)の峨々たる岩稜に狭まれた割合広い峠

であり、ここを一歩越えればイタリア領となる。峠からイタリア側への路は残雪にタップリ埋もれ、グリセードにはチョット考え度くなるような急坂が続いている。しかし遥か下方の一帯は緑の丘が夕日に映え、突然、虹が掛って来たのを見て、遠来の旅人を歓迎してくれる天の仕業か……と勝手に解釈して、しばらく路傍の石に腰をおろして一服を味わったのである。虹の消えるまで、この大自然の真只中で一服をつけていると、四辺のあまりの静けさに耳の中はファーンと鳴っている。Meier 氏の鉛筆で記してくれたルートは、このイタリア側の急坂を下ってオフェンホルンの下を右に巻き Pinbaglio の小湖を回ってビンに帰っているが、チョットこの通りも歩いて見たくなるような登山ルートである。勿論、ラーデン等はこの辺りは既に一八九〇年頃初登山等盛んにやっていることは、その著書にも載っているし、小生としても一応、クーリッジの *The Alps in Nature and History* 巻末の山群別の一章、Lepontine Alps の処にもチャント載っているこのアルブルン・パスだから欲は言うまい……、これだけでも充分満足な山行であったのだ。夕日に燃えるイタリア側の山稜に名残りを惜しみ、小舎に引返すことにしたのは五時も大分過ぎていたか……。小舎に帰り着いて見ると二人の青年登山家がオフェンホルンの登山から帰って来たとのこと。何れもスイス山岳会の会員であるとのことで、幸い英語も巧に話すので、自ら日本の山の話などにも花を咲かすことが出来、楽しき一夜を満喫出来たのは幸いであった。そして終始小舎番とこっちとの間の通訳を率先引受けてくれ、「何んでも判らないことは遠慮なく言ってくれ」と親切に申し出てくれるのであった。早速、晩飯となるのであったが、この二青年を通じてスパゲッティーかマカロニーを欲しいと頼んだら、これまた肉の罐詰をまるまるブチ込んだマカロニーを大皿に山盛り……。その三分の一も食えそうにもない大盛りに、先程のドンブリ紅茶を出されたには思わず尻込みしてしまった。夜になると外は一時、相当激しい俄雨になって、益々 Hütten Leben の快感を味わえ、この二青年の差出す地酒の赤ブドウ酒にホロ酔い、二階の毛布にくるまって寝についた時は下のストーブの暖気で上衣をぬぐ程暑くなり、雨にもめげず野外に佇む牛の群のかすかなクラリオンの音に引かれつつ、夢路を辿るのは正に天下泰平、これに過ぐるものなしであった。

グッスリ寝られて翌朝は、いつも早起き勝ちの小生は六時前に眼覚め、昨夜の俄雨の名残りの朝霧の立ち込める中を傍の冷水で洗面に出ると、またしても何れとも判らぬ方向からクラリオンの緩やかな音が、朝モヤを通して聞こえて来るのであった。日本の都会ではとても味わえない脂肪のトロッとした牛乳の美味さは、朝食のパンとチーズとソーセージに一段と食欲をそそるのであった。二青年も今日はチューリッヒ迄帰るとのことで、七時に一緒にこの小舎を後にした。小舎番の夫妻はま

た、来年も来いと愛想よく握手を求め、ニコニコ笑いながらこれはこの付近に咲くエーデルワイスで昨日摘んだばかりだ……と言って、この地特産の水晶の小石と一緒に呉れるのであったが、本当に今度はユックリと滞在してこの付近の山でも登りたいものだ。

「ああ何んと楽しいスイス山岳会の小舎の一夜であったことか……。」この二日はよく毛唐の使う言葉を拝借すれば、正に「黄金の日」であったのだ。

ビンまで大股の外人で、しかも若い二青年に果してついて行けるかなどと内心気懸りにもなったが、どうせ昨日の路通し降れば何んと言うこともない……遅れればどうぞお先にと言えばいいと独り決め込んで、この二人と小舎を後にしたのであったが、二青年もまさかこちらのためにユックリ歩いているようでもないので、結局ビン迄、また色々語り合いながら途中一回、一服つけただけで十時頃には帰り着いてしまった。

ビンも間近くなった頃だった。フト、この二青年にスイスでこのビンみたいな人の少ない静かな山村はないかと尋ねて見たら、即座に「ある……ある……」と喜んですぐ様ポケットから鉛筆を出し、地図の裏の白面に Oyedymitigen-Grimmialp と記してくれ、ホテルも一軒あるし、最近、付近にスイス山岳会の小舎も出来たが、番人はいないから炊事は用意して行かなければならない……と教えてくれたのには、思わず飛上りたい位嬉しくなってしまった。正に天の神の御告げみたいなものだ。否、天の神の御召しだ。ビンのホテルの前で更めてこの二青年の住所のメモを貰い、懇ろに挨拶を述べて室に飛び込むなり、時刻表を取り出し、一応の予定をたてて見た。

次の予定はツェルマットに行くことになっていたのだが、この年齢と胃のない体力で、クレバスだらけの氷河の山を登る勇気と無謀は持合せていないし、その上この頃のような観光地化した雑踏のツェルマットに永く留る気は毛頭なかったのだ。それよりも成可く早く切り上げて、先年ロングスタッフからの手紙でアローラ (Arolla) の村がいいと言うことを聞いていたし、前述のラーデンもまた、偶然にもロングスタッフ同様頻りとアローラの村を激賞、十数回も訪れて "Rambling Reminiscences of Arolla" をアルパイン・ジャーナルに寄稿したり、その一部も *Recollection of an old Mountaineer* に載せているのを読んで知っていたので、一応アローラ村行きも考えないではなかったのだ。しかしツェルマット迄来てしまうと、また Sion まで戻るのも億劫だし等と考えていた矢先であったので、ツェルマットは早く切り上げて、その名も聞いたこともない、二青年の勧めてくれた Grimmialp に行くことに腹を決めたのである。

ツェルマットとシェーンビュール（Schönbiel）の小舎

ツェルマットでの予定は英国山岳会歴代の猛者連のメッカ、モンテローザ・ホテルとG・I・フィンチにゆかりのダンデラン（四一七一メートル）のフィンチ・コリドール（Finch Corridor）だけ見ればアトは用なしと、東京を出る時から予定していたのであった。モンテローザ・ホテルについては百年この方、英国山岳会（AC）の会員とは切っても切れぬ御縁の由緒あるホテルであることは以前、拙著『山・よき仲間』にツェルマットのクラブ室と題して一文を草したこともあり、実はその後の文献漁りでこれに加筆、追加したいと思うような材料、例えば、日本山岳会の設立に際し、ウェストンさんの蔭の尽力者となって本会創立の促進をしてくれたり、辻村さんと近藤さんが渡英の節、晩餐会に招かれた席上でノーマン・コリー、ロングスタッフその他居並ぶ猛者連を一人一人御両人に紹介してくれて、創立後間もないJACとACの友交を益々深めてくれた名誉書記のC・ウオラストン（後にACの副会長となる）もまた、このメッカのとりことなってしまった一人であり、晩年にはユニオン・バンクの頭取と言う要職になっても、毎年このメッカを必ず訪れることを忘れず、しまいには段々滞在期間も永くなってシーズン・オフには従業員にまざって寝具、食器の整理迄手伝い、ドアーがロックされてホテルが冬期の休業に入るのを見届けて始めてロンドンに帰ると言う執念振りを繰返し、戦後（第一次大戦）には逸早く再びモンテローザ・ホテルを訪れて一九二六年に他界する迄、ホテルの片付けを毎年欠かさず続けていた……等と言うことを知ったり、また、最近では現存のAC名誉会員であり、またアルパイン・スキーイングの創始者として令名高きA・ランも、ミューレンのパレス・ホテルとアルパイン・スキーイングなるものの結びつきは、モンテローザ・ホテルと登山との結びつきよりはもっと密接なものであり……と言うのは、このホテルの第四号室でダウンヒル・レースとスラローム・レーシングに関する細則、Kandahar ski-club の創立等が決められたにも拘らず、スキーの連中は誰一人としてモンテローザ・ホテルのように一度でも足を踏み入れた連中が、その後度々そこを慕って集まって来るようなのと同様の気持を抱いて、この四号室を訪れる者が全然いないのは何故だろう……これは矢張り一つには登山は唯、スポーツだけでなく、従来の宗教と言うものに飽き足らず、これに代るに登山の精神と言う、もう一つの新しい宗教的信念を登山に結びつける傾向に向って来ていることが物を言ってるのではないだろうか……と嘆息の言葉を洩らしているのを見て、尚一層、何んとしてもモンテローザ・ホテルを訪れて、今尚多数のACの重鎮連を酔わせているメッカの雰囲気の「真」に聊かでも触れて見たいと思っていたのだ。

ツェルマットに着いて先ず駅前のホテル・バーンホーフに旅装を解き、愛想のよいマダムとその昔、麻生武治君や松方三郎さんがこのマダムの弟のフューラーを伴ってワリスの山を片端から登り、戦後には松方さんが何十年振りで再びこのホテルを訪れて、弟を偲んだ文をしたためたのをマダムは取出して見せてくれたりし、暫し松方、麻生両氏の話に談笑を交え、松方さんは元気か……等と聞くのであったが、実は松方さんももう余生短かい状態にあることは知りつつも、どうしても「彼は実は今……」と切り出すことは出来ず、マダムとの連名の寄せ書きを松方さんに送ったのである。勿論、麻生武さんにも……。

このマダムの亡弟は山のアクシデントで他界してしまったのであるが、この弟を偲ぶ弔文を刻み込んだブロンズ板が、このホテルの入口の壁にはめ込まれてあり、振り返れば勿論マッターホルンも見えるし、如何にも山のホテルらしいのであった。それにこのマダムは大の日本人好きだそうで、最近では日本人の客が多く今日もドイツに留学中の若い日本人青年が休暇を利用してマッターホルン、ドム等の登山のために来て居り、また、山岳画協会のJAC会員も既に三週間もこの宿に滞在していたり、また、マッターホルンに二回も登っていると言う本会々員の久留米大学教授の脇坂教授も丁度泊り合すと言う賑やかさ、小西君などもここが常宿だそうで、マダムが日本人大歓迎と言うのもあながち御世辞ではないのだ。

この翌日は快晴を利して一応、ゴルネルグラートの展望台に登山電車で出掛けたが、ワイスホルンから始まって馬蹄形に眼をそらせて行くと、ドム、テッシュ峰迄一応ワリスの山は一望の中におさめられ、各々特長のある山容は何れも恰も我こそはと言わんばかりの構えでいるようだ。さすがにマッターホルンだけは何人も寄せ付けず……と言わんばかりの構えだ。幾度見回しても飽きない大景観とも言えよう。そして暫らく繰返し繰返し今度は右から、今度は左から、と馬蹄形を追掛けている内に、ティンダルのワイスホルン、アルマーのオーベルガベルホルン、アンデルソンのフィヤエーゼルグラート、ツムットのマンメリー、コル・ドゥ・リオン、ブライトホルンのヤング・グラート、リスカムのノルマン・ネルダ、クヌーベル、ピオ十一世のモンテローザ・オストバンド、ヤングのトイフェルスグラート、等とそれぞれの峻峰、側稜にまつわる先蹤者の偉業が次次に頭をかすめて来るので、益々腰を上げにくくなって来て百聞は一見に如かず、百読は一見に如かずの有難味をつくづく痛感したのであった。一応漸く心の落着いたところで、こんな大景観との対談は滅多に撮れるところもないし、一応カメラにおさめることが出来たので早昼を済ませ、ホテル・バーンホーフに帰り着いたのは正午頃であったろうか。そしてフト、ホテルの屋上を見上げると日の丸の国旗が如何にも晴やかにひるがえっているので、一体どうしたことかとマダムに聞いて見ると、

昨日から日本人の客が多いので歓迎の旗を上げたのだと言うのであったが、別に阻止する理由もないのでこの旗のひらめく間からチラチラ見える、一段と高く聳えるテッシュ、ドムの峻峰を暫らく眺めたりした。

その午後は待望のモンテローザ・ホテルに出けたのであったが、街の雑踏に聊か失望を禁じ得なかったのであるが、モンテローザ・ホテルの入口には、このホテルの由来を物語るドイツ語の短文の末尾に、C・E・マシューズ（第八代ACの会長）の例の推賞文、"Mountaineers True Home"が銅板に記されてあり、右側にはウィンパーのいかめしい顔のプレートが壁面にはめこまれてあるのを見ると矢張り、嬉しくなるのであった。このホテルとしてもマッターホルンを売物としているツェルマットにある以上、ウィンパーの像はあって当然のものであろう。ウィンパーはこのホテルでは木戸御免で、一応ゲストとして取扱われていたのは当然としても、御酒の飲み代だけはロハとは行かず、ある時これを請求されると渋々支払いながら「わたしがいなかったらツェルマットはこうはなっていなかっただろう」と高ビシャに出ると、ホテルの娘もさるもの、すかさず「マッターホルンがなかったらあなたはどういうことになっていたでしょう」と逆ネジを食わされた等と言う話を思い出すのであった。一応、刺を通じて右側のサロンものぞいて見た時はAC歴代の重鎮が食後のワインに寛いだり、AC会員以外はお断わりのいわゆる「アルパイン・クラブ様御席」の食堂、交際嫌いのウィンパーが、いつも隅っこで一人ポツネンと坐っていたと言うことなど、ACの数多の重鎮が入れ代り現われて "Best Host and Hostess in the World" とザイラー夫妻を慕って集まって来たことなど……枚挙にいとまないこのホテルとACの関係、つい話が頭をかすめて来ると思わず微笑まずには居られなかったのである。

このホテルの前の道を挟んでしつらえた当時からの "Guide Wall" を見ては、ユーリアス・クギーの名文を思い出さずには居られなかったのであるが、こればかりは余りに今はこの名文を死文と化せしむるような、凡そ似ても似つかぬ観光客の座となってしまっているのには、失望を禁じ得なかったのである。実はここに来る前に今の当主のザイラー氏に会って、もっとこのホテルについての古い話、ACの連中との何か面白い話でもゆっくり聞いて見たいと思って一応、面接を申込んでおいたのであったが、同氏は今はチューリッヒの東京銀行支店の副頭取の要職にあって、ここには居ないがマネージャーの Mr Ballial に会って充分、御自由にあなたの「ツェルマットのクラブ室」を満足さすように伝えてある……。われわれ代々の家族をあんなにお賞めいただいて感謝申上げる……と言う手紙が入れ違いになって Ballial 氏に面接の機を逸したのは誠に残念であった。

その翌日はこれまた快晴に恵まれ、フィンチのダンデランを

近々に眺めるためシェーンビュールの小舎に出掛けた。ゴルネルグラートの展望台で、前日ワリスの全山は一応隈なく眺め尽したものの、ダンデランだけはマッターホルンのツムット山稜の蔭になって全然見えないので、どうしてもシェーンビュールの小舎だけは訪れたいと東京を発つ時に決めていたのだし、その昔、アルパイン・ジャーナルやフィンチの唯一の著書 *Making of A Mountaineer* によってダンデランの北面のトラバースの名文は、当時の読者をして否、少なくとも小生をうならせたものだから、万難を排してもシェーンビュールの小舎には出掛ける積りで張切って来たのであった。

このダンデランの北壁には、フィンチはあるいはマッターホルンのツムット側から、あるいはダンブランシュからと、実に十数回の偵察を重ねてこの小舎を根拠に十四年振りに成功し、フィンチ・コリドールの名を残した偉業は登山史上の燦然たる名文でもあるのだ。幸い、この小舎迄はツェルマットから馬でも通える路で、殆んど半日はマッターホルンの北壁を仰ぎ見る登路なので、こんな快晴の日の山行を逃しては正しく一大痛恨事ともなるわけだ。

ツェルマットの村を外れて約一時間位した処のツムットの僅か十軒足らずの小村は、こんな小さな村でもさすがはカトリックの国にふさわしくせいぜい十五、六名しか入れないようなチャペルが村の中央にあり、これも一風情をそえるのであった。

それにギド・レイの名著『マッターホルン』の挿絵でよく覚えていたペン画の一風景でもあるので、石のゴロゴロした村の中の細い路を通り抜けて行く時は、勝手知ったる路を歩くような気もするのであった。丁度、路傍のマッターホルンを仰ぎ見る景勝の地に簡単な茶店が出ていたので、此処でコーヒー一杯の一休み……。手製の民俗衣裳をまとった、好人物のような婦人は勿論英語は通じないのであったが、手真似よろしく昼食の補充にウルストを挟んだ黒パンを二枚作って貰って先を急ぐことにした。マッターホルンも、この辺りから一般の登山ルート、ヘルンリー山稜の部分より、北壁の部分の方がより多く仰ぎ見られるようになり、振返ればリスカムからモンテローザ、テッシュ、ドムの輝く雪稜が眺められ恰好の散歩路といいたい処だ。ツェルマットを出たのが七時、ツムット村が八時半頃という順序で、スタッフェル・アルプへの分れ路に来たのが十時十五分……。十時半頃になって初めてダンデランのツムット寄りの一端が、真白い姿をチョッピリ現わして来た。そしてマッターホルンも北壁の三分の二以上が仰ぎ見られる地点になり、北壁ごと此方に覆いかぶさって、今にもこっちに落ちて来そうに見えるのであった。後は進めば進む程、北壁とダンデランの全容が大きく展開に変ってくれるのだから、自然足も早くなるのであった。併しシェーンビュールの小舎は、右側からツムット氷河に突出している小尾根に隠れて未だ見えない。天気は折柄

の快晴に恵まれて未だ雲一つ現われないという状況で、照りつける太陽と足早やに汗ビッショリかいてしまったが、時々出合わす路傍の流れに喉を潤す。正午近くであったろうか……。もうダンデランの全容とマッターホルンの北壁の全部が判然仰ぎ見られる地点に到達。北壁はもうこの辺りでは益々今にもこっちに落ち掛って来そうな威嚇的の存在だ。そして今度はツムット山稜の白一色の帯が、ダンデランと手をつないでいるように見える。ヤアー、漸くシェーンビュールの小舎も右側の一段と高い処に見えて来た。小舎の前の、それと察せられる処に例の赤地に白十字の旗がひるがえっているのも、かすかに見えて来た。ダンデランの頂上直下からトテツもないデカイ氷の廊下が、小舎側に傾き掛って今にもズリ落ちそうで、大型ナイフでズバリ切り落したアトのようにテラテラ光っている。この断面だけでも何十メートルもありそうだ。これこそフィンチ・コリドールだ。絶えず引切りなしに上から落石と氷塊を浴びせ掛けられるという、三十度にも傾いた氷の廊下を、ティーフェンマッテンからツムット側へトラバースしたのだから、まあ命からがらの離れ業といってもいいだろうと、この眼でつくづく眺めるのであった。こんな悪場だから勿論、仕事は夜半の仕事だ。夜明けの陽の出る前には、通り抜けてしまわなければならない短時間の勝負だ。片手はステップ切りに、片手は確保にロープとランターンの確保に、時には吹きつける風に蝋そくの火は消える……。時にはランターンを口にくわえて進み、夜明けの白らむ頃には不要になったランターンも、両手を使えないので蝋そくを噛んでランターンを畳んだ等という苦心談が、次々に頭をかすめて来るのであった。

シェーンビュールの小舎は、ダンブランシュ側から突き出た側尾根の突先の上にあり、高度にして百メートル以上のジグザグ路を十数回繰返して登り切った処にあり、ツムット氷河を足下に挟んでダンデランの全容を見せる地点にあるのだ。小舎に着いたのは午後一時少々廻っていたか……。早速記念撮影にと小舎の入口に掲げられた「スイス山岳会、モンテローザ・セクション、シェーンビュール小舎、二六九四メートル」の看板を背にして、ここに居合せた人にシャッターを押して貰ったのである。もう、ダンデランは手に取る如く近く、漸く午後の雲が頂上付近をかすめる何んたる凛々しき姿かな……と、更めて小舎の扉に寄り掛って眺める。小舎の内部、一階は相当広く三十人以上も楽に休めそうなテーブルが幾列にも並んでおり、炊事場との間のカウンターには果物や飲物を並べて、小舎番の爺さんが時折客の注文に応じている。空腹に、早速スープを注文したところ、ここでも亦、丼スープには恐れ入ったが兎に角、いい知れぬ悦びが胸をついて来るのであった。部厚のヒュッテンブーフを取り上げて「日本山岳会、成瀬」と一筆書きなぐった時は矢張り、押え切れぬ嬉しさを覚ゆるのであった。二階は矢

張り蚕棚式の寝室になっていて、寝ながらにしてダンデランが眺められ、この快晴を利して、明早朝ダンデランを目指すという婦人を交えた一隊と、ツムットをかける他の一隊が明日の準備に何かと忙しそうであった。実は一層のこと、泊って明日、早朝日の出に輝くダンデランをジックリ眺めようかと考えたのであったが、ツェルマットのホテルには日帰りするといいおいて来たのを、内心つまらぬことをいって来てしまったと後悔したものの、これも後の祭り。それにしても未だ引上げるには早いので、また外に出て小舎の石塀に寄り掛かって、ポカポカ日向ボッコをしながらダンデランの頂上を去来する雲を眺めたり、昼寝をむさぼったりして時を過すのであった。三時、漸く帰路につくことにして、山岳会員は一晩四フラン、外国の山岳会員は六フラン、子供は二フラン五十、薪代は一人三フラン等、その他出発時刻、行先等書き入れるようになっている小型の宿泊申込書のカードを一枚記念に貰い、もう一度、ダンデランとツムットを眺める頃には、ダンデランの頂上は殆んど雲に覆われているのであった。思い起せば一九二六年、フィンチの *Making of A Mountaineer* を丸善の書棚で見付けてからこの方四十数年の今日、やっと実物を眼のあたり飽きる程眺め得た、否、実はチットも飽きなかった眺めに後髪を引かれる思いで小舎を後にし、途中何回も振り返り見ながら、帰路を辿ってツェルマットに着いたのは七時近くであった。

ザース・フェー (Saas-Fee)

この翌日、早朝、ツェルマットを後にしたのであったが、かねてよりザース・フェーにも立寄り、マットマルクを経てモンテモローのパスからモンテローザのオストバンドを眺めたいと思っていたので、スタルデンで下車、バスでマットマルクに向った。

その昔、このモンテモローのパスへは麻生武さんと松方さんが早春の頃、当時は勿論バスなどない時だからスキーを担いで、月明を頼りにザース・フェーに辿り着き、ミシャベルの大氷河が軒先近くまで迫るようなのを月の光りで見た時の感激を、武さんから聞いていたので、モンテローザのオストバンドを見た帰りにフェーに一泊することにして、ひと先ずこの奥のマットマルクまで行って泊る積りで出掛けたのであったが、今は武さんの時代から四十年も経っているので、マットマルクには大きなダムが出来たりして、ダム見物の観光客やマイカー族の車が殺到しているのにはすっかり恐れをなして、ザース・フェーに引返すことにした。ザース・フェーは成程、ミシャベルの大氷河は確かに村を押しつぶすのではないかと思われる程近くまで、氷河がせまっている景観は一驚に値するのではあったが、街はツェルマットに負けない位、観光客で賑わい麻生君時代の面影など全く見られないのは、聊か失望を禁じ得なかったので

ある。併し一度、頭を上げれば兎に角、白一色のスイスの最高峰ドムを含むミシャベルの山群を控えている登山基地でもあるので、兎に角一泊することにした。それに武さんと松方さんが当時連れたフューラーのイムゼンクも、七十三歳にして今尚健在であるとのことで、武さんからの伝言、紹介状も持って来ているので早速イムゼンクを訪ねて見たが生憎、一昨日から客を案内してモンテモロー越えでイタリアへ向い、明晩でなけりゃ帰らないとの老夫人の話で、会えなかったのは残念であった。ミシャベルの山群を間に挟んでニコライの谷のツェルマットと、ザース谷のザース・フェーは何れも昔から登山客にとって、重要な登山基地ではあったのだが、今は何れも土産物屋と観光客の群がる江ノ島みたいな処となってしまったのには、聊かアテ外れでもあった。特にザース・フェーなどはその昔、登山家ではないが、クリスマスカロールの著者として文名高きチャールズ・ディケンスも、この静けさと景観を愛して度々訪れ、或る時はディケンス自身が彼の尊父の作った詩を吟誦してくれるのであった、などということをラーデンがその著書の中で語っており、しかも今度、泊ったホテル・ドムでのことであったというのだから、これも今となっては曽ての文豪を偲ぶ、「思えば惜しき過去なりき」と嘆きの言葉で結ぶより他ないだろう。

グリンミーアルプ（Grimmialp）

——二万五千分の一地図、アデルボーデン（Adelboden）参照——

翌朝（八月八日）は、ビンで二青年が教えてくれたグリンミーアルプに一刻も早く行き度く、一番のバスでドム・ホテルを後にしたのであった。一旦、スタルデンに出てブリークに行く電車に乗換え、ブリークからまた電車でスピーツに向うのだ。スピーツは『スウイス日記』にも出て来るツーン湖を見下す景勝の駅であり、インターラーケン、グリンデルワルトに行くにもここから行くので、湖の右の方にはオーバーランドの盟主、フィンステラールホルンも見えるのであった。グリンミーアルプに行くにはインターラーケンの方とは全く反対に、スピーツからツワイジンメン、モントール等を経てローザンヌに向う鉄道に乗り換えて四つ目の小駅、オーウィー（Oye）で降りる。

この駅は見るからに田舎の小駅で、これから向うグリンミーアルプの村も嘸かしこんな簡素な平和村だろうと、心は早るのであった。バスはすぐ連絡して出発。定期郵便バスに乗って見ると乗客もまばらで、見渡したところ土地の人ばかりで、こちらのような目的で来ているお客は誰もいないようであり、思わず平和郷に近付く待遠しさをこらえて、窓外の景色に見とれるのであった。暫らくは青葉の繁る森の中を清流に沿うてバスは走り、やがて両方が段々開けて来て、一帯が冬のスキーには

持って来いのような緩やかな牧草地帯の丘が山頂まで続いている。バスは時々、停車する毎に沿道の小村の郵便局のマークのついた家で郵便の積みおろしをするだけで、乗客も一人減り、二人減り、結局、一時間近く掛かってグリンミーアルプの小高い丘を登り切った処にある終点のホテル(クールハウス)に着いた時は、此方のみであった。成程、期待にそぐわぬ別天地だ。ホテルの周囲は古林に囲まれ、少し離れた処に教会の白い塔が見られる。チョット箱根の仙石原みたいな処で、長尾峠か乙女峠の下あたりにこのホテルが唯、一軒あるような処で、これを囲む四辺の山は神山から金時山がもっと高い岩峰だと思えば間違いない。山はせいぜい二千メートル級程度であるが、何れも頂上はドロミテの山を思わすような峨々たる岩峰であり、麓の丘陵にはポツンポツンと牛小舎がまばらに散在し、夕闇迫る静けさを破ってあちこちからクラリオンの音が流れて来るのであった。ホテルも如何にもこの四辺の風景にマッチした白亜の三階建ての建物で、玄関の前の広場の木蔭の所々には、ベンチや長椅子に老人夫婦が編物や読書に耽っている光景は、ビンとはまた趣きの違った、チョット老人の保養所みたいな印象を受けたのである。お客には若い人は全然見当らず、中には杖を頼りに夫人にすがって歩く爺さん、またその逆の婆さんが多く、勿論、土産物屋など一軒もなく、民家も広い仙石原のゴルフ場の辺りにポツリポツリとあるだけで観光のカの字もなく、矢張り老人相手の療養所といった方が適当かも知れない。それにホテルで出す食物も肉なども柔かく、量も適量で、理想的である。ここを取り囲む山も二六五二メートルのウィンターホルンが最高で、雪や氷河の懸かっているのは見られないが、それだけに若い人には魅力はないかも知れないが、ここの牧歌的風景やマバラに存在する古めかしい民家から立上る夕餉の煙を眺めていると、登山基地などというものではない、桃源郷といいたい処だ。

食後と寝る前の間には何処のホテルでも、サロンやバーでワインやウィスキーで歓談を楽しむ風景はよく見掛けるものだが、テレビなど見てる人は殆んどいない。老人夫婦が如何にも睦じく静かな雰囲気を味わっているのを見るのは、また楽しいものだ。こっちも一応、柔かい椅子に奥深く腰掛けて、例の如くキセルでバットの紫煙(?)を吹かしていると、中には珍らしそうに此方を眺めてニコニコしながら傍によって来る老人夫妻なども出て来て、チョット拝見とばかりキセルを手に取って見たりして、忽ち親しくなり、またここでもどうしてこんな処を知ってるのかとか、日本の人は此処では初めてだ等といって来る者も出て来るのであった。実は先日も、ゴルネルグラートへの電車の中で斜め向うに坐っていたドイツから来たという婦人が、頻りと此方を見ていると思ったら遂に此方へやって来て、これもチョット拝見とばかりキセルを自分の口元にあてる恰好をして見せ、「私の煙草……」といって一本差出すので、有難

く頂戴してキセルに差して "very sweet" といって吸って見せると大喜びなので、こんどは此方からバットを一本進呈すると、"good" などといって傍の御亭主と顔を見合せてニコニコしている。竹で出来てるのだと説明すると、御亭主にその通り説明している。こんなことで見識らぬ異国人と親しく話し合えるのは、何んとも楽しいものだ。それにスイスの電車は喫煙出来る車と禁煙車は一輛おきになっており、車輛の外側にはっきりNicht Raufen と書いてあるので、乗る時からどっちでも選んで乗ればいいのだから、この点でも観光客を扱う上には誠に行き届いた親切だと思うのだ。

翌日はこの周囲を囲む山の一つのトッテルン・パス(Tottern Pass)(一二七八メートル)に出掛けて見た。牧柵をめぐらす村道を昼食だけの軽荷で歩き出したが、マイカー族も殆んど見られず、何れを見廻して見ても緑のジュウタンを敷いたような牧草の続く岩稜は、岩登りなら結構楽しめそうな山ばかりで、秋のタンネの色付く頃は素晴しい景観を展開するのではないかと想像するのであった。トッテルン・パスを越せばその先はスキーで有名なアデルボーデンに抜けるので、この辺りの牧草地帯も最近は冬はスキーで賑わうようになったそうだ。そういえばここに来るまでの途中、リフトの掛かっている山もバスの中から見受けられたが、サン・モリッツやミューレンのような派手なスキー場となるには未だ程遠いのだろう……。

街道の傍の古木の木蔭で一服つけていると、後ろから年老いた、シワだらけの爺さんに手綱をさばかれた荷馬車がやって来るのであったが、荷物は牛乳を入れる尨大な空罐だけ。ツイ、引きずられてこの馭者に手真似で便乗を申込んだところ、自らの席の傍をあけ、乗れという。勿論、言葉はスラングみたいで全く通ずる由もないが、歩くよりも遅いこの牛乳運搬車に揺られて、雲一つないすき通るような青空を眺め、峠路指して行くのも楽しいものだ。それにしても、あの空の青さと来たら何んといったらいいだろうか……。胸の中が洗われるようだ。空気が甘いというおうか。そしてフト、思うのであった。それは、どの画面にでも青空を描くのを忘れなかったセガンティーニのことを……。古臭いソフト帽に薄汚ないパイプをくわえた老馭者の傍に、これもキセルをくわえた山男が列んで、石のデコボコ路を行く光景なんてセガンティーニのような大家にとっては、凡そ絵になるかはチョット疑問だが、こっちはセガンティーニの画を頻りと思い出すのであった。それでも小一時間は便乗しただろうか……。こちらからボンボン飴とオレンジ一個を老爺さんに進呈した時以外は、碌に口を利かなかったが、路傍の数十頭も収容出来そうな、大きな石で固めた、一見山小舎風の牛小屋の前に止まったこの運搬車の考爺さんと固い握手を交わして、なおも峠路を急いだのである。でも峠は未だ遥か彼方なので、千メートル近くの清水の湧いている草原で昼食ということ

にしたのは一時を廻っていた。

名の知らぬ足下の紫の花群の甘い香りが鼻をついて来る。一応、ホテルのマダムが用意してくれたオレンジ、ペアー、冷肉、パン、ボンボン飴などの昼食に満腹して、青空を仰いで大の字になって休息ということにして、サブザックの中を片付けていると、フト、固いものが指先にあたるので、出して見ると毎夜寝酒にするワインの小ビンが現われて来たので、これ幸いとばかり口に入れて見ると、忽ちいい気持になってしまって華胥の国への御召しに掛かってしまった。足下の細流の音はまるで子守歌のようだ。こんなことで三時過ぎまで眠ってしまったのには自分ながら驚いた次第である。峠は見えるものの、これからは相当の急坂を未だ二時間近く掛かりそうだし、この分だと帰りも心配になって来たので、此処で帰路に着くことに決めてしまった。何も無理にトッテルン・パスまで行かなければならないということもないと、勝手に決め込んで降りに掛かった。今まで来た峠の路は羊腸の緩い坂ではあるが、車の通る街道であるから大廻りの長い路であり、時間的にも損なので、その途中々々に "Berg Weg" などいう小さな指導標に従って森の中の近路を降って行くことにした。時には先程の細流の下流らしい処にブツカリなどして、スタスタ降りて行くと割合に広い谷に架せられた木橋にぶつかり、此処でもう一度、テルモスの紅茶に最後の休息を取ることにした。この辺りは内地の沢歩きを思い出す風景だ、などと考え込んでいると、突然、森の中から大袋を抱えた中年の紳士が現われ、如何にも馴れ馴れしく話掛けて来て、この付近に沢山採れるのだと、袋の中から椎茸を取り出して誇らしげに見せるのであった。こっちも椎茸は大好物なので、"Fine…" と連発してやったら次々に大きいのを出して見せるのであった。そしてまた、例によってどうして日本から態々こんな処に……と珍らしそうに聞くので、スイスはヨーロッパで一番美しい国で外国人に対して親切な国民だから……といってやったら、高笑いをしながらこっちの顔を見つめながら、自分はスピーツから今朝車で此処にやって来たのだが、椎茸が大好きで時々ハイキングかたがたこの辺りに来るので、ツイ、この先においた車に女房と子供が待っているのだが、どうせ貴君のホテルのそばを通るのだから乗って行けという。こんな意外な好意に甘んじてホテルに帰り着いたのは、四囲の岩峰の突先が漸く赤く染められる頃で、晩食もそろそろ初まったらしく、昨晩、サロンで親しくなった老夫妻はスープの冷えない内に早く食堂に行けと、親切にいってくれるのであった。

晩飯後は例によって地下のバーで軽くワインを味わっていると、隣に坐わった素晴しい美人から、自分はバーゼルから来ている看護婦で、もう一ヶ月近くここに泊っていて、入れ替りたち代りここにバーゼルから来る老人連の面倒を見ているので、このホテルはバーゼルの市が幾分出資して出来た、老人の慰安

所兼ホテルだと説明してくれ、成程こっちの予感もズバリあたっていたのであった。そしてこんない処を教えてくれたビンで会った二青年に、更めて謝意を表すべく感謝の絵葉書を走り書したのであった。この近くにある筈のスイス山岳会の小舎にはツイぞ見参に及ばなかったが、そんな処で故国の南会津山ノ会でもやったら、嘸かし楽しいだろうと、頻りと会津山村の風景も思い出すのであった。翌朝はホテルの前から出る九時始発のバスで此処を去ったが、僅か二日の間で親しくなった多くの老人夫婦や愛想のいいホテルのマダム、例の看護婦の握手攻めに遭って、グリンデルワルトに向ったのである。

グリンデルワルトとメンヒ登山

グリンデルワルトもツェルマットやシャモニー同様、あまり人が多いので聊か驚いてしまったのであるが、何んといっても槇さんのアイガーを控えた登山基地でもあり、その著書『山行』や辻村さんと近藤さんの『スウイス日記』が出版当時、漸く山登りに興味を引付けた原因の一つでもあるので、矢張り無下に引下ることは出来ない。それに今年は辻村さんの五十回忌であるから、もう一度『スウイス日記』を読み返して、出来れば槇さんのアイガー小舎か、メンヒに登って見たいと考えていた。

今度スイスに来て以来、昼間は殆んど雨らしい雨に会っていない幸運の連続で、ここに到着の翌日の八月十二日もまた雲一つない快晴に恵まれ、絶好の展望日和とあって、早速、赤毛布よろしくユングフラウ・ヨッホの展望台を訪れて見た。

暗いトンネルを出ると、雪面の激しい反射を通して眼に入ったのは、アレッチ氷河の蜿々尽くる所を知らずの大氷河であったが、これは過日、この下流のエギスホルンに上ってコンコルディアの小舎を右に、ユングフラウ峰やアレッチホルンを眺めて来たので、さすがはアルプス一番の氷河たることを充分見尽すことが出来た次第である。早速、地図を拡げてベルナーオーバーランドの巨峰を丁寧に拾い上げて見た。

アイガーはメンヒの蔭になって見えないが、オーベル・メンヒヨッホから左にメンヒの頂上に続く尾根は左程急でもなく、またこのヨッホに達する迄の雪原は、途中スキーを楽しんでいる連中もいるので、このスキー場を外さなければクレバスを渡るような処もなく、メンヒは登れそうだと一応自信もつけたので、よし「これなら俺でも……」という気がして、翌日出掛けようと決心したのであった。午後はグリンデルワルトに帰って、一応登山の準備を整え終ったので、ここの教会に眠る、その昔、北海道ほか諸処にスキー行を共にした旧友田口一郎君の墓を訪ねて、一掬の花を捧げて来た。ウェッターホルンを仰ぎ見る景勝のこの墓地には、クリスチャン・アルマーの墓もあり、またここを臨終の地としたクーリッジもまた此処に眠り、一九二六年五月、ここで永遠の眼を閉じたクーリッジは当日不

幸、英国は炭鉱ストライキのためACの連中の弔問客は誰も来られず、偶々ここを同じく常住の地としていたアーノルド・ランが唯一人の英人の弔問客であり、あとは地元のガイド、村民のみで教会は所狭きまでに埋められ、時折ウェッターホルンの彼方より響き渡る雪崩の轟音は、恰も大登山家の死を悲しむかの如く響き渡るのであった等という、当時のアルパイン・ジャーナルの報告を読んだことを思い出し、異国から来た無名の赤毛布も、是非この墓地は訪れて見たかったのである。

街に戻って明日の登山の食糧など少々仕入れにブラついていると、先般ツェルマットのホテル・バーンホーフで会った脇坂さんが、メンヒに登っていま帰ったばかりだ。昨晩はクライネ・シャイデックのホテルに泊って、今朝ヨッホ向け四時半発の電車で出発して登って来たとの話なので、この通りやれば、明朝グリンデルワルト朝一番、七時十五分のヨッホ行より三時間も早く山に掛れるので、早速ホテルに引返して荷物を整え、クライネ・シャイデックのホテル・ベルビューに向ったのは午後四時過ぎであった。この時刻になるともう観光客も皆、グリンデルワルトに下りてしまって閑散たるもので、グリンデルワルトでは見えないチングル・ホルン、スパルテン・ホルン迄アルペン・グリューンがホテルの窓から眺められ、独り静かにユングフラウ峰からこれ等の山に続く連嶺の美しさに見入っていると、またしてもクーリッジとその愛犬、チングル、ウィンスロップ・ヤングのスパルテン・ホルンなど、これ等にまつわる名文を思い出すのであった。

スパルテン・ホルンについては当時、ヤングはこの他に槙さんのアイガー東尾根と二つを目標に、アルプスに残された最後の難しい山稜として、ネラっていたのだと、その著書 *On High Hills* に判然書いているのだから……。

ホテルのグリンデルワルト側に面した一人部屋から、折しも満月を浴びたアイガーの北壁の辺りを眺めていると、此処でもかすかにクラリオンの音が流れて来る。これなら明日も好天は間違いなし、ヨシ、三時半起床と決めて一風呂浴びて寝についたが、辻村さんではないが初めて試みる氷河の山への嬉しさ…メンヒのルートが気になって、仲々寝つかれずそれでもウトウトしている内に、三時にはハッキリ眼が開いてしまった。月は益々冴えている。「ヨシ……」とばかり食堂に下りて手探りで電燈のスイッチをひねり、キッチンの昆炉で湯沸しなどしていると、同じくヨッホに向う登山者十数名が次々と表われて、一同朝食の準備に賑やかになって来た。一足先に来て沸したお湯を、彼等はダンケなどと云いながらテルモスに入れ、お返しにと紅茶のパックを呉れたりするのであった。ホテル側でも、この毎日の四時半出発の登山客にはなれているので、パンその他の副食物は、前夜からの申込人数に従ってキチンとテーブル毎に並べておいてくれてあるので、皆セルフサービスで事はス

ムースに進むのであった。

未だ薄暗い外に出ると、目の前に電車のヘッドライトは我々の乗車を「早く……」と促しているようだ。ヨッホには一時間ばかりで到着、昨日来た処のトンネルを出ると、コンコルディアへの大氷河を挟んでの巨峰の頂が、漸く上りかからんとする朝日に薄紅に染まり、正にモルゲン・ロートにもう直ぐと云うところだ。アレッチホルンが馬鹿に立派に見える。雪原は未だ相当固いがアイゼンをつける程でもないので早速歩き出す。一足先に雪原に出た十五、六名の連中は、ガイドを連れてコンコルディア・ヒュッテに向う一隊と、メンヒのノルレンに向う二隊と、オーベル・メンヒ・ヨッホに向う十数名と別れ別れになったようだ。一応、冬仕度の厚着のせいか寒くもなく、前の踏みあとを忠実に進むうちに素晴しいモルゲンロートの展開だ。Turgberg の左側にグロース・シュレックホルンも顔を出して来る。約一時間でヨッホに達し、すぐ左側へメンヒに続く尾根に取り附いた。これからメンヒ迄は側尾根は一つもない。要するに尾根一筋の一本登路だ。実はメンヒの登山については会員の渡辺正臣君が既に三回も経験して居られ、今度も一緒に行ってくれることになっていたのであるが、生憎グリデルワルトで処用のため同行出来ず、ルートについては大丈夫、難かしい処もないと細かく説明を聞いて来たのだが、普通では四時間もあれば登れると云う話でもあったので、此方は足も遅いから六時間位だろうと考えながら行く。成程、未だこの辺りは処々岩場を避けて歩き易い処を拾って進める位、広い尾根であったが、ヨッホから一時間も進むと漸く尾根も狭くなり、両側は凄く急斜面になって来たので、アイゼンをつけることにして一服することにした。それにグロース・シュレックホルンからフィンステラールホルンも大きく見えて来、「メンヒの頂上ももうすぐだ……頑張れ……」と励ましてくれてるようで、恰好の休憩場所でもあった。

これから先の尾根は益々狭くなるばかりで、岩、雪と交互に続くのであったが、雪稜の部分はアイゼンが気持よくさゝって歩き易いのだが、岩に掛るとコブのようなのばかりで、この岩場を乗り越えたり巻いたりしなければならず、それに最近のアイゼンは素晴しく軽いので足の運びは楽だが、それだけに先端が岩に引掛り、ズリ落ちては大変だと……先ず、必ず手掛りをしっかり決め、次に足場をと、それに上衣のフリクションを利用して進まなければ、到底上れないような処が時々出て来るので、いやでも緊張せざるを得なくなって来た。併し、さすがは石灰岩だけあって、チョットした手掛りでも足掛りでも、ぐらつくような処は一個所もないのは有難かった。二、三ヶ所、岩場を巻くのに反身にならなければ巻けないような岩場もある。何しろ独りだから慎重そのものだ。間もなく頂上への尾根の右端が見られるような地点に到着したのは十時半頃で、オーベ

ル・メンヒヨッホから三時間は来ただろう。もうアイガーもウェッターホルンも判然全容が見られるようになり、高さから云っても両峰と同じ位、或はより高い処迄登って来ているようであったが、そろそろ胃のない悲しさ……息もはずむようになって来た。傾斜も大分急になって来たのでジグザグに登ることにした。先行の毛唐の踏跡は直登で、とてもその通りはついて行けない。休息も十歩に一休み、五歩に一休みと、はずむ息を静める始末になって来た。腹もすいて来たし一先ず大休止と、昼食を採ることにして一服つけることにしたのは十一時を廻わっていた。先に登った足の早い連中は、何れも若い発剌たる連中とは云え、もうこっちに向って降りて来る連中もある。何れもザイルを結び合った連中ではあるが、此方から見上げていても緊張した足取りはよく判るのだ。もうアイガーもウェッターホルンも明らかにここより低いと判る地点ではあり、八合目位いはトックに過ぎているだろう。頂上に人が立っているのがよく見える位の処である。フト、此処で、息ははずむし、もう槙さんのアイガーよりも高い処迄来たし、日本に帰って槙さんに「槙さんのアイガーより高い所までは行って来ましたよ……」なんて一応いばれると、不心得なことも考えたりしたが、一方辻村さんだって急仕度の借物の登山靴で、このメンヒに登られ、矢張りあえぎあえぎ登ってしまったのだと云うことも思い出しながら、テルモスの紅茶をすすったりしているうちに、ザイルにつながった婦人を交えた四、五人の一隊が上から近付いて来て、「富士山とどっちが難しい……一人か……何歳だ……、独りでは……誰かロープ・メートはないのか……」などと、親切だかひやかすのだか判らない言葉を俗びせかけて来るのであった。聞けばイタリアから来たそうで、ドロミテなんかはもっと凄い岩場がある、などと恰かもこの位で弱るな……、と励ますような顔付きもするので、此方も負けずに「じゃーお前のロープに入れて呉れ……」と云ったら、傍の婦人と顔を見合してニッコリ、「ノーノー」などと云って来る。そうだろう。日本の何者だか判らない小男が、キセル煙草でロープメートへ入れろなんて云ったって、仲間のフィアンセの方が余程大切なのだから、ノーノーと云うのも当然だ。でも一人一人グッド・ラック、スロー、スロー、ステディなんてお世辞を残して降りについて行くのであった。腹も満たしたし、兎に角十歩が五歩へと一休みの回数を続けて登って行くうちに、確かに四千メートルは越しただろう。頂上への最後の屋根型のリッジももう一息と思うと、今度はおかしなもので足取りが急に早くなり、四千メートルは初めてと云う意欲にでも駆られたのか、息も楽になって来るのであった。これから先はもう岩場もなく雪稜一本を頂上に向って約二百メートルも行けばいいのだ。ところが、この頂上までの雪稜は幅一メートルもないナイフエッジで、両側は若し落ちたらとてもピッケルでいくら引掛けても止りそうに

もない急斜面で、見るからにゾッとするようなナイフエッジだ。先に登っていた毛唐の一隊が頂上から、まるで這うようにしてヘッピリ腰でこのナイフエッジを降りて来るのが近付いて来るのを見て、正直のところ暫らく考え込んでしまった。独りでこんな処を行って落ちでもしたら大変なことになるし、余程この辺で失礼しようかと考えながら、一先ずパンと紅茶をすすりながら休むことにした。そのうち後ろから来たグリンデルワルトを朝の一番で発って来たと云う日本の若い登山家が二人、一人はアイゼンもなしで登って来て「あなたは山岳会の成瀬さんですか……。渡辺さんが、途中で会ったらよく面倒を見て上げてくれ……と云ってましたから……」と一先ず先に行ってナイフエッジをよく見て来てくれて、大丈夫ですよ、沢山踏み跡が深くついてますから、と励ましてくれるのに漸く、それならと、頂上目指して歩き出し、踏み外しては一大事と、それこそ傍目もふらず約三百五十歩目を数えた頃、平らな雪面に辿りついたことを知り、初めて顔を上げたのであった。もう息も平常に戻っているし、兎に角四千九十九メートルの頂上は足下にあるわけだ。天気は依然快晴、微風だになく、マッチの煙も聊かも揺れないような平穏な山頂の景観で、オーバーランドの主峰は残らず眺められ、さすがにフィンステラールホルンは最高の貫録だ。すぐ足下からアイガーへ続く尾根のクライネ・シャイデック側に乗り出した、今にも落ちそうな雪庇の連続は、槙さんも当時、若い時とは云え、この雪稜をよくもアイガーへ行かれたものだと、「メンヒよりアイガーへ」のあの当時の写真を思い出すのであった。二人の青年もお目出度うと云って果物やジュースを分けてくれ、この時の美味さは何んと云ってよいか……。

辻村さんや近藤さんを呑んだクーロアールはどれだろうなどと、グロース・シュレックホルンから下のオーベル・アイスメーア氷河に幾本も落ちているクーロアールを眺め、奇しくも今年は辻村さんの五十年忌だ等と思ったりして頂上には三十分止まっていただろう。ユングフラウへもこの好天を摑んで誰か登ったらしく、ザッテルに向って踏み後が真すぐついているのが雪面に判然見える。ユングフラウはそんなことでどうしても氷河のクレバスを避けて登らなければならないので、到底独りでは無理だろうと見つめたりして、いよいよ降りに掛ることにしたのは一時半位であった。ナイフエッジは傾斜度は緩いので、それに登る時に雪の柔かさも充分判って来ているので、降りは案外心配する程もなく楽に降りて来られるのであった。このナイフエッジを過ぎてからの下の方の雪稜は、グリセードで飛ばせるような処もあって、案外早く降れるのであったが、岩稜にかかるとむしろ登りよりも緊張を要するのであった。と云ってその都度、アイゼンをぬぐのも面倒だし、時には緩傾斜の岩面でもお尻をピッタリつけて、アイゼンの先でつまずかないようにフリクションを利かして、むしろ登る時より降りの方が、

岩場は恐しかった位だ。併し雪稜はグリセードで降りられる個所も降るに従って多くなって来たので、さすがに降りは時間的に早くてオーベル・メンヒ・ヨッホに達して一息入れたのは四時頃であった。ユングフラウ・ヨッホ迄はたんたんたる雪原をトボトボ歩いて、グリンデルワルトに帰り着いたのは七時少々前であった。

ホテルの窓際に独り坐ってゆっくり、静かに暮れ行くアイガーを眺めていると急に今日一日の緊張から開放され、初めて、兎に角永年憧憬のアルプスの一峰、四千メートルに登った喜びが全身に廻って来たようだ。案外、肉体的の疲れは全然、感ぜられなかったのも我ながら不思議に思うのであった。

グリンデルワルトを朝、一番の電車では到底頂上迄は行けなかったろう……。終日無風の快晴……。途中岩場での緊張……。ナイフエッジの緊張……。等と次々につい数時間前のことが頭に蘇み返って来るのであった。それにしても槇さんの『山行』では途中、雪稜では氷雪面でブラバンドが盛んにステップを切った……と書かれてあるが、今日は連日の好天気のせいか雪は柔かく、ステップを切る等と云う場面には一度も出合わず、登れたのは全く運に恵まれたと云うより他なく、状況によって、かくもコンディションが違うものか……矢張りアルプスだと思うのであった。大体メンヒの今日登ったルートは殆んどと云っていい位い、南向きの斜面なのだが、それでもステップを切る

山岳　第六十七年（一九七二年）

カンジロバ山群未知の部分　阿部和行
マナスル西壁（一九七一年）　小原和晴
コルディエラ・レアルとアタカマ高地　向一陽
パタゴニア南氷陸中央部縦断　上智大学パタゴニア縦断隊
叔父板倉勝宣のこと　板倉勝正
アフガニスタン中央高地単独横断　梶正彦
ランタン・ヒマール踏査行　梶正彦
バウダ・ピーク登頂（一九七一年）　愛知教育大学山岳会
ティリチ・ミール登頂（一九七一年）　増江俊三
ビアーズ峰登頂（一九七〇年）　都竹勝
ダーラン山塊（一九七一―七二年）　国鉄山岳連盟ニュージーランド親善登山隊
山の地名と歴史　原全教
追悼
図書紹介
会務報告・英文梗概

A5判二八八頁　写真・地図・図版五十六点
定価　二五〇〇円

ような固い時もあるのだから、矢張りアルプスはアルプスだと感ずるのであった。かりに風でもあったら、とても独りなどで登れるものでない、本当に今日は運がよかったのだとつくづく感じた。

東京を出る時に麻生武さんから、スイスに行ったら地酒のワイン・ドールとグリンデリワルトでは Viande Fleisch を是非食って見ろ等と云われて来ていたのだが、この Viande Fleisch と云うのはスイスの一州カントン・グラウヴュンデン特産の薄肉を、冬の北風にさらしておいて出来たもので、ワインにはもって来いの酒の肴であり、早速食前に味わうのであったが、今日の味は又格別、と云うものであった。スイスの百姓家に迄入り込んで、永年生活したことのある武さんでなければ、こんなことまで教えてくれる人はないだけに、今日のメンヒも一緒だったら……とつくづく感ずるのであった。彼が戦前、スイスに来る前に態々小田原在の辻村さんを度々訪ね、『スウイス日記』をいつもリュックの底に入れてスイス中を歩き廻っていたのだが、今日では辻村さんを知ってる人は、武さん以外には誰もいないのであろうと思うと尚更、こんどのスイス旅行は武さんでも一緒だったら……と思うことは実は屢々あったのだ。

ミューレン（Mürren）

附　フィンチの *Making of A Mountaineer* について

ミューレンはウェンゲンやサンモリッツ等と共に古くから著名なスキー場で、どうせガヤガヤした処だろうから、態々行く処でもないと思っていたのだが、此処にはアーノルド・ランが居るので、ランに会って見ようと思って出掛けて見たのである。ところが行って見て初めて知ったのであるが、此処には車は入れないのでまるで静かで、ダージリンから車を締め出したような処であり、しかもグリンデルワルトでは全然見えないエビネフリュー、ミッタグスホルン、ブライトホルンが、ユングフラウから右方にかけて白い屏風を真正面に立て掛けているかのように、展開されているのは認識不足であった。メンヒのノルレンも真正面に見られ、フィンチの *Making of A Mountaineer* の中の一章、「ユングフラウ」に、グギーの小舎の屋根で半裸で甲羅を乾して日向ボッコをしている写真のグギーの小舎の位置も、地図を出して見ると大体見当がつくのであった。この小舎からユングフラウの北面を頂上にかけて、折重なるように存在するグギー氷河、キューラウネン氷河、ギーセンムルデ氷河、ホッホフィルンと四氷河はその昔、A・W・ムーアをしてアルプスに於ける最も容易に寄せつけ難き氷河の峡谷、と叫ばしめた、セラックス林立の氷の殿堂なのである。ムーアと云えば一八六〇年代に既にモンブランのイタリア側の、今日でも尚おアルプス一流の悪場とされているブレンバ・リッジの初登攀者であるのだから、フィンチにとっては正に腕の試し処でもあり、

ステップ・カットの技術には持って来いの試練の場所であったのだ。今、この大雪面をミューレンから真正面に見ては、屢々足を止めて、あの悪戦苦闘の一章を思い出さざるを得ないのであった。

当時フィンチは未だ中年で、彼の提唱する、第一次大戦後の当時としては英国人としては珍しいガイドレス登山の先駆者で、正に油の乗り切って来た時代であり、この殿堂をネラって来たのも当然のことであったのだ。

偶々このグギーの小舎に来て見ると、同じこのユングフラウの北面をネラって来ていたスイスの高名な登山家、アンドレアス・フィッシャーが、これも当代一流の名ガイドたるウールリッヒ・アルマーを伴って来ているのに邂逅、フィンチはこれ等斯界の大先輩から "boy." などと呼ばれている場面もあり、この「ユングフラウ」の一章は興味津々たるものであるのだ。フィッシャーと云えば、その父ジェアン・フィッシャーは一八七四年にモンブランのイタリア側のブルイヤールで、兄貴のヨハンはドンキンと共にコーカサスに出かけて、何れもその地で山の神に命を捧げ、またこのアンドレアス自身も後にアレッチ氷河で山の神のお召しに掛った、言わば一家をあげてのスイス国登山界きっての高名なアルパイン・ファミリーであったのだから、未だ若年のフィンチにとってはまたと得難き邂逅であり、"boy" 呼ばわりされるのも無理はなかったのである。当初はフィッシャーもガイドも伴わぬこのボーイには、一見無謀な計画ではないかと、他人事ながら不安を抱いたのではあったが、結局はフィンチはこの大先輩のパーティーに、ジョイントを許され、指導、激励の声を浴びながら五名が一団となって或は先になり、後になりして群立する尨大なセラックスとクレバスを、ステップを切りながら悪戦苦闘してユングフラウの山頂に立つの栄誉と喜び溢れる記述は、読む者をして快哉を叫ばざるを得ない名文でもあるのだ。

要するに先述のダンデランの北面の登攀は、フィンチが最早や立派な登山技術を磨き上げて来た第一次大戦後の爛熟期のことであり、このユングフラウ北面登攀は第一次大戦前の若さと元気に満ちた修業時代の登攀で、この *Making of A Mountaineer* なる大冊の書は、つまり第一章の「少年時代」——登山を初めた頃——から始まって第二十章の「エベレスト」で終るまで、各章毎に順次レベルの高いアルプス一流の悪場へ取組んで行く……ボーイから始まってエベレスターに至る……「かくして私はエベレスト隊員にまで選ばれるようになった登山家にまで成長したのです」と云ってるようなもので、"Making" の意味がこれで判然判るので、その上この書の随所にはフィンチ自身の永年の貴重な、自らの体験に基くピッケルの使い方、ステップの切り方、隊員の選び方、氷雪面の登り方、その他数々の意見が述べてあり、登山に関する教程書とも云えるもので、曽

てマンメリーの *My Climbs in the Alps and Caucasus*、ウィンパーの *Scrambles* に匹敵する名著であるとJ・P・ファーラーが激賞したのも当然なことなのである。特にこの第四章の「ユングフラウ」の北面の登攀の記述は、斯界の長老たるフィッシャーに対する boy、フィンチの尊敬と敬意の言葉、態度が、また一方には大先輩フィッシャーの boy、フィンチに対する優しき態度、指導の言葉が入り乱れた誠に「麗わしき風景」と云いたい一章であるのだ。

アーノルド・ランのミューレンに於けるロッジは「ユングフラウ・ロッジ」と称し、前述のブライトホルンにかけての白い屏風の連続が一望の中に眺められる丘の、景勝の地にあったが、生憎当日はインターラーケンで来訪を待つと云う手紙が入れ違いになって、会えなかったのは残念であった。

ランについては色々批判の噂が一部にはあるにしても、一応アルプスに関する数多の著書もあり、今はSirにもなり、ACの名誉会員でもあるのだから、ACの古い連中の話や、クーリッジの終焉の家、グリンデルワルトの "Chalet Montana" の在家、クリスチャン・アルマー一家のその後の様子等色々聞き、併せてランが尊敬措く能わざりし故秩父宮殿下に御供して、アルプスのスキー登山をやった当時の思い出などを是非『山岳』に寄稿を依頼しようと思っていたのであったが、その機を逸したのは残念であった。それにランが昔、盛んに推賞したスキー登山には最適のBBビンディングは、一時は日本でも愛用者も多く（註、武田久吉さんなんかでも愛用されていた）、小生も昔、スイスから取寄せて今以てこれを愛用しているので、ランを喜ばしてやろうと思って、この靴を穿いて訪問したのであったが、唯、空しく重い足を引ずりながら引返さざるを得なかったのは残念であった。

チューリッヒで

チューリッヒでは旧知のグブラーさんが待っているので、その翌日早速ルッツェルン経由で出かけた。チューリッヒ湖を遊覧船で約四十分。キュスナハトのグブラーさんの岡の上の邸宅に招かれてゆっくり夕食を味わい、ご自慢の日本から取寄せている大根畑、桐の木、等を観賞した。池には時期は過ぎたが水芭蕉の枯葉を見たり、その傍にはこれも日本から持帰られた石燈籠等を見て久振りで落付いた一晩を送りいい気持であった。チューリッヒの駅近くのホテルに帰るため最後の遊覧船、八時に危く間に合い、又翌日の再会を約してお別れした。当方から持参の水芭蕉の蝋けつの眼鏡ケース、大和美術館の六曲の松浦屏風の小型のもの、会津木彫りの盆などのお土産にグブラーさん夫妻の御満悦そうな顔は忘れられない。

翌日は誠に恐縮した……と云うのは先年（一九六六年）グブラーさんがスイス山岳会員五名を携えて来日された節、山岳会

で十数名集まって一夕、歓迎会を催したことを覚えて居られたのだろう……。遠く十五世紀から続いていると云う古風な、格式豊かな料亭に昼食に招かれ、先年こちらで招いた五名の内の三名（二名は他界の由）の御連中も一足先にここで我々を待ち受けて居られ、つまり、先年のお返しの招待と云う歓待であったのだ。当時こちらで出席者一同が記念撮影した写真、会報に載せた小生の歓迎文、まで携えて来られたのには全く驚いてしまったのである。この写真を逸早く小生に見せて皆さん未だ元気か……、槇さん、松方さんは元気か……等と矢継ばやの質問に始まったこの歓迎会には小生も感激、下手な英話で一応の挨拶を述べなければならなかった次第である。それにもっと驚いたことには……小生が昔、一九二七年、吾妻山から会津の沼尻へ正月の元日にグブラーさんと初めて会ってスキー行を共にした時の写真をグブラーさんが持って来られ、その当時のグブラーさんの日記に我々三人一行の、SEIKEI Higher School と書いた手帳、日記を見せられその上、1927.1.1—Aizu, 1966.4.5—TOKYO, 1973.8.16—ZÜRICH と三段に刻み込んだ銀の菓子皿を「今日の記念に……」と云って、渡された時には全く驚きと感謝の他はなかった。

山が結んだ海外の友。こんなごやかな、しかも先年のお返しのお礼と云う一応、公式の歓迎には、内心頭がさがらざるを得なかったのである。場所も兎に角、何百年の歴史に輝く、チューリッヒ一流の料亭らしい、その昔、文豪ゲーテもこの料亭には立寄ったと云う。赤毛布が見ても判るような古色豊かな料亭であったには全く恐縮した次第である。集まったグブラーさん他三人のご連中も、話して見れば何れも相当に山を歩いているご連中で、つい数日前に山から帰ったばかりの日焼けの顔…こんな会は小生にとっては今度のスイス行の最後の日を飾るに全く感激、一生忘れられない一日であった。

伊藤孝一氏の足跡

上田竹三

東海山岳史を調べているうちに、はからずも雪の立山・針ノ木越え、また薬師・槍縦走を映画にも撮影した人がいたと人づてに聞き、当時の新聞を調べてみると、全国の新聞がその壮挙をトップ記事としてあつかっている。

「雪のアルプス踏破名古屋伊藤孝一氏の冒険」「名古屋山岳写真家伊藤孝一氏ら立山に消息を断つ」……こんな記事が全国の新聞紙上に幾度となく報じられたのは、大正十二年の初春のころで、伊藤氏はかつて前人がなしえなかった雪のアルプス縦走と映画撮影を半世期も前に行ったのである。あたかもそれは登山の夜明けのころであった。

大正十二年の初春に雪の立山・針ノ木越えを行い、そのとき撮影した映画を宮内省に献上し、また「雪の日本アルプス」活動写真大会が、東京帝大や名古屋、大阪らで盛大に上映せられた。

これらのフィルムを探し求めて数年。私は昭和四十年の春、ついに伊藤氏の戦時中の疎開先の、アルプスの見える里、信州有明の燕山荘主、赤沼千尋氏の分家の土蔵の中から、大正時代の新聞紙に包まれたフィルムを発見したが、惜しくも立山・針ノ木越えのフィルムはなく(焼失?)立山・針ノ木越えの翌大正十三年に計画実行された、薬師—槍ヶ岳縦走の未発表のネガ・フィルム二十巻を発見することができた。

このフィルムは私費二十万円（現在の三億円を越す）を投じて山小屋三ヵ所を建設し、「雪の薬師槍ヶ岳縦走」、「冬の黒部源流と雲の平」を踏破して映画撮影に成功したわけだが、立山・針ノ木越えやこの薬師・槍縦走直後の伊藤氏は、経済パニックのあおりをうけて破産し、このフィルムを世に問うこともなく、フィルムを抱いて戦争中に信州に疎開した。

伊藤氏は昭和二十九年四月十六日に、数々の日本アルプスの

槍ヶ岳へむかう一行（三俣蓮華岳付近にて）

想い出を胸に、愛嬢都留子さんに見とられて、東京都三鷹市で他界せられた（六十三歳）。実業家としては失敗者であったが、大正の登山界に雪山縦走に先鞭をつけた足跡はきわめて大きいものがあった。

登山家、山岳写真家として知られた伊藤孝一氏（一八九一～一九五四）は、尾張藩御用商人の七人衆の一人、京屋吉兵衛の七代目として名古屋に育った。大正時代に外車三台を自家用車として所有、家業の伊藤殖産（名古屋市西区玉屋町四＝現在中区）は支配人まかせで、読書、カメラ、登山の趣味がつのり、富士山、南アルプス、北アルプスを登山し、撮影（大正末期までは登山やカメラ道楽は旦那衆のみ）するなど新馬鹿大将という異名さえつけられた。

大正十一年、当時三十一歳の伊藤氏は厳冬期の立山・針ノ木越えを、第二次として薬師・槍縦走計画を、信州大町の対山館主・百瀬慎太郎氏と、燕山荘主・赤沼千尋氏、映画技士・勝野銈四郎氏らの協力で立案した。

その暮、まず信州大沢から針ノ木より立山越えを実行にうつした。一行は人夫を交えて十八名、大沢から針ノ木に向わんとしたが、連日の猛吹雪のため涙の敗退をせざるを得なかった。やむなく大沢から針ノ木越えを断念して富山に入り、芦峅で食糧を整備して、大正十二年三月、立山温泉を基地に多量の積雪と闘いながら立山に挑み、三月十五日室堂、十六日は晴天に恵ま

れて午前五十分立山頂上をきわめて、待望の映画撮影機パルボを心ゆくまで回転させた。そして黒部渓谷で四日間の吹雪に耐え、二十一日の正午、針ノ木岳頂上に立った。かつて富山城主佐々成政が徳川家康に援軍を求めて、天正十二年（一五八四年）の暮、この雪の峠路を越え浜松に駈けようとしたとき以来の、積雪期の飛騨山脈横断の成功であった。かくして「雪の日本アルプス」活動写真大会が、東京帝大や、名古屋、大阪で新聞社などの後援で盛大に行なわれた。そのフィルムは百五十場面七巻、七千フィートにおよぶ長大なもので、当時の愛知県議清水市太郎氏がさっそく宮内省に献上の手続きをとり、伊藤氏を伴って東上した。また山の宮様として知られた、秩父宮家にも献上して御覧に入れた。

この伊藤氏の栄光の裏面では、冬山の無情を世に知らせて衝撃をあたえた事件があった。伊藤氏が大沢キャンプ地で猛吹雪と闘って敗退したころ、富山側から立山登山の槇有恒、三田幸夫、板倉勝宣氏らの一行が下山の途中、吹雪のため松尾峠で遭難し、板倉氏は一月十七日、救援を待たずに絶命せられた。

このような頃だけに伊藤氏の成功はいっそうの注目をひいた。この登山行と同時に「薬師・槍縦走」中間基地の山小屋の建設や食糧計画がすすめられた。有峯部落（今は有峯ダムとして湖底）にベースキャンプがつくられ、真川（現在、折立峠南方小畑尾峠東面）と上ノ岳、黒部乗越の三ヵ所に山小屋が建設された。そのため事前に、富山の芦峅寺の当時の村長・佐伯静氏に、山小屋建設や人夫動員などを約して金二十万円が支払われた。このように営利外で登山のため、個人の資格で法外の返らざる投資をした人は、空前絶後といえよう。

有峯部落はいま有峯ダムの湖底に沈んでいる。大正十年ごろ有峯はダム建設のため、東谷、西谷十一戸が二万円の補償金で立ちのき、伊藤氏はその土蔵二軒を買いとり、これを解体して真川にはんこで第二のベースキャンプとした。真川の小屋というより完全な大農家風の家である。間口十四メートル、奥行十二メートル、中央に山家特有の炉が切られ、調理場、風呂場、写真暗室などある豪勢なもので、そのたたずまいは当時として最高の山小屋であろう。さながら海抜千八百メートルに近い日本アルプスの山中に、有峯部落が再現されたようでもあった。

大正十二年の十一月、伊藤氏一行は名古屋を出発して岐阜県猪谷、土（ど）、大多和峠の新雪を踏んで、有峯部落に残された岩段家に登山物質を運びこんだ。

登山用具や食糧の配分（約三ヵ月分）が行われ、本隊は名古屋の五名、芦峅から立山初期のガイドである人夫、平蔵、光次郎、伊三郎、新二郎、善正坊、福松、亀蔵、鶴松、勇蔵、弥曽太郎、徳助らが参加、連日有峯から真川と豪雪のラッセルと荷上げが続く。

食糧、天幕、防寒具、夜具、数台の写真機と現像用具、薬品、

槍ヶ岳頂上でバルボ映写機をかこんで（中央前列百瀬氏，そのうしろ伊藤氏，その右赤沼氏）

スキー、猟銃、弾薬などのほか、個人装備としてリュック、ワカンジキ、金カンジキ（五本爪）など、一方、輸送部員以外は真川に集結して太郎平へラッセル、くる日もくる日も吹雪のあけくれの中を荷物の整理と、補給物資としてかもしか狩り、熊狩り、岩魚つりに忙殺された。

そのうえ本隊員と人夫らは、初めてはくスキーの練習も日課の一つとして欠かせなかった。十二月四日は晴天に恵まれたのに力を得て、太郎山へのアタック、伊藤氏らはその鞍部から白銀に輝く、薬師岳をはじめ黒部五郎岳、黒岳、鷲羽岳、雲の平などの大景観の撮影をほしいままにし、ふたたび真川に引きあげた。小屋には豪華な魚肉の料理が待っていて、一行の食欲と疲れを十二分にいやしてくれた。当時の『山岳』に関西の登山家榎谷徹蔵氏は、真川小屋は大ぶとんの上に厚い毛布を五枚も重ね、寝間着も毛織のシャツ、伊藤家の梶田支配人の手料理による、クマやウサギ、カモシカなどの料理も格別、真川の流れのほとりにアセチリン灯、おそらく太閤さんでもできなかったことと書いている。

長い雪山生活の慰めとして、部屋の水槽に岩魚を泳がせ、かもしか狩りに金時計を与え、さらに芦峅から来た人夫の妻女をよび寄せ、豆を引かせて豆腐をつくらせて、一同を喜ばせた。

二月四日、薬師岳に挑んで頂上に立った。雄大な日本の屋根、大アルプスの白銀の大景観に一行は狂喜した。数百フィートの

フィルムがまたたく間に写され、伊藤氏のスチールカメラ、アンゴーとグラフレックスのシャッター鳴りづめである。続いて大天幕を薬師沢に張り、氷壁まぶしい黒部源流の撮影、五百メートルに及ぶ大雪崩をフィルムにおさめ、雪山の猛威に改めて驚きの眼を見張った。

すべて神秘と驚異の世界であり、夢ごこちの撮影行でもあったという。凍る黒部川の渡渉、一望大雪田の雲の平にさしかかると、アルプスの山波はますます雄大さを増す。休む間もなく三月十一日全員で上ノ岳、黒部乗越小屋へ。小屋に入るには氷雪をくだいて入らねばならなかった。米びつに埋めてあった上酒は、すっかり凍ってすぐに呑めなかった。そして前進キャンプを双六岳近くに三張はった。晴れ間に撮影に入る。鷲羽岳、黒岳、遠く立山、剣岳の勇姿などすべて水平パンニングによる撮影、こうしたところへ信州側から食糧輸送にあたっていた百瀬慎太郎、赤沼千尋両氏が、上高地から殺生小屋をへて双六キャンプへ入ってきた。縦走隊と信州側の両隊員四十名の歓呼がアルプスの山々をこだまして、いつまでも響き渡った。

真黒に雪やけした顔、伸びたひげ、伊藤氏と百瀬氏、赤沼氏の三人は固く手を握りあった。雪積期の輝かしい縦走記録と、映画撮影の成功と二重の喜びに、抱きあう隊員らの眼頭にキラリと光るものがあった。四月十七日、最後の稜線であり、雪の花道である西鎌尾根に延々と隊列が進む。次第にせり上ってくる待望の槍ヶ岳の穂先が、雪煙の中に隠顕する。さあ、槍ヶ岳の肩である。その夜殺生小屋で手足をのばしての一泊は、前日までの天幕生活の疲れを一気にほぐしてくれた。

十九日、快晴の下で大槍の岩壁に映写機械を吊りあげる映写機バルボに三脚が固定した。伊藤氏と勝野技士がパンニング（回転撮影）撮影の位置をたしかめる。真北に槍頂上のほこらを入れ、赤岳から左へ左へと映写機は回転する。遠く鹿島鑓、針ノ木、立山、野口五郎岳、薬師岳、笠ヶ岳、乗鞍岳、穂高岳、中央アルプス、南アルプス、富士山らが霞んで浮ぶ。

カメラはさらに、常念岳から大天井岳、アルプス銀座へと回され、再び真北の赤岳で停止した。三百六十度のパンニングである。この一瞬、雪におおわれた日本アルプスの大景観の映画が、初めて記録せられたのだ。（この大正十三年の一月、早大・船田三郎、麻生武治の両氏が槍沢から積雪期の槍ヶ岳登山の記録をつくった。）大正十三年四月二十一日、「名古屋新聞」は次のように報じている。

「名古屋市の登山家伊藤孝一氏一行の日本アルプスの撮影班は、信濃山岳会赤沼千尋、百瀬慎太郎らの連絡班と合して四十名、四月二十一日殺生小屋より下山、日本アルプスもカメラで征服、死を決して険を冒して撮影したフィルム三万五千フィート……」

前記の立山・針ノ木越えに引き続いて、今回の薬師・槍縦走

の壮挙に投じた費用は四十万円を下らない額で、これらが起因して伊藤氏の経営している伊藤殖産は、間もなく破産の憂目をみるに至った。そしてさらに伊藤氏の消息も断たれ、大正、昭和を境に新聞紙上からすっかり消えさり、いつしか山岳界からも話題から遠ざかり、戦時中、信州の有明に疎開した伊藤氏は、朝な夕な忘れ得ぬ山々を眺めながら、かつての山仲間の赤沼、百瀬氏らと酒をくみかわし、往時の想い出にひたっていたという。

猛吹雪の中を越年して、苦闘した大沢キャンプでのこと、薬師沢の大ノマ（なだれ）に遭遇して命拾いしたときのこと、凱旋将軍のように下山して迎えられた日々、羽織・はかま・山高帽子で宮中に参内、大森皇后宮大夫を通じてフィルムを献上した晴れの日のことなど、その想い出はつきない。

それにこたえるように百瀬氏やガイドの平蔵もまた往時の山の想い出を歌に託してあのころを懐しんでいる。

橋桁を踏み滑らして川に落つ
　福松の赤ありやなしや（注・赤は犬の名前）
今なればダンケルクにもたとへまし
　一散に降る篭川の谷
平蔵がどっかと雪に腰おろし
　板倉さんは此処ですといふ

前記の槙有恒氏ら一行の遭難地点通過の節の想い出をいたむ心をうたい上げられている。以来すでに四十星霜、その百瀬氏は昭和二十四年三月に世を去り、それにおくれること五年、伊藤氏もまた昭和二十九年四月十六日、静かにこの世を去られた。

いまなを健在なのは赤沼氏だけだが、氏は浅間にウェストン・ホテルを経営、山男らしい気迫にみちた毎日を送っている。

その赤沼氏の分家の土蔵から四十年ぶりに発見されたフィルムは、十六ミリに縮少、約二千フィート、上下二巻に収めて一応編集したものだが、はっきりとした撮影行の道すじが判然とせず、そのため私は芦峅に当時の参加者である志鷹光次郎氏を尋ねた。志鷹氏は五十余年に及ぶガイド生活を重ね、昭和三十七年黄綬褒章、四十一年単光旭日章を受章している。一夜ともにこのフィルムを映写して教えを乞うたが、五十余年前のこととてすべて想い出は忘却の彼方にあった。かもしかと格闘し、かもしかを抱いた白面の青年時代の己が姿を映画に見て、飛びさったはるかなる時代を回想したに過ぎなかった。

おそらく伊藤氏も一番心残りであっただろう。このフィルムは映写されずに世を去られたのである。この幻のフィルムはテレビを通じて一般に公開せられる日を待っている。

［付　記］

積雪期北アルプス縦走の新資料

名古屋の素封家伊藤孝一氏による大正十二年春の立山・針ノ木峠越え、大正十三年二月の薬師岳登山、同年春の上ノ岳・双六・槍ヶ岳縦走については、これまで日本の登山界にほとんど知られていなかった。これらについて若干ふれている文献としては、藤田信道著『積雪期登山』（昭和八年朋文堂刊）の中の「伊藤孝一氏の思出」、『山岳』第十七年三号雑報欄の「伊藤氏の映画隊大成功」と大正十三年二月十日付『東京朝日新聞』の記事、雑誌『山』第一六二号（昭和二十四年九月朋文堂刊）にある赤沼千尋氏の随筆「ゴリラの珈琲」などでわずか断片的にそのアウトラインをうかがうだけにすぎなかった。

ところが、名古屋在住の元毎日新聞写真部員、日本報道写真連盟理事上田竹三氏が、かくれた郷土の登山家としての伊藤孝一氏に注目され、赤沼氏の分家から未公開のまま埋もれていた当時の薬師・槍縦走のフィルムを発見、これをもとにその行動記録を明らかにされたことを海野治良氏より連絡を受けた。海野氏の御紹介により小生は上田氏と連絡、この貴重な記事を『山岳』に紹介することが出来た。

その当時、日本の積雪期登山は、まだほんの序の口にすぎなかった。穂高連峰はまだ登られておらず、積雪期の北アルプスで登られたピークといえば、槍ヶ岳、立山、剱岳、白馬岳、燕岳、乗鞍岳にすぎなかった。しかもいずれも山麓の小屋からの往復登山であり、山稜縦走など行なうパーティは皆無であった。そうした時代にきわめて大がかりな隊を組織し、立山・針ノ木越え、薬師・槍縦走を敢行した伊藤孝一氏の記録は、日本の登山史上、異彩を放ったものといえよう。

上田氏はこの記録を『毎日グラフ』別冊（昭和四十四年三月一日号）および名古屋のPR雑誌『駅前』第四十三号（昭和四十三年四月発行）に記されているが、この記事はそれらを整理されたものである。

（山崎安治）

石井鶴三先生のこと

小野幸

本会の永年会員でありました彫塑家・石井鶴三（一八八七―一九七三）先生は、明治二十年六月五日、東京市下谷区仲御徒町三ノ九、石井鼎湖の三男として生まれました。母はふじの、長男は満吉、同氏は洋画家の柏亭であり、二男は貞次であります。先生は当時四年制でありました尋常科の小学校を終える頃までには、ご両親ともなくなられましたので、千葉県船橋の矢橋（父の妹のとつぎ先）家へ養子に行かれるのです。その頃のことを先生の童話「常吉と鶏と卵」では、

「常吉は可哀さうな孤児です。十二の時両親に死に別れて、それからは田舎の叔母さんの処で育てられてゐました。其叔母さんはやさしくない人で、常吉に対してどうも邪慳でした。常吉は元来内気でおとなしい子でしたが、それで猶更さびしい子になってしまひました。近所の子供達と一緒に遊ぶでもなく、毎日つまらない日を送ってゐました。」

と述べられております。常吉は先生自身、田舎は船橋と解釈してもよいでしょう。

「常吉は又絵を描いたり、本を読んだりするのが好きでしたが、それは又叔母さんのひどく喜ばない処で、

『そんな事をして居る暇があるなら、庭でも掃け、雑巾がけでもしろ』

と云って叱るのです。でも常吉は好きな事はやめられず、それからは叔母さんにかくれて、こっそり此さびしい楽しみを続けようとしました。厩の天上裏は藁の置場になってゐましたが、常吉はここに隠れ場所を見付けて、それからは此処で絵を描いたり本を読んだりして居りました。」

この頃から美術に心をよせられていたことがわかります。な

お、前文の中に「厩」とありますが、先生の養子先は薪炭業を営んでおりまして、運送馬車用の馬がおり、その馬をかわいがられております。

「此中でたった一つ大変仲のいいお友達がありました。常吉は此たった一つのお友達によって僅に心を慰められてゐるのでした。常吉はよく厩へ行っては、其青の頸のあたりを軽くたたいてやったり、頬ぺたを撫でたりしました。……いつか、馬の世話をするのが常吉の毎日の仕事になってしまひました。」

その頃（明治三十六年）の先生の歌「少年愛馬」に、

わが うまは わが あしおとを ききわきて いなきて ゐる あし ふみならし

わが かほに その ながき かほ よせて くる うま の かはゆさ かほ なでて やる

「少年愛馬」

わが かひな そと かろく かむ わが うまは われを あいす と いひたげ なる らし

あき の くさ つゆけき かりて あたふれば うれしげ に はむ はしき わが うま

くらおかず のる うま の せ の ごつごつ と わが み に ふるる も あしく あらなく

かくして、この船橋で小学校の高等科を卒業されましたが、勉学の心やみがたく、養家に別れを告げて上京され、美術の道に踏み込まれるのです。それは明治三十七年一月、先生十八歳の時でありました。この年、洋画家・小山正太郎の不同舎に学ばれます。朝日新聞、昭和四十二年十二月十四日の「折り折りの人」に文を寄せられて、

「小山正太郎は私の画道の先生である。私は造形美術を専門としているが、ほとんど独修で勉強してきたので、画道の先生として師事したのは小山先生ひとりだった。

小山先生の不同舎へ入塾（じゅく）したのは私の十八のときで、そこに通ったのは一年くらいであったが、……。」

なお、彫塑につきましては加藤景雲につかれましたが、間もなく東京美術学校彫刻科選科に入られます。

先生の山登りのはじめは、明治三十九年の信州浅間山であったと思います。

東京日々新聞社の東日講堂で、昭和五年七月講演された「山の話」の中で、

「山が好きになった動機、といふやうなものを一寸考へてみたことがあります。私が旅に出たその最初の旅というものが信濃の国でありました。信濃の国は御承知の通り山国で、初旅で直ぐ山にぶっつかった。そんな所から私は山が好きになったのではないかと一応は考へてみたのですが、何だかもっと深い所に根ざして居るやうな気がします。」

又、「雲」では、

「はじめて山に登った時、暁け方まだ明けきらぬうすあかりに雲の海を見た時の不思議な印象は今に忘られない。頭の上にばかり見て居た雲といふものが、足の下にもくもくしてゐたのだから全く驚いてしまった。」

このことを「浅間登山（明治三十九年）」の歌では、

あさまやま　よるを　のぼると　かんてらの　ひを　あかり　とし　やまみちを　ゆく

つねは　うへに　みてゐし　くもが　めの　したに　ある　が　ふしぎさ　うみの　ごとく　なる　くも　の　うみ　に　はるかに　うかぶ　やまなみは　ひだ　の　やま　かも　あな　かうがうし

のぼりたち　のぞく　くわこうは　くわうくわうと　おと　すさまじく　そこつひは　もゆ

この翌、明治四十年胸の病気になられ、養生をされながらの美校生活が続けられるのです。その頃の歌に、

やうじやう　の　ひとつ　と　し　あゆむ　わらぢ　はきゐなか　の　みち　を　あゆむ　よろし　も

「木曾節」

ぐわんじつ　の　あさまだき　より　ひとひ　あゆみ　ゆ
ふかた　つきぬ　さがみ　の　あつぎ

明治四十一年には木曽から飛騨へぬけておられます。それがつぎの歌です。

おんたけ　の　やまごや　の　よる　やまびと　が　うた
ひて　くれし　きそぶし　の　うた

きそだに　ゆ　ひだ　へ　こゆる　とわ　が　たどる
たうげぢ　に　きく　ほととぎす　の　こゑ

翌四十二年、はじめて日本アルプスに入られます。そのことを「旅の追懐」で、

「針の木嶺が越して見たくて出掛けたのだが、序に立山へも登る事にした。大町細川といふいい案内者を得た。……翌日細川さんは一人では少し荷が重過ぎるからと、途中迄勝野さんといふ人に一緒に行ってもらふ事にして三人で出掛けた。」

この時の歌「針木嶺」には、

のぼりたてば　あなや　ひらくる　たいくわん　に　むね
をどらして　め　を　みはる　かも

やりがたけ　の　みね　を　かすめて　いちだん　の　く
も　ながれ　ゆく　なんたる　さうくわん

「嶺の彼方は深い渓になって居る。程もなく私達は其渓の底に達した。……黒部川を渡ると品右衛門さんの小屋がある。品右衛門さんは大出村の猟師で、夏はこの小屋にとまって岩魚釣をして居る。其夜はこの小屋に泊めてもらってぐっすり眠込んでしまった。翌日はここで勝野さんに別れ、細川さんと二人で立山へ登った。……それから霧の中を温泉まで下りた。」

翌四十三年三月、東京美術学校を卒業され、ひきつづき研究科に進まれます。この年は山本鼎と同行、大町から烏帽子岳縦走、今で言う裏銀座コースに向かわれます。前に引きました「山の話」の中に、

「今度はやはり大町から槍ヶ岳へ行ってみ様といふ、其の頃としては可なり無謀に近い企てをしまして、出掛けて行きました。その前年に案内して呉れた細川といふ人がきっと居ることと思ひまして、其の人に頼んだらば大して間違ひなからうと思って行ったのです。ところがその細川は、木曽の方へ行ってしまって、ゐなかったのです。それで前年細川が途中まで連れて行った勝野玉作――今、大町の案内者の中で一番長老で威張ってゐる人ですが、其の頃は全く新米で、まだよく山のことを知らない、だが非常に元気な人でした――と云ふ人が案内して呉れました。

もう一人、人夫を連れて行かなければならぬが、その人夫がなかなか得られない。勝野氏があっちこっち奔走して呉れても、農村が忙しいので山へ行くと言ふ人が無い。さうして野口まで行って、やっと惣八といふ猟師――五十幾つかになるお爺さんでしたが、其の人を見付けて呉れました。」

このようなスタッフで、葛の湯、烏帽子ブナ立坂など六泊の後、槍から蒲田に降りたのでした。翌四十四年は南アルプス白峯方面に行かれています。

又、大正二年には碓氷の霧積温泉を訪れております。「碓氷初冬」には、

やまぢ　にて　かりうど　に　あひ　さりげ　なく　くま　を　みでや　と　とはれ　ける　かも

たそがれて　たどり　つきたり　ひなぐもり　うすひ　の　おく　の　ひとつ　ゆのやど

くま　は　でます　さる　も　きますと　ゆのやど　の　をんなあるじ　は　ほほゑみて　いはす

さて、明治四十年代、特に美校在学当時からはアルバイトとして職業にもつかれていました。「貧乏時代の回顧」では、「私のパック社勤めは、兄の眼病が重くなって、私共一家が一人の働き手を失って、困窮に陥った時、一時の急場しのぎのつもりであったが、兄が再び働けるやうになっても、つひにやめるわけにゆかなかった。……パック社勤めは毎日午後一時から夜十時までであったが、仕事の都合で時にはもっとおそくなることもあった。終電車を追ひかけることも少くなかった。終電車を乗りはずして、有楽町から駒込まで歩いて帰る事もあった。朝飯を食ふとすぐ家を出た。午前中、美術

学校へ行って、それからすぐ社へ勤めた。私の使ふ小遣は往復の電車賃を除くと、平均一日三銭位であった。……之で弁当代其他に充ててゐた。私は豆餅を三つ買って行って、それを四時頃に食ふのを例とした。（中略）

春さきはわけて食慾をそそられる。私は一日上野公園で青々と萠えてゐる若草に目をやった。おお、ここにもよい食物がある、と思った。たんぽぽよめな其他名前は知らぬが、菜に似た草の葉などうまいと思った。おかげで私は食物のありがたさをしみじみ知った。そして、可なり長く空腹に堪へられるやうになった。草を食ふところまで行って、私は豁然として世界がひろくなったやうに思った。人は生命のあるかぎり食ふには困らぬものだと悟った。（中略）

以上の如き極端な貧乏生活は三年程であったが、実感では随分長いやうであった。其後は次第に貧乏から遠ざかった。食ひたいだけのものは食へるやうになった。冬は外套も着られた。だが、長い間の習慣で、空腹の直感が鈍くなって困った。（略）かくして、この犠牲生活は八年続いてパックの廃刊と共に一と先づ終りを告げた。」

この頃は駒込林町にすんでおられたのです。「夜業（明治四十一年）」に、

よふけまでしごとにはげみあをあかのでんしゃおひかけかへるわれはもやたいみせのだいふくをかひくうふくをやはしてありくまよなかのみち

いこはむとみをよこたふるじやりおきばさむげにあれどかぜよけてぬくし

この「貧乏時代の回顧」はつぎの勉学時代をのべています。それは大正五年からです。前にのべた「回顧」に、

「さて、私は卅歳にしてまた美術学生の生活に入った。ここで第二期の貧乏時代がはじまるのである。家を出て五年間自炊生活をしながら勉強した。米と味噌を兄のところから貰ひ、家賃と学資を自分で稼いだ。午前は美術院の研究所で四五の同志と専心研究した。午後は木彫の人形をこしらえたり、絵を描いた。夜は外国語の勉強をした。本を読む余裕も出来た。五年間火なしで冬を過した。絵の具をとく時と膠を煮る時の外は炭火を使はなかったので、一俵の炭が五年間にいくらも減らなかった。食事は大抵米と味噌で済ませた。一日二食、一本の大根が一週間の副食物になった。大根は葉を塩からく煮つけ根は生で食った。」

これは日本美術院の彫塑部に入られ、研究所にかよわれていたことを述べられているのです。なお、文中「夜は外国語の勉強をした」とありますのは、フランス語を修められたらしく、

当時共に学ばれた畏友、河越虎之進画伯（明治二十四年生、東京美術学校西洋画科卒）にこのことをおききしますと、はがきのご返事（四八・五・九付）に、

「お申越しのこと、大分昔のことになりましたが、神田のY・M・C・Aで、まだアテネフランセが開設されてそれ程時がたってはいなかったようで、大正六、七年頃かと思ひます。丸山先生の心切な教授ぶりであったが、私は不勉強の第一人者で、石井さんも先生に問はれて返事が出来ず（フランス語で）ドモリのまま坐ってモジモジして居ました。私は二ヶ月ぐらい通ったかと思ふが、マッドモァーゼル・トイダといふ少女と、私と、石井さんが、答に、ジュヌコンプランパ、をくりかえして授業時間が終る次第でした。私が止めてから、どこまで進められたか、たしか一週二晩ぐらいだったでしょう。10人前後の講習生で、勤人風の人達はグングン進んだようでした。今年も明日乗鞍へ行きます。李の花が咲いたようです。」

日本山岳会への入会は先生の山登りをはじめられた頃ではなく、ずっとおくれて大正八年十一月二十五日で、会員番号は七〇九でした。

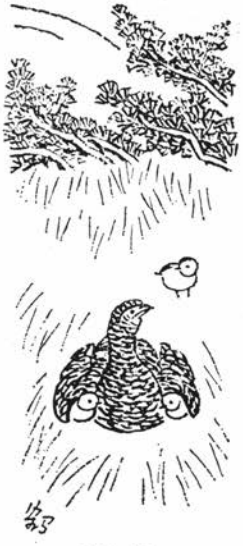
大正時代の山登りをよまれた歌を、ひろって見ましょう。大正五年「山上自画像」に、

やまのうへにかがみとりいでわがかほのうつれるみればつねのかほににずきりふかくやまはみえなくはひまつのなかにこもらひじぐわざうゑがく

大正七年「雷鳥」の歌に、

あめにふられてんとにこもりいこひをればまぢかくきこゆらいてうのこゑ

かうざんのはなさきにほふくさはらにらいてうあそぶたぬしきひととき



「雷　鳥」

くさのうへにうづくまりたるらいてうはつばさのしたにひなをいだける

大正九年は病身の中原悌二郎（彫塑家）と八ヶ岳におもむいています。「中原君と私」に、

「此年の初夏、私は君と信州の八ヶ岳へ登った。其頃私も、少し健康を害して居た。私はいつも山へ行くと快くなるので、其時も山登りを企てたのだが、君を誘ったら、君は進んで行かうと云った。おくさんも賛成した。そこで二人が山へ行く事になったのだ。私達は佐久の方から登った。晴れた朝だった。私達は千曲川の上流に沿って歩いてゐた。（略）裾野にかかった時、雨が来て、それからは止んだり降ったりしたが、山道も別段の事もなく、本沢の温泉宿に着いた。（略）

翌日は硫黄岳の八千尺の頂に立った。（略）頂上では私が赤岳を写生してゐる間、君は毛布を被って山上の草の上を歩いていた。岩燕がしきりに飛んでゐた。（略）宿に帰り着いたら、其夕方にも又夕立が来て、雷が降って雷鳴が荒れ狂った。帰途は諏訪の方へ出た。峠の上迄私は君の荷物を背負って行った。峠には雪が深かった。裾野へ来た時、丁度春のやうな暖さで蕨が沢山出てゐた。」

この友人・中原悌二郎は翌十年三月二十八日他界されるのです。

大正十年七月には後立山に行かれています。『みづゑ』一九八号（大正一〇・九）に「針木岳より爺岳迄」として記されています。

「此連峯の縦走はかねてより考へて居たところだったが、今度友人府立三中の教諭Wから、生徒数名を連れて此連峰の縦走を試みるが同行せぬかと誘はれた。（略）出発は七月廿日、午後十一時飯田町発の汽車に乗る事になってゐた。

七月廿一日（略）大町に着いたのは三時頃だったらう。直ぐに対山館へ入った。（略）一行は生徒が八人に先生が二人、卒業生其他の同行者が五人、それに人夫が九人、全部が廿四人の大勢になる。宿の若主人慎太郎氏がよく世話して呉れる。（略）

廿二日　早朝に起きて物干台に出て見た。（略）偶然吉田博氏に会った。氏も私達と同じく針木から尾根を伝って、猶、白馬迄行かれるといふ（略）。三時扇沢を渡り、四時大沢に着いた。

廿三日　朝目がさめたら、雨が天幕を打っていた。（略）針木の雪渓も可なり急傾斜だが、スバリのは又一段の急峻だ。（略）マヤクボの露営地は針木岳とスバリ岳との間にある僅ばかりの窪地だ。

廿四日　昨日からの雨は猶降り止みさうにもない。（略）今日一日はここに滞在ときめて針木岳に登って見る事にした。（略）

廿五日　今日こそは晴天疑なしと思ひ込んで居たのに、目がさめると又雨になっている。（略）十時頃吉田さんから、

お茶を入るから来ないかと、人夫を使によこして呉れた。（略）氏の連れて居る導者は喜作という猟師で、此辺の山も谷もまるで自分の家のやうにしてゐるのださうだ。猟の話や雪の話など少し聞いたがなかなか面白い。かう云ふ人と一緒に山を歩いたら、どんなに面白からふ。正午頃霧はかかってゐるが、雨が止んで幾分明るくなったから、ここをたって先へ行く事にした。（略）赤沢、鳴沢、岩小屋沢の諸岳を過ぎ、七時頃小さな池のある草地に出た。今夜の露宿地だ。（略）

廿六日　朝起きると又バラバラ雨の音がして居る。（略）突然今日はもう下山しなければならない事になった。米がもう残り少なになったと云ふのだ。爺岳も鹿島槍へも行かずに下りるのは残念だが、米が無くてはどうにも仕方がない。（略）二時頃漸く種の池に着いた。（略）十時少し過ぎ大町に着いた。」

『山岳』第二十五年（昭和五年）の表紙は、先生の野猿がえがかれており、その説明に冠さんが「昭和三（二のあやまり）年八月二十二日石井鶴三、田中薫の両氏と共に、黒部川の東信歩道を棒小屋の小屋場へ下る途中、剱沢の大瀑布の見える処から二町程で群猿の嬉戯するを見た」と記されております。なお、この時のコースは『山渓記』第二巻（冠松次郎著・昭和四十三年春秋社版）の「剱沢行　その二」に、

「昭和二年八月、石井鶴三、田中薫の両君と、千垣から立山温泉に入り、平（たいら）の小屋から御前谷まで下って、旧東信歩道を棒小屋の小屋場に至り、そこで下流から上って来られた別宮貞俊、岩永信雄の両君と落ち合い、十字峡を経て神潭まで入り、別宮、岩永、私の三人は、黒部本流に架橋して剱沢に入り、石井、田中の両君は下流を鐘釣に下られた。」

と記されております。この時、野猿に合ったことは先生も印象深かったと思います。「深山群猿」として、

さけびごゑ　なにぞや　みれば　むかつを　に　おびただしき　かな　やまさる　の　むれ

ばさばさ　と　き　を　ゆすぶりて　いづく　へ　かさる　おほかた　は　さりゆける　かな

ふかたに　を　き　より　き　へ　とぶ　やま　の　さる

き　を　ゆすぶりて　かるがる　と　とぶ

おいさる　か　ひとり　のこりて　き　に　すわり　うごく　とも　せず　しり　を　かき　ゐる

おいさる　の　ゐる　き　の　ちかく　すぎたれば　よく　みたる　かな　その　さる　の　つら

と、よまれています。なお、『山岳』の表紙へは第五十、五十一年にも「岩と小鳥」を、戦後には会報へカットもよせられております。

この頃は、日本美術院彫塑部のほか、春陽会や文展にも関係され、その上、自由学院の絵の教師もされているというお多忙をきわめ、小さな山行きが多かったと思います。昭和九年「初夏新緑」に、

ゆのまるの　やまに　のぼるや　ひさかたの　あめは　ふり　きぬ　ふりて　やまぬ　かも

つがのきの　はやしの　なかに　しやくなげの　うすくれなゐの　はなさはに　さく

さみどりの　からまつ　はやしの　うへ　はるかけぶり　ふける　は　あさま　が　たけか

又、昭和十年「秋山霜葉」に、

いりつひに　てりかがやきて　こがね　なす　しらかばもみぢの　この　うつくしさ

やまみちに　ちりしく　もみぢ　ふみて　ゆく　ふむに　さやさや　おとの　よろし　も

なお、先生は昭和十五年江南地方へ、同十八年南満州に旅行されています。

昭和二十年、終戦後しばらく山梨県に行かれ「晴れの日は鍬とり、雨の日はこもりて絵をかき書よむ。朝夕は薪とり、水くみ、ひとり炊ぎ、ひとり食ふ。」（『風流』の「半農生活」より）というおくらしの後、先生はいろいろの要職につかれます。戦争中から母校、東京美術学校（昭和二十四年に東京芸術大学となります）の教授をはじめ、疎開からかえられてからは、横綱審議会委員、日本芸術院会員のほか、戦前からの日本美術院、日本版画協会、日本水彩画会、春陽会などにも属して活動されておられました。したがってふたつの海外旅行をのぞきましては、戦後からおなくなりになるまで、長期の山登りはほとんどされなかったように思います。

昭和二十九年五月二十二日から五日ほど、尾瀬に水芭蕉のスケッチに行かれました。帰京されてその感動が狂言「水芭蕉」となって現われました。先生は能狂言には以前から興味を持たれ、専門の狂言師に狂言をならわれてもおられ、一方、戦後間もなく能彫会（第十三回展まで）や能彫刻会（昭和三十六年より）という能や狂言をテーマとした作品をつくります彫塑の会に入られ毎年、会場の三越本店に木彫を出品つづけられたのです。

水芭蕉（狂言）

（うた）「地の中ゆ、小びとのむれはうちいでて、沼べにおどるよ水芭蕉の花。

（なのり）「これは上野岩代両国にまたがる尾瀬のほとり、年久しく住む水芭蕉の精でござる。長き冬の間、暗き地中にひそみ居たるが、この頃何とやらん、暖うおぼゆるにより、定めし地上には春がめぐり来ったそうな。さらばちと地上に出でて見ばやと存ずる。先づそろりそろりと参ろう。

（みちゆき）「イヤまことに地中にある間は鬱々と致して、心楽しまざること久しうあった。久々地上に出でたならば気も心も晴ればれと致すことであらう。

「ハア何かと云ううちはや地上じゃ。オオ地上は既に春ぢゃ。

（うた）「沼田の雪はあともなく、わづかに見えるは森のかげ。「雪解の水をたたえては、ゆたけき沼の景色かな。「仰げば燧ヶ岳の峯、残んの雪の美しさ。「吹く風はなお寒けれど、天つひざしは暖かく。「そこともなくかぎろいの、春のきざしはみなぎれり。

「オオ地上は既に春ぢゃ、春の気は野山にみちみちたり、わがともがらの地上に出づべき時はまさに至れり。「出でよ、出でよ、わがともがらよ。ともがら、出でよ、出でよ。出じようよ、出じようよ。

「オオ出づるわ、出づるわ。あちらにも、こちらにも。出たわ、出たわ。あなた、こなた、イヤ出たわ出たわ。さてもさても、夥しきわがともがらの数々、しゅくこつとして、沼辺をうづめつくした。

「さてかようにわがともがらが地上に出でたからには、再び春にめぐりあうた、このよろこびを、うたにうたうて、舞はうではないか。いざ舞はうよ。

（うた）「白きかづきも清らかに、春にまた合ふよろこびを、うたひて舞ひて遊ほうよ。水芭蕉の花は咲くよ。

「白きかづきをくつろげて、かたみに顔を見あひては、ゑまひかはすぞ楽しき。水芭蕉の花は咲くよ。

「白きかづきに守られて、緑のはしらめぐり咲く、黄金の色の花の数、水芭蕉の花は咲くよ。

「白きかづきをかたむけて、春のながき日ひもすがら、歌ひて舞ひて遊ぶなり、水芭蕉の花は咲くよ。

「白きかづきをなびかせて、春のおそ霜おりぬまを、命のかぎり舞ひ遊ぶ。水芭蕉の花は咲くよ。（とめる、もしくはうたひつまひつ入る）

（以上）

後日、小生は先生からこの「水芭蕉」についてのお便りをいただきました。その一節、

「拙作『水芭蕉』は尾瀬沼へ行き、ちやうど水芭蕉の花ざかりに会ひ、大に感動し、その感激を狂言として作ったもの。

その時案内してくれた日本水彩画会の牧野正吉氏が印刷に附して諸方へくばったのが、たまたま野村万蔵氏の目にふれるに至った次第。このたびの日水画懇親会の席で、はからずそれを所望され、場所がせまいので舞うことは出来ないので、ことばとうただけ口演したことであります。そのうち見ていただくこともあるべくと存じます。」（昭和三十六年六月二十日付、小野幸あて）

戦後はよく先生にお会いもし、お便りもいただきました。先生はお宅で一日制作にかかられておられますし、早朝か、おひるごろの休み時間でないとお電話するのは失礼と思い、わたしもお便りで電話がわりを申しあげました。先生はいつもお気がるに長文のお便りをくださいます。

只今、保存さしていただいておりますお便りの中から、折り折りのお行動の一部ずつを記したいと思います。

昭和三十三年には中共に旅立たれました。

「前略御免下され度、先日は御心におかけ下され、御地成田山のお守、速達にて御送り下さいましたので、出発の日の朝拝受、御厚情のほどありがたく、おかげ様にて此日無事あちらに着さました由しらせが御座いました。台風に一日のばし出発致しましたわけで御座います。先は御礼まで申上げます。かしこ。石井鶴三内」

このお便りは先生の妹様（その頃ご健在だった）の筆かと思います。

それから、昭和三十五年三月十六日付の旅やお仕事のお便り、

「長らく御無沙汰に過し失礼おわび申上げます。年末には御厚情に甘え、まかりいで御世話さまにあづかり、ありがたく御礼申上げます。（略）あれから一ヶ月は健康は快復致しませんでした。一月は少し旅にでも出たらばと、それでも寒い方は敬遠して四国へ行きましたが、暖い四国でも山の中は寒く、大歩危小歩危、祖谷渓などでは氷のはったところ、残雪など見ました。祖谷渓はなかなかよろしくありました。有名なかづら橋は今では実用には用ひられてはゐませんが、民族生活資料として一個所だけは保存されて居りました。住民じゅんぼく、礼儀正しく、平家残党の末とのいひ伝えもうなづけるやうに思はれました。（略）

小生の健康も二月に入ってから、よろしいやうで、只今、歌舞伎座で上演中の夜の部、第一の『かげろふの日記遺文』の美術をたのまれ、装置と衣裳の選定を致しました。去年の『平家物語』の時は脚本の出来がおくれ、おしせまって無理をしてやったので、そのあとくびがよく動かなくなり、しばらく弱りましたが、今年はそのやうなことはありませんでしたが、それでも芝居の仕事は時日が少く、充分にはやれないで、いつも不満だらけであります。けれども評判はよろしい

とか聞きます。芝居の方はづぶの素人だけに、かえって意表に出るような仕事をして、それが目新しい感じともなり、好評の因ともなるのかも知れません。こういふところが買はれてか時々ひき出されます。昨年は『平家物語』其前は『舌を噛み切った女』と三度歌舞伎座に出ました。こうなるもといいふのは、昭和二年に上演された畑中蓼坡氏の芝居で正宗白鳥氏作の『明智光秀』の装置をやったのが、現在歌舞伎座の重役の目にとまって、それが縁で、あの男にやらしたら何か目新しい仕事をするであらうといふことになった由です。

（略）三月も半過ぎて却って寒いやうですが、やがて暖くなりませう。何卒御元気に、私も暖気と共に元気になりませう」

この三十五年夏には東北の山登りをされました。

「八月末に宅の女子高校生と吾妻山に登り、帰路、川の橋が流れてゐて久しぶりで渓流徒渉を致しました。」

昭和三十六年十一月四日付のお便り、

「（略）先月末には青森から十和田へ参り紅葉を鑑賞致し、今夜行で奈良へ参り、大阪から木曽路を廻って九日に帰京、月半には鳥取で講演をたのまれ居るので、その前後を利用し、九州から山陰諸方まわり、廿一日に帰るよていして居ります。元気にまかせ少々無理も致し、そのあと疲れもするので周囲からも注意されますので気をつけ居ります。（略）十和田で高村さんの女人像をはじめて見ました。原型は見ていましたが、二人の女人が組みあった姿を、しかも現地で見ると、あの作が十和田の自然の中に生かされているのを感じ、すばらしい作と思いました。作者晩年健康を害していたので、体力の衰えからの弱さというものはあるけれど、その内部にこめられた造型と詩魂のたくましさは珍重すべきところと思いました。」

昭和三十八年一月二十日付のお便りは、お病気のようすと南アルプスの思い出や、成田の梅見のおさそいへのご返事です。

「新年おめでとう存じます。御機嫌よく大慶に存じます。小生は十二月はじめ、少々具合わるく、かねて再手術をうけることになっていましたので、七日に入院手術をうけました。この前の手術のとき、私の腸がひとなみより長いということで、そのため『ねんてん』も起るということで、もう一度手術できりつめておいた方が再発のうれいもなくてよかろう、ということだったのであります。経過は良好で、十二月中に退院してもよいといわれましたが、大事をとって年末年始を病院で過し、八日に退院いたしましたが、東京は空気もわるく寒くもあり、あたたかいところで一ヶ月くらい静養した方よろしからんという周囲のすすめに従い、十五日にこの地に

参りました。東京にくらべて暖く空気もよく、知る人がこの家を紹介してくれたのですが、居心地よく、二月末までここにゆっくりしているつもりであります。（略）年末に甲州の西山温泉へ御出でになりました由、私は明治四十四年の夏、彼処へ参り、そこで案内人夫をたのみ、白峯赤石の連峯へ登ったのでありますが、それ以来ゆきませんが、その頃は冬期間到底ゆかれるところではなかったのであります。水力電気工事がひらけて居る由、半世紀経っているのですからあたりまえでありましょうが、昔の者は昔の記憶を思いかえして今昔の感などにふけりたがるものです。前記のような次第で、二月半ちかくまでこちらに居りますので、貴地の梅は拝見出来ないでありましょう。網代温泉群松館にて。」

この明治四十四年の南アルプス行きには「山中静寂」とされて、

しづけき　に　きこえ　くる　ね　は　しづけさ　が　かなづる　がく　の　しらべ　にや　ある

やま　の　すだま　かなて　ゐる　らし　かそけく　も　くしき　しらべ　に　みみ　すます　かも

別に、そのときの入院につきまして作られた歌、昭和三十八年作、

ちよう　ねぢれ　あやふかりける　わが　いのち　くしくも　たもち　とし　くれむ　とす

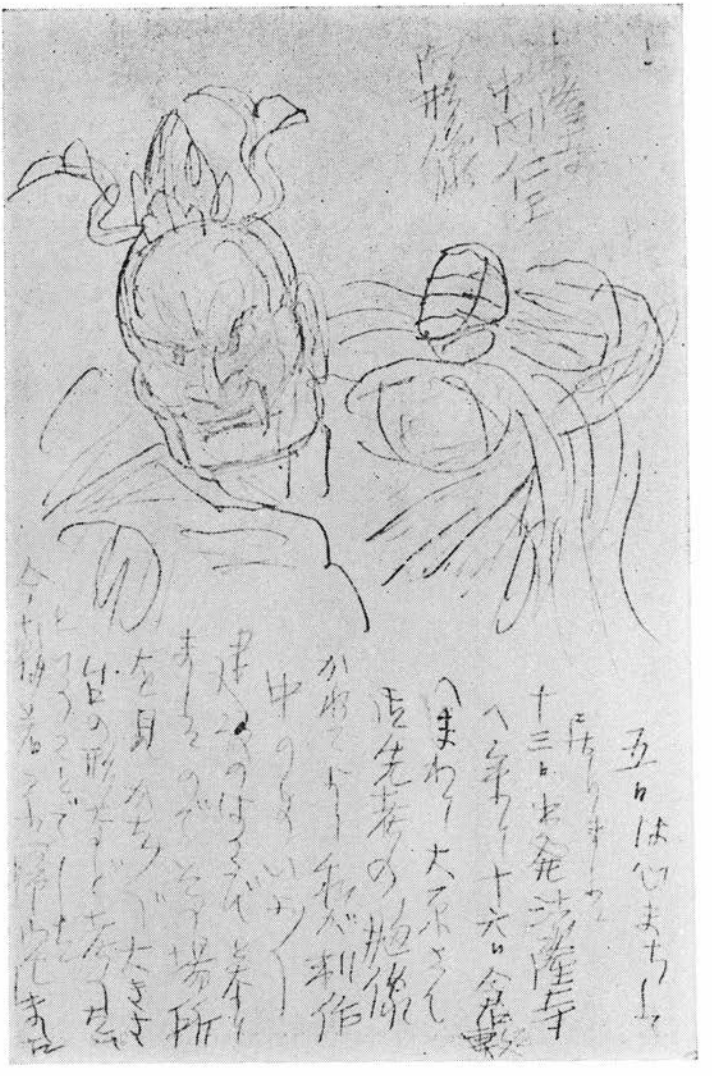
せうわ　じんいん　おほつごもり　を　びやうゐん　にこやりて　きくか　ぢよや　の　かね　の　ね

びやうゐん　の　けさ　の　しよくじ　は　しやうぐわつ　の　れうり　が　ありて　はなやげる　かも

これらは「病院正月」と題する中のものであります。

翌三十九年は春から法隆寺仁王尊修理委員会のお仕事で、奈良の法隆寺に何回となくかよわれております。

「山中静寂」



（39. 2. 18 付　筆者あて先生よりのおはがき）

「きのふ法隆寺へ来ました。あたたかくなり、気分快適であります。桜はまだ咲きませんが、桃の花と茶の花が美しく、樹々の芽ぶきの淡い色がなんともよいものであります。この前二月半に来た時は寒さきびしく手袋をしても手の感覚がなくなるほどでありました。（略）法隆寺文化財保存事務所。四月四日」

そして、この年の五月二十六日付のお便りの一部には「私方旧宅はとりこわし、新築は出来あがらず、貸してあった小家とアトリエに荷物をはこび、そこでしばらく起居することになります」と記されております。

又、おなじくこの年の八月二十二日付のお便りは白馬登山の思い出など。

「信州行は七月末の五日間、日本水彩の講習会で白馬山麓にゆきました。スキーのための民宿に六十人ばかり分宿、二日間人物、二日間風景写生、最終日講評などあり、気候爽涼、風景絶佳、天候にめぐまれ、よい講習となり、私もいっしょに勉強しました。白馬は大正はじめに行った以来のことで、山は昔ながらの姿を見せていましたが、山麓風景は大にかわりました。だが昔泊った白馬館があったのはなつかしくありました。八月は一日から十日まで、上田で彫塑講習ですが、私は白馬から長野を経て上田へまわり六日まで勉強し、七日に帰りました。上田講習は今年四十回となり、小生講師として皆勤し、感深いものあり。（略）東京に帰って暑さと水不足はいささかこたえました。以上」

先生にお会いしたいときは、この頃も電話より郵便でお願いする方が多かったと思います。そうした時のご返事には、いつもちょっぴりでも旅や近況のお知らせをつけてくださいます。昭和四十年十一月四日付でも、

「秋田の旅から十一月一日帰りお手紙拝見いたしました。対談はいつにいたしましょうか。六日にちょっと所用で上田へ参り、十五日芸術院総会があり、その後は木曽の馬篭へ十日ほどいってくることになりましょう。十四日も用事があったと思います。十日から十三日までのあいだ総方のつごう、うちあわせの上きめたらよいかと思います。（略）東北旅行は湯沢から山中へ入って『湯の又』という温泉にとどまって絵をかいていました。紅葉のよい時で、全く全山錦繍の美しさでありました。湯沢では水墨を若干かきましたが、作品は全部彼地へおいて来ましたが、感動だけはもちかえり、長くはなれぬことでありましょう。」

昭和四十一年三月のある日、先生から一通のはがきをいただきました。その全文、

「山川勇一郎遺作展は会場はせまいけれど充実してよい展覧会になりました。さて、小生は急に思いたち、芸大の見学団に加わってヨーロッパへ行って来ます。三月十八日発、四月

廿一日帰京のよていであります。慾ばらずに一行のあとについて、目にふれるものをよく見てきたいと思ひ居ります。三月五日」

山川君は山岳画家で、日本山岳会の会員であり、小生のながい友人でありましたが、このすこし前、チリで急死されたのでした。そして間もなく、彼の遺作展がひらかれ、その会場は東京新宿の伊勢丹だったのであります。さて、旅行中の先生は、ローマから航空便をくださいました。その表には美しいポムペイの淡彩画をおかきくだされていました。

「めぐりめぐりて、イタリアに入り、いまローマですが、きのうはポムペイはいきよを見、けふはエトルスク故地をおとづれました。

いにしへのローマの人の生活を見るおもひすもポムペイにきて

ポムペイのはいきよにしげるくさのなかあはれひそかにさくばらのはな

いにしへのエトルスクの墓壁にかける古拙なるゑのしたしくもあるか」

なお、この年、暮の十二月十二日付のお便りの一部にも、ヨーロッパ旅行のすばらしさを申されております。

「貴書拝見、思いながら何かととりまぎれ、御無沙汰に過ぎ居るうち、今年ものこり少なになり、月日のたつことの早きにおどろくのでありますけれども、今年はヨーロッパに旅したことと十三年もかかってゐた倉敷大原氏先代の胸像が鋳造になり、十一月に除幕式のはこびとなったことなど、私にとって忘れ難い年となるかと思います。」

とよろこびのお気持をのべられています。さて、この十二月から日をすこしもどしまして、九月六日付のお便りは裏磐梯行のことです。

「前便は早く書いてあったのがとりまぎれ、投函おくれ失礼いたしました。裏磐梯へははじめて行き、風景はよろしいのですが、観光地として、人々雑踏。彼処はばんたい噴火爆烈により生じた地形で、あの地下には多数の村落と村民が埋まり居るので、それを思えばいたましく、鬼哭しゅうしゅうの声をきく思いでありました。」

そして、昭和四十二年二月三日付、

「新年の御慶おくれながら申し上げます。私は昨秋仕事をつめてやったので、疲労から風邪の容態で年を越し、正月半に福島の不動の湯へゆきましたが、雪が深く、さむさもきびしく、少々こたえましたが、空気がよろしく、温泉もあって元気になって帰りました。雪の画が二枚出来ました。」

この頃から先生は寒くなると、よくぐあいがすこし悪いともらされることが多くなられました。

翌四十三年の秋、わたしはいつものようにある展覧会のおともをしたあと、上野駅構内の食堂でお茶を飲んで四方山話をいたしました。その話しの中で、先生はよく、わたくしどもへ旅からのお便りに、歌を二三首づつしたためられますが、ノートにでも整理されておられるのですか、とうかがったのです。先生は、歌は全部わたしの頭の中に整理してあります、それだけですよ、と申されました。その頃、同人数人と山登りや旅行の作文でもつづって毎月出して見ようじゃないかと、少女趣味なことを話しあっていた矢先でもありましたので、そのことを申しあげ、ついでに先生にもご協力していただけないでしょうか、和歌などいただければ、ともお願いいたしました。勝手な時、勝手な原稿を書くだけなら、それほどの負担ではないでしょう、と言われました。

その時はまだ誌名もきめてありませんでした。その後、誌名を『行楽』ときめましたので先生に題字をお願いにうかがいました。お多用の先生なので、ほんとうは来年の一月から出しはじめるつもりでおりましたが、そのことは申しあげませんでした。この年の暮に第一号が、といっても半紙一枚を二つに折ったB五版、四ページのリーフレットをごらんにいれました。肩のこらないものですね、と何ともほめようのないので、これだけ申されました。

それから間もなく封書をいただきました。早速ひらきますと、

「前略先日お話のありました貴誌表紙、行楽の文字、別紙のようなようこころみましたのでお目にかけます。二字の間があき過ぎたようにも思いますが、御採用下さる場合、製版印刷のとき適当に御はからい下さるようお願い申上げます。先づはとりあえず要事のみ草々。十二月廿五日」

早速第二号から用いさせていただきました。

それから数ヵ月しますと、先生も原稿をくださいました。前にお話しのあった頭の中につくられている先生の歌で、これなら毎号つづけてもよいとのことであります。それに思ってもおりませんでしたカットも、わざわざ新しくお描き添えくださっておりました。それからは毎月原稿をいただきにうかがったり、校正のゲラずりをお見せにお会いしたりいたしました。月に一二回はお会しておりましたので、連絡用の郵便のお便りはすくなくなりました。

でもときどきお便りをいただきます。昭和四十四年六月二十五日付には『行楽』にのせた先生の歌のことであります。

「カットの絵は位置がゲラ刷りの方よろしいようです。画の下が水平になり、もっと下へさげた方よろしく、さすれば上がもっとひろくなり、天のひろびろした感じになるかと思います。その他結構で、いろいろ御苦心ありがたく、活字の種類大きさ間隔等すべてよろしいと思います。」

なにごとも、ゆるがせにされないお心がここでもよくわかります。

翌四十五年二月十七日付の中に、

「先月末から風邪ひき、どうも長びき、大してわるくはなりませんでしたが、困りました。」

つづいて三月十二日付でも、

「正月末の風邪がなかなかさっぱりせず、わるくもならぬけれど、ぐづぐづして困りました。そのためいろいろ仕事がふくそうしているのに、かたつかなくて困りました。」

とありましたので、その時はほとんどお会いせずに原稿も郵送ねがい、文通をさしていただいていたのでありましょう。しかし、この翌々五月六日付、には「右『行楽』六月号原稿お送り申し上げます。カットは先日おわたしいたしました阿蘇千里か浜の図を御使用下されたく、よろしくおねがい申し上げます」と見えますので、この頃は又先生にお会いもしていたのでありましょう。

又、つづいて五月三十日付では、

「七月号古墳は四首ゆゑ、カットを少しひろく、八月号は五首の上、注までつくのでカットはほそくいたしました。何卒よろしくおねがい申し上げます。」

このように名もない小さなリーフレットにも、何ごともおろそかにしなかったという、先生のまじめさを記させいただきたいのであります。

この年の十二月十二日付に「この頃少々不健康、脳貧血のきみで困ります」とあり、翌四十六年一月十九日付も「十一月以来の不健康、わるくもならないが、さっぱりせず、仕事もてきぱきはこびかね困ります」とあり、二月十四日付でも「私の健康は大分よい方でありますが、まだ時々ぐらぐらとめまいがするので用心して居ります」とあり、四月十九日付でも「どうも健康状態はかばかしくなく、気勢があがらず」と申されておりましたので、あまり参上いたしませんでした。

この年、秋にとうとう入院されました。そして十二月三日は病院からであります。

「思ひの外入院が長くなりましたが、このごろはベットから起きて歩くけいこをしています。」

そして、『行楽』への歌のお原稿も翌四十七年三月でいただけなくなり、退院もされましたが、ついにお逝去になられたのであります。

先生は彫刻にたいして心がなければならぬと申されています。『凸凹のおばけ』では「心が明かでなければなりません」と作成の理想を説いておられます。高村光太郎も『美について』という本の中で「彫刻を見て実物らしいといふ事を佳作の標準にしてゐる人は此の法悦を知らないのです。活人形のやう

な実物らしさは子供だましの興味です。」とも述べていると同じでありましょう。先生の歌にも、

てうこく　を　はにわ　に　みたる　うれしさ　を　ひと　に　かたれど　ひと　がえんぜず

てうこくを　ぶつけい　もざう　と　あやまれる　ひと　には　わからじ　はには　の　よさ　は

ぶつけい　の　もざう　は　なさで　ぶつけい　の　いのち　とらへぬ　はには　の　さくしや　は

註　明治九年創設の工部省美術学校にて、「彫刻科は石膏を以て、物形を模造する術を教ふ」とあり、この誤れる教へ今日なほあとを絶たない。

彫刻はこの心、すなわち形ではなく「いのち」をとらえて作らねばならないといわれることに通ずることでありますが、先生は「山の幻影」という大正六年の文の中で、

「近頃山へゆくと妙なものが見えるやうになりまして、よく裸の男や女を見るのです。嶽の上に大きな男が立って居たり、森の中で美しい少女や、老爺が歩いて居たりします。一昨年八ヶ岳へ行った時その少女は森の中で笛を吹いて居ました。其時です、山を下って来ると森の端に薄墨色の男が立って居て、ヂッと私を見て居た時は思はずギョッとしました。無論、幻影を見たのであらうと思います。しかし幻でも何でもようございます。あの少女や老爺は、やはりあの森林の中に住んで居るのだと私は信じて居ます。」

この森のおばけには、その後も興味を持たれ、まづスケッチ淡彩では、この文を書かれた大正の時代にえがかれ、戦後も版画に「森の男」として作成の後、毎日新聞主催の国際美術展には塑像で出されております。

第38回日本版画協会
「版画展」入場券カット

物にはそれぞれ心がある、人はその目に見えぬそれらの心を知らなければ何もできないのである、と言われたいのでありましょう。

先生にもすき、きらいがありました。「たばこぎらひ」では、

「小生は煙草ぎらひである。未だ嘗て煙草を口にしたことがない。（略）冬の会合の席などは大の禁物なのだが、まるきり出ぬわけにもゆかぬ。一夜幾時間煙草の煙の中に座って居ると、ちょっとした病人になってしまふ。先づ鼻の粘膜がおかされる。ついで眼がおかされる。咽喉がおかされる。頭痛がしてくる。ひどい時には、翌日一日ねるようなことになる。着て行った着物が、翌日まで煙草臭くて気持がわるい。」

又、今ひとつ。

「私はどうも電話を好みません。それはなぜかと考へて見るに、相手の顔が見えないといふ事に大部分其原因があるやうです。（略）で如何に私共は平生顔によって人と話して居るかと云ふ事がわかります。顔がものを云ひ、顔がものを聞く、このあひだの働きは全く不思議です。」

これは「顔」の一部でありました。

さて、先生のお家が新築されてからのことでありましたから、昭和四十何年ごろだったでしょうか。先生といろいろお話しをかわしている時、そうそうこんな色紙をかきました、親類の者に何かといわれていましたので、といわれ、私に渡されましたのは蛇の墨絵でありました。鎌首をもちあげた三分の一身ほどのからだを見せているすがたであります。

色紙の蛇ははじめてであります、と申しあげますと、あなたは蛇はすきですか、といわれます。すきでもきらいでもありませんと、と私。その時、先生の「旅の追懐」の中の、明治の末年に北アルプスへ登られる前日のこと、

「青木と中綱の間だったか大変きれいな森がある。其草の上に座って森の樹を写して居た。写生して居る内にやまかがしが自分の傍へ来た。私はそれ迄あまり蛇は好でなかったが、其時ほんとに蛇は美しいものだと思って、其れ以来私は蛇を見るのが好になった。」

を思い出しました。

それから話はかわりますが、野菜るいはよくたべられたようであります。明治四十年の歌に、

くすり　のまず　にく　も　さかな　も　しりぞけて　も
はら　そしよく　す　よきかな　やさい

といわれております。そんなことを存じておりましたので、たまにはダケワラビやゼンマイなどをおとどけすることもありました。昭和三十九年七月二日付のお便りに、

「先日は山草ありがたく、その節よけいなこと申し、お心にさわり申訳ありません。山草にかんれんして思い出されましたので、そのまま言葉になって申し上げたしだい御免下さい。山岳会の時の話で、話されたのはどなただったか、ついに思い出されませんが、ウルリとまちがえて何かほかの山草をとったのは『かみや』さんときいたと思い出しました。ちがっていたらあやまりますが、山の草やきのこは慎重にしな

ければいけないと其時思ったことでした。あのいただいた山菜は早速ゆでていただき、やわらかく甘みがあり、くせのない味と存じました。もとよりいただいて何事もありませんでした。」

このときは、きっと「たべられそうな山草」を、先生これを食べてください、とお見せしたのです。あたるとこまりますよ、だいじょうぶですかねえ、と質問されたのかもしれません。

最後に山の絵に対するお考えとでもいうことについて述べて見たいと思います。ちょうど先生からのお便りにもありましたので、直接お声を聞いて見たいと思います。これは昭和三十九年四月二十一日付のお便り、

「現在を見ると山を遠望した風景画の如きがたくさん展観されるので、いささか気のひけるところもあります。

先年、今は故人になった茨木猪之吉と中村清太郎、足立源一郎と小生と四人で木曽から境峠を越えた時、折柄夕ぐれとなり、夕空をかぎって乗鞍岳が高くそびえているのを仰いだ時、一同思わず帽子をとって礼拝したことがありました。あのけいけんな心が山岳をえがく者にとっては、根本の大事なことではないかと思うのです。

ちょっと見ると山岳遠望図で同じように見えても、この山に対する敬けんな心のあるとないでは、おのづから画にあらわれるところがちがってくるものであります。」

これと、前にも引用しました「針木岳より爺岳迄」に、

「夕食後、皆は早く天幕の中へ入ったが、私は一人毛布にくるまって、立山の上に棚引く夕雲の色に見入ってゐた。其雲の紅が全く消えて、空には星が輝きはじめた。かくて夜の気は漸々にあたりをつつんで行った。スバリ岳は真黒に突立ってゐる。輪廓が険しい。黒部の谷からは幽かに川の音が聞えてくる。私は焚火にあたって、いつ迄も外に立って居た。」

こうした山での感激がつみかさなって、数多くの山の作品が生れたのでありましょう。

それから、先生は人に接するにも、物を考えるにあたられても、常に厳正な、しかも、自分にじゅうぶんになっとくのゆく態度でのぞまれておられました。それがお便りの文面の内にも、おのずからにじみ出ておりました。

昭和三十年十一月十七日付お手紙の便箋にインクのよごれが一点ありました。それを「インキのこぼれで、よごしましたが、おこころやすきあいだと、このままさしだします。ごめん下さい」とわざわざかかれております。わたしはいつも、手紙にせず、簡単にはがきでお便りする方が多かったようですが、先生は、はがきでくださるときの文面の終りには「はがきにてごめん」（昭和四十二年七月十五日付）などと記されます。は

がきは手紙に対して略式なものだ、とはっきり申されておるのでありましょう。

「寝台に仰臥しての執筆ゆえ、鉛筆書き、ごかんべん」

これは昭和四十六年九月二日消印、病院からのお便りであります。一時は生死の間をさまよわれ、まだねたきりの先生は、ひさしぶりにわざわざわたしにお便りをくだされたものでありますが、ここにも先生の「けじめ」とも申すお心がしのばれます。いつも、何ごともゆるがせにしないお気持で通された先生をしみじみと思いおります。

〔付記〕本文の引用文は主として、石井鶴三著『凸凹のおばけ』昭和十八年・二見書房版、美術誌『みづゑ』『朝日新聞』『風流』、和歌とカットは、ボンベイよりのお便り以外は、月刊『行楽』第五号―第三十九号（昭和四十四年五月―昭和四十七年三月）ただしカット「森の男」のみ別、それに、わたしあてにくださいました先生のお便りから、かかげさせていただきました。このことを御遺族様とそれぞれの出版元の責任者の方々にお許しくださいますようお願い申しあげます。（四十八年九月彼岸、成田にて記す）

著作目録

①日本風景版画　第九輯　東京近郊之部　大正八年　日本風景版画会　菊倍判（五枚組）
②日本風景版画　第十輯　日本アルプス之部　大正九年　日本風景版画会　菊倍判（五枚組）
③石井鶴三素描集　昭和五年　光大社　菊倍判（オフセット）
④石井鶴三挿絵集　第一巻　昭和九年　光大社　四六横判（大菩薩峠の挿絵）
⑤随筆集　凸凹のおばけ　昭和十三年　光大社　四六版
⑥宮本武蔵挿絵集　昭和十八年　朝日新聞社　四六横判
⑦凸凹のおばけ　改訂増補版　昭和十八年　二見書房　四六判
⑧坂本繁二郎文集（編集）　昭和三十一年　中央公論社　A5判
⑨日本上代の彫刻　昭和三十八年　文部省初等教育局中等教育課　四六倍判
⑩折り折りの人　4（共著）　昭和四十三年　朝日新聞社　B6判
⑪坂本繁二郎文集（編集）　増補改訂版　昭和四十五年　中央公論社　A5判

略歴

明治二十年（一八八七）六月五日　東京に生まる
同　三十八年　東京美術学校彫刻科選科入学
同　三十九年　登山をはじめる（浅間山）
同　四十三年　東京美術学校卒業（のち研究科修了）
同　四十四年　第五回文展「荒川岳」褒賞
大正　五年　日本美術院彫塑部入会
大正八年十一月　日本山岳会入会（会員番号七〇九）

同　十一年　春陽会・日本版画協会入会
同　十三年　日本水彩画会入会
同　　年　第十一回日本美術院展「古稀老」
同　十五年　自由学院美術教師
同　　年　第十三回日本美術院展「老婦」
昭和　五年　第十七回日本美術院展「俊寛頭部試作」
昭和　十年　第二十二回日本美術院展「若き男」
昭和十一年　第一回帝展「風」
昭和十二年　自由学院辞任
同　　年　文展審査員（この年より四回）
同　十四年　第三回文展「相撲」
同　十九年　東京美術学校教授
同　二十一年　日本美術院展「仕舞」
同　二十五年　横綱審議会委員
同　　年　日本芸術院会員
同　三十年　第四十一回日本美術院「雷（試作）」
同　三十四年　東京芸術大学（前、東京美術学校）辞任
同　三十六年　日本美術院彫刻部開散のため退会
同　三十七年　東京芸術大学名誉教授
同　四十一年　ヨーロッパ美術見学旅行
同　四十二年　文化財専門審議会専門委員
同　　年　生存者叙勲（勲三等旭日中綬章）
同　四十四年　相撲博物館長就任
同　四十四年十二月　日本山岳会永年会員
同　四十七年　文化財専門審議会専門委員解任
同　四十八年（一九七三）三月十七日　心臓衰弱のため自宅（東京都板橋区中丸町二一）で逝去
同　　年四月二日　東京、青山葬儀所で春陽会葬

（**編者附記**）本稿は当初本誌追悼欄用として小野氏に依頼したところ、右のような長文のものとなり、他との均衡を失するようになったため、本欄に掲載することとした。引用書簡のなかで、旧かな、新かなの混用がみられるが、原稿のままとした。なお遺影は追悼欄に掲載した。

追悼

鳥山悌成氏（一八八四―一九七二）

この度編集の望月氏より故鳥山悌成氏の事を書く様にとの御手紙がありましたが、何しろ鳥山君とは一度も山へ一緒に登った事もないし、全く材料が乏しいのですが、他に書く人がないとの事で、止むなく引受けた次第です。

依って再々申上げる事ですが、私の住所が下町の浅草であったので、総ての日誌を関東大震災のため全部焼失して仕舞ったので、従って微かな記憶をたどって、たどたどしい不得要領の事しか述べる事が出来ないことを甚だ残念に思って居ります。私が鳥山君と共に理事を任命されて居た時が、丁度二・二六事件が起った時で、当時日本山岳会の事務所が芝の琴平町の不二屋ビルに在った時なので、戒厳命が発令されて新橋より西方は、全然立入り禁止であったが、役員の身分証明があるので、出入が自由であった事は全く好都合であった。

私と鳥山君とが同じ銀行畑なので、会よりは会計係を仰せ附かり、勿論私は補助的な役割であり、種々の御教示と御指導とを賜りました事を、深く感謝して居ります。又湯島の聖堂の一部を借りて展覧会を開いた事もあった。丁度其年に日本山岳会の創立三十周年記念で、会のマークの入った純銀の小箱を頂きましたが、戦災の心配から浦和のある離れの洋館の一棟を借りて、牛車一台分の荷物を預けて置いた所、其の家の家主の道楽息子が鍵をこじあけて忍び込み、盗まれて仕舞った事は、誠に残念で仕方がありません。又其時が社団法人になった時で、始めは財団法人に願いを出した処、会の固定資産がないと云うので社団法人に変更して願を出し、許可になった事を思い出しました。

次に朝日新聞に「熱海で鳥山氏の優雅なる生活」と云う題で、夫妻の写真が載せてあった事がありました。そして再々遊びに来る様との便りがありましたが、遂にそれを実行出来ない内に、どういう訳か再び都会へ舞い戻ったと聞いて、不思議に思って居りました。実に鳥山君は性質が温厚で、篤実で、全く優しい好い人でした。そうして御無沙汰して居る内に、今回の訃報に接し実に驚き残念でなりません。この上は唯々氏の冥福を祈るのみであります。

（松本善二）

略歴

明治十七年（一八八四）十二月三日誕生。
明治三十九年（一九〇六）五月　日本山岳会入会。会員番号七三番。日本博物学同志会では明治三十四年頃、梅沢親光、武田久吉、高野鷹蔵氏らと共に幹事となり編集を担当した。
大正十二年（一九二三）五月　日本山岳会幹事となり、後評議員を兼ねる。昭和九年（一九三四）一月から昭和二十一年（一九四六）六月まで理事。この間また評議員であったこともある。二十三年の長年月役員として会務に尽し、特に多年会の財政面を担当した。また昭和二年九月、本会の事務所は新潟県高頭氏方から鳥山氏方へ移り、昭和八年一月、虎之門不二屋ビルに移るまで五年数ケ月鳥山氏方へおかれた。
鳥山氏は本会の発起人ではなかったが、本会の母体とも云うべき日本博物学同志会の会員として、会創立当時から深い関係を続けた。また会が社団法人改組に際しては、とりわけ尽力した。
主な山歴としては、明治四十年（一九〇七）武田久吉、梅沢親光、山川黙の諸氏と甲斐駒ケ岳に登り、同山が白崩山と同一であることを確認した（『山岳』二年三号・三年一号）。
昭和四十七年（一九七二）十月七日逝去。御遺族からの便りに「父がどんな山に登ったのか、お恥しいことながら、私共もの心づいてから山に行くといって家を出た父を見たことは御座いません。子供に追われて山どころのさわぎではなかったのでございましょう。但し休みともなれば、一家中ひきつれて、正月には温泉、次にはスキーと楽しい時をあたえてくれました。山岳会に籍をおいていても、会がすこしでも大きくなってくれるように、面倒見の好きな父は、それが楽しみだったのではないでしょうか。病院のベッドでヒマラヤ山行のプランを拝見して、私にも「行けるといいね」と語りかけてくれる父でした。山岳会、日本写真会、俳句へと、父の命は燃えていたように思います」とあった。（編者）

田部重治氏　（一八八四―一九七二）

「君も七十近くなったんだから、強精酒なんかあまり飲まない方がいいよ。」これが東京医科大学病院で田部重治先生が私に話された最後の言葉であった。その前年、八十七歳の先生は、九州を半周して今までにない疲れを覚えたので、人の勧めで特殊の強精酒をスプーンに一ぱい飲んだが、それから急に身体全体の具合が悪くなったそうである。ふだん先生は、人の身体はアルカル性にしなければいかん、玄米食を食べよと勧められていたのであるが、その先生がと今でも残念に思う。然しそう言えば先生は酒好きであった。懇親会などでビールしか出ないときは機嫌が悪かったが、酒が出ると急に元気になって、木暮さんと雲取山から三頭山へ歩いた最初の登山話が、いつ迄も続くのであった。又酔が回ると、大正二年の夏、高村光太郎がミス千恵子を徳本峠の岩魚止小屋迄迎えに行き、清水屋でウェストン夫妻と同宿したとき、よいお似合の仲だと言われた話や、佐渡

の小木へ行って、尾崎紅葉が小菊と言う女の三味線の胴に「こいちゃこいちゃで二度だまされた　またもこいちゃでだますのか」と書いたのを見てきた話（この話には、いつも君達にはこいちゃと言う方言がわかるかとの註がついた）が、飛び出すのであった。

先生と一緒に登った山は、先生の好きな信州や奥秩父や奥多摩の、精々十指を越える程度のものに過ぎなかったが、氷川の三河屋や数馬の山崎屋や、はては御岳の神官宅、相模湖畔亭、六義園などで毎年のように先生から聞いた話は、みな『日本アルプスと秩父巡礼』、『山と渓谷』、『忘れえぬ山旅』などに詳しく記されている。わけても先生は奥秩父をこよなく愛された。「私はもともと深い森が好きだった。私の故郷に近い有峯の奥の深森がとてもよく奥秩父に似ているからだ」と友人に語っている。「薬師岳と有峯の孤村」などにも、この辺のことが出ている。又「山は如何に私に影響しつつあるか」には「秩父は一種の魅力と一種のあたたか味をもって、私達を引き入れなければ止まないものが漂っていることを感じた」と書いている。

大正元年（一九一二）十一月、先生は二十八歳で築地の海軍経理学校の英語の教官になった。大正五年、生徒の希望によって山岳部を作ろうとしたが、教官連が賛成しなかった。先生は直接校長に「海軍生徒は愛国心が強いが、その国たるや抽象的であって、日本の国土をあまり知らない。国土を知るには山に登るのがいい方法である」と説いた。山岳部が設置されたのはその直後のことで、その年の夏、先生は生徒を連れて徳本峠を越えて上高地に入り、槍へ日帰り登山をした。梓川に因んでその山岳部に梓会と名づけたのはその時である。それから毎年の如く北アルプスへ生徒を連れて行った。私は大正十年入学して英語、論理学、心理学を教わった。言わば五十年来の門人である。生徒が先生の講義を喜んだのは、時間の後半は必らず山の話に移ったからで、その初の言葉はきまって「山はいいですね」であった。私が先生に岩登りを提案すると強く首を横に振って「岩登りは英国のように高い山のない所で発生したので、日本のように三千米級の山の多いところでは岩登りの必要はないし、岩登りが登山の醍醐味だと考えるのは間違いだ」と受入れて貰えなかった。この辺に先生の反骨にも似た一面を見ることができよう。英語の時間に Pater の話を聞いたことがあった。先生が漱石門下の一人だと知っていても、ペイターの研究家だと知る私の山友達は少い。大正四年翻訳のペイターの『文芸復興』は有名であり、昭和三十六年日本ペィター協会が設立されたとき推されて会長となっているし、四十年には『ペイターの作品と思想』を書いている。

先生は明治十七年八月四日、富山市の近くの農家に生れた。姓は南日。令兄南日恒太郎氏の『英文解釈法』は私共がお世話になった本である。先生は幼少の頃病弱で後年登山家になると

は誰も考えなかった。十九歳のとき親戚の田部家へ養子にいった。金沢高等学校時代は北国の吹雪ふきまく陰惨な自然と、母堂の死、許嫁だった田部家の次女の死、叔母の死等郷里からの悲しい便りの連続と、自分の健康の衰弱による失望によって悲しい気持が続いたようである。明治三十八年東京帝国大学英文科へ入り、その翌年木暮理太郎氏と知るようになる。先生の山旅はこの頃から初まる。初めて秩父へ入ったのは二十五歳の五月で、木暮氏と二人で雲取山に登り、十月には又二人で十文字峠から甲武信岳、金峯山を歩いている。又帰郷して兄弟と共に立山にも登った。日本山岳会に入ったのはこの年である。

先生にも失敗はあった。明治四十五年三月末、友人と二人で大菩薩峠へ登った時、柳沢峠へ出る道を誤り積雪二米の大黒茂(おおくろも)谷へ迷い込んで洞穴で一夜を明かしたが、翌朝洞を出て歩き出して間もなく人事不省に陥った。友人が辛うじて村人に連絡して救出されたのであるが、この遭難が先生と秩父を切っても切れぬものにしたことも否めないであろう。この頃友人と共に秩父会を作る。この頃から先生は、「落着いて静かに人生を観照するような態度で山のもつ一切を眺め、それを観照するばかりでなく、体験したいという気持になった」(『わが山旅五十年』)ようで、後日私共に繰り返して話された野麦峠、天生峠、庄川峡などの漂泊的旅行、奈良の古寺巡礼、追分の山小屋作りに、それが窺えるような気がする。昭和十五年夫人をなくされ、やがて法政大学を退職し、十九年木暮氏死し、やがて敗戦へと先生には重苦しい年が続いたが、二十八年今迄子供がなかったので、令姉の子を養子として孫が生れたのを皮切りに、御岳や信州の楽しい家族旅行が続き、先生に再び明るい表情が見られるようになる。

昭和三十八年、秩父鉄道が秩父草分けの恩人として雲取山の雲取山荘前に先生のレリーフを建設した。先生は雪と低血圧のため出席できなかったが、大変うれしかったと見えてよく私共に、秩父には秩父宮殿下と木暮理太郎と僕のレリーフが立っているが、生前に立ったのは僕だけだと話された。翌年八月、八十歳でお嬢さんや友人とそのレリーフを見に雲取山に登った。先生が好んでサインした、

奥秩父　はるか眺めて雲取に
　立ちたる　われは　若人なりし

の歌を、お嬢さんに朗々と聞かされたことであろう。

その後は、先生は日本山岳会や梓会の集りに出ることが段々少くなっていった。昭和四十七年八月、米寿を迎えた直後の九月二十二日、先生は天寿を完うして大往生を遂げられたのである。私はシャモニーで悲電を受けた。

先生は何か難かしい問題が起ると、必らず山へ入って考え込まれたようである。孤独を求めて山へ入るのは、深く自分を見つめようとする心からであると語られた。私は病床の先生に何

追悼

故山へ登るのかと聞いたことがある。「つまり山が好きなんだ。登らないで居られないからなんだ」との返事であった。そして「自分にも人並に山にあこがれた時代と、山が自分であると強い自己意識を持った時代があった。然し今ではそう言う小さい自己では駄目だと気がついた」と、しみじみ述懐された。

先生の歿後私は何回目かの雲取登山でレリーフの前に立った。そのとき私は生前感じなかった大きな先生を、そこに見出したのである。（昭和四十八年八月十五日）　**（茶谷東海）**

略年譜

明治十七年（一八八四）八月四日　富山市に近い山室村字東長江の農家南日喜平の三男として誕生。

明治三十年（一八九七）富山中学校入学。中学の漢文教師に明治の隠れた登山家小杉復堂がいた。

明治三十三年（一九〇〇）この頃から短歌、新体詩を作りはじめ「文庫」、「新声」、「明星」、「文学界」などを読みはじめた。「文庫」の小島烏水の紀行文をはじめ久保天随、大町桂月、田山花袋の紀行文を愛読した。将来国文学者たらんと志していたが、英文学を専攻しようという気持に変ってきた。

明治三十五年（一九〇二）第四高等学校入学。西田幾太郎教授が塾長をしている三々塾に入る。早期の登山家林並木教授から屢々山の話をきく（『山岳』第五十四年一七三頁以下に林並木氏の追悼文がある）。

明治三十六年（一九〇三）母病歿。田部家との養子縁組がきまる。母の死は心の痛手となり、意気銷沈の結果肺尖カタルにかかる。

明治三十八年（一九〇五）許嫁の田部家の次女も肺結核で病歿。恒太郎、隆次の二人の兄が、彼の失望を慰めるため神通川ぞいに飛騨の高山まで、彼を伴って旅行した。九月帝国大学英文科入学。教授に夏目漱石、級友に中勘助、野上豊一郎、山崎良平がいた。

明治三十九年（一九〇六）木暮理太郎を知る。

明治四十一年（一九〇八）東大卒業。八月、帰国の途次妙高山に登る。十月頃明治大学夜間部英語専修科の教師となる。木暮との交遊深まり、日曜毎に郊外に散策に出かけ、十一月二人で高尾山に登る。これが木暮と二人で山へ登った最初である。

明治四十二年（一九〇九）一月から郁文館中学の英語教師、春頃から天台宗大学中学部（後の本郷中学）、中央大学夜間部の英語講師を兼任して収入がふえる。

五月、木暮と甲武国境山脈をへて多摩川に下り、川野から雲取山に登る。国境山脈に初めての野営をした。

七月、伊折から弟、甥ら数名と二人の案内人をつれて立山へ登り、八月には有峰から薬師岳に登った。彼の高山地帯への第一歩である。

十月、木暮と十文字峠を越え、甲武信岳、金峯山に登り黒平鉱泉へ下る。この頃山岳会機関誌『山岳』を愛読し始め、薬師山頂で偶然見た辻本満丸（山岳会幹事）の名刺から、その名に惹かれて目白の辻本宅を訪れ、やがて日本山岳会に入会することとなる。明治四十二年十二月入会、会員番号一〇六番で既に会員であった。また木暮は彼の懇憑によって漸く大正二年九月入会することとなる（会員番号三一一九番）。

この年の暮頃、木暮と共に辻本邸を訪れ、小島烏水、中村清太郎、三枝威之助（現守博）ら山岳会幹事に初めて会う。

明治四十三年（一九一〇）四月、病死した許嫁の妹きよと結婚し田部家に入籍し、本郷林町に新居を構えた。五月、大岳山へ登る。

夏、越中から信州への山岳縦走を企てたが、有峰で案内人を得られず、前年と同じく再び薬師岳に登る。山頂で偶々針ノ木峠からきた中村清太郎、三枝に会い立山温泉に下った後さらに奥大日岳に登る。その後宇治長次郎を案内人として針ノ木峠を越えて大町に至り、さらに丸山広太郎を案内として白馬岳に登る。

八月、片貝川を溯って毛勝岳へ登る。ウォルター・ベーターの作品を読み研究を志す。

妻が胃を病み、彼自身も胸を浸される。

明治四十四年（一九一一）春、妻と母を千葉県に一ヶ月転地させる。

五月、木暮と三頭山へ登り小河内へ下った。

七月、岩波茂雄、安倍能成、市川三喜らと大町から鳥帽子岳、赤牛岳、立山温泉まで縦走した。案内は又吉、玉作、遠山品右衛門の長男作十郎。

明治四十五年（一九一二）三月、中村と丹波山村から飛竜山に登り、さらに大菩薩峠へ登った。帰途大黒茂谷に迷いこみ雪中一夜をあかした。

四月、東洋大学教授となる。

七月、ルックザックを作る。木暮と雁坂峠を越えて甲武信岳まで縦走したのち、梓山から単身、本沢温泉、赤岳、茅野、上松、寝覚ノ床、王滝口、御嶽、黒沢口、木曾福島、松本、徳本峠、上高地、槍ヶ岳、安房峠、平湯、船津を経て富山へ帰る。

秋、本郷蓬萊町から豊多摩郡西大久保村に移転する。

十月中旬、岩波茂雄と塩原から尾頭峠を越えて川俣へ出た。

十一月、海軍経理学校の英語教師となる。

十一月、木暮、中村と唐松尾、牛王院山、将監峠、飛竜山、雲取山、大血川と奥秩父を縦走した。

大正二年（一九一三）五月、木暮、中村と甲府から昇仙峡を経て、金峯、朝日、国師、甲武信岳に至り、一旦梓山へ下った後、再び甲武信に登り破風、雁坂峠を経て栃本へ下る。この山旅の後中村の主唱で「秩父会」をつくり、雑司ヶ谷の「あやめ」で三人の他に梅沢親光を加え酒をくむ。

八月、木暮と槍ヶ岳から日本海までの縦走をガイドレスで計画し、みごとに成功した。五色ヶ原で中村と待ち合せたのち、長次郎の案内で剱岳にも登った。

大正三年（一九一四）夏、上高地に滞在してベイターの『ルネッサンス』の翻訳および研究に没頭した。

大正四年（一九一五）五月、木暮、中村と笛吹川東沢（信州沢）を初溯行して梓山へ下る。

七月、木暮と毛勝岳より剱岳を越えて黒部川を渉り、東沢より赤牛岳に登って大町まで縦走する。案内は長次郎、宮本金作、沢崎源次郎。

大正五年（一九一六）木暮と笛吹川東沢の釜沢をめざしたが、失敗して栃本へ下山。

七月、海軍経理学校生徒と上高地から槍ヶ岳へ登り、のち二十日間上高地に滞在した。

大正六年（一九一七）五月、木暮と再度笛吹川釜沢を試み、初溯行に成功して甲武信岳に登り、真ノ沢から栃本へ下山。

七月下旬、木暮、森喬と共に泊町から小川谷を溯り、白馬岳、鹿島槍、針ノ木を越えて大町へ下る。案内は長次郎他二人。

大正七年（一九一八）八月、海軍経理学校生徒と中房温泉から燕、槍ヶ岳。

十一月、東洋大学々生らと塩山から将監峠を経て三峰神社へ至る。

十二月、丹波山村から柳沢峠を越える。

大正八年（一九一九）六月、『日本アルプスと秩父巡礼』を刊行。
七月、石坂修一と柳沢峠、将監峠を経て滝川谷から栃本へ、さらに十文字峠を梓山へ越え、八ヶ岳の裾野野辺山ヶ原を経て長坂に至る。
七月下旬、海軍経理学校生徒と上高地に至り、奥穂高へ登ろうとして雨と落石のため果たせず、焼岳へ登ったあと白骨温泉に泊る。
六月、慶応義塾山岳会主催の講演会で「山は如何に予に影響しつつあるか」を講演する。
この年日本山岳会の幹事となる（昭和六年まで）。
大正九年（一九二〇）四月初旬、木暮、松本善二と富士の裾野に出かけ本栖、精進、西、河口湖に遊ぶ。
四月下旬、単身秋川上流から御前山に登り、数馬の山崎屋に一泊して上野原に出る。
七月、東洋大学学生の清谷、谷岡と王滝口から御嶽へ登り、飛騨側へ下って上ヶ洞から乗鞍岳に登り、さらに野麦峠を越えて白骨温泉、上高地に至る。
八月下旬、万座温泉へ泊り渋峠を上林へ越える。
大正十年（一九二一）七月、妻および田部正太郎（甥―昭和五年一月劔沢小屋で雪崩のため歿）と中房温泉滞在。帰途追分に寄って油屋で中食、これが初めての追分訪問であった。
大正十一年（一九二二）
法政大学の教授となり（英文科主任）、のちスキー山岳部長ともなった。
大正十二年（一九二三）
九月、追分の油屋に逗留中関東大震災にあう。
翌年、西大久保から阿佐ヶ谷へ新築移転（杉並村阿佐ヶ谷五一一）。
大正十四年（一九二五）一月、野沢温泉で初めてスキーをはく。
一月二十八日、父八十三歳で死去。
三月、再び野沢へスキーにでかける。
七月、日光湯本に滞在、奥白根山へ登る。
十月中旬、菅沼達太郎と草津温泉から花敷温泉、野反池へ至る。
大正十五年（一九二六）一月と二月、野沢へスキーにゆく。
七月、白馬岳へ登り大池に至り、さらに小谷温泉から笹ヶ峯牧場へ越える。同行大村、田中、松村ら。
十月中旬、紅葉見物をかねて増富鉱泉から黒森、信州峠を経て梓山に至る。
昭和二年（一九二七）
一月、野沢へスキー。
五月、菅沼らと柳沢峠付近で一泊、将監峠を経て栃本へ下り大村宅に泊る。
七月下旬、田中菅雄の計画で初めて南アルプスへ行く。青木鉱泉から鳳凰山、仙丈岳、甲斐駒へ登り日野春へ下る。
昭和三年（一九二八）一月、野沢へスキー。
七月、長兄南日恒太郎（富山高校長）岩瀬の浜で水死。
八月、甥の石坂と白峯三山を縦走して西山温泉へ下る。案内人深沢義近。
昭和四年（一九二九）五月、『山と渓谷』を第一書房から刊行。この頃から早期の日本アルプスおよび奥秩父などへの先駆的登山は影をひそめ、峠、高原への山歩きがふえ、また全国各地への山旅が目立ってきた。第二次大戦中、戦後の一時期それらの山旅も出来にくくなるが、その後再び行われるようになって八十歳まで続けられたことは、驚嘆に値すると言って過言でなかろう。ここにそれらを詳述する余裕はないが、後出安川茂雄氏作製の年譜について見られたい。

昭和六年（一九三一）この年日本山岳会定款変更に伴い評議員となり、昭和二十一年六月まで在任した。
昭和二十五年（一九五〇）四月、日本山岳会名誉会員に推さる。
昭和三十八年（一九六三）春頃、秩父鉄道より雲取山にレリーフを建設したい旨の申し出があり承諾。同年十一月三日除幕式が催されたが、降雪と低血圧のため欠席。
昭和三十九年（一九六四）八月上旬、娘の和子および同僚などが同行して雲取山へ登る。三峯口から途中一泊して山上に至りレリーフを見て七ツ石山を経て鴨沢へ下る。八十歳の山歩きとしては特記に値する。
五月、雑誌『ハイカー』に連載した『わが山旅五十年』が桃源社から刊行された。
昭和四十五年（一九七〇）昭和四十四年まで毎年出席された有志閑談会にも、この年は「神経痛のため四月初から学校も欠席しています。残念至極です」と便をよこして欠席した。
昭和四十七年（一九七二）昨年来入院加療して一旦退院したが、九月二十二日午前十時頃逝去。享年八十八歳。葬儀は九月二十四日阿佐ヶ谷の自宅で行われた。なお十一月十日、赤坂のOAG会館で武田久吉、鳥山悌成氏らと共に三名誉会員の追悼会が催された。

主要著書（山岳関係）

日本アルプスと秩父巡礼（大正8・北星堂）、山と渓谷（昭和4・第一書房）、峠と高原（昭和6・大村書店）、紀行と随想（昭和9・大村書店）、山への思慕（昭和9・第一書房）、山路の旅（昭和13・新潮社）、青葉の旅・落葉の旅（昭和16・第一書房）、旅への憧がれ（昭和17・新潮社）、旅路（昭和18・青木書店）、日本の山（昭和21・生活社）、山行く心（昭和21・養徳社）、高原のあけ暮れ（昭和22・東海書房）、山茶花の咲く頃（昭和23・鳳文書林）、憧れの旅路（昭和29・元々社）、わが山旅五十年（昭和39・桃源社）、山旅と随筆（昭和40・世界文庫）、忘れえぬ山旅（昭和44・三笠書房）

『山岳』への寄稿

越中毛勝山（五年三号）、十文字峠を越え信州梓山より甲武信、三宝、金峰の三山に登る記（六年一号）、秩父の旅（十一年一号）、秩父の印象（同）、秩父旅行の思ひ出（同）、槍ヶ岳から日本海まで（十一年二号）、秩父行（十五年二号）、山岳文学に就て（二十八年一号）、文芸批評家としての小島君（四十四年一号）、林並木氏の追悼（五十四年）

（附記）略年譜および著書目録の作成にあたっては、田部重治著『忘れえぬ山旅』（一九六九年三笠書房刊）所収の年譜および解題・文献ノート（安川茂雄氏作製）に依るところ多大であった。僅かに誤りを正した個所があるが、記して謝意を表する。（編者）

佐々木健太郎氏（一八九四―一九七三）

会員番号五二一号の佐々木氏は、永年会員に推薦されることに決まった昭和四十一年十二月の年次晩餐会の前に、私に電話されて曰く「戦後は日本山岳会には殆ど行かず、御無沙汰をしていて敷居が高い。第一、知っている顔がないので、会場の八

芳園に連れて行ってくれ」とのこと。

私はそれまで佐々木氏がＪＡＣの会員であること、しかも大先輩であることは全然知りませんでした。

彼は藤島敏男氏や亡き主人より二年先輩で、同じく暁星中学育ちであり、後に一高、東大と進まれる筈のところ、一高なら医科、四高なら好きな科へと、祖父の厳命でしたが、医科をきらって四高の工科に入学され、東大の機械科を卒業されたのです。

彼の山好きは中学時代からで、従兄弟が海水浴で溺死されたので水泳は禁止されたため、それ以来、強力を雇って単独登山を始められたようです。特に四高及び東大時代には乗物の不便であった北アルプスによく登られたそうで、或る夏に針ノ木の雪渓で非常に困難されているので、冠松次郎氏がカンジキを貸して下さった。それを強力と片方ずつ穿いて黒部へ下られたこともあり、彼は五色ヶ原、篭ノ渡し、ザラ峠などの話を御子息連にされて、昔を懐しんでおられたとのことです。当時の彼の五万分の一図には、餓鬼山から祖母谷を経て宇奈月まで黒部を歩かれた印があり、八峰キレットで苦心された跡を見ることが出来ます。今でさえ、アプローチに不便な加賀の白山にも、当時既に登っておられ、休暇を利用して山をたのしんでおられたことは、人後に落ちないようでありました。

東京大学の卒業式と言えば学生は必ず出席した時代に、彼は欠席し、酒田市から山開き前の鳥海山に、強力を無理に説得して登られたことを見ても、いかに、青春時代の楽しみを山に見出されたかを知ることが出来ます。御子息から送られた彼の地図を拝見しますと、特に立山、黒部、大町の図幅は山小屋の焚火の香が浸み込んでいる感じがします。明治の末期から大正にかけて盛んに歩かれたときいておりります。

佐々木氏は、私共夫婦にとって忘れられない恩人とも言うべき方で、戦後、主人が彼の生き甲斐を感じた自転車業界にひっぱって、彼の性格を理解し、くせを見逃し、彼の天分を充分に伸ばせる地位と環境を与えられる様に努力をされた方であります。

暁星育ちの遠慮のない先輩と後輩という交りだけでなく、東京の山の手の子弟としての礼儀を守られた紳士でありました。

主人の追悼集の第一頁を飾られた原稿は、佐々木氏の最後の文章であり、本の完成を見ずに他界されたのです。

冬になりますと、ふぐ料理に誘って下すった佐々木氏と、いつも仲良く盃を重ねておりました主人の姿を思い出すことでしょう。

略　歴

明治二十七年（一八九四）六月十三日　金沢で生まれる。
大正六年（一九一七）三月　高野鷹蔵氏の紹介で日本山岳会入会、会員

番号五二一。
大正七年　東京帝国大学工科（応用化学）卒業。
創始期のゴム業界の発展に尽力。大日本機械工業（株）社長を経て日本自転車振興会初代理事長。従五位勲四等。
昭和四十一年十二月　日本山岳会永年会員。
昭和四十八年（一九七三）四月十五日　死去（七十九歳）。

（佐藤テル）

山下一夫氏（一九〇五―一九七三）

四十三年前に山下一夫君からもらった貴重な本が、とうとう片身となってしまった。

理学博士三好学、牧野富太郎共撰『日本高山植物図譜』の第一、第二巻である。二巻とも扉に「進呈　渡辺公平君　山下一夫　一九三〇年五月三日」となつかしい彼のペン文字が記されている。

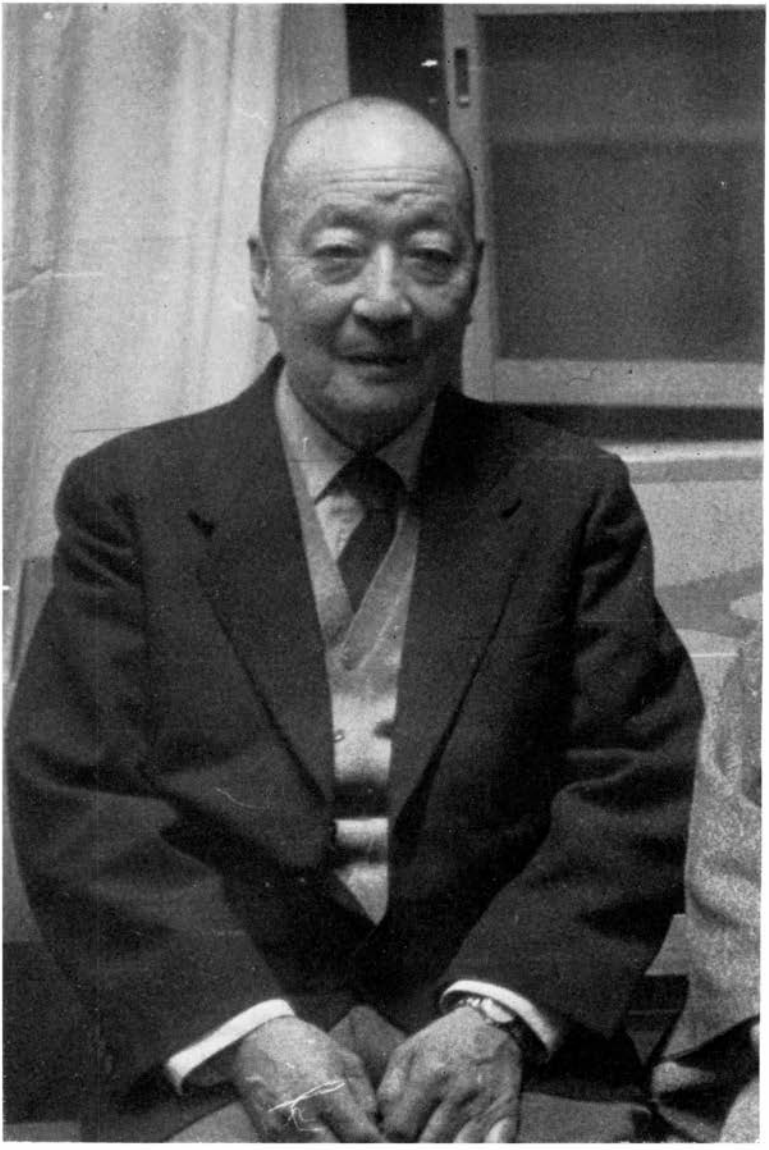
僕んとこには同じものがあるから、あげるよ、といって惜し気もなくくれたのだが、第二巻の見返しには「呈多胡君　著者」という署名があり、一巻のほうには T. TAGO というサインがあるところからみて、この著者献呈本の初の持主は多胡という人であったことがわかる。

どうしてこの二冊が山下君の手に入ったのか、その辺の経緯を一度聞いてみよう、みようと思っているうちに四十年も過ぎ、ついにとこしえに質ねることができなくなってしまった。この春三月十四日、山下君が三鷹市の杏林大学病院で亡くなったからである。

第一巻の刊行されたのが、明治三十九年八月、僕の生まれた日よりほぼ一年前。また第二巻は四十一年の一月。発行所は日本橋の成美堂で、当時の慣習だったのか、奥付には二人の著者と成美堂の判が押してある。

一九三〇年五月といえば、僕が学校を出て間もないころ。どういう理由で、このような珍本を僕にくれたのか、今もって判らないのだが、学生時代の僕にとって、彼が高山植物の先生だったことを思うと、あまりよく勉強はしない生徒だったが、その卒業を記念し、これからはこの本でよく勉強しろというつもりだったのかも知れない。

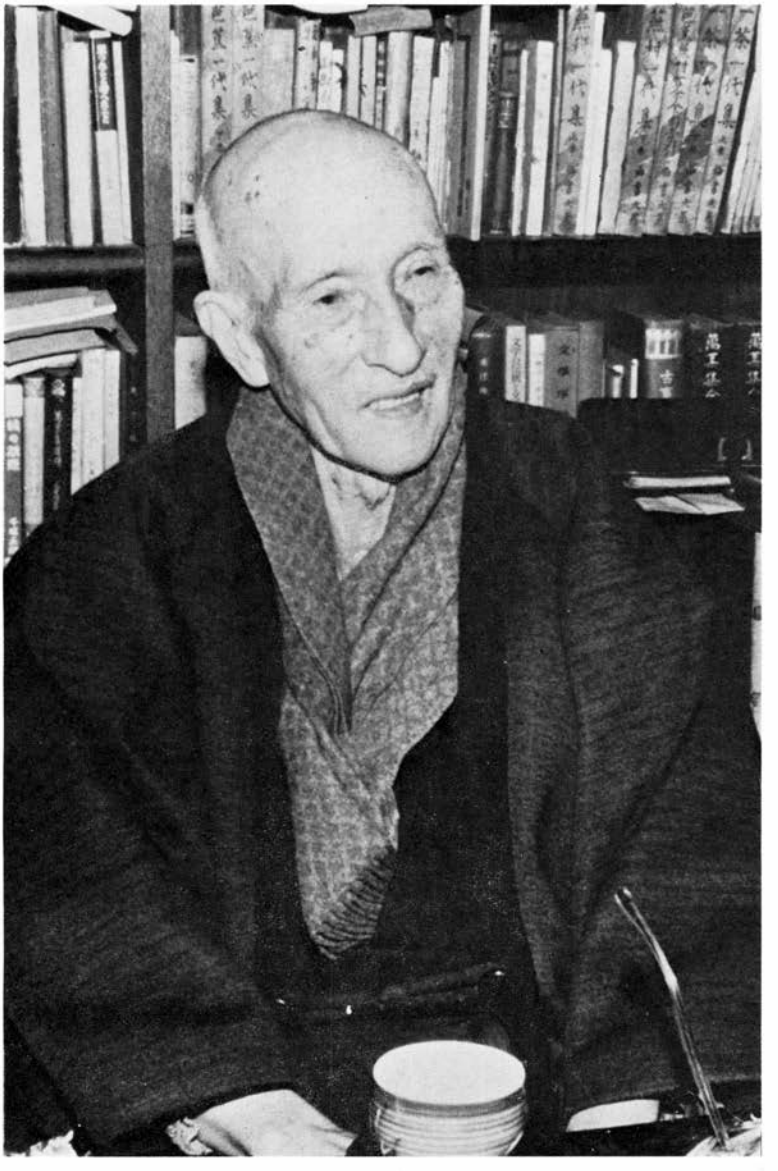
父君が博物の先生で、特に高山植物について造詣の深かった関係から、山下君も東京府立三中時代から父君とともに山を歩き、早稲田の山岳部に入ったころには、もう相当な山の植物の精通者となっていた。それは彼が部報『リュックサック』第六号に発表した「東北から北海道への山旅」を読んでもらえばわかる。「早池峰と、岩手と、ヌタツクカムウシュペ」という副題がついているように、この三山の登山記というより植物紀行



名誉会員　鳥山悌成氏

Yasunari Toriyama (Hon. men.)

(1884－1972)



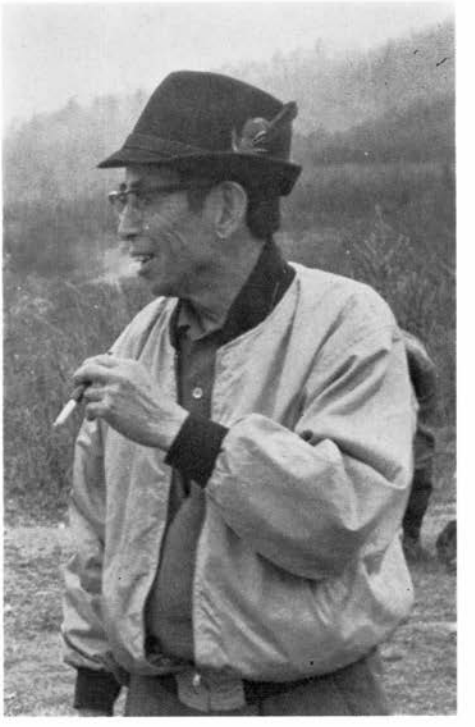
名誉会員　田部重治氏

Juji Tanabe (Hon. men.)

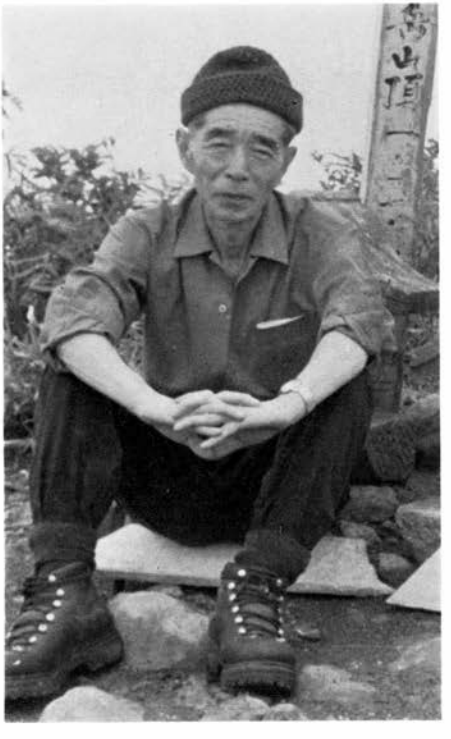
(1884－1972)

石井鶴三氏
Tsuruzo Ishii
(1887－1973)

佐々木健太郎氏
Kentaro Sasaki
(1894－1973)



小平 潔氏
Kiyoshi Kodaira
(1900－1972)



山下一夫氏
Kazuo Yamashita
(1905－1973)

といった内容だが、大学山岳部員の記録としては、まことに異色といっていい。

このうちヌタツクカムシュペについては僕にも思い出がある。このヌタツク行は、はじめ僕と二人で石狩岳からニペソツへの縦走を計画していたものである。僕がにわかに出られなくなったためニペソツ計画は延期して、彼単身で大雪山へ出かけ、八月末から一週間ほど黒岳の石室を拠点に、秋風の立ちそめている大雪の稜線や谷を歩いた。

もし、このときニペソツ行が実現していたら、僕はまただいぶ高山植物について教えられたことであろう。惜しいことをしてしまったと悔やまれるのは、彼と二人で北海道の山を歩く機会を、その後も持てなかったことだ。

早稲田の山岳部に入るまで、山の植物について全然無知だった僕に、とにもかくにも興味を抱かせるようにしたのは彼であり、山登りそのものについても、僕よりキャリヤーも長く、あらゆる点で先生格だった。山岳会に入会したのも僕より五年早く、一九二五年で、いつも登山服の胸に赤銅色のＪＡＣのバッジをつけていた。あと二年も元気でいてくれたら、永年会員のバッジを胸に飾ることができたのに、と思うと残念である。

学生時代から彼はスケッチが巧みだった。いつもカメラの代りにスケッチブックをポケットにいれていた。最近でもこのことに変りはなかった。昨年の暮近く八王子の病院へ見舞に行ったときも、山や植物のスケッチが小さな画帖にいっぱい描かれていた。

『山岳』の表紙のカットでも、彼の絵は会員になじみだったし、『リュックサック』その他の機関誌や単行本にも、彼はよく頼まれてカットを描いた。

しかし山岳会の会員といわず、登山者の印象に最も強く残っている彼の画といえば、『山日記』に連載された「山の植物」であろう。

一九六〇年版の第二十五輯から六九年版まで、右のような標題で、初心者のために高山植物のわかりやすい解説図を描き続けた。一九六三年版からカラーになって、見て楽しいだけでなく、植物の名称を知りたいという登山者たちの手引書として、たいへん役立つようになった。

「絵はうまくないが、できるだけ山での生態に近い姿で捉えたところがミソなんだよ。だから精密さでは完璧とはいえないが、花の名を知ろうとする人たちには、少しは重宝されるんじゃないだろうか」と彼は言っていた。

毎年五、六十種類かの花を描くんだから、たいへんな仕事だったと思う。十年も描き続けて十冊にもなったんだから、一本にまとめてみてはとすすめる人も少なくなかったが、「僕のはアマチュアだから、本にするにはまだまだたいへんだよ」と、出版の話には乗らなかった。

このアマチュアの先生と二人で、よく山を歩く幸運に恵まれた私は、花の名前だけでなく、高山植物についての興味のある話をしょっ中聞かされた。図譜はとにかく、そんな話だけでもまとめてみたら面白いじゃないか、とよく話したのだが、ついにこの計画も実現しないうちに、彼は天国のお花畑に旅立ってしまったのである。

自分の本こそ遺さなかったが、そのかわり足立源一郎さんの『日本の山旅』や、坂本直行さんの『雪原の足あと』や、初見一雄さんの『すこし昔の話』など見事な山の本をたくさん造って、われわれを楽しませてくれた。

山下一夫といえば誰でも高山植物を連想しがちだが、戦後交通博物館の仕事に転じるまでの彼は、雑誌編集者として活躍した。学校を出て『登山とスキー』の黎明社に入ったのが第一歩。昭和十一年には交通公社に移って『旅』の編集に当った。『旅』に山の記事が目立つようになったのは彼のせいである。ジャーナリズムを通して登山やスキーの大衆化に残した彼の足跡を私は評価したい。

学生時代の山のパートナーも、卒業して職場が違ってくると、なかなか一緒に山など出かけにくいものだが、新聞記者として鉄道省（現在の運輸省プラス国鉄みたいなもの）や公社を担当していた私は、仕事の上でも遊びの上でも、つねに彼と会う機会に恵まれていた関係上、よく二人で小さい山に出かけた。社会人になってしまってからも彼の脚は強かった。

その強脚の一番印象に残っているのは悪沢岳から赤石、塩見と歩いた山行の帰り、鹿塩から伊那大島へ出たとき。一緒だった須藤宣之助君は「なにもそんなに急ぐ必要なんかないじゃないか」と怒ったくらい、彼の歩調は早かった。

私は彼の快速になれていたから「またエンジンがかかったんだ。一人で歩かせときゃいいんだ」と須藤君に言った。

植物採集のための胴乱や、腊葉用の古新聞などを、しこたまザックに入れているんだから、つねに私達より重荷をしょっていたくせに、彼の脚力は全然ハンディーを感じさせなかった。

二人だけでやった初の長い山旅は、湯の小屋から狩小屋沢をさかのぼって至仏を越え、尾瀬から沼山峠、大津岐峠を越えて銀山平に泊り、枝折峠を大湯温泉に下った昭和二年晩夏の山行だった。

はじめは尾瀬から平ヶ岳を越えて銀山平に下る計画だったのだが、猫又川の上流で熊におどろかされたり、藪がひどくて二人だけでは手強すぎるというような理由から、平ヶ岳は来夏に延期し、尾瀬からぶらりぶらり大津岐峠を迂回することに変更したのであった。

山の帰りに、彼の父の長兄に当る山岳会の大長老、大平晟氏を小千谷郊外の高梨に訪ねたりしたのも、そんな旅だったからだろう。

しかしお蔭で、私はかねてから一度はお目にかかりたいと願っていた大先輩の謦咳に接することができて、非常に嬉しかった。

先年苗場山に登ったとき、新雪で化粧されたこの名誉会員のレリーフに、久しぶりでごあいさつをしてきたが、太平さんも教育者だったことを思うと、山下君にも植物の先生になれる下地がじゅうぶんあったんじゃないか、また先生にしたかったとよく思った。

平ヶ岳はその次の夏に仲間をふやして目的を果たしたが、猫又川源流地帯から白沢山までの薮漕ぎでも、彼はその強さを発揮した。

私はいまでもはっきりと彼との山での出会いを思い出す。

それは穂高・槍縦走を目指して徳本峠を越えた大正十五年七月の暑い日のことだ。五、六人で組んだ私たちのパーティー、私の前を黒い普通のズボンをはいた逞ましい脚が、しっかりした歩調で進んでいた。はき古した鋲靴から時折り火花が散った。恐ろしくその歩調が早かった。私は黒ズボンのリズミカルな動きを見つめながら、黙々としてその後についていった。その黒ズボンの主が山下君だったのである。

つい最近でも彼は同じようなズボンをはいていた。そしてその脚力もそう衰えはみせていなかったようだ。まだまだ五年や十年は、あの調子で山を歩きまわるんじゃないだろうか、私たちはみなそう思いこんでいたのである。

運命とは残酷なものである。

略　歴

明治三十八年（一九〇五）六月九日　東京市に生まれる。
大正十二年三月　東京府立第三中学校卒業。
同　十三年四月　早稲田大学専門部商学部入学。
同　十四年四月　日本山岳会入会（会員番号九五四番）。
昭和二年　早稲田大学中退。
同　三～五年　兵役。
同　八年　黎明社入社『登山とスキー』編集長。
同　十一年二月　日本旅行協会（現日本交通公社前身）入会。『旅』の編集に従事後、編集長。
同　十三年八月～十二月　応召。
同　十六年七月～十八年二月　応召。
同　十九年七月　応召。
同　二十年九月　復員、日本交通公社に復帰、交通博物館勤務。
同　三十三年二月　交通博物館次長。
同　四十年六月　同館定年退職、交通公社出版事業部嘱託。
同　四十八年（一九七三）四月十四日　東京都三鷹杏林大学病院で死亡。

（渡辺公平）

小平　潔氏（一九〇〇―一九七二）

小平君は昭和六年五月ＪＡＣ入会（会員番号一三一三番）紹介者は山崎和一、松方三郎と私の三人である。開成中学の同期でもあり義兄に当る山崎君（故人）は、その頃熱心な会員で、土曜日午後の常連のひとりであったから、小平君と連れ立って虎の門のクラブルームへ来たことがある。その頃顔見知りになったものの、彼はＪＡＣの会合などにあまり顔を出さなかったので、相見る機会がなく二十年近い歳月が流れた。しかし私の頭から彼の名が消え去るようなことはなかった。

戦後お茶の水のクラブルーム建設基金募集のとき、私は彼のことを思い浮べ勤め先きに訪ねて、第一銀行山岳部からの寄附をもらってきた。これがキッカケとなって旧交を温めることになったのだが、相往来し殊に文通しげくなったのは、彼の晩年十余年のあいだである。銀行を去ってほか（有終会―シチズン―高千穂交易）に移ってから、彼は社用で北は知床半島から南は開聞岳の方まで頻りに旅に出る。行く先きざきから得意のスケッチだよりが届く。こちらも山旅のたよりを返えすといった具合で、そのやりとりは本当にたのしかった。おたがいに年中連休だから週日の午後、銀座渋谷新宿などで落ち会い、昼さがりの静かなビヤホールで、ジョッキイを傾けながら閑談にふけり、画廊を巡ったり、御苑を散歩したり、「オイ今頃まだみんなコンクリートの箱の中で、判ンコを押したり、会議をやったりしてるんだよ。お気の毒さまだね」こんな減らず口を敲いたり、当節オイソレと得難いよい相手であった。

戦後の混乱時代に離れていたＪＡＣへも五年ほど前に復活し、小集会や年次晩餐会に出席したこともある。ヒマがあるのだから山旅をともにしようと誘っても、近年まるで山から遠ざかっているので、自信がないと中々応じなかった彼が、一九七一年九月広河原の小舎から北岳肩の小倉まで登り、すこし自信がついたというので、十一月軽井沢――霧積温泉泊――鼻曲山――長日向とあるいた。葉をふるい落した初冬の山のたたずまいは彼の画嚢をみたし、久し振りに山の頂上をふんだと大喜びであった。しかし、これが彼と山行をともにした最初にして最後となった。一九七二年春から不調を訴え、九月一日不帰の客となる。どうしてみんなこうも先きへ逝ってしまうのか！

小平君は器用多才な人であった。山登り（熊本・第五高等学校時代から）、スキー（東京帝大時代から）、ゴルフ、弓術、スケッチ、水彩、油彩（慈彩会出品）、木彫、最も堂に入っていたのは、篆刻（京都在住のとき師匠についたという）、従って書もたくみであった。私が拙ない書物を上梓するに当って（一

九七〇年）中扉のカットと題簽を乞うたところ快く引き受け、その上「附録」に一文を草してくれた。限定版に用いた「留心山谷」「不二」の刻印も彼の手になる。いづれも流石とおもわれるものである。それらはこれからも永く私の手許に残り、私をして彼の厚意と友情とをいつまでも忘れさせないであろう。

（一九七三年十月七日記）

（藤島敏男）

川喜田壮太郎氏（一九〇四―一九七二）

昭和四十七年二月十五日JACの第二八一回小集会は、川喜田君の「エベレスト見物」。スライドをみせながらのネパール印象雑談といったようなもので、講演者と親しい老童達も沢山出席して、なごやかな会合であった。前の年の十一月のネパール行は大分疲れた様子だったが、その夜は元気そうに見受けられた。いずれまたといって別れたのだが、それが彼と私との最後の面晤となった。

小集会の翌々日横浜で入院――二十日手術――三月退院――三重県自宅に戻る――五月再入院――六月退院自宅療養――九月二十七日永眠。まったく人間のいのちは、本当にはかないというよりほかに言葉がない。

昭和七年五月、神津牧場荒船山へ同行、六月JAC入会には紹介者のひとりとして私が署名しているところから、川喜田君とのおつきあいは、この頃に始まったものであろう。親しい往来や文通が戦前戦中戦後とつづいて来たが、山あるきをともにするようになったのは、最初の荒船山から十九年目、昭和二十六年五月のことである。彼はその前年、銀行の頭取になって毎月会議のため上京し、よく私を訪ねてくれたものだ。仕事が重荷というわけでもあるまいが、心身の疲れがみえるようなので、私が「君の頭取業は三菱や住友の傭われ頭取とちがって、家業みたいなものだから、いつになったら辞められるという目安がたたない。いまの内から疲れていては仕様がない。遠慮なんかいらない。適当に息抜きをして自分の心身を大切にしなさい。山が好きなのだから僕と一緒に山旅をしよう」とすすめ、手はじめに残雪の燧ヶ岳、会津駒に登り銀山平を抜けて、六泊一週間のたのしい旅をした。頭取が電話も電報も届かない山中を、一週間ぐらいほっつき歩いていても、別に銀行がつぶれる心配はないことが判明して、爾来私と出かける機会が多くなり、そうこうするうちにJACの老童仲間が出来て、随分あちこちの山に登った。ただ、その仲間が一癖も二癖もある連中だから、月並みな混み合う山をえらばず、ときにはそれはどこだというような山も少くなかったが、川喜田君は一度も文句など

いったことはない。人烟まれな山谷を放浪して、いたるところで彼の特技の素早いスケッチをして楽しめれば、それで充分満足していた。亡くなった深田久弥君とも彼はたびたび山行をともにした。その『日本百名山』の内いくつ登ったとか、南端の宮ノ浦岳へ登ったから、北端の利尻岳もといった話もきいたが、だいたい登る山に注文をつけるようなことは、あまりなかった。ある意味ではおおらかな山好きといえるだろう。

昭和三十四年に始まった吾々仲間の正月登山に、彼が加わったのは三十九年一月からのことで、彼にしてみれば年末年始の来客をスッポかし、美しい冬の自然の姿に接するのは、よほど嬉しかったにちがいない。その初回に正真正銘の伊勢エビと川喜田夫人手製のマヨネーズソース、バーガンディの白ブドウ酒を持参して、吾々を喜ばせてくれた。爾後四十六年一月までそれがつづいて、年の暮が近付くと老童の中には、「この正月、エビは参加するのかしら?」などという不埒な言辞を弄するものもあった。頭数だけのエビを入手するのも、たやすいことではあるまい。また彼自身はアルコールを殆んど嗜まないのに、エビに合う白ブドウ酒を持参するなど、通一遍の親切心だけでは中々できないことである。

歿後、のこされたノートから夫人の浄書された略年譜によると、川喜田君は若いときから山野跋渉、旅行を好み、学生時代に父君とともに世界一周旅行などもしている。戦前、支那、南洋諸島（二回）にも遊んでいるが、最近十年ほどのあいだ、空の旅が便利になってからは、ほとんど毎年のように海外へ出かけた。公式の会議、大会、或は視察団に加わったり、ある場合には家族同伴の私的旅行もたびたびあった。ゆく先きざきでスケッチブックを取り出し、ひとを喜ばせたり、自分が楽しんだりしていた。どこかへ視察団の一員で出かけたとき、一行と離れてバザールをひやかしたり、民俗の写生をしたり勝手に行動していたところ、東芝かどこかの社長から、「この中でエコノミック・アニマルでないのは、あなただけですよ」と言われたのを、うれしそうに話してくれたことがある。

彼は青年時代、当時の新劇運動に刺戟されて、舞台美術、舞台照明の本職になろうと志したこともあったらしいが、終生かわらなかったのは写真と絵筆をとることであった。写真では『南洋の旅』（昭和十五年三月刊、三五〇部限定、丸善）、絵では『ソ連とイランの画信』（昭和四十一年十一月刊、二千部、丸善）と二つの美しい本を作っている。油彩は昭和三十一年創元会に初出品、準会員、会員と進んで四十二年には審査員に名を連ねて、余技としては本物の域に達している。尤も毎年の出品をみて「ことしはヴァン・ドンゲンばりだ、今年はラウル・デュフィーばりだ、ことしはアンリ・マチスばりだ」と私が酷評すると、しいて反駁しなかったところをみると、この巨匠たちの絵が好きだったのかもしれない。

ＪＡＣでは四十年の在籍だから、知人友人の範囲も拡がり深い関心を寄せ、戦後いろいろの機会の募金にも応じ、忠実な会員であった。会報誌のカットでソー或はＳＯとあるのはみな川喜田君の描いたもの、旅信山信の収録されたものはかなりの回数にのぼっている。ここに是非記しておきたいのは、『山岳』第三十五年、第三十六年の奥附に発行者川喜田壮太郎の名をみる由来である。昭和十五、六年、既に当国は物資欠乏、用紙統制で、自由主義者の集まりと非難されていたＪＡＣの刊行物に、希望の用紙を入手するのは至難という話だった。川喜田君が柏原洋紙店の主人と親戚だか友人だかときいていたので、私が彼に相談したところ、発行者を川喜田壮太郎にすれば紙はくれるというので、用紙さえ手に入れば名義など誰でもよろしい。つまり川喜田君は身をもってではない、名をもってＪＡＣの急を救ってくれたわけだ。ご本人はとっくに忘れていただろうが、後世史家のためにもここに記して、故人への謝意に代えたいとおもう。

四十七年六月ＪＡＣ終身会員になったというので、病床へ宛て「早く元通りの健康になって、終身会費のモトをとりなさい」と書き送ったが、それから僅か三ヶ月にして川喜田君は還らぬ人となってしまった。ほんとうに残念である。

歿後四ヶ月、四十八年一月下旬、川喜田家と友人と合同で故人を偲ぶ集りを東京で催した。夫人から住所録の名前に山のしるしがついていると連絡があり、その連中が洩れなく参会、川喜田一家も総出、故人の山での失敗談や苦労話、遠慮のない追憶談が続出、いまさらのように逝った人を惜しみ、懐しんだ。山印で顔をそろえた連中は、みんな山旅は共にしないまでも、故人と山を通じて親しくした人ばかりで、川喜田君が、日頃頭取会だの銀行協会だので顔をあわせる碌な話題を持合わせない種族のほかに、山印をたくさんもったことは、彼を一介の銀行屋サンに終わらせず、彼にとって倖わせであった、と思うのはおなじ山好きの私の身贔屓であろうか。（一九七三年十月三日記）

（藤島敏男）

（追記）会報「山」三三〇号一九七二―十二月。「川喜田さんを偲ぶ」村尾金二稿、参照。

略歴・山歴

明治三十七年（一九〇四）八月九日　三重県津市で久太夫の次男として誕生。

明治四十四年四月　小学校入学後、長谷山、経ヶ峯、朝熊山に登る。

大正六年四月　宇治山田中学校入学、宇治山田―逢坂峠越―磯部―青の峯―鳥羽。この頃から既に絵を画くことが好きになる。

大正七年八月　富士山。

大正九年四月　東京私立麻布中学に転校。在校中、武州御岳、榛名山、浅間山、箱根駒ヶ岳、筑波山に登る。

大正十一年四月　麻布中学四年終了にて法政大学予科入学。九月、朝鮮旅行。

大正十二年三～九月　父に従い世界一周の旅、ヴェスビアス山に登る。
大正十三年八月　吉野三之公。
大正十四年三月　家族と上海旅行。四月、法政大学経済学部進学。
昭和二年七～八月　ジャワ、カンボジア方面へ旅行（父、弟と共に）。ジャワ、ブロモ火山に登る。
昭和三年四月　大学をおえて日本銀行入行。
昭和四年十一月　結婚。阿蘇山。
昭和五年　白馬岳。
昭和六年六月　北京方面へスケッチの旅。十一月、大菩薩峠。
昭和七年五月　神津牧場―荒船山（藤島敏男、田中菅雄氏らと）。六月、赤城山、神津牧場。谷川岳。八月、神津牧場―八風越―軽井沢。
同　年六月　日本山岳会入会、会員番号一三六九。紹介者は藤島敏男、角田吉夫、神谷恭の三氏。
昭和八年九月　富士山（六合目まで）。
昭和九年九月　笹ヶ峰―小谷。十二月、赤倉、燕、関スキー。
昭和十年一月　野沢スキー。二月、谷川岳マチガ沢スキー。三月、湯沢芝原峠スキー。十月、上海、杭州への旅。
昭和十一年三月　日本銀行退職、七月、百五銀行役員、東京に駐在。七月、野辺山、海ノ口牧場。
昭和十二年二～三月　南洋群島、セレベス、フィリピン、台湾への旅。
昭和十三年八～九月　再び南洋群島への旅。
昭和十四年十一月　志賀高原。
昭和十五年七～八月　北海道へ画をかく旅。
昭和十六年一月　多武峯。三月、湯桧曽、土樽スキー。十月、三留野―大平峠―飯田―天夜峠。
昭和十七年七月　白馬岳、志賀高原一周。九月、戸隠山。
昭和十八年一月　五色スキー。二月、根子岳スキー。三月、霧島山、九重山、六月、信州峠。八月、鬢科親湯―伊那宝来寺山。柏木―河合神川―西山―新宮―湯の峯。十一月、茨木猪之吉画伯と交際始まる。
昭和十九年一月　大門峠（茨木氏と）。三月、由布岳、高千穂峰、金峯山（熊本）。六月、入笠山。浅間山。七月、東京を引揚げ津に帰る。
昭和二十年二月　百五銀行副頭取。四月、白猪山。五月、亀山峠越。十月、土湯峠。藤原岳。
昭和二十一年三月　観音岳。六月、大洞山、尼ヶ岳。八月、御在所岳。花抜峠―大杉谷、大台ヶ原山。
昭和二十二年二月　鷲嶺。三月、矢頭山。六月、大門峠。七月、時山。九月、御在所藤内壁。十一月、青山峠。
昭和二十三年四月　矢頭山。五月、馬飼峠。
昭和二十四年五月　鬱岳。
昭和二十五年八月　鈴鹿峠。九月、頭取就任。
昭和二十六年三月　逢坂峠。五月、亀山峠越。五月、尾瀬、会津駒、銀山平。十一月、木曾御岳。
昭和二十七年四月　鬱岳。五月、八幡平―玉川温泉―山形―高湯―蔵王山。
昭和二十八年三月　倶留尊山。別子越。七月、加賀白山。十一月、神坂峠―恵那山。
昭和二十九年五月　倶留尊山。五月、ドノコヤ峠、デンツク峠、三伏峠。七月、吉野三之公。十一月、桧原峠、保成峠。
昭和三十年四月　安倍峠。
昭和三十一年四月　第十五回創元会展に初出品して入選。爾来毎年出品入選。五月、焼額山、渋峠、草津白根山。七月、吉野三之公。九月、双六小舎―槍ヶ岳―上高地。

昭和三十二年五月　倶留尊山。七月、早池峯、栗駒山。十一月、甲子山。

昭和三十三年八月　湯の平―北股岳―御西岳―大日岳―飯豊山―小玉川温泉。

昭和三十四年四月　局ヶ岳。五月、以東岳―大朝日岳。十二月、五知越。

昭和三十五年一月　経ヶ峯。三月、会津山王峠―尾頭峠―八方ヶ原越。五月、八方尾根。六月、聖岳、奥聖。七月、比叡山。八月、三重県公安委員。九月、安楽峠。十一月、大杉谷―吉野三之公―高見山。

昭和三十六年一月　油日岳。五～六月、マニラ、香港へ船旅。九月、薬師岳―雲ノ平―三俣蓮華―鷲羽岳―水晶岳。

昭和三十七年一月　飯福田山。三月、鈴鹿入道岳。六～七月、ソ連への旅、帰途ブダペスト、インスブルック、ジュネーヴ、シャモニーへ行く。十一月、岩菅山。

昭和三十八年三月　尾高高原。六月、岳温泉―安達太良山―鉄山―沼の平。十月、蓼科高原。この年創元会々員に推挙される。

昭和三十九年一月　青崩峠―熊伏岳。四月、デンマーク、スウェーデン、フランスを廻ってテヘランへの旅。七月、吉野三之公。八月、信州鉢伏山。十一月、井川峠。

昭和四十年一月　遠州秋葉山。五～六月、カナダ、アメリカ、ヨーロッパの旅（バンフ、ツェルマット等で山を楽しむ）。七月、立山。十一月、堀坂山。十一月、長者岳、天子ヶ岳。

昭和四十一年一月　七ッ峯。三月、稲含山―ホーロク峠―投石峠―土坂峠―仙元峠。五月、屋久島宮の浦岳。開聞岳。十一月、アメリカ西部、メキシコへの旅。

昭和四十二年一月　守屋山。二月、天城万三郎岳。三月、五知越、神宮林。三月、久慈男体山、八溝山。五月、伯耆大山。九月、宝剣岳―木曾駒ヶ岳。十一月、四国剣山。石鎚山。雲母峯。この年創元会審査員となり四十七年までつづける。

昭和四十三年一月　御池山。五月、オーストラリア、ニュージーランドの旅、タスマン氷河を少し歩く。六月、瑞牆山。八月、新穂高鍋平。九月、大峯山。十月、未丈岳。

昭和四十四年一月　御堂平、熊森岳。二月、鈴鹿羽黒山。四月、越前荒島岳。六月、チロル、ドロミテ方面への旅。九月、信州鉢伏山。十一月、長谷山。仙ヶ岳。経ヶ峯。

昭和四十五年一月　権兵衛峠。御在所にてミニスキー（チロル製）を試む。矢筈山。二月、バンコック、チェンマイ、アンコールへの旅。四月、妙義山。五月、蓼科、横岳。六月、額取山、大将旗山。七月、八甲田山、岩木山。八月、利尻岳、有珠岳。十月、妙高山、火打山。十一月、氷ノ山。竜爪山―俵峰。

昭和四十六年一月　蛇峠山。二月、足和田山、雨ヶ岳。五月、八丈富士。国師岳。六月、金時山。七月、三国峠―仙ノ倉山。十一月、頭取を退き会長となる。十一月、インド、ヒマラヤの旅。

昭和四十七年（一九七二）一月　額井岳。二月十七日腸に腫瘍を発見、二十日横浜山手病院で手術。三月十七日退院帰津。五月十日黄胆にて三重大学附属病院入院。六月十日退院自宅療養。九月二十七日死去、享年六十八歳一ヶ月。

（編者）

足立源一郎氏（一八八九―一九七三）

クラブルームの土曜会をこよなく愛された足立さんは、他に所用のないかぎり出席されて、足立さんらしいユーモアを発散されていた。興がわくとくわえたばこの灰が落ちることなど無関心に、話に夢中になられるのが印象的であった。足立さんのお話の中にはしばしば風流談のたぐいが出たし、山小舎の夜でもそういう話をされたようである。

本会地方支部で行なわれる小集会等にも時折り参加されていた。越後支部の佐渡の山、山梨支部の木暮翁碑前祭、静岡支部の紅葉会等には私もよく同行して、何処にあっても変りないあの温客に接する機会がしばしばであった。

また霧の旅会の会合にもお招きしたが、参加されたことは再々であった。数年前に同会々員としてお迎えして、今後の御交誼を大いに期待していた次第である。

新しいクラブルームが湯島のさくらビルに移転し、環境の良い談話室で五月十二日（昭和四十八年）に初の土曜会が発足した。なつかしいメンバーが参加されたが、足立さんのお姿が見えないのがいかにも淋しいことであった。

昨年春、白内障のため手術されたあと、ご自宅へお見舞に伺うと、眼鏡を遠近五個も作って非常に面倒であると述懐されていた。そのあと不運にも胃潰瘍の手術のため再度入院されて、結果は胃癌で、ともしびの消えるように三月三十一日八十四歳の生涯をとじられた。

足立さんは明治二十二年、大阪は博労町に末っ子として生まれた。御両親が旅行好きだったので、少年の頃は高野山、吉野山、その他へ行く機会に恵まれた。こうして足立さんの旅行、登山癖は少年の頃に培われたようである。

明治三十八年、京都市立絵画工芸学校に入学されて、三十九年夏、富士山へ登られたのが高山として始めてであった。大正十一年にスイスに遊んでスキーを習ったというから、山やスキーへの好みはその頃既に相当強かったようで、その後の永い生涯をかけて、日本ばかりでなく海外の山へも出かけられ、山の絵にうちこんで多くの傑作を残されたことは、ここに改めて申すまでもない。また足立さんは極めて健康に恵まれていたので、山岳画家として第一人者であったばかりでなく、本会々員としても老年に至るまで、日本のあらゆる山地へよく出かけられた方であったと思う。

少年の頃は病弱だったために、八十歳以上の生命は儲けものだと口癖のように云われ、達観した人生を過しておられたのであった。

四月五日の葬儀は鎌倉七里ヶ浜ホテルで行なわれた。白布の祭壇にはなつかしい山行時のお写真とピッケル、尻皮、帽子が飾られ、洋蘭の香が漂うところに桧の桶があり、石の地蔵さんが置かれてあった。施主と春陽会代表の参拝と共にワインが桶に注がれたあと、日本山岳会三田会長の弔辞があり、松本（善二）名誉会員、成瀬副会長から花輪が捧げられ、一般のお別れは地蔵さんにワインを注ぎかけるというもので、その列が長く続いた。

各界代表者に依る故人を偲ぶ挨拶があり、パーティーにうつってから木桶のワインも呑み乾されて、無宗教で画期的なお別れの時間は過ぎていった。

その後施主よりの挨拶状と共に故人の訣別の書が同封されていた。生前から用意されたもので、故人の生涯を通じての感慨が彷彿として、私達の胸に迫るものがあった。ご家族の同意を得て、ここに掲載させていただくことにした。

いつのほどよりか一期一会を心として、自然と人に接して来ましたので、病弱だった少年の頃には想像もしなかった長い歳月を過ごしました。回想すればまことに慚愧にたへぬことばかりですが、総ては好きな山行と山を描くことに専念した愉しい生涯でした。

恒に荘麗な自然と辱知皆様の御交誼と御芳情に因るものと深く感謝して居ります。崇巌をほこる岩峰も日毎に落石を走らせ、鮮烈な氷河も年毎に退嬰する自然の相を教へて呉れました。私も愈々還元される時が参りました。皆様の御清福と御自愛を祈りつつ左様ならと申上げます。有難う御座いました。

昭和四十八年三月三十一日　　足立源一郎

略歴

明治二十二年（一八八九）　大阪市博労町に生まれる。
明治三十八年（一九〇五）　京都市立絵画工芸学校入学。関西美術院で浅井忠に学ぶ。また太平洋洋画研究所に学ぶ。
大正三年（一九一四）　渡仏。第一次松方コレクション選定。
大正七年（一九一八）　帰朝。ケープタウン廻りで八十日の航海。藤村の原稿を携える。日本美術院洋画部同人。
大正十一年（一九二二）　再渡仏。グリンデルワルト、ツェルマット等にてシュトリ他から一本杖によるスキーを習う。
大正十三年（一九二四）　帰朝。春陽会創立会員。
一九三〇年頃から山岳を主題とした作品が多くなる。
昭和九年（一九三四）六月　日本山岳会入会、会員番号一五二四。紹介者は中原繁之助、茨木猪之吉氏。
昭和十二年（一九三七）　積雪期台湾登山、新高山、大覇尖山、南湖大山等、新高山ではスキーを用う。田中薫氏らの神戸商大グループに同行。
昭和二十一年（一九四六）より北アルプスを中心に山岳画を描く。また

特に九州への旅行が多くなる。
昭和三十六年（一九六一）　渡欧。モンブラン、マッターホルン、エギーユ・デュ・ミディ等を描く。
昭和四十五年（一九七〇）　長塀山に登り穂高岳を描く。
昭和四十八年（一九七三）　三月三十一日逝去。

著　書

ドオミエ、ルウッソウ	大正10	日本美術学院
人物画を描く人へ	大正11	日本美術学院
古美術行脚、大和	大正12	アルス社
山に描く	昭和14	古今書院
山は屋上より	昭和31	朋文堂
日本の山旅	昭和45	茗渓堂

（松本熊次郎）

荒巻広政氏（一八九二―一九七二）

先生、今度は年次晩餐会でお会いしましょう、それまでお元気でといって楽しみにしていたのに、とうとうお会いすることができなかった。昭和四十七年十二月一日、秋田を離れてから五年目、郷里千葉流山市に八十歳の生涯を閉じられた。

先生と秋田の登山界とのつながりは、絶対に切れることのないつながりを持っており、秋田県山岳界の草分けであり、県山岳連盟をはじめ単位山岳会の育ての親であった。

私とは親と子ほどの年齢差がありながら、実によく、できたばかりの私達のグループを自分から進んで面倒を見てくれた。会合や行事には必ず出席し、若い者には負けていなかった。或る時、先生にはよく暇がありますねといったら、「君、暇は天から降るものでなく自分で作るものだよ、忙がしいのは仕事に追われるからで、自分が仕事を追って行けば暇はいつでも作れるだろう、ね」こんな調子で一度も休まず出席されるものだから、自分の主張も通すといったワンマン振りもあった。時には「頑固オヤジ」と言われながらも、若者と山行を共にしては人を信頼しあった。特に登山を始めて以来「自然を愛すること」、「絶対安全」、いわゆる現在の自然保護、安全登山が先生の確固たる柱として、戦前、戦後を通じて一貫した荒巻思想が現在の中年層にうえつけられていた。

近年、安全登山の域を脱したロッククライミングに反発を感じてか、クライマーの軽業かアクロバットと批判していたことも、とにかく安全登山に徹せとの直言でもあった。

私がようやく山を歩き始めた頃、いち早く知ったのが「秋田駒ヶ岳」の先生であった。当時秋田では少ない日本山岳会員の長老として、秋田県山岳会長をしておられ、戦後の食糧、交通難時代に山仲間を集めることに奔走していたことを知ってい

る。

このころ、私達がアキタ・アルパインクラブを結成するに当り、先生の指導を仰ぎ、その翌昭和二十六年に、そのお礼返しではないが秋田県岳連の組織作りに協力し、先生を初代会長に推し、以来十年間秋田岳連発展のために貢献され、中でも三十六年の秋田国体の際は、毎夜欠かさず夜業している私達に激励に来られ、難題は自分で片づけてくれるくらい、まだ青年並の行動力を持っていた。

「アマチュア・スポーツの発展は誰かが犠牲にならなければいけない」と言って、常に自分の時間を犠牲にしてまで、岳連発展に寄与してくれたことは、ただ頭の下る思いであった。

或るとき、「君、秋田にもう一つアカデミックな会を作ろうよ」と言うので、何を今更と思ったが、国体遂行も一つの理由であったが、日本山岳会の支部を作るのが先生の最も大きな望みでもあったようだ。むりやり会員を集めて三十四年に秋田支部結成総会を行い、国体遂行に万全の構えを作った。

こうして、秋田ではワンマン的存在として批判をし、遠ざかる者さえいたが大勢の信頼と尊敬は動かなかった。国体成功を機に長い間の県岳連会長を退き専ら自からの道を楽まれた。長唄（宝生流）等はその得意とするところ、日常は体力コンディション作りにゴルフを燃心にやっておられた。どちらかと言えばコチコチタイプの先生も、一杯飲むと野球ケンを踊り出すのは定評があった。

何と言っても先生の登山観は、「健全な体と健全な精神を作る道場であり、神聖にして侵すべからず」の信条であった。

老齢のため、秋田を離れたのは四十三年の秋、郷里は千葉だが本当のふる里は秋田ですと語っていられたことは、秋田に於ける活躍のあとを見るに当然のような気がする。

正月はよく妙高や蔵王へスキーに出かけられ、私もお伴しては年末年始を楽しんだが、晩年は殆ど田沢高原でスキーをされ、毎年千葉からかかさず来られた。

秋田の山と雪に対する永い間の愛着が、スキー安全の塔の建立、スキー五十年の記録を八十歳の高齢にて完成したと思う。

四十六年に全日本秋田大会に、不調だとおっしゃられながらも、遠路参加され、会員の皆さんと登山された折、本人が全く知らない出来事があって、私達も大分心配した。翌年三月に来秋されたときはケガをしてはいけないと、今後スキーはやりませんと、スキー終止の宣言をしながら夕食したことを思い出す。

ワラジばきから登山靴へ、又一本杖からメダルスキーへと、大正・昭和の最も目まぐるしく変った時代を生きた先生が、現代の山をいかなる目でみつめたであろうか。

昨年六月鳥海山に於いて地方支部長会議、小集会が行われたときは、わがことのように喜んでおられた。そして自分の家に

でもいるかのように、楽しげに歓談されていたことが、つい昨日のようにひらめいてくる。

再びめぐりあう日もこない今日、秋田のスポーツ界に又社会事業に残した多くの業績は、永久にふるさとの山に映えることであろう。

略　歴

明治二十五年（一八九二）八月二十二日、誕生。東京歯科医専卒業後、大正六年　秋田赤十字病院歯科医長（二代目）として秋田市へ赴任。
昭和七年一月　日本山岳会入会（会員番号一五五六）紹介者は藤島敏男、大橋良一氏。
昭和三十四年　秋田支部設立に尽力し初代支部長となる。
他に関係したもの
秋田県山岳会々長、秋田県卓球協会々長、秋田県スキー連盟会長、秋田山岳会々長、秋田県山岳連盟会長、秋田県歯科医師会々長、また、秋田市文化功労賞受賞、秋田県スポーツ功労賞受賞、秋田県文化功労賞受賞。
昭和四十七年（一九七二）十二月一日、逝去。

（福田文二）

（附記）なお会報『山』第三〇三号所収、保坂隆司「秋田と荒巻先生」を参照されたい。

（編者）

諸岡一次氏（一九〇三―一九七二）

「西ドイツへ行ってくるよ」といわれたのが、八月。もう帰られたかなあと思って、お宅へ電話をしたら、あちらで病気になられ、羽田に着き、そのまま翌日から入院されているとのこと。どうせじきによくなられるから、そうしたらヨーロッパの話をせびらねば、と思っているうち、本家をついでおられる諸岡さんの実兄がなくなられた。ところが、まっさきに実家である成田市にとんでかえるべき彼の姿がない。おききすれば葬儀に来るどころではない病状が、続いているとのこと。そして、約一カ月ほどの入院の後、十月二十五日早朝、薬石の効もなく、静かに逝去されたのである。腹膜炎とのこと。

諸岡さんは小生とは同郷、しかも学校（明大）の先輩であり、彼の弟（故人）とは成田中学校のクラスメートであった。そんなことから諸岡さんの実家へはよく遊びに行っていたので、その頃から山こそ共に行かなかったが、顔だけはおたがいに知りあっていた。

諸岡さんは、明治三十六年十二月十三日生まれ、成田中学より明治大学に進み、昭和三年法学部を卒業、ただちに不動銀行

（協和銀行の前身）に入社された。趣味は植物採集、山登り、スキー、カメラ、マラソンなどで、いずれもそれぞれに多少のつながりはあるが、戦前はことに、その中の山登りとスキーに終始されたといってよいと思う。それが戦後から晩年にかけては、この山登りとスキーにマラソンが加わり、毎朝のランニングの練習や万歩クラブの例会参加など、かなり熱心に行かれておられた。

小生との山行は昭和十一年、大島三原山のハイキングがはじめてであったろう。それから数十回の同行を重ねるに至ったのである。

諸岡さんの山登りは大学に入られてから急にその回を増した。中でも樺太の山々や谷川岳に登られたのも昭和のはじめで、樺太の山地や谷川市の倉（一ノ倉）の壁の写真を見せられ感激した頃もなつかしい。その他、東京付近や北アルプスへはよく行かれている。

日本山岳会へ入られたのは昭和十五年十二月で、紹介者は吉沢一郎さんと小生、会員番号は一八六四番であった。その他の会では故行方沼東会員が主催されていた「日本シダの会」や山草の会など植物関係のものにも入られていた。諸岡さんの庭には今、都会にはめずらしく元気な二本の白樺がある。これはごじまんの庭木のひとつで、戦前にも別の白樺があったが、これは二代目で、昭和二十六年ごろ、広瀬潔会員からゆずられたものだとのこと。

小生との山旅で思い出深いもののひとつには、戦時中の昭和十七年八月下旬の北アルプスがある。もう食糧事情や交通機関も思うにまかせず、いつ召集令状が舞いこむかも知れぬときの、家をはなれた一週間は長い旅であった。第一日目は松本駅前の「ひだや」に泊り、翌日は中ノ湯から焼岳へ登った。一行は諸岡さんと愚妻と姉と愚生という、女子をまじえたものなので楽なコースを作ったのである。上高地に降りるとテントはすくない。その夜は徳沢園どまり。諸岡さんはいつもカメラにおわれている。この頃は山の頂上など一定の所に着くと「宮城遥拝」といって、皇居の方に向かって礼をすることを行なっていたが、その発声はいつもまじめな先輩の諸岡さんが号令役であった。計四名の一行は起立して、その声に応じて深々と頭をさげるのである。だから奥穂の頂上、涸沢岳へ月見に登ったときも、その翌日、白出沢をくだり平湯の船津屋に泊まり乗鞍岳の頂上でも彼の号令はつづいたのもなつかしい。乗鞍の肩のガランとした小屋には福島君（現安曇村長）がポツンといて、どうしても泊まれというのを白骨まで降りた。あとで諸岡さんはほんとうによい旅だった、とうつされた写真の中からわざわざ数枚をのばしてくださった。その中の一枚を今見ると、穂高小屋の前では、同宿の滝谷にあそびにきていた学習院ＯＢの榊君と谷君、それに上条孫人君の若い姿をまじえて写っている。

昭和三十三年十二月、つとめ先の協和銀行を定年退職されてからは、多少アルバイト的なこともされたが、常にマイペースを守られ、悠々自適の生活をされていたのである。気が向けば四季を通して谷川温泉の協和銀行寮に行かれ、山登りやスキーを楽しまれ、都におられては山岳会ルームの土曜会のレギュラーメンバーとなって、ルームに出ない小生への会のうごきの伝承者ともなっていただいていた。

今年の山行きの主なものは四月の立山アルペンルート、六月の秋田支部の鳥海山であろう。それが、めずらしくある日、諸岡さんは会報子にたのまれたので、立山の報告を綴ったので見てくれ、と原稿を示された。何の風の吹きまわしでめったに書かれぬ原稿を記されたんだろう、とふしぎにも思えた。この文は会報『山』三二六号に「立山黒部アルペンルート」として発表された彼の数すくない活字すがたである。

こんどの最後の旅ともなった西ドイツ行は「第五回世界ベテランマラソン選手権大会」六十歳クラスへの出場のためで、会場が西ドイツのベンスベルグ市、参加二十二カ国、四百四十七名の一人としてであった。そして、去る七月二十四日、山中湖のマラソン合宿を終えられてから、小生のつとめ先の役所へ出発のしらせに来てくださったのであった。

そして、ロンドン空港にて、というお便り、「アンカレッジ経由コペンハーゲンより八月二十一日午後二時ロンドンに着き、夕方よりマラソンの練習をハイドパークにて」をいただいたのに、いまはもう、小生をやさしくお導きくだされた諸岡先輩はおられない。

（四七・一一・三）

略　歴

明治三十六年（一九〇三）十二月十三日　千葉県成田市に生れる。
昭和三年三月　明治大学法学部卒業。
昭和四年　不動貯蓄銀行勤務。
昭和二十四年　協和銀行（支店長代理）。
昭和三十三年　同銀行（調査役）定年退職。
昭和三十四年　阜月鋳造株式会社（経理課長）勤務。
昭和三十六年　同社退職。
昭和三十八年　株式会社東日本ツーリストビューロー東京営業所（所長）。
昭和四十年　同社退職。

主な登山歴

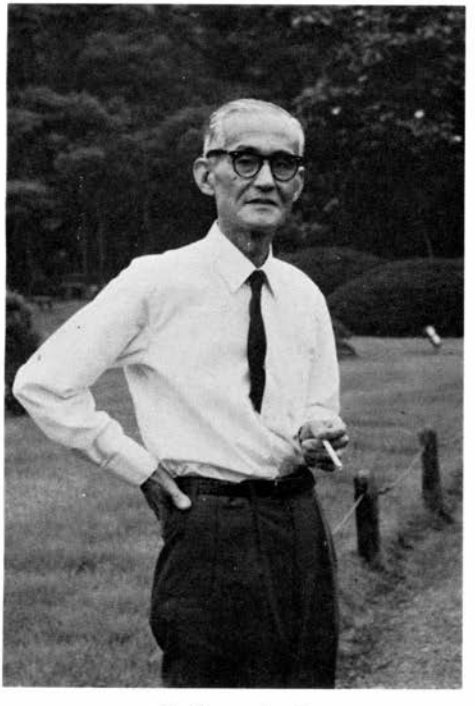
昭和元年　谷川岳に入り始める。
昭和二年　樺太高原。
昭和五年　北アルプス、東京付近に登山をかさねる。
昭和十五年十二月　日本山岳会入会（会員番号一八六四、紹介者・吉沢一郎、小野幸）。
昭和二十一年より再び登山をつづける。
昭和四十七年（一九七二）十月二十七日　逝去。

（小野　幸）

足立源一郎氏
Genichiro Adachi
(1889－1973)

川喜田壮太郎氏
Sotaro Kawakita
(1904－1972)

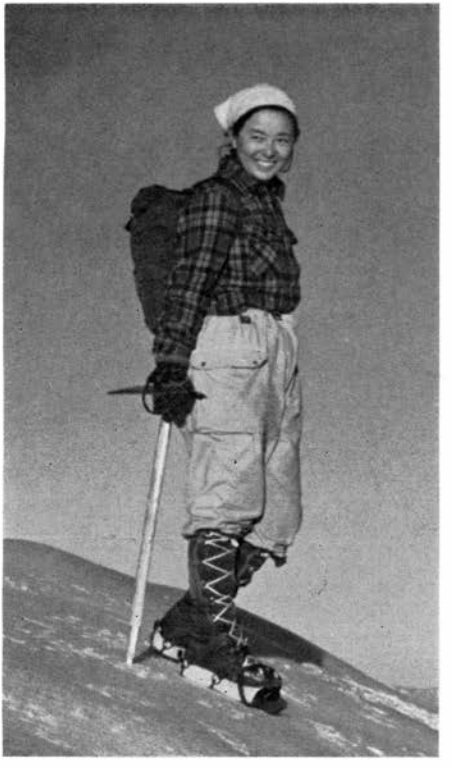
荒 巻 広 政 氏
Hiromasa Aramaki
(1892－1972)



諸 岡 一 次 氏
Kazuji Morooka
(1903－1972)

三井松男氏
Matsuo Mitsui
(1909－1972)

岡村精一氏
Seiichi Okamura
(1900－1973)



井本貴子氏
Takako Imoto
(1949－1972)

木津誠一氏
Seiichi Kizu
(1905－1972)

垣内政彦氏
Masahiko Kaito
(1918－1973)

三井松男氏（一九〇九―一九七二）

その若き日。

マウント・ロジャースの頂上の眺めはほとんどない。ただ霧の海だ。晴れていたら僕が最初に画いたサーザンフォーツも三十哩の彼方に見えることであろう。……

と綴った三井松男氏が逝かれたことは、元山梨県山岳連盟会長、南嶺会会長、慶応大学山岳部員、現日本山岳会山梨支部長であり、また県ユースホステル協会副会長、県キャンプ指導者協議会会長、県自然環境保全審議会委員、そして鶴城山岳会会長でもあった経歴が示されるように幅広い活動家だっただけに、山梨県の山岳界にとっての反響もさりながら、東都の岳友の驚きが日をへてこだまされます。

樹氷に吹雪く昭和五年正月の夜叉神峠の山頂で、三井松男兄とはじめて会いました。冬の鳳凰山に初登頂した三井さんたち甲斐山岳会のグループは芦安ガイドの名取治太郎、名取久平をつれた慶応の重装主義、私たち南嶺会のスキー登山隊は早大山岳部の小林高幸さんの監督のもと、軽装主義の信奉を感受しました。

旧制の甲府中学時代は庭球部で活躍され、慶応大学に入学されて浅間山に登り山に魅せられて山岳部に入部、穂高連峰にクライムされておると聞きおよんでおったので、寒気のなかで感激し、温和な人柄の奥底に山に対する激しい気慨も受けました。

その直後、山ふところ深かった白峰北岳の草すべりに慶大山岳部員野村実氏の雪崩による遭難があり、甲斐山岳会の野々垣邦富、大沢伊三郎氏らとともに救助におもむかれ、救援隊に私がお貸ししたプリマのツァッケが、その後の冬山では使用に耐えなくなったことから推察しても、随分ご尽力なさったようです。

しばらくして小林高幸さんを失なった南嶺会では、岩登りや積雪期の登山に良きリーダーを求めて、慶応の三井松男、早稲田の今井友之助両先輩に入会の懇請を思いました。三井さんは昭和七年八月にカナダのセルカーク山脈のアフトンやタッパーとロジャースに登られ、昭和八年三月に慶応大学経済学部を卒業、南嶺会に入会され、昭和九年に麻布歩兵第三連隊で一年志願兵をおえて、祖父の代からの畳表卸商を継承されました。

三井さんとの初めての山行は一月の八ヶ岳の主峰赤岳でした。そして穂高の峰々にザイルを結びあい、慶応時代のよきパートナーといわれた谷口現吉氏に紹介されたのは上高地の常さんの小屋で、当時のバドミントンスタイルからニッカー、ベレ

ーに洗脳されました。

穂高の涸沢の岩小屋生活では、この谷に逝った大島亮吉氏について語られ、春の白峰行でのビバークで教えられた多くの山の歌は、いまも南嶺会や鶴城山岳会の人たちに唄いつづけられております。

ひととき関東ガス前橋支店と甲府の有信銀行に勤務されましたが、やがて支那事変の拡大で南支派遣軍の主計将校として軍務につかれて広東黄埔の軍需廠から便りをいただき、一時除隊なされたときには進んで翼賛壮年団県本部に入られて銃後の食糧増産の指導にあたられました。私たち会員多数も順次送別山行をうけて戦野に向い、その間に甲府の留守宅はみな空襲で焼かれましたが全員無事に復員し、三井大尉の終戦は八丈島だったそうです。

戦後の再建には、それぞれに人の世のいとなみに労苦を重ねましたが、一応の生活の基礎をきずくと根がみな山好き、大沢伊三郎会長のもとに南嶺会員は集り、すでに昭和初期から日本山岳会員だった大沢さんと私が三井さんをはじめ同志のＪＡＣ入会を斡旋し、県岳界も大正末期に日本山岳会の指導で発足した甲斐山岳会は、戦時下挙国総力戦の要請によって発展的に解消して山梨県登山連盟になっておりましたが、第一回の県体育祭登山部門が帯那山に催されたのを機会に山梨県山岳連盟に改組されて大沢氏が会長に推薦され、南嶺会のスキー合宿も再開して神ノ田圃では兄のシュテムボーゲンが示され、旧鹿沢、熊ノ湯、発哺とつづきました。

ときを経て第四回国民体育大会山岳部門を十一月の富士山を主会場に、甲斐駒を副会場として催した県岳連は、このとき日本山岳会山梨支部をつくり連盟会長が支部長を兼任し、三井さんは南嶺会会長を引き受けました。

昭和二十七年に県岳連会長兼支部長に三井さんが就任し、県岳連副会長と支部常務委員だった私に南嶺会会長がバトンタッチされ、あい協力して組織の強化と後進の育成に努力しました。

山梨大学山岳会と鶴城山岳会が岳連に加盟し、梨大には私が、鶴城には三井さんが顧問になり、後に甲府一高ＯＢの立場から鶴城の会長をお受けになられ、愛媛県の石鎚山国体には県選手団を統率し、よく入笠山ハイクや霧ヶ峰スキーには雪稜クラブに同行され、ヒュッテ・ジャヴェルに高松宮殿下のお立寄りを願ったのもこのころで、私はガイドブック『南アルプス』を執筆し、梨大も厳冬期の南アルプス全山縦走を完遂し、冬富士をはじめ幾多の遭難者救援に、私は現地に三井さんが後方を指揮されて、恒例の県体育祭の金峰山、鳳凰山、八ヶ岳、甲斐駒の集中登山には、私が特殊コースを、三井さんは本部コースを歩ゆまれました。

昭和三十二年に私が県岳連会長を引継ぎましたが、支部長は

三井さんに留任をお願いしました。しかし、そのころの岳界は団体組織の全日本山岳連盟と、個人組織で伝統を重んじた日本山岳会の主導権をめぐる対立が目立ってきましたが、山梨県では金峰山麓金山平の「秩父の父」木暮理太郎翁碑の移築に県岳連と支部が協力し、第一回の木暮祭が盛大に催されたときの三井さんの労は多大なもので、ひきつづき木暮碑委員として努力されました。それから三井さんは県ユースホステル協会に情熱を燃やされて、甲府市北郊の大正池の池畔に立派な甲府ユースホステルが建設される基盤をつくり、これらによって文部大臣表彰の栄誉をうけられました。

私は昭和四十年に第一次県岳連の台湾山行をおえ、中央には統合団体として日本山岳協会が発足したのを契機に、県岳連会長を三井さんとも旧知の古屋五郎氏に託して退きましたが、三井支部長は岳書を集めておった私に福沢諭吉全集や島崎藤村の著作集を示めして、福田恆存氏の著書を推奨し、鶴城山岳会長として君島久登君をモンブランに失なって、その死を悼んだ『白嶺に生きる』の編集後記に謙虚に心情を綴り、しばらく小さな峠歩きや川釣りに親しまれてから、ヒマラヤのチョンラ・ピークの計画を樹てられてヒマラヤン・クラブに入会されましたが、健康をそこなわれて、期待された県自然環境保全審議会の委員としても活躍していただけなかったことが残念でなりません。昨夏再生不良性貧血症で入院されましたが、多数の献血者のあったことからも氏の人柄がしのばれます。

昨秋、韓国雪岳山への旅をもった私は、出発前にお目にかかりご無沙汰をお詫びしましたが、場数を踏んだ人らしく、人間の個々の振舞いなどは秋かぜの中の一片の木の葉でしかないように首肯くのみで、旧臘の二十九日に急性心不全で逝去なされるとは人生は無情といわざるを得ません。

葬送の儀は松のあけた九日、奇しくも氏の誕生日にあたり、甲府市城東一丁目の尊体寺で、喪主は嗣子庸一君、葬儀委員長は大沢伊三郎氏で行なわれました。県体育協会会長の野口二郎氏の諸団体を代表しての弔辞、追慕の念をこめた日本山岳会の山田二郎会長代理と三田登高会代表の谷口現吉氏、県岳連会長の中山四郎氏の弔辞もおくられて、支部長二十年をささえた望月雅朗、斉藤俊哉さんをはじめ陸続と参集した焼香者で境内は哀悼の色が濃く、とりわけ組織論で見解が分れた山梨支部を原点にかえそうと努めた斉藤さんは、感慨ひとしおにみうけました。

いま改めて慈信院松誉光岳居士の文藻豊かなセルカークの山旅を読みつづけて、辻々に山のせまりし甲府の街にあの温容を追うことはできないが、なかば蒼空に融けこみそうな薄白く光ったカスケードの山脈を望んだ兄のみ霊は、あの世でもまた、あかるみのなかには懊悩をえがかずに、くらい柔かい雪原にシュプールを描いておられるでしょう。

私は兄のあとを県自然環境保全審議会委員を委嘱されましたが、かけがえのない自然を後世に伝えることこそ、私の出版記念会や県政功績者受賞を心から喜んでくださった故人にも応えるものであり、日本山岳会終身会員として、南嶺会と山梨大学山岳会の顧問として、山梨県山岳連盟の人たちともどもに、英魂安らけく、遺児庸一君に天のご加護と、文恵夫人に余慶をと祈るのみであります。

相識りて　数を尽して　登りたる
　山々変らね　兄はや逝きぬ
兄ひとり　棺火みつめて　想いをり
　友みな眠る　岩小屋の夜半
もみぢ燃え　丘辺に建てる　木暮碑に
　集ひし友の　歌声めぐる

略　歴

明治四十二年（一九〇九年）一月九日　山梨県甲府市に生まれる。
昭和二年　県立甲府中学卒業、慶応義塾大学予科入学、同山岳部入部。
昭和五年一月　鳳凰山薬師岳と観音岳に登頂。
昭和七年七月～八月　カナダ・セルカーク山脈のアフトン、タッパー、ロジャースに登山。
昭和八年　慶応義塾大学経済学部卒業。南嶺会に入会。
昭和九年　麻布歩兵第三聯隊に幹部候補生として入隊。
昭和十二年　応召、陸軍主計少尉として南支派遣軍にて転戦。
昭和二十年　八丈島にて終戦復員。陸軍主計大尉。
昭和二十三年二月　日本山岳会に入会（会員番号二八八六）。
昭和二十七年　山梨県山岳連盟会長兼日本山岳会山梨支部長に就任。
昭和二十九年　鶴城山岳会会長。
昭和三十二年　山梨県体育功労者受賞。
昭和三十四年　山梨県ユースホステル協会副会長。
昭和四十一年　ヒマラヤン・クラブに入会。
昭和四十二年　文部省体育功労者受賞。
昭和四十三年　山梨県キャンプ指導者協議会会長。
昭和四十六年　山梨県自然環境保全審議会委員を委嘱さる。
昭和四十七年（一九七二年）十二月二十九日　再生不良性貧血症にて逝去。享年六十三歳。

（百瀬舜太郎）

木津誠一氏（一九〇五―一九七二）

木津さんが亡くなられてから、もう一年近く経ってしまった。先日ご遺族から一周忌のご案内を戴き、改めてご冥福を祈るのである。昭和四十年六月に最初の発病をされ、八月に腎臓の摘出手術を受けられた。その直後に病院へお見舞したら意外にお元気で、経過もよく年末には退院されて、昭和四十六年は正月から仕事にも復帰されていた。それが、その年の十月に再

び入院されたということを聞き、驚いて再びお見舞に駆け付けたが、今度は腰が痛いといってベッドに伏して居られた。これは容易ならざる事態のように私には感じられた。しかし、こんなに早く突然に他界されようとは夢にも思わなかった。それは年が明けて春まだ早い三月二十三日、訃報に接し愕然としたのであった。

木津さんと私との出会いは、昭和二十三年に敗戦の荒廃の中に日本山岳会富山支部を設立した時からであった。その年の六月二十五日に県岳連が発足し、その副会長を引受けて戴いた。昭和三十二年から三十五年までの三年間は富山支部長をお願いした。今、私の脳裡には二十五年間の想い出が走馬燈のようにかけ回るのである。槙さんに来てもらって共に登った牛岳の頂上で、あの巨体を汗びっしょりにして槍を眺めて居られた姿。僧ヶ岳の別又谷の急坂を一歩一歩と足を運んで居られる姿。越道から黒薙への北又谷沿いの林間の踏跡を、バランスを取りながらヨイショ、ヨイショと掛声を出して降りて来られる姿。東蔵でも五ヶ山でも小学校の講堂を借りて、板の間にシュラフザックを敷いてごろ寝した。こんな時、いつも木津さんのリュックからはウィスキーの角瓶と、奥様が作られたであろうイナダの美味な削身が大量に出てくるのであった。それは私達を楽しませてやろうという親心であった。秋の美松坂でモタセを取って来て、汁にして共に楽しんだこともあった。

忘れられないのは昭和三十三年の富山国体の時であろう。代表者会議の紛糾した席で微動だにされなかったあの貫録は、私達の後楯として頼もしい限りであった。準備と実施に共に苦労を重ねて戴いたのも昨日の事のようである。弥陀ヶ原ホテルの本部に陣取って、運営の総指揮を取って居られる間にも、学生時代の早稲田山岳部の針ノ木遭難救助の体験談等も聞かせてもらった。

昭和三十九年に富山岳連が後援して、ヒマラヤ登山隊を出そうとしたことがあった。木津会長を中心とした委員会を結成してスポンサーの協力を取りつけ、準備は着々と進んでいた。ところが突然ネパールの政情から登山禁止令が出てしまった。隊員達は観光ビザでも渡航しようと言うが、公的責任は国際問題を無視するわけには行かない。この問題で県山岳界は大騒動になった。しかし木津さんは断乎として取止めを決断された。私はこの時ほど責任者としての重みを教えられたことはない。この一件は後に昭和四十四年になって、ネパールの登山解禁と同時に実現することとなり、グルジヤ・ヒマールの初登頂に成功することになった。

木津さんは本当に円満な人格者だった。そして純粋に山を愛し、山を志す若者を愛された。このような包容力をそなえられた大物は、富山県の今後にも簡単には出現しないように思われる。

略　歴

明治三十八年（一九〇五）七月三日　高岡市に生まれる。
昭和三年四月　早稲田大学理工学部電気工学科入学。山岳部入部。
昭和六年三月　早稲田大学卒業。
昭和六年七月　日本電力（株）入社。
昭和十六年四月　国産軽銀工業（株）入社。
昭和十七年九月　北陸配電（株）入社。
昭和十九年四月　北陸軽金属（株）取締役、同二十二年四月同社々長に就任。
昭和二十三年（一九四八）六月　日本山岳会入会。会員番号二九五二番。
同月富山県山岳連盟副会長。
昭和二十四年五月　北陸銀行取締役。
昭和二十五年十二月　高岡製氷取締役。
昭和二十六年一月　高岡魚市場取締役。
昭和二十六年五月　富山県人事委員会委員。
昭和二十九年五月　富山県人事委員会委員長。
昭和二十九年十二月　伏木海陸運送監査役。
昭和三十二年四月　日本山岳会富山支部長。
昭和三十三年四月　富山県山岳連盟会長兼務。
昭和三十五年三月　日本山岳会富山支部長辞任。但し連盟会長は四十七年三月死去まで続ける。
昭和三十九年六月　富山県公安委員、同四十一年六月同委員長。
昭和四十年五月　高岡ステーションビル社長就任。
昭和四十年十月　富山県山岳遭難防止対策審議会々長。
昭和四十一年十月　富山県観光事業審議会委員。
昭和四十二年四月　富山県自然保護協会副会長。
昭和四十四年一月　富山県ヒマラヤ委員会々長。
昭和四十七年（一九七二）三月二十三日　死去。

（若林啓之助）

岡村精一氏（一九〇〇―一九七三）

岡村精一氏が亡くなられた。岡村氏といえば、ウォルター・ウェストン師の名著『日本アルプス　登山と探検』、『極東の遊歩場』の訳者として、本会々員であるならば、知らない人はあるまい。

ウェストン師の『日本アルプス』を岡村氏が訳出されたのは、昭和八年十二月で、発行所は梓書房であった。この訳書の「訳者の言葉」の中で、岡村氏は、ご自身の登山について次のように書かれている。これは、その後昭和二十八年創元社より出された『日本アルプス』や、昭和三十八年角川書店より出された「角川文庫」本にも載っていないので、少し長くなるが、その大要を引用しておきたい。

「私は幼少のころから山を愛した。そして愛山心は、私の成長と共にのびていった。勇敢に山を征服したい心に駆られての

少年時代の初山行き。人生の苦悶の象徴をおぼろ気に認めはじめ、この世のしばしの憩いを山に求めた二十歳前後、社会の煩雑と都の喧騒を逃れて、真の自我に徹し、触れたい望みで企てたその後の山旅、かくて私の成長と共に登山の味得も推移した。

しかし、私は思い立った時、自由に登山できる生活にはなかった。それで日常生活の単調と平俗を超えた彼方の山に入りたくも入れない時には、よく山岳の文学、登高の記録を読み耽った。小島烏水の『日本アルプス』、高頭氏の『日本山嶽志』はすでに少年時代に愛読した。その後多く著された諸先輩の書物もどんなに興味深く読んだことであろう。」

こうして岡村氏は、ウェストン師の著書と接することになるのだが、氏がどのような山に登られていたかはお話をうかがったこともなかったし、『山岳』や会報にも全く出ていない。しかし岡村氏は、あの難解なウェストン師の著作をよく日本語に訳され、師の存在を、より一層われわれに密着された功績は、長く記憶さるべきであろう。小生も後年ウェストン師の『日本アルプス』を訳出したが、さまざまな古い日本の地名や、人名などについて、岡村氏がどれほどご苦心をはらわれたか、身に泌みて感じたことがある。

東京におけるＪＡＣの会合にはあまりお見えにならなかったようだが、毎年六月の上高地のウェストン祭には欠かさず出席され、若い参会者たちに、ウェストン師について蘊蓄を傾けられていた。雨に煙る新緑の上高地の小道を元気に歩いておられた姿が、いま懐しく思い出される。

また懸案であった「ウェストン祭の歌」もご自身で作詞され、今年（昭和四十八年）の第二十七回ウェストン祭に辻荘一氏の作曲で披露されたが、氏はこの歌を上高地で聞かれることなく、その前日逝去された。

つつしんでご冥福をお祈りする。

略　歴

明治三十三年（一九〇〇年）四月五日　滋賀県五箇荘村に生まれる。芝中、青山学院英文科を経て、大正十四年三月、東大文学部社会学科卒。
昭和八年四月　東大文学部大学院入学。
昭和八年十二月　ウェストン著『日本アルプス　登山と探検』を訳出、梓書房より発行。
昭和十年四月　東大文学部大学院修了。
昭和二十四年三月　日本山岳会入会（会員番号三五三四）。
昭和三十三年　東京農工大学教授。
昭和四十五年一月　ウェストン著『極東の遊歩場』を訳出、山と渓谷社より発行。
昭和四十八年六月二日　胃ガンのため立川病院で死去。
正五位勲四等、旭日小綬章授与。
主要著書に『社会学―社会構成論』、『社会と教育の諸問題』などがある。

（山崎安治）

井本貴子氏（一九四九―一九七二）

井本貴子さん、一九七二年二月入会、紹介者は宮下秀樹さんと私、会員番号七三三〇番。婦人懇談会の一員として、ヒマラヤから帰ったら大いに働いてもらおうと期待して送り出した矢先、遠い異郷の山で、遥かなる世界へと旅だったまま、帰らぬ人となりました。

井本さんは上智大学で山岳部に入り、山への生活が始まりました。私が知り合ったのは一九六九年で、日本の山、ヒマラヤの山々について語ったことを覚えています。四年間、山を通して、よき友よき先輩にめぐりあったようです。この間ＪＡＣ学生部の書記としても活躍し、向井ビルのルームにはよく顔を出していて、図書室で熱心に本を読んでいた姿を、想い出して下さる方もいらっしゃるのではないかと思います。

大学卒業、就職も決まり、ヒマラヤへの夢がふくれあがり、友人と二人でネパール、ランタン・ヒマールへと三月出発しました。友人の病気により、トレッキング途中でカトマンズにもどり、「行く前からチョット話のあったDeo Tibbaへの登山に本格的にとりくもうかと……思っております。」との便りを受けとった頃は、インドへと観光旅行に行き、私達の一九六八年の日印合同婦人隊の仲間の家を訪問して、インド生活を楽しんでいたようでした。インドからの便りには「ただ日本の春をとびこえて一気に夏になってしまったので、毎日非常に疲れを感じますが、これをのがすと……と思って頑張っています。」

この様ななかで彼女は、ネパールで知り合った日本の青年達とパーティーを組み、ＩＭＦよりデオ・ティバ峰の登山許可をもらい計画をすすめて行きました。

遠くはなれている日本で受けとる手紙よりも早い速度で彼女は行動し、突然、外電により五月十六日の急逝を知ったのは、数日おくれてからでした。原因は高山病と云われております。

突然の病没はとても信じられないことでした。彼女の山登りに対して批判もできますが、現実に彼女は帰らぬ人となりました。

彼女のインド旅行の報告を楽しみに待っていただけに、永遠の別れは残念でたまりません。私の悲しみ以上に重い荷を背おって、これからの人生をあゆまれるご両親のことを思うとき、なぐさめの言葉もございません。

この拙い追悼によって、井本貴子さんという、笑顔のうつくしい会員を想い出していただきたく、また私を含めて山に向う若い人々にこのような、はかない逝き方を決してしないよう願ってやみません。心からご冥福を祈ります。

この間、IMFはじめインドの方々から寄せられたご親切の数々は、悲しみの中でも一つのなぐさめでした。心からお礼申し上げます。

略　歴

昭和二十四年九月十八日　誕生。
昭和四十七年三月　上智大学卒業。
昭和四十七年五月十六日　デオ・ティバ峰にて急逝。

山　歴

昭和四十三年五月　北八ヶ岳。
昭和四十七年三月～四月　ネパール、ランタン・ヒマール、トレッキング。
昭和四十七年五月　デオ・ティバ峰。

（須田紀子）

垣内政彦氏（一九一八―一九七三）

垣内政彦氏の死去を新聞協会報（昭和四十八年十一月六日号）で知った。そのすぐ前、浜野正男氏が自費出版された『ソロモンの人形』を垣内氏のもとに届けに行かれたとき、すでに順天堂病院に入院され、重態だと、浜野さんはわざわざルームの掲示板にはり紙されていたが、いまの会員で恐らく垣内氏のお名前

小島烏水
木暮理太郎　三氏生誕百年記念出版
岡野金次郎

近代登山の先駆者たち

［執筆者］今西錦司　藤島敏男　三枝守博　織内信彦　山崎安治　三田幸夫　串田孫一　色川大吉　松永敏郎　望月達夫　吉沢一郎　島田巽　山崎金次郎　野口末延　小島栄　小島隼太郎　木暮美枝子　岡野敬次郎　近藤信行　神原忠夫　石川治郎　［資料］小島烏水「その頃の思い出」「滝沢秋暁宛書簡抄」「『日本と台湾の登山記』序」木暮理太郎「『鶏肋』より」「一ノ倉懐古」　岡野金次郎「日記抄」（図版八十五点入）　定価一〇〇〇円

山岳　第四十四年第二号　小島烏水記念号［覆刻版］

［執筆者］槇有恒　武田久吉　高野鷹蔵　中村清太郎　岡野金次郎　東良三　河井酔茗　田部重治　藤懸静也　辻村太郎　斎藤昌三　松方三郎　藤島敏男　田辺主計　島田巽（図版四点）　定価二〇〇〇円

霧の旅　第十九年第五十四号　木暮先生追悼［覆刻版］

木暮理太郎遺稿「絶筆」「信甲旅行日記」　和歌（奥秩父釜沢行・猩猩袴）［執筆者］鷹見安二郎　田部重治　武田久吉　尾崎喜八　荒井道太郎　村尾亨　小池新二　鶴岡元之助　吹原不二雄　柴山登茂次　野口末延　石川孟範　神谷恭　河田楨（写真五点）　定価二五〇〇円

送料荷造料共二〇〇円　御希望の方は実費をそえて本会事務局までお申込み下さい

を知っている方はほとんどないのではあるまいか。浜野さんが心配され、むろん私も驚ろき、そしてその後すぐ亡くなられるなど全く想像もしていないことであった。

垣内氏の入会は、私とほぼ同じで、昭和十五年八月、会員番号一八四一、紹介者は藤島敏男、望月達夫両氏であった。私と垣内氏とのおつきあいは、昭和十五、六年ごろからであった。当時三大学山岳部懇親会というものがあり、東大、立大、早大の三つの山岳部のリーダー級のメンバーが思い出したように集っては、お酒を飲んだり、運動会のようなものをしたり、全く肩のこらない親睦会をたびたび開いていた。会場はそれぞれの学校付近のたまり場であった。東大のメンバーで当時出ていたのは浪高の佐谷健吉、松高の山崎次男（故人）、村山雅美、朝比奈菊雄、甲南の伊藤文三、それに静高の垣内政彦、立大は大町の酒造り薄井脩助、金子信恒（故人）、早大は関根、杉本、大井（故人）、二宮（故人）、といった面々であった。中で異彩を放っていたのが垣内政彦で、ふだんはおとなしいが、お酒がはいると大変にぎやかとなり、ハイドンだかブラームスだかの「大学祝典序曲」をもじって節を付けた「垣内節」というのを東大の連中は大声をあげて合唱し始める。「垣内がよ、垣内がよ、大酒飲みの垣内がよ……」といった文句であった。

戦後彼は、日本山岳会の『山』のエディターとして大活躍した。終戦直後数年間はむろん会報編集担当の理事もつとめている。そして関東学生山岳連盟の結成にも縁の下の働きをしている。谷口現吉、関根吉郎、浜野正男氏らと力をあわせて、戦後の日本山岳会復興の一つの原動力となっていた。共同通信社編集局勤務だけに、まさにその方面の仕事にはうってつけであった。会報を山という名称にして交通公社から一般に売り出し、さらにその後、河出書房、明文堂と発行所は変わっても、終始その編集にきわめて熱心であった。このころ松方さんは共同通信の専務理事、彼は労組委員の一員として松方さんと組合問題でわたりあい、話がこじれると山の話になって一向らちがあかなかったという話が伝えられている。交通公社版の『山』は五号まで出たが、その内容はいま読んでもまことに充実している。『山』は昭和二十二年九月の創刊号から二十五年七月号（一七二号）まで編集をした。その後彼は仕事の関係で朝鮮に出かけたり、サイゴンやシンガポールの支局長などを長く勤めたため、自然会との関係も薄くなり、会籍もなくなってしまった。最近氏の後輩山本良三君を通じ、しばしば復活会員の手続を取るようおすすめしていた矢先の急逝だけに惜まれる。山本君の手をわずらわした故人の略歴をしるし、ご冥福を祈りたい。

略　歴

大正七年二月一日　三重県一志郡大井村に生まれる。
昭和十年四月　静岡高等学校入学、山岳部入部。
同　年　七月　北岳―農鳥岳―滝沢下降―東俣。

同　年　十月　愛鷹山。
同　年十一月　夜叉神峠―北沢―北岳―荒川口―芦安。
同　年十二月　関温泉スキー合宿。
昭和十一年三月　伊那大島―大河原―小赤石―大島。
同年七月　千頭―大無間山―光岳―イザルケ岳―易老岳―上河内岳―聖岳―赤石岳―荒川岳―三伏峠―塩見岳―仙丈岳―駒ヶ岳―横手―菲崎
同　年　八月　穂高涸沢合宿、ジャンダルム、北穂、奥穂などに登る。
同　年十一月　伊那大島―三伏小屋―塩見岳―蝙蝠岳―二軒小屋―新倉
同　年十二月　関温泉スキー合宿　乗鞍岳。
昭和十二年二月　吉田口より富士登山。
同　年　七月　芦安―杖立峠―五葉尾根―大樺小屋―バットレス第二尾根―北岳―広河原峠―日野春。
同　年　七月　穂高涸沢生活、前穂北尾根、ジャンダルム飛驒尾根、涸沢槍東尾根などに登る。
昭和十三年四月　東大文学部社会学科入学。
同　年　七月　穂高涸沢生活（静校）滝谷第二尾根などに登る。
昭和十五年八月　日本山岳会入会（会員番号一八四一番）。
昭和十六年三月　東大卒、四月、同盟通信社入社編集局東亜部勤務。
昭和二十一年～二十二年　日本山岳会幹事。
昭和二十三年～二十四年　日本山岳会理事。
昭和三十年十月～三十一年九月　共同通信サイゴン支局長。
昭和三十五年九月～三十八年十二月　シンガポール支局長、整理部長、編集局次長などをへて昭和四十六年システム計画実施本部副本部長。
昭和四十八年二月　定年退社　嘱託。
昭和四十八年十一月四日　肝硬変のため本郷順天堂病院で死去。

（山崎安治）

図書紹介

遥かなる未踏の尾根 ―マカルー一九七〇年

日本山岳会東海支部編　B5判　本文四〇四ページ　カラー写真六四ページ（一〇二枚）　一九七二年十月　茗渓堂発行　定価四八〇〇円

ヒマラヤ登山といってもさまざまの楽しみ方があることはいうまでもないが、もっともヒマラヤらしい登山を考えるとすれば、その内容としても八〇〇〇メートル峰の登山でそれが組織的共同作業によってなされるということが挙げられよう。

一九五三年の英国エベレスト隊派遣の際、隊長選衡をめぐって、小遠征隊主義を主張するシプトンと組織的遠征を主張するハントの二つの考え方が対立し、結局、シプトンが隊長を辞退し、ハントが指揮をとることになったが、シプトンの小遠征隊主義といえども、このことを否定するものではない。シプトンの主張のなかには登山に対する彼一流の好みがあることは間違いないが、それも、エベレストにおける組織的共同作業を、いかに個人のもつ能力を最大限に発揮し、効率的に行なうかという発想に裏うちされていると見ることができる。

本書は、一九七〇年春、マカルー東南稜初登攀というヒマラヤ登山史上に燦然と輝く成果を挙げた日本山岳会東海支部隊の公式報告書だが、ここでもっとも力点がおかれているのは、組織的共同作業としてのマカルー登山の全体隊を描き出そうということであり、そこにマカルー隊ならびに本報告書の最大の特色が見られる。

巻頭の「編集について」（原真）のなかで編集方針が簡潔に述べられているが、編者が設定した次の六項目のなかには、単なる編集方針を超えて、ヒマラヤ登山を志す者の基本的姿勢のあり方を示唆する宣言的な意味合いがこめられていて、注目に値する。

①この遠征隊は企画の段階で多くの人々の協力を得た社会的事業である。②現地に派遣された隊員の行動はすべての点で協同作業であった。③協同作業の特徴として一定の判断が先行しそれと同時に必らず責任の所在が存在した。④この遠征隊は組織と個人という観点から見られる人間関係の一個の実験的縮図であった。⑤徹底的な自己分析を試みる。⑥学術的研究についてはその独創的な部分のみをそれぞれの専門家によって責任ある論文に作成する。

わが国で、遠征隊の活動を組織と個人という観点から、人間関係の実験的縮図として考えようとした最初の試みは、高木正孝『パタゴニア探検記』（岩波新書一九六八年刊）だと思われるが、準備から登山行動、帰国後の再検討、報告書づくりまでの長期間の過程を、企画、実行、認識という三段階の一貫した過

程として把握し、報告書のなかでこれだけきびしい自己分析を行なった隊は、マカルー隊がはじめてであろう。

その意味で、本書は、ヒマラヤ登山論の先駆的業績といってもあながち誇張ではないだろう。少なくともここ当分、ヒマラヤ登山のよき教科書としての役割を果たすであろうことは疑いない。

本文四〇四ページ、全体で五〇〇ページにおよぶ膨大な報告書だが、内容は五部に分かれ、第一部記録、第二部交信記録、第三部検討、第四部学術、第五部随想と座談会から成り立っている。さらに、白簱史朗隊員を中心とするオールカラー六四ページの「マカルー東南稜写真集」はこれだけでも一冊の本になりうる立派な内容であり、ほかに英文要旨、年表、参考資料がついている。

簡単に内容を紹介しておこう。

第一部登山記録は、主観的な判断や感想を排した淡々とした筆致だが、構成、事実の選択、用語その他に細かい配慮が払われていて、かえって緊迫した雰囲気がリアルに伝わってくる。

第二部には交信記録が再録されている。最近のようにトランシーバーによる交信がヒマラヤ登山の常識として多用されていながら行動の記録として活字化（文章化ではない）されたのはこれが初めてである。

その後刊行された「海外登山研究資料」Ⅳには、本報告書で省かれた部分の交信記録も収録されおり、それも参考にすると興味深い。これらの交信記録を通じて、われわれは高所における登山行動、人間関係の赤裸々な姿をまざまざと知ることができる。とくに極限状況における登山者の思考、判断、態度等を知る上でこれ以上の資料はなく、高度の人間に与える影響についても新しい視点を提供している。

もし他の隊が同じようなことをやったらどうなるだろう。ほとんどの場合あまりにもくだらない、どうでもよいことばかりしゃべって電池を消耗しているか、支離滅裂で読むに耐えないか、あるいはまた感情的なやりとりで自らの恥部をさらけ出したものか、のどれかになってしまったにちがいない。そういった意味で、交信記録が活字化され、このように登山行動の分析に供されたという事実そのものが、この隊の水準の高さを卒直に反映している。

第三部は、記録とともに重点がおかれている部分だが、とくに遠征運営論（原）、戦術（越山、松浦、浅見）などチーム運営をめぐる検討のなかに、マカルー隊の性格がよくあらわれている。この部分は巻末の座談会「マカルー遠征をかえりみて」を参照しながらよむと興味深い。

第四部学術関係では、五つの論文がまとめられているが「その独創的な部分のみをそれぞれの専門家によって責任ある論文に作成する」と編集方針にあるように、いずれもきわめて興味深い。しかし登山者の立場から見ると「マカルー遠征隊における高所医学実験」（御手洗玄洋教授）、「八〇〇〇メートル峰の高度順応」（原、橋本）が、いずれも戦術との関連において高度順化および高度障害の問題を取扱っているところにとくに興味を

ひかれる。また「ネパール・ヒマラヤの構造地質学」（木崎、太田、秋葉、相馬、加納、渡辺）は、単に一九七〇年に行なわれた氷河および地質の調査報告ではなく、北大グループを中心として約一〇年間にわたってつづけられてきたヒマラヤにおける地質調査の、いわば集大成をなす研究論文のひとつであり、ヒマラヤ造山運動に関するきわめて独創的な見解が展開されている。このような論稿を一登山隊の報告書に収め得たということはきわめてまれなことであり、本書の価値を高めているばかりではなく、これを可能にしたマカルー隊の土壌の豊かさをうかがい知ることができる。

マカルー隊の成果は、何といってもマカルー東南稜という、長く、難しい、八〇〇〇メートルをこえる稜線に、国際的にも高く評価されるバリエーション・ルートを開拓して登頂に成功したことであるが、われわれはいま、そこに至る過程のなかから、さまざまのものを学ぶことができる。

まず第一は、ヒマラヤ登山の技術、戦術に関することである。

二日間ほとんど睡眠をとれず、救出活動から一転して、二十五時間行動での登頂（しかも無酸素）、わずかのチャンスを把えたこのような壮絶な登攀のなかにマカルー隊の強烈な性格が端的に表われているが、そこに危なげな感じはまったく見られない。完璧な支援体制に支えられていることがよくわかるからである。八〇〇〇メートルをこなす高峰の登山では補給の問題がもっとも重要であるといわれているが、それが成功した例は少ない。その意味で、マカルー隊の成果は貴重である。

また睡眠中のみ酸素を用いて、無酸素で八五〇〇メートルに近いマカルーの登頂に成功した事実も示唆に富んでいる。しかし、それは、八〇〇〇メートルをこえる困難なルートの限られた条件のなかで、登頂のためにもっとも合理的かつ確率の高い方法を模索し、実践を通じて選びとられたひとつの〝知恵〟であり、いわばその採用のプロセスにこそ、より大きな意義があるのであって、これがすべての場合にあてはまると単純に考えることは危険である。しかし、最近刊行されたフランスのマカルー西稜隊の報告書でも、酸素の利用方法に関して東海支部隊と同じ結論を出していることは注目される。

さらに、マカルー隊では、高度順化に関しても新しい考え方をとり入れており、登山の前半部でかなり重い特異的高度障害を体験した隊員を、頂上直下まで登攀させることに成功している。この問題などは、もっとつっこんだ検討をする必要があろう。本報告書のなかで提起されている「特異的高度障害」と「非特異的高度障害」の区分は、云われてみればごくあたり前で、古くから云われてきたように考えるが、実際にはこれまで誰も明確に区分したことがなかった、いわば〝コロンブスの卵〟である。登山の世界ではこのような問題が実に多い。ヒマラヤ登山のタクティクスは、つきつめて考えれば高度順化をどううまくやるかという点に尽きる。それにもかかわらずあいまいな点が多すぎる。したがって、この問題に関して、マカルー隊が実践的な立場から新たな問題を投げかけていることは興味深い。

このような技術や戦術の問題とならんで、より重要な第二の問題は、組織およびチームの運営に関するものである。

マカルー隊ではいわゆる〝同じカマの飯〟主義に挑戦し、人材抜擢主義による隊員の人選を行ない、実力主義と競争原理にのっとった機能的な人間関係を基礎に、強力なチームを作りあげることに成功した。

これは、従来の混成隊がほとんどの場合、チームワークの問題から失敗に終わっていることから見ても、大いに注目されるが、そればかりでなく、タテ社会を建て前とするわが国の社会のなかから、このようなチームが成立したという意味で、社会的現象として興味深い。

準備過程から登山活動、そして報告書の作成に至る各段階でのブレーン・ストーミング——徹底的な全員討論を通じてのチーム作り、KJ法、PERT法の活用、無線による情報の集中と指揮命令系統の統一、一隊員をBCにはりつけ、カードを活用した荷上げの集中といった、従来まったく考えられなかった斬新な方法、システム的な発想がとり入れられ、生かされたのは、実質的な推進者であった原登攀隊長の影響が大きかったとはいえ、今後のヒマラヤ登山の新たな可能性を引き出した。

しかし、ここで注意しておかなければならないのは、これらが契約的人間関係の徹底という形で、自らをとりまいている伝統的な社会との対決を通じて、ということは、そのなかで育ってきた自分自身との対決を通じて形成されてきたものだということである。巻末に参考資料として付されている同意書や借用書、隊員調書の用式、あるいは連絡棚のつくり方や会議のもち方といった細かい部分部分のなかにもそれが明確にあらわれている。

最近、カードの活用をはじめ人材抜擢主義の人選などが各隊の遠征準備の原則として採用され、ブーム化されているようだが、ほとんどは失敗に終わっている。契約的人間関係を基礎に成り立っている方法を義理人情に頼ってやってみてもうまくいくわけはないのである。マカルーの方法が唯一絶対のものでないことはいうまでもないが、やるなら自己改造まで含む徹底的な洞察と決断を要することを忘れてはならない。

第三に、われわれは文章を通じてマカルー登山の全貌を把握できることの意味を十分に認識しておく必要があろう。このことのメリットは量り知れないものがある。準備から現場でのそれぞれの段階における企画—実行—認識の積み重ねを基礎に、チームづくりをしてきて、情報の集積と体系化の最終的なまとめが本書であるということは、すでに発刊された「海外登山研究会資料」のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ（合本も刊行されている）を見るとよくわかり、これらも報告書の一部と見なすべき内容を備えている。とくに同資料、Ⅰ、Ⅱには、登山実行前の準備のすべてがタクティクスまで含めて整理されており、それらと本報告書を比較検討することによって、計画作成の具体的なプロセス、さらに国内で検討され、煮つめられたプランが実際にはどのように適用され、どのような障害にぶつかったか、といったような問題をつぶさに確かめることができる。これこそ貴重な

歴史的財産というべきである。

登山行動を通じて変更されざるを得なかった問題は、①隊員の選考、②補給計算のミス、③酸素使用計画の変更、④食糧計画の軌道修正などにつき、巻末の座談会で率直に触れられているが、現場における弾力的な対応措置がそれまでの綿密な準備活動で得られた自信に支えられていることを、本書を参考にしてヒマラヤ登山を考えようとする人は、十分頭におくべきである。

しかし、これらマカルー隊の投げかけた問題を考えつつ、このなかにヒマラヤのもつ意味の変化および、それに伴うヒマラヤ登山の変質が大きく反映していることも感じないわけにいかない。結論からいえば、ヒマラヤ登山が人間の領域の問題になったということであるが、登山者のヒマラヤに求めるものも変わってきているといえるかもしれない。

マカルー隊の場合のように、難しいルートを登るには、すぐれた登山技術とともに、補給システムの確立、シェルパの効率的な活用からはじまって、組織の効率を高めるためのさまざまのチーム運営の合理化、技術化がなされなければならない。しかし、それを担うだけの人材がどれだけいるか疑わしいのが現状であろう。この報告を読みつつ、私は、登頂に収斂されていく登山行動のなかで、単に協力の精神で協力するのではなく、一定の機能を果たすことによってチームの行動を支えている部分のいかに多いかを痛感した。ベース・キャンプにいて無線機で全ての情報をキャッチし、カードを繰って補給計画をつくる人も、アイス・フォールの変化に応じて、ルートを整備する人も、自分がつぶれるのがわかっていながら酸素を最前線に補給するために二つ下のキャンプから荷上げする人も、すべてが主役である。このようなドラマに参加できる人間に必要な資質が、本書のなかでは、組織と個人の間のさまざまの図式を通して描かれている。このような要素が問われるに至ったことそのものがヒマラヤ登山の変質を反映しているが、そのなかでも、管理する者とされる者との問題および登山者の性格や精神的な問題が中心的なテーマになっているところにそのことが明確にあらわれている。

無線機の発達とそれを有効に使うことによるチーム運営の効率化は、登山が難しくなればなるほど機能的には有効だが、登山行動そのものを部分的なものにする危険をはらんでいる。ヒマラヤ登山のように、高所の極限状況の下においてはお互いに自分がもっていないものを他人に見出すことよりも、むしろお互いの能力の限界が見えた状態で、裸でぶつかり合うことが多いだけにその危険が大きい。ここで要求されるものは、登山者の側の水準の向上、とくにすぐれたリーダーシップと質の高いチームワークである。しかし、そのバランスは崩れやすく、登山の堕落あるいはチームの崩壊と背中合わせの状況にあるというのが実態である。しかし、わが国の場合には、ここを通り抜けて、いいヒマラヤ登山がもっともっと実行されるようになってはじめて、より低い山で本当の登山を楽しむといったことも含む、多様で、豊かな、本格的なヒマラヤ時代を迎えるとみるべ

きなのではあるまいか。

マカルー隊の投げかけた問題は複雑かつ大きく、日本の登山界に新たな動きをよび起こす数多くの水脈をもっているが、それにとどまらず、日本の社会、文化全体にとってのひとつの歴史的な出来事として充分研究に値する素材を提供している。

〔中島　寛〕

マナスル西壁—鉄の時代のヒマラヤ

高橋照著　四六判函入　四二〇ページ
一九七二年十一月　文芸春秋発行
定価一二〇〇円

この著書に直接かかわりのある話ではないが、私の参加した隊のメンバーで、たまたま前年の偵察にも加わった一人が、その経験からいっても、シェルパの取扱いに馴れている、シェルパたちも彼には心服していると称し、なおかつ、彼らを使いこなすには日本語でも十分だなどと言い言いしていたが、その結果は惨怛たるものであった。

物事が容易におこなわれていた時に示されたシェルパの、雇傭者に対する態度が彼に一方的な錯覚を抱かせ、彼は常にそれをシェルパ観の基礎においたのであったろうが、シェルパの彼に対する批判は熾烈をきわめた。

そして、それにもかかわらず、彼自身はほとんどその理由がわからず、「シェルパの質がわるい」と憤慨しつづけていたのであった。

これは極端な言葉であるかも知れないが、シェルパの質が実際に低下しているとすれば、その一半の責任は彼らを雇傭する側にもあるのではなかろうか。

「日本人のサーヴは、遠征が終ると、自分の使った肌着までやたらに呉れたがる」とは、若いシェルパが、ある意見を含んで私に言った言葉である。

『マナスル西壁』の著者は国内での登山歴も長く、経験もゆたかである上、一九六二年のジュガール・ヒマールの遠征以来、数次をこすネパール行きで、単に登山活動だけではなしに、ネパール事情に精通している人々のうちの一人だとお聞きした。

この登攀記録に続いて、約三十ページにわたって載せられた「ネパール余話」には、その歴史的背景や、流動する国際情勢のなかのネパールの位置など、解説や私見が述べられているが、そのような点からいえば、著者のこれまでに見聞されたネパール社会、民族性や習俗について、同様な筆致で結構、より詳しくかいてもらえたなら、これからのヒマラヤ登山を目指す若い世代に益するところが多いと思う。

というのは、これまでにも経験者によって言われてきた登山隊のトラブルのいくつかが、この登山以前の問題でもある事柄

には理解しようとする努力もせず、その多くを、狭い、日本人的感覚でしか受けとれぬまま、馬車うまのように、山へさえ登って駆けおりてくればそれでよしとする日本隊の態度に起因するところもあるのではないかと思うからである。

あとがきによれば、「詳しく、通り一遍の数字の羅列に終る無味乾燥な報告書でなく、エピソードや人間の内面的なことまで、虚構や誇張なしに、誠実にありのままを記述しようと試みた。」とある。

内容は、マナスルの西面ドメン・コーラの上部にベースキャンプを設け、その西北壁の下部から大きく右へトラバースして高度六五〇〇メートルの西稜上にC3を設け、雪稜上に立ちはだかる「傘岩」を突破し、七一〇〇メートルにC4、上部プラトー上にC5を進めた後、一九七一年五月十七日、隊員の小原・田中両氏が、八一五六メートルのマナスル頂上に立つつまでの登攀の模様を、隊長である著者の目を通して記されたもので、隊員やシェルパの行動も、むしろ煩雑になるほどに細かく述べているが、文中の随所に、著者のネパール通を偲ばせる情報や感想がはさまれていて興味深い。

さて、この年、パキスタン経由で入った日本隊の多くが、内乱の影響を大きく蒙って、非常に苦労した話を聞いたのであるが、比較的スムーズにいったというこの隊の、カルカッタからポカラへの荷物陸送時のトラブルを読むと、著者が他の日本隊の事故を弔いながら、

「肉体的・精神的負担が、死に追いやったかどうかは判らないが、私達の隊の陸送者の肉体的負担が、そのまま後遺症として残ったことから判断して、今後は十分究研すべきであろう。」

という言葉は、ヒマラヤでの遭難の多様性の中で、見逃されがちな、それでいて重要な要因を指摘しているものであろう。

さて、下部氷河地帯の偵察とルート工作から、技術的にも最大の難関である「傘岩」を越え、頻発するなだれと強風に悩まされながら、このバリエーションルートからの登頂を無事はたし得たことの一つは、文中で独得な紹介がなされているように、隊員の資質を十分に知った隊長が、常に、その行動を見守ろうとする努力の下で、個々の隊員が、のびのびと全力を奮って活動し得た結果でもあろう。

通読して、隊員相互の確執や、シェルパとのトラブルなど、実際にはおこり易い事柄はほとんど見当らないが、上部で奮闘する隊員やシェルパのために、下のキャンプで御馳走づくりに精出す隊長の様子を行間に想像すると、特別なスポンサーもなく、その資金のほとんどを隊員からの拠金だけでまかなったというこのような隊だけでなしに、海外登山のチームにもっとも必要なものは何かということを、前述のことがらも含めて、改めて考えさせてくれるように思うのである。

文章について難をいえば、詳細さを意識した結果かやや煩瑣な点に、独特の語法の癖がところどころに出て、いささか読みづらかったこと、登攀の描写にやや観念的なものが多かったことなど、これは、そのハイライトであるべき「傘岩」乗越しの個所と、登頂記（小原隊員記）を比較して読めばわかろう。

ちなみに、隊の名称を西壁登攀隊としたのは、日本山岳会のとった東面ルートの反対側からという総称的な意味に、語呂の良さを優先したからの由。

後尾に、「登攀隊資料」「遠征日誌」が付記されており、前者は参考になる。また、この隊に協力したシェルパについて述べた「シェルパの横顔」のように、個々の隊が雇傭したそれぞれのシェルパの詳細なデータを作り、これを集大成すれば今後に貴重な資料になるであろうし、すでにその努力が行われていると聞いた。

これからヒマラヤ登山を志向する方々に必読を奨める一冊である。

〔松永敏郎〕

山の思想史

三田博雄著　新書判　二三六ページ
一九七三年六月　岩波書店発行　定価一八〇円

会報「山」の三三九、三四〇合併号に、この本についていくらか批評めいたことを書かせてもらった。まことにそそっかしいことだが、そのときには「あとがき」を読まなかった。そしてこの本が山と心のかかわりあいのある人をいくにんかえらびだし、そのかかわりあいの解釈（ディルタイのいうところの）のうえに立つ随筆だと早合点していた。このかぎりにおいてこの本のすぐれているところを紹介し、また望むべきところをも指摘したのが、「山」にのせてもらった拙文である。この本の著作目的をこのように誤解したために『山の思想史』という題も軽い気持でうけとった。山と心のかかわりあいのある人を単に年代順にならべてあるということを、史ということばであらわしてあるのだと思った。

ところがこれは誤解であったことが、「あとがき」を読むにいたってわかって来た。著者の目的は評者が早合点をしたようなものではなくて、世界の終末への運命を、山にかかわりあう心のうちに読みとろうとしているので、精神史の一分野をひらこうとするのが著者の真意であることが明らかになった。読者にもう一度この本の二三三頁の七行目以下を熟読してもらいたい。その文のなかには終末とか、象徴とか、考えようによってはショッキングなことばがでてくるし、しかも歴史という重々しい観念がそこにどっしりと腰をおろしている。これらの観念がいかに重い意味をもっているかは、著者のような博学のひとにわかっていないはずはない。特に著者は数学、科学の歴史の研究者であるから、歴史学がいかに多くの問題をふくんでいるかは十分に理解していると期待して良いと思う。たとえ山とかかわりあう心の歴史という、極めて特殊な分野においてでも、歴史学者である著者は、その本職でないにしてもその本領を何らかのかたちで発揮すべきである。しかし評者は著者の歴史学

的意図を、特に終末への歩みをこの本から読みとることができなかった。したがって著者がえらびだした山と心のかわりあいを持つ人たちの心境の解釈についてあらわした博識と解釈の周到さは、「あとがき」を正直にうけとった評者にとっては、失礼なことばかも知れないが、教養のある人の饒舌となりおわった。

著者が終末ということばをどのように解しているかが、この本にはあらわされていないが、常識的な理解においては終末は希望と救いのない境地にはいることであろう。著者が意図するごとく、日本の登山者や山を愛する人の心のうつりかわりが終末への道を象徴（このことばも問題をはらんでいる）するとするならば、今西錦司を巻末においたことと矛盾するではなかろうか。この幸福な登山者の冒険への意欲、仕事と道楽の調和はいかなる意味において終末なのだろうか。評者は全く理解に苦しむ。近来特にさかんになってきたヒマラヤ登山が著者の眼にうつらないはずはないのだが、この現実のなかからどのようにして終末をよみとるのか、評者は途方にくれる。

歴史記述は史上のひとつのできごとが、どのような先行事態によっておこったかと、そのできごとがいかなる影響を後に残したかを明らかにする義務がある。これがはたされていてこそはじめて歴史と名のることができるのである。それゆえに歴史記述者は、先行事態をよくうけつぎ、しかも後に大きな影響を及ぼしたできごとや人物の事蹟をさがし求めねばならぬ。近来のアルピニズムは槙有恒に負うことが非常に多いことは衆目の見るところであるにもかかわらず、この登山家についての章を設けることも、詳説することもなくとおりすぎたのはなにゆえであろうか。これも評者が不可解とするところであるし、酷評をあえてするならば歴史記述者としての怠慢ではなかろうかとさえ思う。これと似たことが藤木九三、深田久弥についてもいうことができる。すこし時代をさかのぼれば小島烏水の名もこの本では重くとりあつかわれてはいない。

北村透谷がとりあげられるなら、大町桂月もとりあげられてしかるべき人物である。欲をいえばウォルター・ウェストンにも及ぶべきである。総じて著者は、かれがえらんでその山とのかかわりあいを解釈した人たち以外の人物やできごとは論じるに当らぬとしているとしか思えない。著者がこのことについて別段の説明をしないかぎり、著者の歴史眼はあらぬ方向にそそがれているとせざるを得ない。

著者は山で死んだ加藤文太郎と、大島亮吉をとりあげているが、もし著者が山での死が終末を意味すると解して、このふたりをとりあげたのだとすれば、評者はあらためて終末という観念について著者の再考三考を促さないではいられない。前にも書いたが、きわめて常識的に解しても、終末は希望と救いのない環境への陥没である。多くの哲学者、神学者はこの観点に関して深遠な思索をしたあとを示しているが、これらについては今は言及しないでおく。この本の批評をするというしごとの範囲では、その必要を認めないからである。著者は現代を人類の終末と見ているようだし、また多くの哲学者、科学者、宗教家

もそう考えているが、評者は終末と危機とを混同してもらいたくないと考えている。現代はたしかにひとつの危機である。

しかし、現代には未だ希望と救いがある。今のうちに何とかしなければ、かけがえのない地球は生物を養って行くことができなくなるという警告がなされていることそれ自身が救いであり、希望である。人類が全くこれらの警告を発しなくなったとき、それが終末である。常識でもここまで考えを進めることができるのに、著者は事もなげに終末を口にするのは、その博読と全くあいいれないではないか。この恐ろしい観点を軽々しく口にすることを、評者は許容し得ない。

もうひとつ著者の、すくなくとも評者の眼には軽卒としかうつらない用語がある。それは象徴である。著者によれば「本書は山の思想史であると同時に、日本近代の歩みの象徴にもなっていると思う」とある。この日本の近代の歩みはほかでもない、終末への歩みなのである。この観念の狭義の理解においては象徴は形象でなければならない。カッシーラーにおけるごとく広義に解すれば言語、宗教、神話、科学も象徴と呼ばれ得る。著者はおそらく広義にこのことばを使用しているのだと思うが、登山という行為はどう考えても終末をシンボライズしているとは思えない。出家遁世して山に入るならば、あるいは山の悠久なすがたに対比して、人間のはかなさを思うならば、あるいは終末をシンボライズするかも知れないが、本書にとりあつかわれた人々のうち、いくらかこのケースにあてはまるのは北村透谷だけである。それとても透谷が恍惚（ただし近来はやる老人のそれではなく、いわば法悦ともいうべきもの）の境に達したことが主想になっている。恍惚は終末どころか、大いなる未来への道の発見である。他は省筆するが著者の軽卒さはここにも見られるのである。

今までこの本を思想史の本として批判してきたが、次にここにえらばれた人の山との心のかかわりあいかたの解釈の態度についての評者の意見を記すことを許されたい。この本では登山者と、そうでなく山に思いのむすぼれを托してそれを解こうとした人とが同列にあつかわれている。これは根本的な過誤ではなかろうか。山と人との心のかかわりあいは、職業として山を歩いたりする人の場合は除外して、大体ふたつに分けられる。そのひとつは仮に観照型と名づけておく型で、山を見たり、歩いたりすることを機縁として、心のむすぼれをときほごし、新らしい心境に達しようとしたり、また達し得た人の示す心的行動の型である。この本の著者はキッケルハーンでのゲーテの心境に筆を起しているが、これはこの型の心的行動のひとつの典型である。高村光太郎においてもこの型を見ることができる。これらの人において、山は心のひとつの跳躍台であり、自分の心のうごきに伴う情動を、山のさまざまの景観に感情移入（リップスやフォルケルトのいうところの）し、自我感情を客観化しているのである。せんじつめれば山をほめているのではなくて、自分自身をほめているのである。このような心的行動を文辞に托して表出するのに成功すると、芸術的に価値の高い詩や文ができあがる。その詩文の美しさは山を機縁として、その筆

わ
✓

者の心におこった感動の美しさであって、山そのものに帰すべきではない。しかしこの種の詩文のすぐれた作は人間形成の見地から見て極めて有用、貴重である。何となればこの種の詩文に魅せられる人は、意識する、しないに係らず、自分にもこのような美しい感動を、機会があれば持ち得るであろうとの可能性を感得し、おのずから精神的に成長するからである。この種の詩文で人の心に媚びる安易な、甘ったるい情趣を伝達するものがあれば、それは読者の精神的成長のさまたげになることに戒心しなくてはならぬ。評者はこのような安易な、甘味たっぷりの詩文が世に出ないことを切望してやまない。

読者にわずらわしく思われることを覚悟のうえで重ねていうが、このような山と人の心とのかかわりあいにおいて、主たるものは人の心であり、山はその心を托するものであるにすぎぬと。このようなかかわりあいにおける山は他のものによって、とって代わられることも稀ではない。このようなかかわりあいを山について持つ人のまえに、敬愛すべき異性があらわれ、それと心をかよわすようになれば、それにすべての心事を托するようになるであろう。そのとき山は見棄てられる。

登山者にとっては山は他者ではない。山は登山者にとっては敵であると同時に、自分の一部分である。山と自分との対決であって、この二者のあいだにアウフヘーベンがおこなわれる。これがほんとうの登山である。そこには両者のきびしい緊張関係があるゆえに、その克服は自他融合の宏壮な境地をひらくのである。この克服は自他、主客の融合であるがゆえに、美辞麗句が口をいれる余地は皆無である。手近なところで槇有恒の『わたしの山旅』を例にとるが、この登山者は何の修飾も用いず、淡々としてその山の思い出を語るが、そこには衒学も自己主張もない。それでも読者をして粛然たらしめるではないか。このような文を書くことのできる心境こそ、ほんとうの山と人とのかかわりあいによって得られたものであり、山の観照によっては全く得られない境地である。

この本の著者は観照の対象として山とかかわりあっている人と、登山者とを同列においていて、登山者であって同時に観照者でもある人、たとえば木暮理太郎、田部重治、大島亮吉については、その観照的心境にのみ注目し、行動者としてのかれらの心境に迫ることができなかった。これはこの三人について誤った印象を読者に与えるという、極めて望ましからざる事態を招くことは必然である。著者のために惜んであまりあると考えるのは評者ひとりではあるまい。このことから考えると著者自身が観照的立場にのみ固執し、ほんとうのアルピニズムに眼を注いでいないからではないかと疑うのも当然である。したがって前にも書いたように槇有恒、藤木九三、深田久弥、冠松次郎などの人物、それにヒマラヤ登山について語ることができなかったのではないかと思う。これではこの本を山と心のかかわりのある人の列伝的解釈学的随筆と見ることもできなくなる。著者がこの本をまとめるにあたって文献を渉猟したことに敬意を表するにやぶさかではないが、うえに書きつらねたような思考の筋道からすれば、山の思想史としてははなはだ物足りないとい

わざるを得ない。評者の見地からすれば著者は山の思想史の方法論の反省が、行きとどかなかったとさえ思われてならない。

終りに毎日新聞社が委嘱した良書選定にあたった人たちが、この本に賞をさずけたことが評者にとっては不可解であることを告白する。その選定委員はいずれも学識者であることに疑いはないが、それらの人たちがほんとうにこの本をおわりまで熟読したのだろうかと疑わざるを得ない。礼を失するかも知れないが、卒読してこの著者の博覧と美辞に眩惑したのではないだろうか。評者自身も実は眩惑した。しかし再読するに及んでうえに書きつらねたような根本的な著作の態度に対する不満、不可解を感得したのである。選定にあたった人たちの再読を切望してやまない。（一九七三・一二・四）〔辻　荘一〕

探検と冒険　全八巻

〔編集委員〕加納一郎　泉　靖一
梅棹忠夫　樋口敬二　本多勝一　四六判　平均四六二ページ　一九七二年一月～八月　朝日新聞社発行　定価各巻九八〇円

この全八巻よりなる講座は、わが国の極地研究の第一人者である加納一郎先生の古稀を記念して企画されたものである。この講座の多彩な執筆者の顔ぶれ、豊富な内容は、先生の人柄、なされた仕事の偉大さを反映するものであろう。

『探検と冒険』講座は各巻「地域講座」、「技術講座」、「理論講座」の三つの講座で構成されている。各巻の編集は、異なった一人の編集委員に委ねられ、各巻それぞれが個性豊かなものとなっている。編集委員の個性と思想、さらにはそれぞれの巻に集まる執筆者の個性はこの講座そのものを全体として独創的ではなやかな企画にしている。

この講座の幅の広さ、ものの見方の自由さはこの編集の方針に負うところが多い。

講座ものにありがちな知識重視主義はこの講座には見あたらない。たとえていえば、これは重々しいアカデミックな構えをした大学ではなく、市民が自由に参加できる市民大学の趣きがある。だから逆にいえば、周囲の華やかな喧噪ともいえる雰囲気を楽しんでいると何を学んだか、この本についていえば余韻のある読後感を失ってしまうかもしれない。

この講座の幅の広さ、見方の自由さは「地域講座」の構成によくあらわれている。人文地理学や自然科学の立場から克明に一つの地域の風土や人間の問題を論じたものから現在の政治問題の原点を探るもの、あるいは新しい探検の提唱まで広いテーマについて論ぜられている。全体に「探検される側」の立場への理解が深いのはヨーロッパ風をはなれて日本人が新しい「探検と冒険」感を形成しつつあることを示すものだろう。木崎甲子郎「南極を開放せよ」（第六巻・巻頭論文）や本多勝一「ニセ

モノの探検や冒険を排す」（第七巻・巻頭論文）などは、探検や冒険さえも資本の論理にまきこまれ、個人としては純粋な発想にもとずくものであっても、その実現にあたって他の力の安易な利用や妥協のために権力や官僚の道具となっている探検や冒険の多い現状をするどく批判したものである。探検や冒険のもつロマンチシズムのひびきだけではなく、その社会的行為としての側面を直視する必要があろう。

この「地域講座」のもつ幅の広さ、見方の自由さは、反面探検的、冒険的行為「ごっこあそび」との距離感をあいまいにしているともいえる。探検や冒険は発想としてのユニークさ、面白さだけでは行為として成立しない。肉体的行為としての側面も重要である。その意味からすれば、探検や冒険の名にふさわしい登山的行為がはぶかれているのは残念である。

やや饒舌な京都弁で語られる「理論講座」は現代文化論、日本文化論としても興味深い。しかし語られている内容は難解である。語られていることばの表面的な意味あいは理解できたとしても、その背後の意味の理解は、語っている人達のこれまでの業績や住む世界についての認識なしには困難である。この理論講座は、これから「探検と冒険」を志す若い人たちよりも、ゆえなき権力をふるう官僚や大学にとじこもった教授達に読んでもらいたい。

「技術講座」は探検準備の方法（第二巻）生活技術・医学知識（第三巻）言語・通信連絡の方法（第四巻）陸上での移動と輸送の方法（第一巻）など探検隊の組織から現地における生活と行動の方法が詳しくのべられている。しかし一部の討論には現代の最新の技術や積み重ねられてきた技術的蓄積の紹介や検討より回顧的な議論に多くがさかれている面もある。

学術的な仕事を志す人々のためには、気象観測の方法（第三・六巻）フィールドノートのとり方、撮影・録音の方法（第四巻）、地図の見方、つくり方、各種学術調査法―地形・地質、氷河・陸水・気象・動植物・人体（第六巻）および得られた観測データの整理・報告の技術（第七巻）が参考になるだろう。現在の地球上にはなお多くの空白な部分や未知な課題が残されている。アマチュア科学者の果たす役割は大きい。（第八巻理論講座）

海や空に興味のある人には、熱気球の手づくりする方法やその操縦術、ヨットから氷山までの乗り方、帆船の生活技術と航海術（第八巻）が役立つだろう。ないのは父母からの許可のとり方ぐらいのものであるが、これが必要な程度の人にはこの本は高等すぎる。

技術講座が各巻に分散しているのは不便である。ジーパンのポケットに一冊をさしこんで未知の地へとはいかない。全巻もっていくとなるとアブリッヂ公の探検隊ほどの陣容でないと無理である。技術講座に関しては、「探検する側」への配慮が足りない。

この講座を読んだ若い人に感想をきくとこの技術講座が最も楽しいとのことである。地域講座や理論講座を読むと、最早自分がなすべきことは何もないと錯覚するが、技術講座には夢が

あるという。日本人の手で独自の探検観にもとずいた「Hints to travellers」をつくる時期にきていると思う。

一般論であるが、この技術講座の自然科学系の著者は「現象記載の方法」に重点をおき、人文・社会学系の著者は「現象の見方」に重点をおいているように思われる。学問の世界は伝統的にその傾向がつよいが、探検と冒険にあってはその人類史における先駆性の役割からいっても、狭い学者の視点にとらわれることなく、その二つの合一の視野でもって自然や人間の世界を偏見なく見つめることが必要であろう。

これから「探検と冒険」を志す若い人々は、この講座のもつ量感やはなやかさに圧倒されることなく「冒険」の心をもって「探検」するつもりで読まれたらよいと思う。〔渡辺興亜〕

ヒマラヤ関係図書目録

—Catalogue of the Himalayan Literature—

薬師義美編　B5判　三四三ページ
一九七二年十月　自費出版　限定五〇〇部　頒価三五〇〇円(郵送料共)

本書の編者である薬師義美氏が、本書のはじめにのべられているように、編者はヒマラヤ関係の文献のカード作りを一九六〇年前後から行っていたようである。そしてこれらカード作りの成果の一部は、すでに

・Selected Index of Report on Himalaya, Tibet and Central Asia to the Geographical Journal, Vol. 1 (1893)～Vol.125 (1959) by Yoshini Yakushi, Kyoto, June 1959.

・Contents and Index to the Himalayan Journal, Vol. I (1929) ～Vol.XXI (1958) by Eizo Suwata and Yoshimi Yakushi, Kyoto, Aug. 1960,

として上梓され、ヒマラヤ研究者の間で、利用に供されていることは、ご承知の通りである。(JAC会報二一一号13ページ図書紹介参照)

その後薬師氏が、深田久弥さんの九山山房を訪ねられて、こつこつと文献カード作りの作業を行っていたこと、また深田さんが、この図書目録の完成を非常にたのしみにしておられたことは、深田さんからも生前よく聞かされたことを憶えている。

この点については、序文の中で、

「深田先生からは、それ(一六〇〇枚に及ぶ文献カード)を1冊の本にまとめてくれたら大変ありがたいと何度もいわれた。しかし……(中略)……目録をつくるなどという時間はまったくなかったのである。

ところが、一九七一年三月二一日、私は白馬山麓のスキー場で、とつぜんに深田先生の訃報に接した。しばし、耳を疑ったが、しばらくして、しまった、という気持ちでいっぱいになった。気をとりなおし、私はたまった数年間分の資料を整理し、

一気にカードを補充していった。遅きに失したけれど、ここにそれを一冊の目録にまとめることができた。これが生前にいただいたご厚情に対する、せめてものご恩返えしと思い、故深田先生に謹んで本目録を捧げる所以である」と記されている。

一九七二年秋のある日、日ネ協会理事会の折に、たまたま上京され、川喜田二郎氏を訪ねられた薬師氏から、ヒマラヤ関係図書目録を作るべく目下懸命になってタイプ・オフセットでまとめており、しかも英文タイプについては、自分でタイプし、邦文タイプのみを外注し、これを自分で原版に貼りつけて編集している話を聞いたことがある。私自身、エベレストの報告書をこの方式（タイプ・オフセット印刷）で編集した直後のことでもあり、この作業が如何に大変なものであるか、よく知っていたので、こうした困難な作業に一人で挑戦している編者の姿をみて陰ながら声援を送ったことを憶えている。

年があけて、本書が私の手許に送られてきたのを見て、その出来ばえのすばらしさに先ず驚き、改めて敬意を表した次第である。従来この種の作業は、専門家の分野であり、充分な予算がなければ難かしいものと、決めこんでいた私も考えを改めざるを得なかった。こうした点でも本書は、今後のよき範例となると思えるのである。

かつて私は、神原達氏のまとめた Nepal Bibriography にもその努力に対し感心させられたことがあったが、本書を手にしてみて、ヒマラヤ関係の文献がこんなにあったかと驚くと同時に、改めてこの図書目録の重みを感ずるのであった。

本書に収録されている文献は、ネパール・ヒマラヤを中心にチベット、中央アジアを広汎に含み、東は中国雲南省と北部ビルマから、西はカラコルム、ヒソゾー・クシュ、天山、パミールまで及んでおり、それらの文献は、

第一部　欧文図書

・文献目録（Bibriography）……一一点
・著者別　A～Z　……一八八〇点
（各国語訳本も加えると更に数はふえる）
・地　図　……三四点
・近着本補遺　……三七点

第二部　邦文図書

・著者別　あ～わ　……二五六点
（翻訳本は、欧文図書の部の各国語版に加えられているが、末尾の十一点のみ、ソ連、中国語の文献の邦訳本が含まれている）

以上合計二二〇七点の文献が収録され、巻末には、三四ページにわたり、題名別の索引が収録されている。

この分類法も極めて適切であるし、また各文献の記載内容も「著者別」「発行年」「書名――副題」「発行地」「発行所」「サイズ」「ページ」「図版」「地図」「概要又は解説」の順序で整然とまとめられており、各国語版の扱い方などまとめ方としては、完全といえる。

この種の文献目録（Bibriography）は以前に発行されているBibriographyをベースに、その肩の上に立って作られるため、

後から出るもの程、収録される文献の点数も多く、又新しい文献が入るために内容が充実してくることは当然であるともいえるが、文献の取捨選択法（これはどこにウェイトをおいているかにより異なる）、整理法等により、その価値が、異ってくる。本書は題名からみても、編者の最も得意とする分野からみてもヒマラヤに最重点がおかれていることは当然であるが、中央アジアをはじめ、広範囲にわたり収録されていることは前述した通りである。こうした点からみて、単にヒマラヤの研究者のみならずこの方面の地理学、考古学、歴史学、民族学、文化人類学の研究者からも、最新かつ、もっとも内容の充実した Bibliography として、高い評価が得られることを信じて疑わない。各国の関係ジャーナルのブック・レビューをみるのが楽しみである。

特に本書で特筆さるべきことは「本のサイズ」「英文解説」がつけ加えられていることである。前者は編者が九山山房をはじめ各地をまわられて、自ら計られた努力の結晶であるといえるし、後者が書名の書き写したものを並べただけでなく、自分なりに内容を消化した上でまとめたことを意味しているといえる。こうした点からも、本書が高く評価される所以である。

最近のヒマラヤにおける日本隊の活躍には目をみはるものがあるが、報告書が邦文のために、外国人には理解されず、日本隊は登るだけで報告書も作っていないというような誤解を与えているふしがみられる。この点については、本書に収録されている邦文図書二五六点、邦訳本一八二点を見れば、わが国のヒマラヤ登山の層の厚さも理解してもらえると思う。特に邦文図書につけられた、英文による解説はこの点で価値が大きいと思われる。

なお、ここに収録された単行本以外にも、年報やジャーナル類には、すぐれた論文や記録が無数にあり、また専門となると集大成したものが必要な関係で、単行本になりがたいものもある。私は以前から、これら内外の山岳会の年報類、山岳雑誌、地理学雑誌などのジャーナル類、個人的に発行された報告書等にでているヒマラヤ関係の文献目録として一冊にまとめられないかということを切望している者の一人である。どこかで読んだ記憶があるが、探して見つからないという経験は、多かれ少なかれ誰もが経験されていることと思われる。ヒマラヤ研究者にとって、この時間的ロスは大変なものである。

そこで、本書の編者、またはこれに続く研究者に期待したいことは、本書の続編として、「ヒマラヤ関係文献目録」をまとめられないかということである。もちろん、尨大な作業であることは覚悟の上のことであるが、誰かが、いつかまとめておかないと、ますますできにくくなることも必定である。この種の本は営業的に見れば、儲からないことも明らかであるかも知れない。こうした本こそ、JACあたりで刊行すべきではないかと思うのである。そして本書のように邦文の文献には、英訳をつけておけば、今まで種々と文献でお世話になった先進欧米諸国の登山家に対しても、ささやかなご恩返しができることにもなると思えるのである。期待して止まない次第である。

深田さんの急逝により、具体的にすすめられたこの作業には発刊にこぎつけるまでには、どれだけの苦労があったことか、計り知れないものがあるが、この努力の結晶である本書を見るにつけ、薬師義美氏は、今は亡き深田さんに対し、何よりの供養をされたと思うのである。

〔松田雄一〕

ザイルを結ぶとき

奥山章著　B6判　三九六ページ
一九七三年七月　山と渓谷社発行
定価九五〇円

奥山章を知る者には信じられなかった彼の死後、山の友人によってまとめられたこの本は、彼を伝えてはいるが、彼と面と向っているときの印象とはほど遠い。彼の印象は文章で表現できないほど強烈だったし、その彼がもういないことをこの本は伝えている。

飯田橋の「梓」ではじめて彼に会った晩、日本青年会館へ行こうと誘われ、柴野利秋氏の登山教室へ引っぱり出されたから、この本の年譜でみると昭和三十四年だったらしい。その柴野氏が死んだことも後日彼から聞かされた。私と同年輩の彼には何だか通じるものを感じるのだが、中野の彼のアパートへ夜おしかけたり、新宿で飲んだりしながら、彼のラッパを聞くのが楽しみでもあった。二月の細野で会ったとき、ショートスキーを都合するから、二人で鹿島槍の北壁をスキーで下ろうとさそいかけられたのは、彼にもやはり同年輩の共感というものがあったからではないかと思う。もちろんお互いの足なみを見て中止になったが——

彼は一言でいえばスタイリストだった。その彼に弱い面がなくはなかったのだろうが、めったにそれを人には見せることがなかった。常に自分の前面を人に向けている点には感心させられる。性格的に私と異っていて、私が心配症なのに反して、彼はとにかく前向きで、不意に横に何かが現れても、とっさに自分の前面をそちらに向けられる、そんな人間だった。

私が日本最大の壁だと称して奥鐘山の西壁をとりあげていたら、そんなゴルジュ登りはやめろ、もっと空の多い壁を登るべきだと意見した彼は、やはり岩登りでもスタイリストだった。彼の登ったすべての壁がピークにつながるものではなかったが、それは日本を舞台としている間は仕方のないことだったろう。その夢がヨーロッパで達せられたことを彼は喜んだにちがいない。

同年でも山への出発がおくれていた私は、彼に教えられることも多かった。私に対する彼の反論は、煙に巻くようなこともあったし明快な意見もあったが、いずれにしても聞いていて腹が立たなかったのは、彼の割りきったような気性と、ケタはずれの毒舌のためだろう。

さてこの書評を私に書けと電話してきた原君は、JACと直

接のつながりがなかったとしても、奥山の存在を否定するわけにいかない。それで彼と全く対象的な私に書かせてみて、私がこれを取り上げればよし、書かなければこの本の書評はボツにするという。頼りにされているのか強迫されているのかわからないが、彼に共感を持ち、彼と親交のあったJACの会員の中で、私を選んでくれたことを感謝している。私は彼に何も与えることができなかったし、今もできないのだが、目をむいて反撃しそうなことを彼のために書くことはできる。

彼は最後に自分を見つめ、自分とギリギリのたたかいを続けたことを奥さんの手記から感じとることができるのだが、登山は常に自分とのたたかいであり、彼は生涯それを続けていて、それを全く表面には出さず、最後に最も大きいたたかいを経て自分に見切りをつけた、そんな感じがする。彼の死を不思議に思った多くの人達も、彼の心情と、そのたどった道をやっと理解することができるだろう。

この本の彼の手記は、その紀行において最も彼らしくない。登山の行為は、彼の生甲斐の中で最も一般的な状態であって、ことさら取り上げるほどのこともないのだろう。それに反して評論とか批判になると、彼らしい面が浮かび上ってくる。それを、彼の毒舌のはけ口と見る人もあるかもしれないが、彼が生甲斐を感じ、自分なりに考え、自分に課し、自分が生き抜いてきた登山への態度と、世俗の登山とがかけはなれているために、自然発生的に彼の中に胎動していた批判が口をついて出ていたのかもしれない。それだけ彼の生き方が登山に対して純粋だったのだと思う。

この手記の中で、私には彼の手紙が最も彼らしいと思われる。街で話しているときのような、公式ばらない姿がその中にあふれている。彼の茶目気、洒脱さ、相変らずの前向き、意外に細かい心づかいなどが、次々と手紙の中にくりひろげられている。そして私に対するのかもしれない皮肉が盛りこまれているのも愉快だ。

彼が書き始めたという自伝も、最初のフィクションの息が続かなくなって、途中から忠実な伝記に移っていくが、彼のいう戦中派一ノ倉の残党の一人を記録しておきたかったのだろう。やがて積雪期初登のありさまが語られていくが、彼が女性とパーティを組むことの不可解さが頭に残る。それは山にではなく、女性に対してのスタイリストの彼の一面と思えば理解できなくもないのだが——。それともう一つ。私に理解できなかった彼の生活。何の収入で食べているのだろうという疑問も、ある程度その裏がわかるような気がする。

全く書評らしくないことばかり述べたように思うが、この本は編者によってうまくまとめられており、彼の足跡が最後に行動と文章と映画に分けて納められている。せいいっぱい登山に生きた彼としては不満があるかもしれないが、この本は彼の遺骨だ、そんなふうに私は考えている。

〔阿部和行〕

Travels amongst the Great Andes of the Equator

by Edward Whymper,
edited and introduced by Eric Shipton,
Charles Knight & Co., London, 1972

エドワード・ウィンパーの書いた『赤道直下の大アンデス登攀記』は、初版が一八九一年に出ているから、もう山の本では古典に属するものと言ってよいと思う。

私のところへは時々妙な本が飛び込んでくるが、これもその一つ。私の持っているのは第二版（一八九二年もの）であるが、これには面白いことにウィンパー自身の署名がしてある。この署名も私が持っている他の本にしてある署名と全然同じだから、偽物ではあるまい。日付は一八九五年一二月二日となっているから、ウィンパーの五十五歳の時で、ベーコンという神父への献呈本となっている。而もそのベーコンさんの写真まで貼ってあるのだから愉しい。

私がこの復刻新版に興味をもってわざわざ買ったのは、例のエリック・シプトンが前書きを長々と十六頁も書いていることであった。山の場合はある人が序文を書いていると、その中に必らず自分の山に対する考えや、他の本にはなかったことなどが書いてあることがあるので、なかなか参考になるものである。

シプトンと言えば、パタゴニアに興味を持っている人ならよく知っている "Land of Tempest"（あらしの国）が、田村協子訳で山と渓谷社から刊行された。これには、私の解説みたいなものと、ジェフ・ブラットの略歴と随筆が拙訳で載っている。

尚その時、シプトンの最近の著書として次の書を加えておいた。

"Tierra del Fuego : —the Fatal lodestone" Charles Knight's Latin American Adventure series, London, 1973 £ 4.00

即ち『避け難い魅力——火の島』である。彼は前に出している本にもティエラ・デル・フエゴについてはいろいろ書いているが、今度はそれを一まとめにしたのだと思う。彼はこの島のダーウィン山脈ではかなりなパイオニア・ワークをやっているので、こういう本が出たとて別に不思議ではないが、そこをよく知っている人がまとめてくれるということは、われわれにとっても大助りというものである。

このチャールズ・ナイトという出版社では、ここで紹介しているウィンパーの『大アンデス』の他に、グレーム・パリッシュの『チリー像』、ギルバート・フェルプスの『最後の地平線・フラジルの旅』、スティヴン・クリッソルドの『南米の聖人達』、チャールズ・ウォータートンの『南米放浪』というのを出している。私達もかつて「南米登山叢書」というのを作ろう

としたことがあるが、そのアイディアだけはチャールズ・ナイト社にとられてしまった訳になる。

さてシプトンはこの前書きで何を言っているのか、それを紹介しなければなるまい。彼はセイヤーやボニントンの本などにも序文を書いているが、それぞれの本に適しているような当り触わりのないことを述べている。

しかしセイヤーの序文では国境侵犯を褒めているような書き振りで、私には頷けなかった。これは勇気でなく無暴であり、他人にかかる迷惑を考えず、自分さえよければという何処かの国の登山者と全然同じ行動である。

しかし今回の序文は成る程と思われるようなことがところどころにあって、シプトンやウィンパーを研究している人には、いくらか役に立つかも知れない。その幾つかを拾ってみよう。

シプトンがこの本の可なり傷んだ原本を手に入れたのが十五歳の時、そして山の探検に生涯をかけるようになったのもこの本のお蔭であるという。また、スマイスはその『ウインパー伝』(拙訳、あかね書房版)で、ウィンパーの人間性を可なり暗く描写しているが、それが本当なら『スクランブル』のような本は書ける筈がないと弁護している。

それから暫らくの間はマッターホルンの事件を紹介しているが、事故の原因をウィンパーだけに負わせるのは酷だとして、その理由をいくつか挙げている。

その一つは、一八六五年当時は登山技術もまだ幼稚で安全対策も充分ではなかったこと。その二は、ハドスンはウィンパーより十二歳も年上であるから、隊の編成にも責任があり、特にその弟子で登山経験も殆んどないハドウを仲間に入れたこと。第三に、戦術的なことは総てガイドに任されていた時代であること。という風にウィンパーだけが責任者ではなかったということを、強調しているのである。

ウィンパーがエクワドルへ行った主な目的は、高山病の研究にあった。彼は科学者ではなかったが、いろいろの学問に興味を持ち、これらに関する資料も沢山集めて、それぞれの専門学者にデータの整理と研究を依頼している。

彼自身の研究(高山病やバロメーターのこと)には、独りよがりや誤まりが沢山指摘されているが、その知識欲の旺盛さには敬意を表してもよいのではないか。

当時、高山病は酸素の欠乏よりも気圧の減少にその原因が帰せられていた。チンボラソの実験結果でもそう考えられているが、シプトンは食中毒に過ぎないのではないかと書いている。

いずれにしろ科学的な目的を持つということは今日、その探検や登山の言訳になったり、資金集めの手段になったりする場合があるのだが、実際的にも科学面の範囲が広くて深いほど、その探検の満足や意義も一層大きくなることは疑いない。クライミング・アニマルも結構だが、こういう面のあることも考えておいた方がよい、とシプトンは言っているのである。

この新版では一般読者に余り興味がなく、煩わしいと思われる部分は省かれているし、付録の「バロメーターの使い方」もついていない。それにしてもウィンパーの本が再びいろいろの

形で世に紹介されるということは、喜ばしい限りである。

〔吉沢一郎〕

Ney Elias

Explorer and Envoy Extraordinary in High Asia,

by Gerald Morgan,
George Allen and Unwin, London, 1971.
294 pages ; maps and plates.

カラコルム、ヒンズー・クシュ、そしてパミールなどの探検史や政治史に興味をもっている人なら、ネイ・エライアスの名を知っていなければならない。それにも拘わらず日本語の中央アジア探検史には殆んどその名が出ていない。出ていても、このエライアス伝にてらして余り正確でないと思われる節がある。

これには無理もない事情もある。彼の比較的詳しい業績は公けには殆んど発表されたことがなく、この伝記にしても七十年経ってやっと陽の目をみたということなのだ。今までに私がみた横文字の本でも彼のことに言及しているのは、カーゾンの『パミールとオクサスの水源』とシーヴァーの『ヤングハズバンド伝』だけであって、それもそう細かくという訳ではない。

七十年間もどうして伝記が出なかったのかという疑問が浮ぶ。その障害は実の母だったようだ。母は極端ないわゆる教育ママだったらしい。この本に出ている母の写真をみると、丸ぽちゃで虫も殺せない優しい女性という感じをうけるのだが、これが長じるに従って次第にヒットラー化していった。親のいうことを聞かないで自分勝手な方向に進んだ者は、親でもない、子でもないという訳だろう。そんなことから、私の目の黒いうちは伝記なんかとんでもないと頑張られてしまった。ありそうなことである。

この本の編者、ジェラード・モーガンはエライアス（一八四四―一八九七）の甥であるから、資料集めには都合のいい立場にあったろうと一般には考えられるが、事実はその反対であったらしい。私信などは伝記作家には欠かせないものだが、それも使えなかったし、政府に対する公式の報告書も官僚主義のお蔭で余り利用出来なかった。この本が出来たのは、主として英国地学協会の資料室の奥深くにしまわれていたもののお蔭であった。

私はネイ・エライアスの活動を中心にした当時の中央アジアの情勢について、第五回目のヒンズー・クシュ会議（昭和四十八年十一月、於盛岡）で講演をやるため多少整理したので、『山と渓谷』の海外山岳書欄では六回に亘って内容を紹介してしまった。どうしても一、二回ではすませられなかったからである。

探検家にもいろいろある。私も自分なりにそれを分類してみたが、十九世紀中葉から二十世紀の初めにかけてパミール並び

にその周辺で活躍した各国のいわゆる探検家、それらの名前はいちいちここに並べなくとも、皆さん先刻ご承知の筈だ。詳しくは深田久弥著『中央アジア探検史』の最後にある「近代中央アジア探検年表」を御覧願いたいが、これらの探検家にとっての最終目的は必らずしも近代的なスポーツ的な探検そのものにあったのではなく、それぞれの国の安危と権威を背景にした、いわば密偵的な要素がその大部分を占めていたといって差支えないであろう。而もその中には他人の功績を横取りしてしまって、自分一人がいい子になっているというようなこすっからいのもいない訳ではなかった。

そういう中にあってネイ・エライアスは、無私無欲、純粋な愛国心から粉骨砕身、自分の身体と健康を犠牲にして、当時としては誰にも負けない長途の旅行と細密な踏査を行なって、インドの辺境（当時の）を安泰ならしめた。後に有名になったゴドウィン・オースティンを伴なってカラコルムを越え、東トルキスタンへ入ったこともあり、フランシス・ヤングハズバンドさえも彼の直接の弟子であったことを思えば、エライアスが如何に当時の探検家として、一頭地を抜いていた存在であったかがわかろうというものである。そうした意味から、彼の真価を知っていたカーゾンは流石に偉いと思うが、エライアスが活躍していた時にはカーゾンは副王ではなかった。もしカーゾンがその時インド副王であったら、中央アジアの歴史はもう少し変っていたろうし、エライアスに対する処遇も大いに違っていたことと思う。

ところで彼はどんな踏査旅行をしたのか、それを略記してみよう。

一、一八六七―六九年、黄河の測量及び新黄河の流路踏査。
二、一八七二―七三年、北方より西蒙古を経てシベリアの横断。
三、一八七四年、ビルマ、雲南使節団。
四、一八七七年、ラダーク。
五、一八七九年、ヤルカンド往復。
六、一八八〇年、G・オースティン同行、カシュガールへ。
七、一八八五年、カラコルムを越えてヤルカンドへ。ヤンギ・ヒサルからパミール横断。
八、一八八八年、シッキム。
九、一八八九―九〇年、英国、サイアム国境委員会。
一〇、一八九一―九三年、ペルシャ。
一一、一八九五―九六年。ペルシャ。病が篤くなってから、クロポトキンの好意により露領を通って帰国。九七年五月、ロンドンで波瀾と苦難の多かったその五十三年の生涯を閉じた。

興味のあるのはメシェッドにいた一八九五年の十月に、日本の福島安正中佐と会見していることである。日本人でエライアスを知っているのは彼一人であろう。

私が本書を読んで最も感銘というか興味をもったことは幾つもあるが、その中でも次のものは最も印象深く受けとめたものであった。

東から西へパミールを横断した時、並んでいる峠を一つ一つ反対側の河までおりて調査していること、アクスーとアブイ・パンジャの合流点で両河の流量を測り、後者をオクサスの本流と発表したこと。

ムズターグ・アータはヘディンの命名ではなく、彼がそうした時にはロシアの地図に、クングールと共にそう記載されていたこと。

ロシアのきりのない南進を防ぐため、アフガニスタンと中国の国境を一部共有させ、ロシア領を直接インドと接触させずに、今のワハン回廊をその間に挿入して、アフガン領としておくということの最初の提案者が彼であったこと。ナイトは『三帝国の会するところ』という題名の本を書いているが、正確にはそういうところはパミールにはないということである。

彼は北京から蒙古を経、シベリアを横断した時の旅行（八〇〇〇㎞）に対し、RGSから金牌をうけているが、それはリビングストンを救出したスタンレーが、同じものをもらったのと同じ日であったという。

ネイの旧友で崇敬者の一人であったスティヴン・ホイーラーはRGSと英国伝記事典のために追憶記を書いているが、当時の新聞には、「本当に偉い人は認められずに死ぬ」、「アジアにおける女王の臣下で、彼ほど多くを行ない、自分のやったことを語らなかった人は少ない」と書いてあったという。

まだ多くのことを書かなければならないと思うが、この辺で一まずこの本の紹介文を終ることにしよう。〔吉沢一郎〕

Antisuyo–The Search for the Last Cities of the Amazon(1)

by Gene Savoy
Simon and Schuster, N.Y., 1971.

Vilcabamba–Last City of the Incas(2)

Robert Hale, London, 1971 by Gene Savoy

(1)も(2)も内容は同じで文章も地図も全然変っていない。私は最初(2)の方を英国から取り寄せたのであるが、偶然の機会に(1)を奥アマゾン探検隊の事務局で発見した。(1)の方は版が大きくて地図も見易くなっている。(2)では地名などルーペを当てがわないとよく読めない。

書名の意味であるが、ビルカバンバの方はクスコの北西にある地名で、アンデスに興味をもっている人なら誰でも知っていよう。

アンティスヨは、これもインカ帝国に関する本を読んだ人なら先刻ご承知の筈であるが、インカ帝国東部の一州であって、アンデスは、このアンティス（階段畑という意味ときく）から出ているとも言われている。スヨは地方の意。

近頃とはいわないが、同じ内容で題名だけ違う本が、アメリ

カと英国で同時出版されることがあるから注意した方がよい。メルツバッヒェルの「天山探検記」にアメリカ版のあることは全然知らなかったが、この場合は書名は同じである。

今度のサヴォイの著は結論から先へいうとわかり易いと思うので、著者の言葉をそのまま引用すると、「アマゾニアは、考古学における発見と新地平線の期待の出現以来、探検家に対して最大の挑戦を行なっている。私は一人の探検家として、この惑星の上では探検というものが死滅してはいないし、特に南アメリカではそれが始まったばかりである。」となる。

つまり、未知の世界は無限とは言わないまでも、一人や二人の努力では片づけられないほど豊富にある、ということを言っているのである。嬉しい言葉ではないか。而もこの言葉がエベレストの登られた以前ではなく、サヴォイの一九六八年の探検が終った時点において書かれたものである、というところにわれわれには興味があり、実感が湧いてくるのである。

彼がこうした結論に達した経路を辿ると、こうなる。

――中部及びペルーの海岸とシェラ地帯における探検によって、この地域にもまだまだ研究して、時代や所属する文明を同定すべき考古学的遺物が夥しくあることがわかった。飛行機も遺跡の発見に大いに役立ったが、赤外線写真も強力な技術的武器となっている。

墓盗人などによる歴史以前の遺跡の破壊は、決して海岸地帯やシェラ地帯に限られてはいない。先駆的な農民達がモンタニャへの移住を奨励されると、彼らは森林を焼き払い、土地を整理してしまったので、古い記念物は永久に壊滅されてしまった。ペルー政府がこのモンタニャ地帯にある国家的遺産に対する規制の必要を認めない限り、無数の歴史的、考古学的記念物は永久に失なわれてしまう運命にある。

しかしながらそれでも尚、この奥アマゾンに当るモンタニャ地帯には発見さるべき宝が、金銀財宝を別にしても無限にある。それは失なわれた文明発見の可能性である。熱帯アマゾンにはわれわれの何も知らない古代文化の痕跡があり、われわれの想像を絶した大規模の文明があるが、その規模はクスコのそれを越すチャチャポヤス文明を考えればわかろう。

サヴォイの前身はジャーナリストであって、根っからの専門的考古学者ではないが、ハイラム・ビンガムらの残したビルカバンバの開明によって、世を驚かすと共に有名になり、ペルー政府も本格的な応援に乗り出してきたので、以後の活動が可なり楽になった。

彼の探検の前半ははしょって一九六三年から読んでみよう。

（第七章以下）

一九六三年、ビルカバンバ探検隊誕生。

一九六四年、ビンガムが一九五一年に諦らめた先を探検、エスピリッパンパその他の重要遺跡を発見する。ベラムンデ大統領に引見される。これから以後はエル・ドラード（パハーテン）探検隊となる。

この種の探検は一五三一年のディエゴ・オルダスのものが最初であるが、最近までに大小合せて二十二隊あるということで

ある。これは短かい期間の間に七回まで出ているが、最終的なものはいつになるか解らないという。

その目的はインカのツパク・ユパンキが占領したチャチャポヤス王国の七大都市と、シエサ・デ・レオンのエル・ドラードを探すことにある。

一九六五年、ワヤが河の上流のアピソンチョとパハーテンという小流の間まで入る。大体七度四五分S、七七度一八分Wの辺りである。ここで発見した遺跡がチャチャポヤス族のものであったなら、彼らはインカよりずっと高度の文明を同時代に持っていたことになる。

第二段ではワンボ川の周辺を探る。この上流には毒の吹矢を使うイビトス族というのがいるという。

一八六六年、ワンボ川の上流のメンドサへ。ここにはアリアン系の皮膚の明るい人種がいたらしい。八月、ソロコの周辺で南米最大のメトロポリスではなかったかと思われる遺跡を発見。モンテ・ペルビアと命名する。九月、エクワドルに近いシパスバンバを踏査。殆んどの学者は、高低いずれのジャングルでも、高度の文明の展開を否定しているが、サヴォイは今までの発見で益々反対の可能性を確信していった。十一月、失なわれた七大都市らしいもののいくつかを発見する。エル・ドラードとは単一の都市名ではなく、ジャングル帝国の全体をいう。

一九六七年八月、六八年五月、十一月、六九年一月と四回たて続けに同じ方面を探検、その規模も次第に大きくなる。

このように、それ以後も探検を続けているのだが、彼の考えでは、ペルーの原住民の祖先はアンデスの東側、そしてアマゾンを遡ってやってきたのではないか、メキシコ文明との関係など、これからも解かるべき問題は、謎は限りなくあるという。

参考資料として未発表の原稿、刊行物、限定出版物と一般出版物が紹介されているが、われわれには手の届かないものが沢山あるようである。

最後に地名、人名等の簡単な説明がまとめてあるが、これは便利。探検年表は三頁に亘っている。しかし東大隊のは一つも載っていない。エル・ドラードには直接関係がないからかも知れない。

〔吉沢一郎〕

会務報告

昭和四十七年(一九七二)七月～昭和四十八年(一九七三)六月

◇**七月理事・評議員会**　七月十四日(金)　ルーム
出席者　三田、成瀬、吉沢、中屋、林、伊倉、神原、近藤、松永、須田、坂下、丹部、板倉、帰山、宮下、金坂、望月、佐藤、今井
▽議事・報告
一、臨時総会および武田久吉名誉会員追悼会の件
二、上高地山岳研究所の件
三、岩佐事務局長停年延長の件
四、名誉会員章作成の件
五、物故会員に対する弔意規定の件
六、本年度年次晩餐会の件
七、岩永信雄氏図書寄贈の件
八、『山岳』覆刻版、図書交換会および「この一本展」(武田久吉展)企画進行の件
九、青年懇談会涸沢合宿計画(八月)の件　その他
(詳細は「山」三二七号参照)

◇**九月理事・評議員会**　九月八日(金)　ルーム
出席者　成瀬、吉沢、中屋、林、伊倉、板倉、近藤、宮下、丹部、帰山、大森、松丸、神原、広谷、神崎、須田、坂下、加藤、望月、織内、小原、金坂、今井
▽議事・報告
一、中島道郎氏国際生気象学会派遣の件
二、ゼロックス・レンタルの件
三、四十七年度除籍者の件
四、上高地山岳研究所建設工事遅滞の件
五、定款改正小委員会の件
六、UIAA総会(神原出席)の件
七、北海道大雪縦貫道路反対申入れの件
(詳細は「山」三二八号参照)

◇**十月理事・評議員会**　十月六日(金)　ルーム
出席者　三田、成瀬、吉沢、中屋、伊倉、近藤、宮下、松丸、丹部、大森、神崎、板倉、帰山、須田、坂下、織内、村山、金坂
▽議事・報告
一、定款改正案について
二、秩父宮学術記念賞候補の件
三、海外登山(日大山岳部―七四年ヤルン・カン峰)推薦状発行の件
四、上高地山岳研究所工事進行の件
五、登山技術講習会の件　その他
(詳細は「山」三二九号参照)

◇**支部長会議**　十月二十日(金)　ルーム
出席者　成瀬、吉沢、伊倉、宮下、加藤、織内、伊藤(北海道)、笠原(岩手)、伊達(宮城)、後藤(山形)、藤島(越後)、山本(静岡)、山村(山梨、代理)、熊沢(東海)
▽定款改正の件
(詳細は「山」三三一号参照)

◇**十一月臨時理事会**　十一月十一日(土)　OAG会館
出席者　成瀬、吉沢、中屋、伊倉、坂下、近藤

▽議事・報告
一、岐阜支部設立の件
二、秩父宮記念学術賞候補に辻村太郎氏推薦の件
三、年次晩餐会の件
四、上高地山岳研究所工事進行および募金の件
（詳細は「山」三三〇号参照）

◇**支部長会議**　十二月二日（土）　京王プラザホテル
出席者　三田、成瀬、吉沢、中屋、板倉、伊倉、宮下、坂下、伊藤（北海道）、柴田（秋田）、笠原（岩手）、伊達（宮城）、藤島（越後）、山村（山梨）、中田（富山）、今西（関西）
一、臨時総会報告および定款改正の件
二、上高地山岳研究所経過報告の件　その他
（詳細は「山」三三一号参照）

◇**十二月理事・評議員会**　十二月十一日（月）　ルーム
出席者　成瀬、吉沢、中屋、林、伊倉、坂下、松丸、近藤、大森、丹部、今井、島田、小原、金坂、佐藤、津田
▽議事・報告
一、細則一部改正の件
二、集会委員会臨時予算支出の件
三、貴重図書保護預りの件
四、朝日新聞社主催『冒険と保護』展後援の件
五、都岳連理事候補として松永理事推薦の件
六、『山日記』四十八年版の件
七、「武田久吉著作展目録」（この一本展）の刊行、および山岳図書を語る夕、山岳史懇談会開催の件
（詳細は「山」三三一号参照）

◇**二月理事・評議員会**　二月九日（金）　ルーム
出席者　三田、成瀬、吉沢、中屋、伊倉、宮下、坂下、近藤、松永、大森、須田、丹部、帰山、小原、織内、金坂、今井
▽議事・報告
一、昭和四十八年度通常会員総会の件
二、三田会長、国際登山家集会（五月・ダージリン）派遣の件
三、昭和四十八年度収支予算案の件
四、ルーム移転の件
五、三井山梨支部長逝去の件
六、信濃支部アンナプルナⅠ峰登山隊後援の件
七、四十七年名誉会員推薦見送りの件　その他
（詳細は「山」三三三号参照）

◇**三月理事・評議員会**　三月二十三日（金）　ルーム
出席者　三田、吉沢、中屋、板倉、伊倉、宮下、坂下、近藤、大森、須田、丹部、神崎、帰山、織内、佐藤、望月、今井
▽議事・報告
一、昭和四十八年度理事、監事、評議員候補者推薦の件
二、昭和四十八年度事業計画案および収支予算の件
三、ルーム移転の件
四、三月末入会申込者取扱いの件
五、複写事務取扱い規定の件
六、別宮梅子氏図書寄贈の件
七、第一回山岳史懇談会開催（講師・三枝守博氏）の件
八、夏山診療所にかんする今後の方針および反省会の件
九、小集会の件　その他
（詳細は「山」三三四号参照）

◇**四月理事・評議員会**　四月十一日（水）　ルーム
出席者　三田、中屋、板倉、伊倉、松丸、宮下、近藤、丹部、須田、帰山、今井、望月、織内
▽議事・報告
一、昭和四十七年度収支決算報告の件
二、昭和四十八年度収支予算案修正の件
三、ルーム移転の件
四、小島烏水・木暮理太郎・岡野金次郎生誕百年記念展の件　その他
（詳細は「山」三三六号参照）

◇**四月臨時理事・評議員会**　四月二十一日（土）　クレール
出席者　三田、中屋、林、板倉、伊倉、宮下、松丸、近藤、須田、帰山、今井、望月、織内、小原
▽議事・報告
一、ルーム移転およびルーム基金募金の件
二、定款一部改正の件
（詳細は「山」三三六号参照）

◇**昭和四十八年度通常会員総会**　四月二十一日（土）　向井ビル四階会議室
出席者　三田会長以下八十七名（委任状多数）
▽総会次第
一、会長挨拶　三田幸夫
二、昭和四十七年度事業報告および収支決算報告　中屋健弐
三、監査報告（右承認）
四、昭和四十八年度役員選任の件
昭和四十八年度の役員として次の各氏を選任した。
〈理事〉今西錦司、中屋建弐、織内信彦、板倉勝正、伊倉剛三、松丸秀夫、近藤信行、春田俊郎、原　真、須田紀子、宮下秀樹、大倉昌身、山本良三、浜野吉生、丹部節雄、神崎忠男、田村宏明、帰山毅、浜口欣一、今成征三
〈幹事〉村尾金二、今井雄二
〈評議員〉藤島玄、津田周二、伊藤秀五郎、渡辺公平、島田巽、堀田弥一、加藤泰安、小原勝郎、田口二郎、今井田研二郎、佐藤テル、今西寿雄、望月達夫、林和夫、山崎安治、中田勇吉、村山雅美、藤井運平、金坂一郎、大塚博美
五、会長副会長選任の件
役員の中から今西錦司氏（一一七番）を会長に、中屋健弐氏（一二四七番）織内信彦氏（一八四六番）を副会長に選任した。
六、昭和四十八年度事業計画および収支予算案の件　中屋健弐
（右、原案どおり承認）
七、昭和四十八年度除籍の件　中屋健弐
八、定款改正の件　織内信彦
（右、承認）
九、支部報告
北海道（伊藤）、岩手（笠原）、秋田（柴田）、越後（藤島）、山梨（山村代理）、静岡（山本）
十、昭和四十八年度除籍者の件
十一、上高地山岳研究所建設状況報告その他
（詳細は「山」三三六号参照）

◇**五月理事会**　五月二十二日（火）　ルーム
出席者　中屋、織内、板倉、伊倉、近藤、春田、宮下、浜野、松丸、原、須田、大倉、山本、田村、浜口、今成
▽議事・報告

一、ルーム移転祝賀パーティの件
二、上高地山岳研究所開所式の件
三、女性マナスル登山隊後援の件
四、小島烏水・木暮理太郎・岡野金次郎生誕百年記念展開催に関する準備委員会組織の件
五、『山日記』検討の件
六、国際アルピニスト集会（シャモニ）の件
七、常務理事互選の件
板倉勝正、伊倉剛三、近藤信行、春田俊郎、宮下秀樹、浜野吉生、神崎忠男の七氏に決定
八、四十八年度理事会務分担の件
総務・ルーム（板倉・伊倉）、財務（板倉・伊倉・宮下）、支部連絡（板倉）、山岳（近藤・今成）、会報（春田）、山日記（松丸）、山岳研究所（伊倉）、集会（神崎・帰山）、指導（田村・大倉）、高所登山（原）、図書（近藤・山本）、書評（春田）、自然保護（板倉・春田）、遭難対策（宮下）、医療（浜口）、海外連絡（丹部・田村）、青年・学生（浜野・帰山・今成・大倉）婦人懇談会（須田）、日山協・都岳連（丹部）
（詳細は「山」三三七号参照）

◇**五月評議員会**　五月二十五日（金）　ルーム
出席者　織内、渡辺、島田、今井田、佐藤、林、山崎、金坂
▽議事
一、新定款にもとづく評議員会開催の件
二、常任評議員互選の件
佐藤テル、望月達夫、山崎安治、金坂一郎の四氏に決定
（詳細は「山」三三七号参照）

◇**六月理事会**　六月十一日（月）　ルーム
出席者　中屋、織内、伊倉、板倉、宮下、近藤、松丸、神崎、帰山、今成、原、田村、山崎、金坂
▽議事・報告
一、会員の弔慰規定の件
二、名誉会員をかこむ会の件
三、海外登山後援に関する規準の件
四、第二次RCCエベレスト南壁隊推薦の件
五、烏水・理太郎・金次郎生誕百年記念展計画の件
六、ルーム基金募金の件
七、文書規定の件
八、上高地山岳研究所長の件
九、昭和四十八年度年次晩餐会の件
十、評議員会報告の件
十一、日山協報告の件
十二、団体加入の取扱い、通常会員入会の取扱いの件
（詳細は「山」三三九・三四〇号参照）

◇**小集会**
▽第二八四回　昭和四十七年七月二十日（木）　ルーム
拓殖大学ヒンズークシュ・ヒマラヤ遠征報告　菊池修身氏
電通大学第一次ヒマラヤ学術登山隊報告　西山忠成氏
（詳細は「山」三二九号参照）
▽第二八五回　昭和四十七年八月二十二日（日）　秋川渓谷
渓流つり大会（参加者二十名）
▽第二八六回　昭和四十七年九月二十日（水）　千代田公会堂

映画と講演の会（参会者約二〇〇名）
　映画「マナスルに立つ」
　講演「南壁国際隊」　伊藤礼造氏
（詳細は「山」三三〇号参照）

▽第二八七回　昭和四十七年九月二十三日（土）～二十四日（日）八ケ岳野辺山高原
現地小集会

▽第二八八回　昭和四十七年十月二十日（金）　ルーム
パネルディスカッション「日本山岳会員としての意識と自覚」

▽第二八九回　昭和四十七年十月二十二日（日）　奥多摩
大岳山集中登山（雨天のため中止）
（「山」三三三号参照）

▽第二九〇回　昭和四十七年十一月二十日（月）　岸記念体育館
雪崩シンポジウム

▽第二九一回　昭和四十七年十二月二十日（水）　ルーム
忘年会

▽第二九二回　昭和四十七年十二月二十二日（金）　ルーム
ニュージーランド親善登山（スライドと解説）　国鉄山の会
マナスル西壁八ミリ映画　高橋照氏製作

▽第二九三回　昭和四十八年一月十四日（日）～十五日（月）八方尾根
中大山荘
スキー懇親会

▽第二九四回　昭和四十八年四月十九日（木）　ルーム
モンゴル親善登山隊歓迎会

▽第二九五回　昭和四十八年五月二十日（日）　奥多摩
大岳山集中登山

▽第二九六回　昭和四十八年六月二十日（水）　ルーム
岩登り机上講習会　講師・小西政継氏

◇**主なる行事および集会**

▽名誉会員・岩永信雄氏をかこむ会
昭和四十七年九月三十日（土）　ルーム（出席者三十一名）「山」三二九号参照。

▽穂高涸沢合宿（青年懇談会主催）
昭和四十七年八月

▽鳥海山の秋を味わう会（婦人懇談会）
昭和四十七年十月七日（土）～十日（火）鳥海山　「山」三三〇号参照。

▽第五回山岳図書交換即売会
昭和四十七年十月二十一日（土）　ルーム　「山」三三〇号参照。

▽杉浦耀子氏をかこむ会
昭和四十七年十月二十五日（水）　ルーム

▽第十五回もみじ会（静岡支部主催）
昭和四十七年十一月四日（土）～五日（日）　大日高原　「山」三三〇、三三一号参照。

▽武田久吉、鳥山悌成、田部重治氏追悼会
昭和四十七年十一月十一日（土）　ＯＡＧ会館　松本善二、藤島敏男、茶谷東海三氏による追悼講演がおこなわれた。出席者七十二名。
「山」三三〇、三三一号参照。

▽昭和四十七年度年次晩餐会
昭和四十七年十二月二日（土）　京王プラザホテル　出席者一九五名。
「山」三三一号参照。

▽第十一回「この一本展」（武田久吉著作展）
昭和四十七年十二月二日（土）　京王プラザホテル　「武田久吉著作展目録」を刊行。「山」三三一、三三二、三三三号参照。
▽第四回山岳図書を語る夕
昭和四十八年二月二十二日（木）　ルーム　講師・田辺主計、吉沢一郎、山崎安治氏。出席者三十四名。「山」三三六号参照。
▽第九回秩父宮記念学術賞授賞式（辻村太郎氏の「多年にわたる日本の山地地形に関する研究」に対し）
昭和四十八年三月二日（金）　銀行クラブ。ひきつづき本会ルームにおいて受賞祝賀会がひらかれた（出席者三十五名）。「山」三三四、三三五号参照。
▽第一回山岳史懇談会
昭和四十八年三月二十九日（木）　ルーム　講師・三枝守博氏。出席者三十八名。「山」三三四、三三五号参照。
▽第十三回登山技術講習会
照和四十八年五月十七日（木）～二十日（日）　富士山　参加者二十七名。「山」三三八号参照。
▽第十一回木暮理太郎翁碑前懇親会（山梨支部主催）
昭和四十八年五月十九日（土）～二十日（日）　金山平　参加者三十二名。「山」三三八号参照。
▽第二十七回ウェストン祭
昭和四十八年六月三日（土）～四日（日）　上高地　「山」三三七号参照。
▽越後・石川・岐阜支部合同懇親登山
昭和四十八年六月九日（土）～十二日（火）　加賀白山　「山」三三九号参照。
▽第四回現地支部長会議および記念山行
昭和四十八年六月十五日（金）～十七日（日）　大雪山国立公園地内十勝岳。参加者九十六名。「山」三三九号参照。
▽第十六回有志閑談会
昭和四十八年六月二十三日（土）　六義園心泉亭　出席者四十八名。「山」三三八号参照。

◇海外登山界との交流

▽本年度は三十ヵ国六十五団体と情報および機関誌の交換をおこなった。
▽インド登山財団会長H・C・サリーン氏歓迎会。昭和四十七年八月十九日、国際文化会館にて。三田会長ほか二十一名出席。
（詳細は「山」三三〇号参照）
▽UIAA（国際山岳協会連合）総会に神原達理事が出席（昭和四十七年八月二十九日～九月六日、モントルー）
（詳細は「山」三三〇号参照）
▽第六回国際生気象学会に中島道郎会員が出席（昭和四十七年九月四日～九日、オランダ）
（詳細は「山」三三一号参照）
▽国際登山家集会エヴェレスト会議に三田幸夫前会長、丹部節雄理事が出席（昭和四十八年五月十四日～二十一日、ダージリン）

◇その他のトピックス

▽信濃支部によるアンナプルナI峰登山実施（塚本茂樹隊長ほか十名、昭和四十八年二月出発）
詳細は「山」三三五号、三三六、三三八号参照。

▽上高地山岳研究所の建設にあたって、募金ならびに増改築工事は、建設委員会を中心に着々と準備がすすめられてきたが、昭和四十七年七月七日に地鎮祭が、十月八日に上棟式がおこなわれた。竣工式は昭和四十八年十月八日、関係者が参集しておこなわれた。
詳細は「山」三二七、三二九、三三〇、三四二号ほか参照。

▽大雪山縦貫道路開発について、関係官庁に要望書を提出（昭和四十七年九月）するとともに、国立公園地内における山岳地の自然保護運動に協力。
詳細は「山」三二八号参照。

▽岐阜支部発足　昭和四十七年十二月六日、発会式がおこなわれ、今西錦司氏が初代支部長に決定。本会からは三田会長、成瀬、吉沢副会長が出席。
詳細は「山」三三一号参照。

▽新ルームへ移転　昭和四十三年六月以降八年間、神田錦町向井ビル五階にあった本会ルームは、昭和四十八年五月、文京区湯島一ノ六ノ一さくらビル七階の新ルームへ移転した。ルーム移転準備委員会（交野武一、沼倉寛二郎、松本熊次郎、板倉勝正、伊倉剛三）、図書委員会、集会委員会、青年懇談会の尽力により移転を五月十三日完了。五月二十六日（土）新ルーム開設記念パーティがひらかれた。
詳細は「山」三三五号ほか参照。

▽『山岳』第六十七年（一九七二年度）
昭和四十八年四月刊行予定のところ、実際には九月に刊行された。
（編集代表望月達夫、担当理事中島寛）

▽会報『山』　第三二五号～第三三六号を発行。
編集者坂下心一、春田俊郎。

▽『山日記』一九七三年版を刊行（一九七三年一月一日）。編集代表松丸秀夫。

▽『山岳』覆刻版　前年度よりひきつづいて第一年第三号、第二年第一号、第二年第二号の三冊を刊行（以後第四年まで続刊の予定）。製作・図書委員会。

美

支部長　伊藤秀五郎（北海道）、笠原潤二郎（岩手）、柴田均二（秋田）、後藤幹次（山形）、伊達篤郎（宮城）、伊藤弥十郎（福島）、藤島玄（越後）、塚本茂樹（信濃）、大沢伊三郎（山梨）、山本朋三郎（静岡）、熊沢正夫（東海）、今西錦司（岐阜）、中田勇吉（富山）、小林雄次郎（石川）、今西寿雄（関西）、織田収（山陰）、末松大助（福岡）、野口秋人（東九州）、三谷孝一（熊本）

一九七三年度役員

会　長　今西錦司

副会長　中屋健弐、織内信彦

常務理事　板倉勝正、伊倉剛三、近藤信行、春田俊郎、宮下秀樹、浜野吉生、神崎忠男

理　事　松丸秀夫、原真、須田紀子、大倉昌身、山本良三、丹部節雄、田村宏明、帰山毅、浜口欣一、今成征三

監　事　村尾金二、今井雄二

常任評議員　佐藤テル、望月達夫、山崎安治、金坂一郎

評議員　藤島玄、津田周二、伊藤秀五郎、渡辺公平、島田巽、堀田弥一、加藤泰安、小原勝郎、田口二郎、今井田研二郎、今西寿雄、林和夫、中田勇吉、村山雅美、藤井運平、大塚博

社団法人 日本山岳会定款

昭和十六年一月十六日制定　昭和三十五年十月二十日改正
昭和十八年十月　改正　昭和三十七年十一月十五日改正
昭和二十三年三月　改正　昭和三十九年九月一日改正
昭和二十七年三月　改正　昭和四十二年二月六日改正
昭和二十九年四月二十四日改正　昭和四十四年六月二十八日改正
昭和三十四年三月十八日改正　昭和四十八年二月七日改正

第一章 総則

第一条 本会は、社団法人日本山岳会 The Japanese Alpine Club(略称 J. A. C.)という。

第二条 本会は、事務所を東京都文京区湯島一―六―一(利根川商事株式会社さくらビル七階)におく。

第二章 目的および事業

第三条 本会は、山岳に関する研究、知識の普及および健全な登山の指導、奨励をなし、あわせて会員相互の連絡懇親をはかるとともに、登山を通じてあまねく体育、文化ならびに自然愛護の精神の高揚をはかることを目的とする。

第四条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

一、登山の指導奨励に必要な集会、研究会、講習会および展覧会等の開催

二、登山施設改善の促進、その他登山のための適切な事業

三、山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導

四、自然保護活動の推進

五、海外登山の企画および実施

六、機関誌「山岳」、「会報」および「山日記」その他の図書の刊行

七、目的を同じくする国内および国外団体との連絡、情報の交換

八、その他、目的を達成するために必要な事業

第五条 本会は、理事会の議決を経て必要な地に支部をおくことが出来る。

一、支部に関する規定は、総会においてこれを定める。

第三章 会員

第六条 本会の会員は、次のとおりとする。

一、通常会員　本会の目的に賛同し、本会の定める入会金七千円および下記の年会費を納める個人または団体。

東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県に在住するもの　五、〇〇〇円
上記以外の国内に在住するもの　三、五〇〇円および支部の定める支部費
国外に在住するもの　十二米ドル

二、終身会員　本会に入会後五カ年間以上在籍せる個人会員にして、所定の終身会費を納めた者。但し終身会費は次の通りとする。

入会後　五年以上在籍せる者　一〇〇、〇〇〇円
十年以上在籍せる者　八〇、〇〇〇円
二十年以上在籍せる者　六〇、〇〇〇円
三十年以上在籍せる者　五〇、〇〇〇円

四十年以上在籍せる者　四〇、〇〇〇円

三、賛助会員　本会の事業を後援し、特別な寄与をなしたもので評議員会が推薦した個人または団体。

四、永年会員　本会入会後在籍継続五十年に達した者。

五、名誉会員　本会に対し、特に功労のあった者のうちから、別に定める名誉会員推薦規定に基づき評議員会が推薦した者。

第七条　前条第四項の永年会員については年会費を、第五項の名誉会員については、入会金および年会費を徴収しない。

二、通常会員は当該年度の年会費を毎年四月一日から翌年三月末までの分として六月三十日までに納入しなければならない。年会費の納入を怠った者に対しては会報等の送付を停止することがある。

三、既納の入会金および年会費その他諸納金については返還しない。

第八条　本会に入会を希望する者は、会員二名（うち一名は、原則として本会役員、評議員又は支部長であることを必要とする）の紹介により、所定の入会申込書を提出し、理事会の承認を受けなければならない。

二、団体が入会しようとするときは、入会申込書にその団体の代表者名を明記しなければならない。

三、入会承認の通知を受けたときは、二週間以内に入会金および当該年度の年会費を払い込むものとし、当該年度に発行される機関誌「山岳」および会報等の配布を受けることができる。

四、入会承認の通知後前項の手続きを行わないものに対しては、入会承認を取り消すことがある。

第九条　会員は機関誌「山岳」および「会報」の配布を受け、本会の開催する各種の集会に出席し、かつ本会備付の図書の閲覧その他本会の施設を利用することができる。利用のための規定は別に定める。

第十条　会員は、次の事由によってその資格を失う。

一、退会

二、禁治産および準禁治産の宣告

三、死亡、失踪の宣告及び団体会員の解散

四、除名

第十一条　会員が本会から退会しようとするときは退会届を提出しなければならない。

第十二条　会員が次の各項の一に該当するときは、総会の議決を経てこれを除名することができる。

一、本会に対し、三カ月以上諸納金を滞納し、理事会の請求があっても納入を怠ったとき。

二、本会の名誉を傷つけたとき。

第四章　役員・評議員および職員等

第十三条　本会には次の役員および評議員をおく。

理　事　十五名以上二十名以内（うち会長一名、副会長二名以内、および常務理事若干名）

監　事　二名

評議員　十五名以上二十名

第十四条　理事および監事は入会後満三年以上を経た会員（賛助会員を除く）のうちから総会がこれを選挙する。

二、会長および副会長は、理事のうちから総会がこれを選挙する。

三、理事は、互選で常務理事若干名を定める。

四、監事は、評議員の推薦する候補者のうちから総会がこれを選挙する。

第十五条　評議員は会員のうちから理事会が推薦し総会に於て選挙する。

二、評議員は互選によって常任評議員若干名を定める。

三、評議員は理事を兼ねることができない。

第十六条　会長は、本会の業務を総理し、本会を代表する。

二、副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、または、欠員となったときは、会長があらかじめ指名した順序によって、その職務を代行する。

三、常務理事は、会長および副会長を補佐し、理事会の決議にもとづき日常の事務に従事し、総会の決議した事項を処理する。

第十七条　理事は、理事会を組織し、この定款に定めるもののほか、総会の権限に属する事項以外の事項を決議し執行する。

第十八条　監事は、民法第五十九条の職務を行う。

第十九条　評議員は、理事会の諮問にこたえ、会長に対し必要と認めた事項について助言する。

第二十条　役員および評議員の任期は次のとおりとし、再任を妨げない。但し再々任の場合は原則として再任々期満了後少くも一任期以上の期間を経過した後でなければならない。

会長および副会長	二年
その他の理事	二年
監　事	一年
評議員	二年

二、補欠または増員により選挙された役員および評議員の任期は、前任者または現任者の残任期間とする。

三、役員および評議員は、その任期満了後であっても、後任者が就任するまでは、その職務を行う。

四、役員および評議員は、本会の役員および評議員としてふさわしくない行為のあった場合、または特別の事情で、その任に耐えないと認められた場合には、その任期中であっても、総会および理事会の議決によって、会長がこれを解任することができる。

第二十一条　本会には顧問若干名をおくことができる。

二、顧問は理事会および評議員会の議決により、会長がこれを委嘱する。

三、顧問は、本会の事業の運営について、会長の相談に応じ、必要と認める事項について会長に助言する。

第二十二条　本会の事務を処理するため、主事、書記等の職員をおくことができる。

二、職員は、会長がこれを任免する。

三、職員は有給とする。

第五章　会　議

第二十三条　理事会は、毎年二回会長がこれを招集する。ただし、会長が必要と認めた場合、又は理事現在数の三分の一以上から会議の目的たる事項を示して請求のあった場合には、会長は、臨時の理事会を招集しなければならない。

二、常任評議員は、理事会に出席し、意見を述べることができる。

三、理事会の議長は、会長とする。

第二十四条　理事会は、理事現在数の三分の二以上が出席しなければ議事を開き議決することができない。ただし、当該議事について書面をもって、あらかじめ意思を表示したものは、出席者とみなす。

二、理事会の議事は、この定款に別段の定めがある場合を除くほか、

出席理事の過半数をもって決議し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第二十五条 評議員会は、会長がこれを招集する。

評議員会は、会長、副会長および評議員で組織する。

二、評議員会の議長は出席評議員の互選によるものとする。

三、会長は、評議員現在数の三分の一以上から討議すべき事項を示して評議員会の招集を請求された場合は、その請求のあった日から二十日以内に評議員会を開催しなければならない。

第二十六条 評議員会は、当該評議員数の二分の一以上が出席しなければ議事を開き議決することができない。ただし、当該議事について書面をもってあらかじめ意思を表示したものは、出席者とみなす。

二、評議員会の議事は、出席評議員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第二十七条 通常総会は、毎年一回、会計年度終了後二ヵ月以内に会長がこれを招集する。

二、臨時総会は、会長、理事会または監事が必要と認めたとき、いつでもこれを招集することができる。

第二十八条 会長は、会員現在数の五分の一以上から付すべき事項を示して総会の招集を請求された場合には、その請求のあった日から二十日以内に臨時総会を招集しなければならない。

第二十九条 通常総会の議長は会長とし、臨時総会の議長は、会議のつど会員の互選で定める。

第三十条 総会の招集は、その開催日より十日以内に会議に討議する事項、日時および場所を記載した書面をもって通知する。

第三十一条 次の事項は、通常総会に提出して、その承認をうけなければならない。

一、事業計画および収支予算に関する事項。

二、事業報告および収支決算に関する事項。

三、財産目録。

四、その他理事会で必要と認めた事項。

第三十二条 理事会は通常総会臨時総会に提出する議案およびその他重要事項につき、予め評議員会の意見を聞かなければならない。

第三十三条 総会は会員現在数の三分の一以上が出席しなければその議事を開き、議決することができない。ただし、当該議事についてあらかじめ書面で意思を表示したものは出席者とみなす。

第三十四条 総会の議事は、この定款に別段の定めがある事項を除くほか、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第三十五条 総会の議事の要項および議決した事項は、会報によって会員に通知する。

第三十六条 総会および理事会の議事録は、議長がこれを作成し、議長および出席代表者二名以上が署名押印のうえ、これを保存する。

第六章　資産および会計

第三十七条 本会の資産は、次のとおりとする。

一、別紙財産目録記載の財産

二、入会金および会費

三、事業に伴う収入

四、資産から生ずる果実

五、寄付金品

六、その他の収入

第三十八条　本会の資産を分けて、基本財産および運用財産の二種とする。

二、基本財産は別紙財産目録のうち基本財産の部に記載する資産、入会金および将来基本財産に編入される資産で構成する。

三、運用財産は基本財産以外の資産とする。

四、寄付金品であって、寄付者の指定のあるものはその指定に従う。

第三十九条　本会の基本財産のうち、現金は理事会の議決によって確実な有価証券を購入するか、または定期郵便貯金とするか、もしくは信託銀行への信託、または定期預金として、会長がこれを保管する。

第四十条　本会の基本財産は、消費しまたは担保に供してはならない。ただし、本会の事業遂行上やむを得ない理由があるときは、理事会および総会の議決を経、かつ文部大臣の承認を受けてその一部に限り処分し、または担保に供することができる。

第四十一条　本会の事業遂行に要する費用は会費、事業に伴う収入および資産から生ずる果実等の運用財産をもって支弁する。

第四十二条　本会の事業計画およびこれに伴う収支予算は、毎会計年度開始前に会長が編成し、理事会の議決を経て文部大臣に届け出なければならない。事業計画および収支予算を変更した場合も同様とする。

第四十三条　本会の収支決算は毎会計年度終了後二ヵ月以内に会長がこれを作成し、財産目録、事業報告書および会員の移動状況書とともに、監事の意見を付して理事会および総会の承認を受けて文部大臣に報告しなければならない。

二、本会の収支決算に剰余金があるときは、理事会の議決および総会の承認を受けて、その一部もしくは全部を基本財産に編入し、または翌年度に繰り越すものとする。

第四十四条　収支予算で定めるものを除くほか、新たに義務の負担をし、または権利の放棄をしようとするときは、理事会および総会の議決を経、かつ、文部大臣の承認を受けなければならない。借入金（その会計年度内の収入をもって償還する一時借入金を除く）についても同様とする。

第四十五条　本会の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

第七章　定款の変更ならびに解散

第四十六条　本定款は、理事会および総会においておのおのの出席者の四分の三以上の議決を経、かつ、文部大臣の認可を受けなければ変更することが出来ない。

第四十七条　本会の解散は、理事会および総会において、おのおのの出席者の四分の三以上の議決を経、かつ、文部大臣の許可を受けなければならない。

第四十八条　本会の解散に伴う残余財産は、理事会および総会においておのおのの出席者の四分の三以上の議決を経、かつ、文部大臣の許可を受けて、本会の目的に類似の目的を有する公益事業に寄付するものとする。

第八章　補　則

第四十九条　この定款施行についての細則は、理事会および総会の議決を経て別に定める。

第五十条　この定款は昭和四十八年四月一日より実施するものとする。

社団法人 日本山岳会細則

昭和四十七年十一月十一日制定

細　則

第一条　この細則は定款第四十九条に基づき本会運営上に必要な事項を定める。

第二条　本会に下記の業務処理のための委員会をおき、会長は委員会別に担当理事を委嘱すると共に若干名の委員を原則として役員を経験しない会員のうちより委嘱して委員会を構成する。
委員会は互選によって委員長を定める。

一、総　務　　八、指　導
二、財　務　　九、医　療
三、支部および会員　　十、自然保護
四、出　版　山岳会報　十一、青年懇談会　十二、婦人懇談会　山日記　十三、図　書　その他　十四、書　評
五、山岳研究所　　十五、遭難対策
六、集　会　　十六、その他
七、海外連絡

第三条　委員会担当理事は、委員会に関する業務を処理すると共に、委員会と理事会との連絡の衝にあたる。委員長は委員会の座長となり、会議のとりまとめを行う。

第四条　委員の任期は二年とし再任を妨げない。

第五条　委員会における重要な決議事項および予算外の支出を必要とする事項は、理事会の承認を経なければならない。

第六条　委員会担当理事は、その担当事項に関する翌年度の予算を毎年一月末迄に理事会に提出しなければならない。

第七条　定款第十四条による理事および監事の選挙は、その候補者を評議員会が推薦するものとする。

第八条　定款第十四条による会長および副会長の選挙は、その候補者を評議員会が推薦するものとする。

第九条　役員および評議員はすべて無報酬とする。但し職務のために要した実費は支給を受けることができる。

第十条　会費は原則として支部を経由して納付することとし、この場合は支部長名をもって会員番号、氏名、納入方法を記載した明細表を七月末迄に本会宛に送付するものとする。

第十一条　支部経由の方法で送付された会費に対し、納入会員一名当り三〇〇円の支部運営費を補助するものとする。

第十二条　本会は新たに入会する者に対し、入会に関する所定の手続の完了と同時に会員章および略章を交付する。ただし紛失等の理由により会員に対し再交付をする場合は実費を徴収するものとする。

第十三条　会員は本会が開催する総会、小集会、年次晩餐会等その他重要な行事にはなるべく会員章または略章を着用して出席するものとする。

第十四条　死亡以外の理由によって会員たる資格を失った場合は直ちに会員章、略章を本会に返付するものとする。

第十五条　主事、書記等の職員は、理事会が定めた職務規定、経理規

定、その他の諸規定および本会運営に関する内規等に基づき担当理事の指示に従い、本会の運営に関する日常の事項および会計事務を処理するものとする。

第十六条 会員は会務に必要な場合を除き、会の重要な備品を使用したり、あるいは持ち出してはならない。

第十七条 会員および会員以外の者が本会施設に来訪する場合は、到着と共に備付の名簿にその氏名を記入しなければならない。

第十八条 理事会の許可を得ないで本会内で次の行為をしてはならない。

一、掲示、広告、展示等

二、集会、商行為等

第十九条 本会は特別の事情ある場合、会員から寄付金を募集することができる。

第二十条 定款第五条による支部の規定は、支部毎に定め、理事会の承認を得るものとする。

第二十一条 本会の休室日は一月一日、二日、三日、四日、五日、十二月二十九日、三十日、三十一日、毎月の日曜、祝祭日、および本会の創立記念日（十月十四日）とする。但し創立記念日が日曜、祝祭日にあたる場合はその翌日を創立記念日として休室する。

第二十二条 本会の開室、閉室時間を次のとおり定める。

自　四月一日　至　十一月　三十日　午前十時より午後九時

自　十二月一日　至　三月三十一日　午前十時より午後八時

附　則

この細則の改廃は予め評議員会の意見を聞き、理事会および総会の議決によって定めるものとする。

経過措置　第十一条、第十二条を除く各条項については、この細則決定の日から実施するものとする。

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. LXVIII 1973 **Issued in April, 1974**

Contents

(*In English*)

The First Ascent of Yalung Kang, 1973 ····· By Haruo Higuchi····· 1

The First Ascent of Nampa, 1972····· By Seigo Matsushima····· 8

Gangapurna, autumn 1971 ····· By Kiyoshi Shimizu·····11

Cordillera Real, 1972—Illampu and high-place medicine

····· By Yoshihiko Kawakubo·····17

Memories of Prince Chichibu ····· By Sir Arnold Lunn·····21

(*In Japanese, except the articles mentioned above*)

Alps remembered ····· By Kyuichiro Satoh·····58

Blundering through Switzerland ····· By ~~Naruo Iwase~~ Iwao Natuse·····70

Memories of Koichi Itoh ····· By Takezo ~~Ueda~~ ···· 100

Tsuruzo Ishii, a painter ····· By Hisashi Ono··· 107

In Memoriam:

Yasunari Toriyama, Juji Tanabe, Kentaro Sasaki

Kiyoshi Kodaira, Kazuo Yamashita, Genichiro Adachi,

Sotaro Kawakita, Hiromasa Aramaki, Kazuji Morooka,

Matsuo Mitsui, Seiichi Okamura, Seiichi Kizu,

Takako Imoto, Masahiko Kaito ····· 131

Book Reviews ····· 168

Club Proceedings····· 193

Editor : Tatsuo Mochizuki

Assistant Editor : Nobuyuki Kondo

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Sakura Bldg, 1-6-1 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo.

(April 1973~April 1974)

President : Kinji Imanishi

Vice-Presidents : Kenichi Nakaya, Nobuhiko Oriuchi

Honorary Secretaries : Katsumasa Itakura, Gozo Ikura

Honorary Editor : Tatsuo Mochizuki

Honorary Librarian : Nobuyuki Kondo

Honorary Treasurers : Katsumasa Itakura, Gozo Ikura

Auditors : Kinji Murao, Yuji Imai

Committee

Katsumasa Itakrua	Gozo Ikura	Nobuyuki Kondo
Toshiro Haruta	Hideki Miyashita	Yoshio Hamano
Tadao Kanzaki	Hideo Matsumaru	Makoto Hara
Kimiko Suda	Masami Ohkura	Ryozo Yamamoto
Sadao Tanbe	Hiroaki Tamura	Tsuyoshi Kiyama
Kinichi Hamaguchi	Seizo Imanari	

Council

Teru Satoh	Tatsuo Mochizuki	Yasuji Yamazaki
Ichiro Kanesaka	Gen Fujishima	Shuji Tsuda
Hidegoro Itoh	Kohei Watanabe	Tatsumi Shimada
Yaichi Hotta	Taian Kato	Katsuro Obara
Jiro Taguchi	Kenjiro Imaida	Toshio Imanishi
Kazuo Hayashi	Yukichi Nakata	Masami Murayama
Unpei Fujii	Hiromi Ohtsuka	

Chairmen of Local Sections

Hokkaido : Hidegoro Itoh
Yamagata : Kanji Gotoh
Fukushima : Yajuro Itoh
Shinano : Shigeki Tsukamoto
Shizuoka : Tomosaburo Yamamoto
Toyama : Yukichi Nakata
Gifu : Kinji Imanishi
Kwansai : Toshio Imanishi
Sanin : Osamu Oda
Kumamoto : Koichi Mitani
Iwate : Junjiro Kasahara
Akita : Kinji Shibata
Miyagi : Tokuro Date
Echigo : Gen Fujishima
Yamanashi : Isaburo Ohsawa
Tokai : Masao Kumazawa
Ishikawa : Yujiro Kobayashi
Fukuoka : Daisuke Suematsu
Higashi Kyushu : Akito Noguchi

The First Ascent of Yalung Kang, 1973

By Haruo Higuchi

We, the members of Academic Alpine Club of Kyoto University, succeeded the first ascent of Yalung Kang (8505m) which had been the highest untrodden peak in the Nepal Himalaya.

AACK members had been desiring to climb eight-thousanders for a long time. In 1952, Eizaburo Nishibori visited Nepal alone and got the permission to climb Manaslu. Though we sent reconnaissance in that autumn, Manaslu was too huge for us at that time. We turned the plan to JAC. However, we continued to go to Himalaya after that. We made expeditions in Karakorum, Hindu Kush, including ascent of Chogorisa(7654 m) in 1958, Noshaq(7350 m) in 1960 and Saltoro Kangri (7742 m) in 1962. Gradually we had become to aim eight thousanders. When I stayed in Kathmandu in autumn, 1964 as the leader of expedition for Annapurna South peak, I could get the permission to explore Yalung Kang (at that time, the peak was called West peak of Kangchenjunga) in pre-monsoon of 1965. But the permission was cancelled in that autumn. We repeated to propose year by year and made reconnaissance in 1967. We had confidence that the route through the ridge which affiliates from the west-ridge of Yalung Kang and continues to Hump, would be possible to climb.

We at last got the permission on 9 October, 1972 for the climbing in pre-monsoon of the next year. Despite our plan had made ten years ago, we actually had only two-months of preparation. We did every thing in a hurry and decided fifteen members. We prepared oxygen, 110 bottles of made in Japan and 24 French bottles, (we bought 9 more French bottles in Kathmandu, and 143 bottles in total) and arranged Karma as the sirdar. We shipped equipments on Jan. 7 and flied from Japan on Feb. 7.

Members

Leader; Eizaburo Nishibori (69), climbing leader; Haruo Higuchi (43), doctor; Atsuo Saito (43); Shigeo Tatsuke (38), Kojiro Tomita (33), Hiromichi Yoshino (32), Takao Matsuda (31), Yoshiaki Kamiyama (30), Yutaka Ageta (29), Kiyoshi Asano (28), Jiro Inoue (27), Kunio Kai (25), Rikuyo Morimoto (24), Shin'ichi Takagi (23), Tetsuro Matsuzawa (22)

Liaison officer; Daman Narashingh Rana (23)

Sirdar; Karma (39), cook; An Gyalzen (33) and nine Sherpas, and fifteen local porters, two kitchen boys and four mail runners.

Caravan

We began caravan on Feb. 20 from Dharan Bazaar after various negotiations in Kathmandu. Our loads ammounted 12 tons including foods for caravan. We constructed three parties and started in turn day by day. On 20 th, the first party, led by twelve members with 350 porters, on 21 st, the second party led by Sherpa with 50 porters and on 22 nd, three members with 50 porters. On 29 th, all parties met together at a ridge near Taprejong. As some porters rejected to go further because it was too cold, we fired some and recruited newly. We again formed three parties and continued caravan to Yamphodin, the innermost village. By Mar. 7, all parties reached there. Our march entered into the most difficult part from there to the base camp. We had to go over two passes to Tseram where we settled transit base. As we prepared 120 pairs of snowshoes for the porters, we relayed to carry up loads to Tseram. The work finished on 19 th. We made three deposit places on the way from Tseram to the base camp on Yalung Kang Glacier (5120 m). We finished to settle it on 29 th. On Apr. 2, all the members except Nishibori and Tatsuke held party in BC.

Climbing activities

Our original plan made in Kyoto was as follows;

1. Take the west-ridge route, and settle six fore camps according to our reconnaissance in 1967.
2. Divide climbing activities into two terms. In the former term, settle five camps and decide the place of C 6 for 31 days. In the latter term, after a few days of rest, settle C 6 and aim the summit for a fortnight.
3. Members use oxygen above C 4, and Sherpas, above C 5. French bottles will be used at the last stage. Average consumption was expected 2 liters per minute when working and 1 liter when sleeping.

We had already began reconnaissance since Mar. 28. On that day, Matsuda and Kamiyama reached the upper snowface which continues to Hump. On 30 th, they decided the place for C1 on the ridge above a little snowfall. There were crevasses at the lower part of the snow face. We brought logs from Tseram or

bridged with duralmine radders later. After two days of route making, we began to carry up loads on Apr. 2. On Apr. 3, we settled C1(5950 m) on the ridge which affiliate from the west ridge of Yalung Kang. Kamiyama and Asano began to search for C 2. The condition had become worse than in 1967. As icewalls were piled up in layers, we made route dodging them zig-zag and fixed both duralmine radder and wire radder against the icewall just under C2. We began loads carrying from Apr. 9 and settle C 2 (6470 m) on 13 th on the ridge. It was near the junction with Hump. In this while, a Sherpa fell in pneumonia at C 1, on 9 th, we let him carry down on radder to BC. We stopped activities for two days.

Ageta and I measured the heights of peaks and expected camp sites. We found Yalung Kang was 8505 m and 14 m higher than South Peak (see appendix).

From C 2 to C3, we again avoided straight climbing for carrying up loads. We took route towards Kangbachen side. After three reconnaissances we settled C 3 at 6990 m. Tomita and Kai used oxygen 0.5 litters per min. at the first night in C 3. On that day, Nishibori arrived at BC from Tseram with Tatsuke and Daman. He stayed there for three days and went back to Tseram again after encouraging members through transceiver.

Matsuda and Morimoto entered into C 3 instead of Tomita and Kai on 22 nd, and continued reconnaissance. Then, Yoshino and Asano took over the work on 24 th and settled C 4 at 7440 m on 26 th. They made route straightly along the ridge, however, slope became so steep that they could not climb easily. On 27 th, we could not communicate in the afternoon by thunders and had snow in the evening. Snowslide occured in various places on the next day.

Ageta and Kai entered into C 4 on 28 and ascended along the ridge and made route traversing to the eastward from 7700 m, then reached 7930 m. (Later we settled C 5 there). Matsuda and Morimoto succeeded them but could not reach there by bad weather on May 1. Though we could not carry out original plan completely, we stopped the former term activities when we decided C 5 site. All the members descended to BC and took rest.

We were obliged to reconstruct our plan because we found load carrying was behind schedule. The reasons were, the condition between C 1 and C 2 was very bad, and Sherpas and local porters were not so strong as we had expected. In Kyoto we had intended to attack the summit for three times. We reduced it to twice with light equipments. At the same time, we also search the possibility of another route, (named "ridge-line route" ascend directly to the ridge line from C 5). Direct rush from C 5 would be possible, though we eagerly try to settle C6.

And the first attackers were decided as Matsuda and Ageta.

Latter activities began on May 3. At first, Kamiyama who had suffered from stomachache in the former term started. On 4 th, Asano, on the next day, Tomita and Kai started from BC.

On 6 th, remained seven members, and on the next day, doctor Saito and Inoue entered in C 1. I alone with a visitor remained in BC.

On May 8, Kamiyama went back to C 2 by stomachahe. Mingma No.1 who had broken down in C 1 also obliged to take rest. On the next day, Asano and Kai could not reach expected C 5 by strong wind. Tomita reported from C 4 that they could not move by strong wind and also they could not have confidence to reach C 5 on the next day. I directed that Tomita and Morimoto would go and enter into C 5 with two Sherpas and local porters. We could receive daily weatherforecast from Japan in those days. It told that monsoon would begin at least ten days earlier than usual and from May 12 th to 14 th would become the last chance to get the summit.

On May 10, Tomita and Morimoto could not start from C 4 by strong wind in the early morning. They at last started at 9 : 30. However, they could not reach the expected place. They deposited loads on the way and returned to C 4. Kamiyama came back to BC that day. On the next day, Asano and Kai advanced an hour further than the deposit place, but they abandoned to climb more. They returned fixing ropes on the route. We must make C 5 on 12 th. We talked eagerly about operation at that night through transceiver. We finally decided to let Sherpas use oxygen from C 4 and settle C 5 on the next day. Attackers would take rest in C 4 using oxygen and enter into C 5 on 13 th with supporters. And aim the summit on 14 th with supporters' help. At the same time, I could not abandon the "ridge-line route." If we could climb over the grey rock at the saddle of snowface on C 5, there seemed possibility to reach the summit much faster. We decided to make reconnaissance by two members.

On 12 th, Takagi led four Sherpas using oxygen, and could safely bring up the loads at deposit place and settled C 5. On the other hand, Kai and Morimoto made reconnaissance from C 4 to the ridge line and soon reported that not only the grey rock but the fore peak on it are impossible to ascend. We finally abandoned the "ridge line route" and concentrated to aim by original route. Both parties gathered in C 5 and returned to C 4 in the snow. Weatherforecast told that 14 th would be a chance. Monsoon front was now passing on lat. 20° N to the north and it would affect us on 16 th. And another chance would come on

18 th. At the night we decided to attack on 14 th.

On 13th, Matsuda, Ageta, Yoshino, Asano and Karma started from C 4. Tomita reported it was exceptionally fine weather and merely breeze at 11 am. At 3 pm, Yoshino reported that all are in good condition and would reach C 5 30 minutes later. They pitched tents three hours later. Forecast told that the center of high pressure would pass on 14 th and 15 th, then trough would come on 16 th.

To the Summit

On May 14, it was the day of assault. At 6 : 20, Matsuda and Ageta started from C 5 and finished traverse in quick pace and rested on the snow ridge a little while. Then they climbed up shallow Runse which continued to the leftward. On the other hand, suppoters who had prepared breakfast for attackers since 3 am ran after them. Asano returned to C 5 when they were finishing traverse because he used out his oxygen. Yoshino and Karma followed attackers with Asano's loads. About 1 pm, attackers received new bottles from supporters at the head of shallow Runse (8410 m) and left their bottles there. The supporters returned to C 5 making routes on their way back. It was a perfect clear sky and weak wind. We could follow attackers' behaviour very well from BC. They sometimes asked us advices through transceiver. They continued quick pace and entered into large triangular snow face under the fore peak. They traversed there and climbed up rock shelf which continues toward upper right. At 2 : 30 pm, I directed them to go to the rightward as possible as they could. We had already understood that there was a rockface on the shelf and the right flinge of it seemed possible to climb. Gas began appearing when they reached there and we became unable to see them from BC more. At 3 : 50 pm, Ageta reported that they reached the col between the fore peak and the summit. Rathere strong wind was blowing from Yalung Valley. And the way from there seemed not so easy. Matsuda reported that they needed to climb about 150 m of height to the summit. They would need about an hour more to ascend. As oxygen remained 100 atm. They would go as far as possible. I suggested that they would go behind of the peak, so try to communicate when they reached windows. At 6 pm, I heard calling noise of transceiver, but no reply could we hear through transceiver. Merely noises came in. Their transceiver must be out of order. We supposed that they could reach the summit, they must have left oxygen a little. They would be able to go back deposit place. However, we could not communicate with them through the night.

Rescue

On May 15, Kamiyama who had searched attackers through telescope since sunrise at last found them at 150 m upper left of the deposit place. Ageta was waiting for Matsuda by a rock. (It was 6:10 am) It was another snow face just above which they had passed when ascending the day before. It shaped like blind alley. They, then, tried to go down from the snow face, then, went back to the rock, and searching another route.

We believed that they had got the summit and would reach the deposit place soon. It was very lucky for us that it was clear sky, too. However, we irritated that we could not use transceiver. At that time, exhausted Yoshino and Karma and also immovable Asano stayed in C 5. They had little oxygen because they let it use for Sherpas. Other members stayed in C 4 preparing for the second attack. I decided rescue plan to let go Kai and Morimoto to help Matsuda and Ageta. Two Sherpas bring two bottles to the deposit place making routes on their way. However, actually, Mingma Tsering could not move by out of condition. Then three members started together from C 4. They passed by C 5 at 2 pm.

On the other hand, Ageta alone at last reached the lower snowface which continued to the deposit place. It was merely 30 m under him. But, at the next moment he traversed the snowface and began to climb leftside rock to the ridge line. We at once understood that Ageta didn't know where he was. We irritated and gathered materials to make smoke. We wished to notice him that BC knew his difficulty. However, Ageta seemed not to find it. He then, climbed down to leftward and reached on sharp cliff just above the traverse route and began to nap there.

At 3:05 pm, when rescue team was passing there, Ageta's sack fell down 50 m behind them. I let them go back and examine it because I suspected that Ageta wrote some memo as his transceiver was broken. But, they found no such things. They again dscended and reached the snow ridge at 5 pm. When they called Ageta, he replied at once. They eagerly continued climbing and met with him at 100 m to the leftward from the deposit place. It was at 7:30 pm. "We found him now. He is drinking tea taking the cap of jar by himself", they reported. Ageta reported that they got the summit and told about the situation when he parted with Matsuda.

The rescue members gave Ageta oxygen and took him to the deposit place. Kai and Morimoto then, climbed up to find Matsuda. On the way, they lost the route a little and entered into the snowface where the attackers had passed when

ascending. They found Matsuda's broken pickel head there. They looked out around there through headlights, but could they find nothing more. Ageta reported that Matsuda has asked Ageta to remain behind the rock which we first found them, because he was tired out. It was 10 am. Ageta then, left his climbing equipments beside Matsuda and tried to fetch oxygen to him. Kai and Morimoto continued ascent and reached the rock shelf. They had used out their oxygens there. They stood 20 m under the rock where Ageta had parted with Matsuda. They called Matsuda's name loudly. But no reply came back. Though they repeated, still no reply came back. It was past 10 pm. It was very dangerous to climb rocks without oxygen at the height at night (8160 m). We decided to take Ageta back to C 5 that night.

Ageta had lost his crampon when he was rescued. They left oxygen bottles for Matsuda and climbed down without it except Ageta to C 5. They started from deposit place at 11 : 15 pm and safely reached C 5 at 4 am of the next day. (They took rest for a while in C 5 and descended to C 3 wherer doctor Saito was waiting in that day).

Tomita and Takagi who had entered into C 5 on the previous day started from there as the second rescue team. It was at 6 am on May 16. When they were arriving at the deposit place, thick gas surrounded and we could not see anything from BC. We directed them according to the detailed sketch which we had made for such condition. They found merely Ageta's climbing equipments behind the rock. As similar rocks stood around there, they precisely searched around. But they could not find Matsuda anywhere. I ordered them to go back after letting them give sufficient time because their oxygen had become short. It was 4 : 40 pm.

I was forced to be in very difficult state to judge at that moment. Tomita and Takagi was heavily tired because of their little sleep last night and hard labor. There appeared the possibility of double disaster. We had merely 5 bottles of oxygen left at that time. We let two Sherpas wait in C 5 for the case that Matsuda would be found immovable by himself. There were no other energetic members in C 5 and C4. Whether should I choose, to use oxygen for Takagi and Tomita, or to use for the tired rescue team? But, we would have only two bottles left in the next morning. It was too dangerous and no spare bottle left for Matsuda. As the broken pickel head had been found, we could not but suppose that Matsuda must have happened to slip down after he had parted with Ageta. The weather also was turning worse after three days of clear sky. I at last judged to use oxygen for the second rescue team.

Asano and Phurtemba (local porter) brought bottles and met with rescue members near the snow ridge. They all safely returned to C 5 at 10: 45 pm. We stopped rescue activities. In C 5, five members slept using two bottles. On 17 th, we withdrew C 5 and C 4 and on 18 th, all members came back to BC after withdrawing lower camps.

We made memorial stone in Tibetan style on Corner plateau, at the opposite side of Yalung Glacier from where we could see most beautiful Yalung Kang. We parted from there on May 22.

Nishibori returned from Tseram to Kathmandu on 18th by helicopter. Higuchi and Tazuke with frost-bitten Ageta also flied to Kathmandu on 29 th. It is too sorrowful for us that we lost Matsuda who had been an active member of our expedition and also a good companion climber, though we could succeed the first ascent of Yalung Kang.

Appendix: About the height of Yalung Kang

We measured the heights of Kangchenjunga peaks and important points on our route from near BC on Apr. 6-8. We used theodolite (Wild T-2 type) and the same typed subtense bar.

Our method was to reduce the heights of peaks from the main peak of Kangchenjunga. The results were, Yalung Kang; 95 m lower, South Peak; 109 m lower, Central Peak; 122 m lower. The deviation was $\pm$ 5 m for each.

There are various measurements about the Main Peak of Kangchenjunga such as 8585 m, 8598 m, 8603 m and 8616 m. The South Peak is said 8474 m, 8476 m or 8480 m, and Yalung Kang (the West Peak) is said 8420 m or 8433 m. As it was difficult to judge reliability, we took 8600 m as the average of the height of the Main Peak. According to our measurements, therefore, each peak becomes, Yalun Kang. 8505 m ; South Peak, 8491 m; and Central Peak, 8478 m of heights.

South Peak has been said higher than Yarung Kang. However, the order turned upside down by our measurement. Although we brought clinometer to the summit to examine it, bad sight on May 14 prevented us to compare.

The First Ascent of Nampa, 1972

By Seigo Matsushima

The Mountaineering Association of Aomori Prefecture sent "The Japanese

Nampa Expedition, 1972" to the north east region of Nepal in the pre-monsoon season. As permission didn't come earlier, S. Matsushima flied to Kathmandu on February 17 and there he got oral permission on Feb. 22.

On the 27th of Feb. the 5 members gathered in Kathmandu and March 3, they left there with 3 Sherpas, 1 cook, 1 kitchen boy, 2 mail-runners, 1 liaison officer and 1.5 tons of loads for Dangarhi by a chartered DC-3.

Members of the party: S. Matsushima (36, leader), T. Komiyama (31, deputy-ld), F. Kimura (28), I. Sawada (24), S. Takahashi (23).

Liaison Officer-K. B. Rana (33), Sherpas: Sona Hishy (27), Ngati (22), Karsang Thhile (28).

We employed 60 porters and started on March 7 from Dhangarhi. Initially we intended to take our approach route via Silgarhi-Doti but owing to the difficulty of obtaining foods on the way, we changed it to the one by way of Dandeldhura and Baitadi. But the condition was the same after all.

On March 13, we reached Dandeldhura and Baitadi on the 18th. On the 21st we entered into the road along Chamlia Khola. The weather was clear but unbearably hot. We had no porter-trouble and the people along the way were very gentle and cheerful, so that we could march our caravan smoothly and pleasantly.

On March 31, we reached at last at the point 3980 m on the moraine, south of Nampa and were established BC in violent snow-storm. On April 2, we began to reconnoiter our climbing route to the direction for the south-west ridge of Nampa.

We started our real climbing on April 3. Next day CI was pitched on the ice-fall at 4800 m. From there to Nampa-Col (after the British party, 1970), we had to climb up complicated ice-fall and steep ice-couloir. In the latter we found a fixed rope left by the British party. Every day we saw numberless avalanches fell down in the afternoon.

We were hampered by furious blizzard several times in this couloir, so we had to spend 10 days until we could establish C 2 on the Nampa Col. On April 14, C 2 was erected at 5390 m. At last we could gain the longed-for west ridge of Nampa. The ridge above C 2 was a continuous and difficult knife-edged ridge On April 20, S. Matsushima fell and carried down by an avalanche and was hit by his ribs.

On April 24, after 10 days since we started C 2, C 3 was established behind the rock gendarme at 5550 m. But on the way from C 3 to C 2, Sherpa Karsan lost his crampon and when T. Komiyama was rescuing him, he hit his own knee severely. On the south face of gendarme we found some fixed ropes of the British

party '70. The rope showed us a nice traverse route under the rock gendarme. From C 3 we climbed up and down 3 rock pinnacles hence reached the upper part of the west ridge. Steeper and steeper became the ridge nearer to the summit.

On April 29, we established C 4 (attack camp) on the hanging glacier at 5900 m. It thundered and fell every day in the afternoon. We must fix the ropes above Kasa-iwa (umbrella rock) at 6350 m.

On May 1, Matsushima, Kimura and Takahashi entered in C 4, Sawada and Sherpa Sona-Hishy in C 3, Komiyama, Ngati and Karsan in C 2. Thus at last our arrangement for the attack to the summit was ready.

After 2 days blizzard, on May 4, at 5: 30 am, Kimura and Takahashi left the final camp under the bright and clear sky. They climbed up cautiously the steep ridge that mixed with ice and rock. Fortunately it was the finest day we ever had in this season. But they were worried unexpectedly by deep snow above the Kasa-Iwa where the fixed rope ended.

Leader ordered to them to bivouac on the way down from the summit. But they were too tired to reach it and thought to have no time enough to continue climbing. Therefore they bivouacked at 6500 m after they descended from the blue ice-wall. That night the moon lit up all the mountains around. We could not ascertain how they were because all the walkie-talkies were broken down.

On May 5, Kimura and Takahashi departed from the bivouac site at 6: 30 am under the clear sky as the previous day. To begin with, they attacked the blue ice wall of 150 m that seemed like a enormous mirror. The pair kept on climbing arduously and at last could stand on the virgin summit of Nampa at noon. They took some photographs and sketches of the surrounding endless giant eaves of the Himalayan mountains in deep emotion.

They left the summit at 1: 00 pm. When they reached the blue ice wall at 2: 40 pm, Takahashi slipped down to the 2000 m deep north face and disappeared. Matsushima, Sawada and Sherpa Sona-Hishy came back to the final camp with Kimura at 9: 15 pm.

On May 7, all members returned to BC with depressing victory.

In the beginning the 2 were tied in one rope, Kimura descended first and waited Takahashi. Takahashi started down and suddenly slipped off and disappeared into the north cliff, giving no shock to Kimura. It seems that one end of the rope which tied Takahashi has got loose when he was falling hence there was no shock to the survivor. After the accident they investigated the rope to find no

indication of even a snap.

Gangapurna (autumn 1971)

By Kiyoshi Shimizu

We, the members of Nagano Prefecture Mountaineering Association had been desiring to go to Himalaya. We purely wanted to climb Himalayan peaks. At first we aimed unclimbed seven-thousanders, or low cost mountaineering. And we hoped big one based on that experience. The reason we chose Gangapurna was that there was unclimbed 7106 m peak by the west side which we later named "Asapurna". We were charmed with the plan to traverse from the peak to Gangapurna.

I made reconnaissance with three other members in the end of 1969 to examine the possibility to approach from the southern side. Though we could not fulfill to examine by bad weather, we could have confidence to approach from the south by three weeks of reconnaissance. We then proposed permission to Nepalese Government.

We sent 1.4 tons of loads by air and two members flied from Haneda advancedly on Aug. lst in 1971. Members are as follows; leader; Kiyoshi Shimizu (35, liaison), sub-leader; Kazutomo Kobayashi (31, photographer, recorder), Naoki Miyasaka (33, equipment), Iwao Ogiso (29, transport), Akira Shiobara (28, accounting), Hirosuke Kinoshita (28, packing), Takeshi Akabane (28, liaison, foods), Kesato Wakabayashi (27, equipment), Kohei Sasagawa (25, medicine), Masuo Hakoyama (22, foods).

Sirdar; Girumi Dorgi (36), cook; Norbu (35), highplace porters; Benba Norbu (36), An Norbu (38), An Gyalzen (28), An Pema (29), Hakupa Tshering (26), local porters; An Norbu (27), Pasang Tempa (23), Dorjee (30), kitchen boy; Tarpa Gyalzen (29), Nawang Chota (24). Mail runner; Pasan Rita (42), liaison officer; Drab Bahadoul Puradahan (24), and hired four more porters in base camp.

Caravan

Main party arrived in Nepal on Aug. 20. We started caravan from Pokhara on Aug. 28. Loads ammounted 4 tons and hired 120 porters. We headed to the westward from Pokhara and from Biletaty, we went along the Modi Khola

upwardly. It was a famous course since Noyce Party. We had continuous rain and land leeches endlessly assaulted us. Though we had expected to buy vegetables on our way, we could hardly get. Even our doctor (Sasagawa) proposed to exchange his medical care, villagers would not sell. It was the midst season of rice planting.

We reached the end of South Annapurna Glacier on Sep. 4. We fired porters there except 30 men. We carried up loads to a round hill in the end of East Annapurna Glacier for three days. We settled base camp on Sep 7. When clouds were gone, we could see the south face of Gangapurna in front of us and ridge from Annapurna III to Machapuchare surrounded there. We could feel that we at last entered into the center of severe and beautiful Himalaya.

Climbing activities

From Sep. 7, Kobayashi, Ogiso and Kinoshita began to search route. They climbed up the glacier, covered with moraine, which lay between sharp rock walls. They soon reached the foot of 300 m of rock wall above which icefall stood. We had been looking forward to see beautiful glacier lake introduced by Gunter Hauzer party, however, no water remained there. They ascended right side of the ridge and found a space for deposit place on icefall. They were always threatened with frequent falling rocks. From the next day, we began loading to there.

On 11th, it was a clear sky, Kobayashi and I climbed up the Garberhorn side wall beside the glacier (we named "Grand Canyon") and sought the route on the southwest ridge of Asapurna and also advised about the route to C 1. We decided to settle C 1 at 5180 m just under the rock wall where side wall of the glacier meets with the southeast ridge and facing icefall. Though we had planned to climb by the southeast ridge of Asapurna straightly, the ridge was too difficult even for load carrying. Then we abandoned traverse from the southeast ridge and changed to attack both peaks from the col. On 15, we settled C 1 and five members and four Sherpas entered into there. We also settled reconnaissance camp on "Grand Canyon" to help route finding from C 1 to the col through icefall. Monsoon had already ended. We had clear sky in the morning and gas appeared in the afternoon, and sometimes we had snow in those days.

We settled C 2 at 5900 m on the snow field near south face after 5 days of route making through icefall on Sep. 22. From there to the col, there were huge insel covered with snow in the open couloir. Rocks frequently dropped down at the southeast ridge side, and the southface side was protected with sharp Himalayan

creases. It looked as if impregnable. The most difficult factor was that the height was about 1000 m. As there were three big ice walls, we named first, second and third step from the lower one. To overcome each step seemed to us the key of our activity. We needed unexpectedly long time to reach the col. We settled temporary camp on the first step (6400 m) and needed 15 days and 1100 m of fixed rope. As the labor in the couloir became longer, our optimistic expectation to get the summit in early October was easily broken out and we needed to examine the condition of left materials. We found fuels were excessively used. Especially, kerosene became short. We replenished it from Pokhara and used logs in the BC. On Oct. 7, Ogiso and Akabane reached the ridge line and they could see the northern side. There were beautiful blue water of Tilitso and the grand Dhauragiri far beyond the lake.

The ridge from the col to Asapurna was continuous knife edged and cornices. We could easily understand that to get Asapurna along the ridge was not so easy as we had expected. We chose Gangapurna, first. Why did we abandon Asapurna? That is because our original plan aimed traverse and Asapurna was merely the passing peak for us. As a result, we lost both first climbing and traverse.

On Oct. 9, we settled C 3 on the ridge near the col (6850 m), Ogiso, Akabane and I entered into there with three Sherpas. We behaved tying our bodies with ropes. On the following two days we fixed 630 m of rope on the west ridge of Gangapurna. Ice-bars became short, so we took off ice-bars at low parts and used the bars of radder instead there. On 13 th, we settle C 4 at 7120 m. As Ogiso caught a cold, I joined in the attacking team instead of him. Though we had expected that over the shoulder might be easier the ridge became more difficult with thinner rock and cornices. We could not have coffidence whether we could climb over a little gap on the way. Girumi, Penba and An Norbu were waiting for us at C 4 pitching one more tent. Kobayashi, Kinoshita and Wakabayashi stayed in C 3 and Ogiso climbed down to C 2.

On 15, at 4: 40 am, Akabane, Girumi and I started from C 4. We slowly climbed up on the thin ridge and icewall and reached the "false Summit" at about 9 am. Our behaviours could be seen from the lower camps. Especially the liaison officer measured left distances and eagerly noticed to us. We struggled with steep ridge, step by step, we made route by pickel. It seemed as if time had stopped. And at last we reached the end.

The summit was a slender snow table where ten men could stand from east to

west. It was 2:15 pm. I was in very cool state of mind and didn't feel any fulfilled or excited feelings. I eagerly wished to climb down.

However, joyful voices came from lower camps. We could see Dhauragiri and Annapurna in the west, Manaslu, Peak 29 and Himalchuli and Tibetan mountains in the west. But clouds covered over the foot. We could not see base camp. We stayed for an hour on the summit. We could descend much faster than ascend. However, when we reached "false summit", strong stormy snow suddenly assaulted us. We suddenly entered into invisible milky world. We eagerly descended following the route. Fixed rope helped us very much. At 7 pm, we could at last reach C 4. Though attacking team had been planned to go down to C 3, we could not move at all and seven members were obliged to sleep at C 4 which was for five men space.

Heavy snow, Snowslide and Disaster

On Oct. 16, the snow storm became harder. We quitted second attack and tried to go back to C 3, however, we could not move, even impossible to stand up in the strong wind. In every camp, our members began to struggle against snow. In C 4, we could not clear the lee side snow but tried to maintain spaces by our bodies. In the camps below C 2, snow lay higher than the tents by noon. Even in BC, poles of a tent was broken and in C 1 and C 2, members gathered in a tent and abandoned others. In C 3, Kobayashi alone stayed there. He was burried in the snow about 4 pm and endured in tiny space between cross poles and frames. What a heavy snow in middle October! It exceeded much more than safety. We all feared snowslides. We communicated through transceivers and encouraged each other at tied times. Gradually we became to know that C 2 had fallen critical conditions. We had believed that it was the safest place around there, however, we could not stop advising to remove more safer place. The reply from C 2 reported that the sound of snowslide were like cannon's roars at Annapurna III and snowslides were happening also from Asapurna to the entrance of couloir. However, the south face was quiet. The hill above C 2 would divide fallen snow into two. It must be the safest place.

At 6 pm, Sasagawa reported, "Snow is still violent and snowslide is occuring frequently, but we are safe. We will keep here. You are of no use to be anxious about us. Do your best there. We will certainly let you take back to BC. Let's meet at 6 in the next morning, through transceiver". Who could expect that this would become his last word?

On 17 th, C 2 would not reply with us. There appears no sign of weakening of storm. We became anxious at once. Something had happened at C 2. We decided to go down to C 3. We started in violent snow storm. We could not judge snow face or space easily. We followed down along dancing fixed rope. On the way, I happened to find that An Norbu was not with us. He was trying to dig snow-cave. He wore only working gloves on his hands. What had happened for him, that two-tigerbadged Sherpa? This became the cause of his losing seven fingers later. I also sometimes suffered from illusions. I felt as if I had been in Northern Japanese Alps in February. Trees and lodges appeared. It took 6 hours and 40 minutes to go down merely 630 m of distance. At last we reached C 3. As tent was broken, we dag snowcave. Kobayashi fled from lonliness.

But, the sirdar, Girumi would insist to go down more. We stopped him eagerly, but we could not persuade him at last. We gave him fuel and food and hé climbed down with Pemba. We insisted to stop on the upper crevasse 300 m under C 3. But that became eternal departure with them.

On 18 th, we could not move by unchanged storm. Girumi reported that there were no C 2 and return C 3. It was about 8 am. Soon after they ordered the Sherpas in C 1 to bring water and foods. The Sherpa answered that he couldn't move by heavy snow. As they spoke in their native language, and air condition was very bad, we were not certain that we could communicate with them well. It was about 1 : 45 pm that both Girumi Dorjee and Pemba Norbu would not answer.

On 19 th, at last weather changed better. We began to descend in deep snow. We reached where we could see C 2. We could see merely the ruin of snowslide. We had to admit that C 2 was completely destroyed. We hoped vaguely that they had escaped somewhere. We could not work sufficiently by mental and physical fatigue. We bivouacked with a dug out tent under the snow and in a snow-cave. We could not bear to see the beautiful sights in the setting sun.

On 20 th, we feared to go nearer to the place where C 2 had been. Wakabayashi who reached first began to cry as soon as he stood there. Others also began to cry. At a glance, we could understand that C 2 was completely destroyed. The scene around there was entirely different. We could nothing to find out. Six members in C 2, Ogiso, Sasagawa and Hakoyama; An Pema, An Gyalzen, Nawang Chota, and also Girumi Dorjee and Pemba Norbu must be somewhere under the snow.

We returned to BC on 22 nd. It was a painful descend by the change of terrain and hungry and also fatigue; however, it was uncomparable with death.

It became colder, sometimes snow was blown up at the summit of Gangapurna. However, it was much more colder in our hearts. We could not search for the eight members. When we entered into villages on our way back, Sherpas were intoxicated with rakshi but we could not forbid them to drink when marching because we could suspect well that they were trying to drown their griefs in spirits.

Examination

The cause of our disaster was unexpectedly tremendous heavy snow. In middle October, we had snow for whole the three days without rest. We have never known such enormous snow in October. We are now judging that the monsoon in that year ended very early after a short summer. It ended middle September and fine days continued during that month. However, monsoon air mass once again expanded to north in middle October. Jet stream retreated for a while by the pressure of hot air mass. And wet and moistured air came over Himalaya and the weather became temporary monsoon there. Though we are not professional meteorologists, we think it is very peculiar phenomenon. We should be careful when monsoon if ended too early.

The second important factor was the location of C 2. We decided the place considering both climbing convenience and safety. It was not so bad place. But, we didn't examine the limit of safety there. We suppose C 2 could endure against as twice as the worst condition that we had expected. If we had the idea of the limit of safety, they would have escaped. We had too much confidence with C 2 and would not think about the capacity of safety because we believed it was the safest place.

Mountaineering will become impossible if we consider dangers excessively. It is needless to say that we should always suppose how much dangerous but at the same time we should care the limit, or capacity of safety.

We have imprinted a stain on Himalayan mountaineering. We believe it is our duty for the dead members to let our experiences notice to climbers. We hope this report will become a useful lesson for the readers.

note; We named "Asapurna" as the memorial of our dead eight members.

Cordillera Real, 1972

——Illampu and high-place medicine——

By Yoshihiko Kawakubo

We have become to have many requests to send doctors for overseas expeditions recently. While having accepted those requests, we, the members of Academic Mountaineering Club of medical devision in Nihon University, have become to go expedition by ourselves. Our purpose was, first let doctors have experiences to climb on six-thousander as many as possible. Secondly, do investigation of high-place medicine. We chose Hindu Kush for these purposes, however, Indo-Pakistani struggle prevented us to go there. Then we aimed Cordillera Mountains in Bolivian Andes. We planned to practise investigation at Huayna Potosi then Illampu, first climbing by Japanese. We chose fourteen members and left Japan by June 30.

Huayna Potosi (6094 m)

As Miss. Sekita has already reported about on this journal (*Sangaku*, vol. 63), I report only the result.

July 11; started from La Paz and constructed base camp at 4600 m.
July 13; settled C 1 at 5200 m.
15; settled C 2 at 5500 m.
17; Yamaguchi, Mizuno, Yamagishi and Ono got the summit.
18; Ogawa and Miyoshi by straight climbing, Katayama and Yahagi by the northern route, Shibata and Sueyoshi by the southern route, met on the summit.

Illampu (6324 m)

We took rest and prepared for Illampu for a week in La Paz. On July 27th, we started from La Paz and entered into Ancohuma village at about 7 pm. In the next morning we hired eight porters and some animals. We began caravan with them carrying about 800 kg of loads. Along a branch of Rio Grande, we marched in cuctus fields. Indios frequently took rests after thirty minutes of quick pace and also they frequently chewed leaves of coca. We settled base camp in damp field between 300 m of cliffs which run from north to south. It was 4530 m of

height near the foot of Ancohuma Glacier. There were many ponds around there and we sometimes found rabitts among moraine.

According to the reconnaissance we decided to cross the right side cliff to the leftward and reach the end of the glacier. We could stand on moraine by the glacier after 90 minutes of walk and settled C 1 at 4970 m on the moraine just the opposite side of BC crossing the cliff. We could see the summit of Illampu on 1400 m of huge rock face from there.

We, then, climbed up the moraine beside the glacier and entered into crevasse zone. It was very lucky for us that we had fine weather. We passed there safely three hours later and reached a large snow field under the west col. On Aug. 2, we settled C 2 on that snow field. The west col stayed about 400 m above C 2, and 45°-50° of steep snow face continued from C 2 to that col. As both sides had crevasses, we were forced to choose straight climbing. We fixed 460 m of rope to just below the col. It took about four hours from the foot of the snow face to the col. There were cornices toward southern side on the ridge and we saw Hancouma peak behind great snow field. We ascended the ridge toward the summit and reached snow field. We settled C 3 there (6097 m).

On Aug. 5, we started from C 3 at 7:45 am. It was rather thick gas and no wind. Temperature was minus 16℃. We ascended the snow ridge and at 9:29 am, Yamagishi, Ono and Miyoshi got the summit. Only one could stand on the summit, though it was flat. On the next day, Waji and Kuniyoshi attacked the summit. They buried ensigns of Japan and Bolivia and also our club flag on the summit. It was just the memorial day of Bolivian revolution. However, we could not win the glory of first climbing by Japanese because two men had already got the summit a few days earler than we.

Pico Shultz (5933 m)

Pico Shultz stood just the opposite side of C 2 behind Ancohuma Glacier. Fanlike snow slope spread down from the summit to the glacier, and wide crevasse lay between the glacier. Its western ridge continued to the west col of Illampu and rock ridge stood on the glacier at the left side.

On Aug 7, Waji, Yamagishi, Kuniyoshi and Miyoshi started from C 2 at 8:20. They went to rightward against the crevasse on the snow face and reached the foot of rock ridge. It was our first rock climbing since we came to Illampu. At noon, they passed the rock ridge and ascended the snow face where nieve penitente grew about 30 cm. They got the summit at 12:40. It was the first

climbing by Japanese. Both North and South Peak of Illampu stand in front of them and they confirmed South peak was much higher. They took lunch there and began to descend from 13 : 20. Gradually, gas had become thick and snow began to fall. They lost the route by gas and obliged to do 40 m of straight descend. They returned to C 2 at 17 : 25 in the snow.

On Aug. 8, all the members gatherd in base camp and celebrated safety. On Aug. 11, we withdrew BC. Since the previous night we had unexpected snow. We parted from pure white Illampu.

High-place medicine

Practical results of our investigation seem to be useful for the readers. As we investigated continuously, we could get two kinds of data. Those are about influences merely staying in high place, and about influences when we were climbing.

We can divide three stages of acclimatization. These are, acute, first acclimatizating and the second acclimatizating stages. Acute stage; as soon as we landed La Paz airport (4010 m), we began to be influenced with low-oxygen. Various subjective symptoms soon appeared. First acclimatizating stage; it is the time we began not to feel subjective symptoms. And the second acclimatizating time; we named the term from the beginning of activities in Huayna Potosi to the end. We investigated at BC (4800 m), C 1 (5200 m) and C 2 (5800 m). We investigated about, subjective symptoms, step test (ability of phisiological recovery), Kraepelin's test, and about influences of drugs on high-place.

The result can be summarized as follows;

1, Subjective symptoms and the results of tests are not necessarily consistent.

It is very natural in acute stage that subjective symptoms appear and recovery of heart beating after step test becomes worse. However, at the first acclimatizating stage, though all the members didn't feel subjective symptoms, ability of recovery still remained in not so good condition. And at the second acclimatizating stage, though members began to feel various subjective symptoms again, the result of step test didn't change so much as the previous stage. Kraepelin's test showed the same tendencies. Five members who were obliged to stop activities a little while were all that didn't feel subjective symptoms but their ability of recovery was bad. Therefore we must be careful that even when we don't feel any subjective symptoms, phisiological abilities are not necessarily acclimatized with the high place.

2, Heart beating in quiet state does not necessarily increase in proportion to

the height.

Usually, heart beating in quiet state is regarded key index of physical condition. However, we can also consider that fastened beating by a slight change of height is the sign of good adaptability to low-oxygen. We need to know the ability of recovery instead of beating in quiet state. Step test must be convenient for climbers to know one's function of phisiological recovery. Even doctors are not there, one can suspect his condition rather exactly. That is, to bend and stretch for a unit time, and count beating after 30 seconds, 1.5 minutes and 3 minutes. First, one should know his standard at home and compare the results in high place with it. We have experienced that one of our member who didn't feel subjective symptoms at all but showed low recovery ability became completely exhausted after he had got the summit and needed to take rest in BC.

3, Though young, one cannot do overworks.

We can divide our members into three groups by age. It is natural that older groups showed lower recovery by test, but the youngest four members took rest by serious subjective symptoms though labors were rather even.

4, Even if one feels mental fatigue, it does not necessarily mean that mental activities have declined.

Kraepelin's test showed that mental activities didn't change so much when one felt fatigue or subjective symptoms. So, we expect that strained nerves can prevent declining of mental abilities considerablly. As dog-tired conditions may happen during climbing, the continuity of mental stiffenness is the most desirable ability for climbers. However, it is needless to say that over-strained condition will become disturbance.

High-place acclimatization is very complicated phisiological phenomena. We know it is dangerous to argue based on insufficient data. However, we believe these four are basic points that each climbers should care of. We hope these results of our investigation will become useful advice for climbers.

Though first attempt, we could complete our expedition safely. Our greatest fruit was that we could actually understand the difficulty to practise medical investigation and mountaineering simultaneously. As two Japanese had climbed both Huayna Potosi and Illampu just before us, some criticized that our expedition was of no use. However, I dare say that we succeeded to nurture doctors who will be able to behave fully at high place, (eleven members climbed the summits) and also, though insufficient, we could get basic data in high-place medicine.

members

leader; Yoshihiko Kawakubo 41, climbing leader; Ken'ichi Shibata 33, Takuji Ohama (39, liaison), Taizo Yamaguchi (34, chief of medicine), Ken'ichi Wachi (33, foods), Toshihiko Mizuno (25, chief of equipments), Kazuo Yamagishi (25, transport), Tetsuro Suetsugu (33, investigation), Kunio Ogawa (25, liaison), Yoichi Katayama (22, recording), Tsutomu Ono (22, accounting), Kazushige Kuniyoshi (21, equipments), Takashi Yahagi (22, foods), Katsuhiko Miyoshi (26, joined specially, Academic Mountaineering Club of Nihon University)

MEMORIES OF PRINCE CHICHIBU

By Sir Arnold Lunn

I first met Prince Chichibu in January 1926 with his A.D.C., Viscount Matsudaira, whom I had known slightly at Oxford. The Prince, he told me, was fond of ski-ing, but his real passion was mountaineering. Mürren, the birth place of the Kandahar Ski Club, founded to promote and obtain international recognition for the Alpine races, Downhill and Slalom, was popular with "Downhill-only" skiers. That the Prince was not a downhill-only skier was made very clear the first day that we skied together. I had planned a pleasant run before lunch. "This, Sir", I said when we reached the summit of one of the popular runs, "is where we start down". "I like better go up" said the Prince. "But, I'm afraid that if we don't ski down from here, we shall miss the train back for lunch". "I like better miss train", replied the Prince. So we began to "go up" and duly missed the train.

Skiers must attain a reasonably high standard of ski-ing before being elected to the Kandahar Ski Club. The Prince as a skier was fully qualified for membership and we appreciated the fact that he preferred to join as an ordinary member, on his ski-ing qualifications, than as an honorary member on his royal qualifications.

He presented a beautiful Challenge Cup to the Kandahar. Today the Kandahar and our sister Club, the Swiss University Ski Club, are, at the moment, occupied with the creation of a joint Anglo-Swiss-Japanese entry for the Prince Chichibu Cup, to be held, if our plans materialise, alternately in Japan and in Mürren.

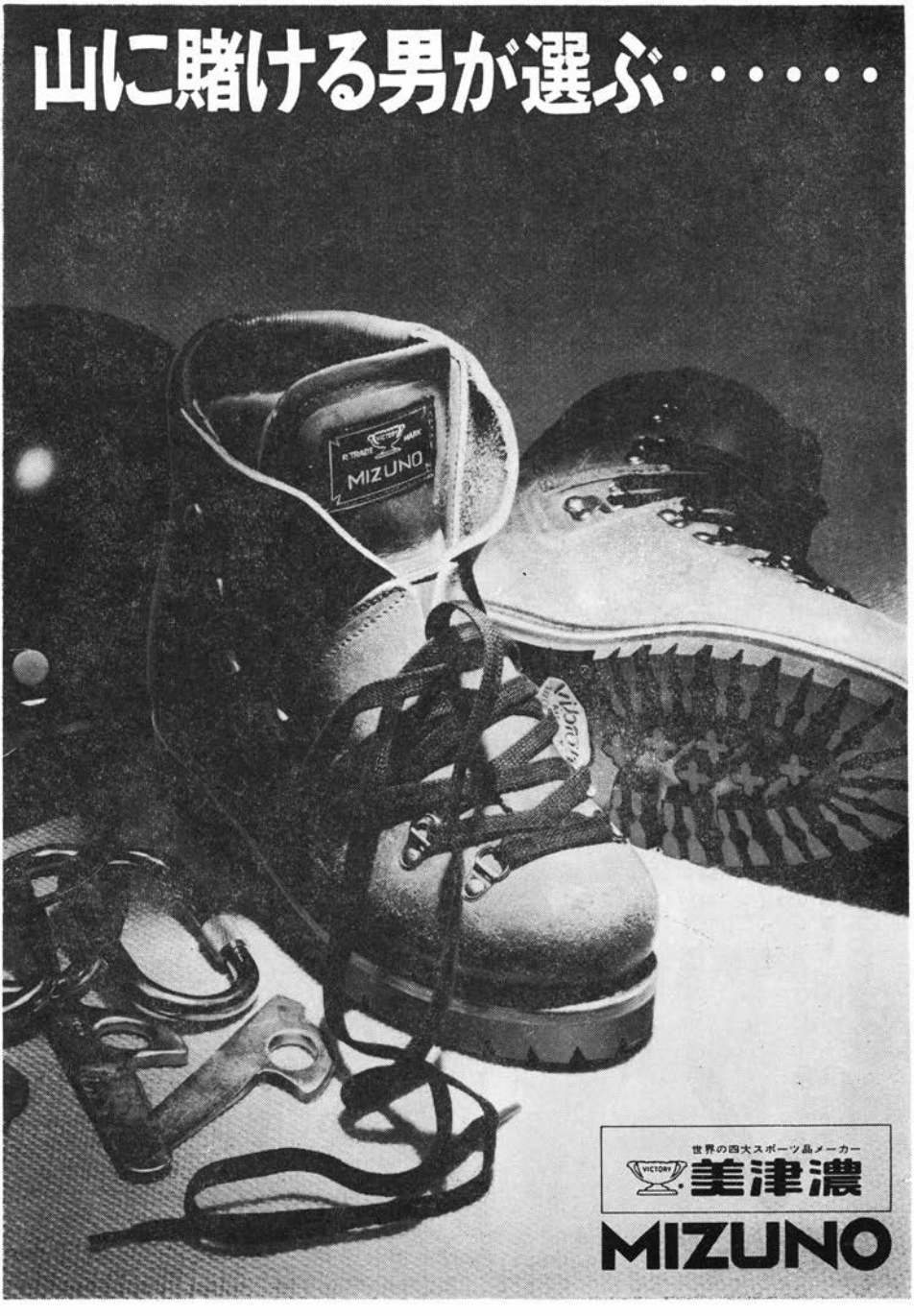
In May 1927 the Prince returned to the Alps and I had the honour of introducing the Prince to the delights of glacier ski-ing in the High Alps. Our ski tours included the first ski ascent of the Grindelwald Grünhorn and the first ski traverse of the Bieligerlücke. Both these expeditions included some rock climbing.

Prince Chichibu continued to climb until the outbreak of the World War. Shortly before he died I sent him *Mountains of Memory* in which our joint expeditions were described. The Prince and I never met again. "I cannot tell you", he wrote, "how much delighted and consoled I was by reading it at a most depressing time. Having lost all my books on mountains and ski, including the British Ski Year Book, when my Tokyo house was burnt down by one of the air raids, I was particularly glad to find the record of my unforgettable ski tour with you in the Alps in the Spring of '1926'".

That great novelist, Evelyn Waugh, once remarked that his contemporaries were as self-conscious about class as their Victorian great-grandfathers were about sex. It is also worth noting that one result of this self-consciousness is to ignore the fact that social status is not the only nor even the most important creator of class consciousness. Those, for instance, are not only mountaineers but worshippers of mountain beauty who belong to a particularly intimate class, a class in which social differences count for very little. For many years I climbed and skied with Fritz Amacher of Grindelwald. We were linked by memories of hard-won ascents, glorious ski-ing and occasional moments of danger. Once when I was walking through Grindelwald with an English mountain lover, we suddenly met Fritz. "This is a friend of mine", I said, "Fritz Amacher". "Not a friend", said Fritz reproachfully, "but one of your very best friends". How right he was !

Fritz was a liftman or porter at a Grindelwald hotel. Prince Chichibu was the brother of the Emperor, but both belonged to the climbers class to whom the mountains have given off their best.

Certainly few men have loved the mountains more passionately than Prince Chichibu. The first English book that he read was *The Mountains of Youth.* From what he said, I believe that what appealed to him in that book was not so much the description of particular climbs but some suggestion of mountain mysticism. Certainly in a magazine which circulated among the Imperial Princes, he expressed what many mountain lovers feel. "The mountains", wrote Prince Chichibu, "stand as the symbols of Eternal Life, and serve as the expression of a mighty Spiritual Being".

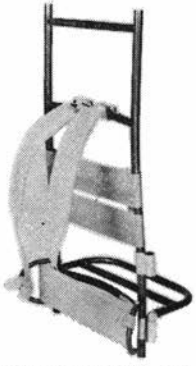

山に賭ける男が選ぶ……
MIZUNO
世界の四大スポーツ品メーカー
美津濃
MIZUNO

クライマーの肌が感じとった信頼。エバニュー・ショイゴ機能を提案

この機能性…

ショイゴは、登山には欠く事の出来ない用具の一つです。技術・体力・精神力・装備・すべてが厳しい自然の中では必要になってきます。
腰ベルトと腹ベルトが一対のため身体に良くフィットするショイゴ、バック内に型くずれのしないフレームの入ったもの、キャスター付で引いて歩けるもの、背ベルト、腰ベルトはむれないように網目になっているもの等、いろいろな機能を兼ね備えたカラフルなショイゴもお好みに応じてお選び下さい。

バックパック花のシリーズ
- ●バックパックS〝リンドウ〟
- ●バックパックL〝コマクサ〟
- ●バックパックM〝クロユリ〟
- ●ショイゴ　〝尾瀬〟
- ●ベビーキャリー〝ネムノキ〟



- ● ショイゴ〝剛　力〟
- ● ショイゴ 調 節 式
- ● ボール式 ショイゴ

エベレスト南壁で活躍

EVER NEW
エバニュー

山とスキーの専門店

片桐

キスリング
門田ピッケル
〃 アイゼン
夏冬用テント

M·KATAGIRI SINCE 1914 TOKYO JAPAN

東京都文京区湯島3－38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) { 1794番 / 6680番

登山とスキーの
日本最古の専門店

好日山荘

東京店
〒104 東京都中央区銀座3-5-7
☎03(561)3600·(567)9031
スキーショップ☎03(561)0966

吉祥寺店
〒180 東京都武蔵野市吉祥寺本町1-19-1
吉祥寺近鉄5F ☎0422(21)3331内線3318

大阪店
〒530 大阪市北区曽根崎上1-47
☎06(364)0933代
登山プロショップ 芳沢ビル1F
スキーショップ マルビル1F
豊中市千里中央 セルシー1F
☎06(833)0123

福岡店
〒812 福岡市博多区須崎町1-4
☎092(281)3440

山友社 たかはし

登山・スキー靴

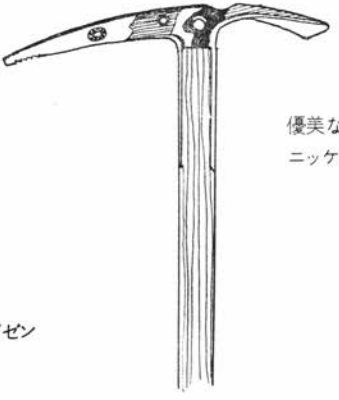
四谷本店
新宿区三栄町3
TEL(351)1912,7432

八重洲口
中央区八重洲1-5-11
TEL(271)1560,8575

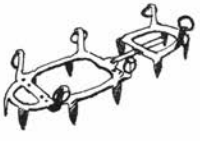
新宿ステーションビル4階
サービスショップ
TEL (352) 6564

SAPPORO KADOTA

古くて 新しい 門田



優美な曲線と素晴らしいバランス
ニッケル クローム モリブゼン鋼



ニッケル クローム鋼 プレスアイゼン
フリーサイズ

札幌 門田製作所

全国有名山専門店
でお求めください。

40年の前進史

マナスル型高所用天幕考案

1952年日本山岳会マナスル偵察隊
全装備納入以来高所用天幕専門
製作・海外遠征隊には各方面より
御使用頂き御高評頂いて居ります

吉田テント

吉田喜義商店

東京都杉並区桃井1丁目3番3号
電話 東京 (399) 2548 (398) 8469 (夜間)

信頼のブランド

●キャラバン・シューズ

デラックス	¥ 5,300
スタンダード	¥ 4,900
メイト	¥ 4,300
ポピュラー	¥ 4,000
ジュニア	¥ 3,000

●カネカロン・シュラフ

ハイサマー	¥ 5,500
スリーパー	¥ 6,500
ヒユツテ	¥ 7,500
ベースキャンプ	¥ 9,800
ハイキャンプ	¥11,000
ポーラー	¥12,000

●登山用ナイロン製品

●ホステリング・シューズ

●キャラバン・エアーマット

●革登山靴・グランジュッタ

●アルプカン・羽毛製品

株式会社 **キャラバン**

〒170 東京本社　東京都豊島区巣鴨1－25－7　☎ (03)944－2331(代)
〒564 大阪支店　大阪府吹田市芳野町1番4号　☎ (03)386－0451(代)
〒062 札幌営業所　札幌市豊平区美園一条6－47　☎(011)822－8664(代)

最前線志願ザンター登攀用羽毛服

様々な山行形態を考える時、最も相応しい装備は、自ずと異なります。日本の冬山でもヒマラヤでもアルプスでも常に一歩先んじた機能性を……
こんな装備を念頭にザンターでは商品の専門化と多様化に努めています。

●登攀用羽毛服(上・下)

着丈は長く、前合わせは並列ボタンとし、
使い易い脇ポケット、ズボンの前チャック、
ニッカの紐締めジャージ等々、全て厳冬期登攀
と海外遠征を対称に作られた、行動用羽毛服です。
従来の重く動きにくい装備から、暖かく、軽快な登攀用
羽毛服とシングルヤッケのコンビネーションは必ず専門
登山家を満足させます。
(上)重量 540g：紺：L・M
(下)重量 420g

ZANTER

●主要取り扱い品目

羽毛服，パンタロン，アンダーウェア，シュラフ，
半シュラフ，コンパクトシュラフ，ベスト各種

株式会社ザンター

〒154 東京都世田谷区野沢2—20—1　TEL 03—410—8808(代)

良いものは…新しい
流行に媚びず，　伝統に固執せず！

Jockey

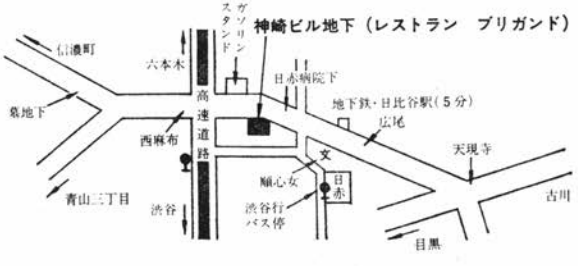
#615 アンデスカスタム　　#627 マカルーカスタム

東京 ジョッキースポーツ株式会社 蔵前

山賊料理

本格的スイス料理(フォンデュ)をお味わい下さい
小宴会・御会食等受け賜わります

＊交　通
地下鉄　日比谷線広尾下車
バス　渋谷→日赤産院下車
〃　〃→西麻布下車



Brigand
レストラン ブリガンド

港区西麻布4・5・2　ＴＥＬ(407)3009・3006

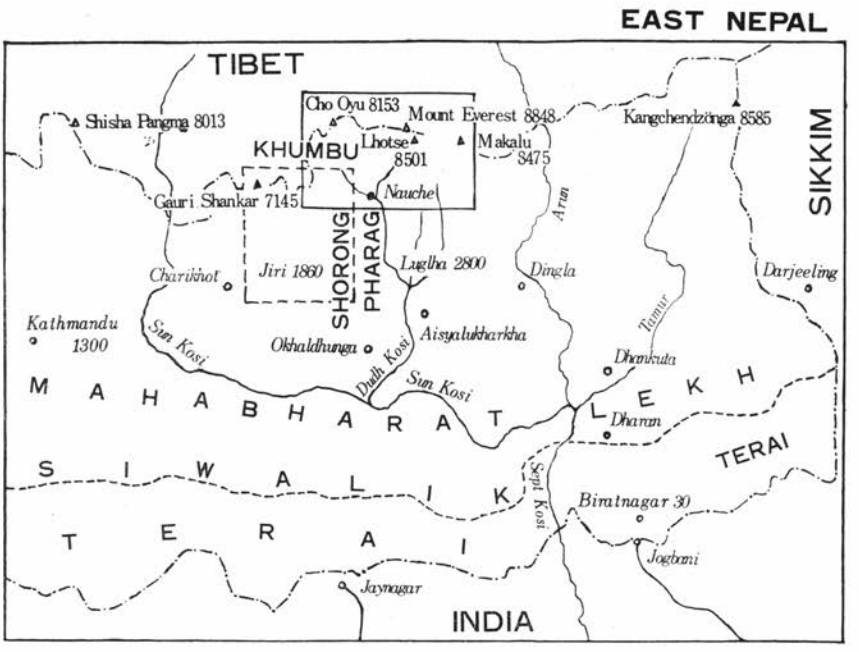
無謀厳禁。安全登攀。

厳然と立ちはだかる岩壁に、高度な技術で挑んだとしても、無理な行動は禁物。クライマーの手足ともなる用具も、正しい使い方と安全登攀があればこそ生きるものです。東京トップでは科学的究明と実用経験をもとに、クライマーの信頼に答えられる登攀用具を開発しております。

ザイル“ガイド” ￥15,200

11㎜×40ｍ，ブレード編タイプ
静的引張強さ　2.700㎏
破断伸度35%　重量3.2㎏

東京トップ
本　社：東京都台東区台東1-37-7　☎03(834)5521
営業所：大阪市天王寺区松ヶ鼻町27　☎06(772)1901



——Khumbu Himal (Mt. Everest) (1/50000) ····¥3,020
(送料¥85)

--------Rolwaling Himal (Gauri Shankar)
with the western sheet of Lapchi Kang Nepal
(1/50000) 2sheets (1974) set···¥5,590
(送料¥85)
(Forschungsunternehmen Nepal, München)

待望のロールワリング・ヒマール(ガゥリサンカール)1／50000 が入荷しました。
直接、お買い求めの方は、東京・渋谷パルコまで。郵送ご希望の方は下記宛現金書留にて送料を含めてお申し込み下さい。(二点セットの場合は送料¥115です。)

MAP HOUSE CO, LTD

5th Floor Travel Saloon
Shibuya PARCO
15-1 Udagawa-cho,
Shibuya-ku, Tokyo.
150

株式会社
マップハウス
東京都渋谷区宇田川町15-1
渋谷パルコ 5F 〒150
TEL 03／464／6867
年中無休
AM10:00～PM8:00

SGS-2247

飲んで
呑まれない
ために

飲みすぎ、二日酔は、お酒のよさをすべて帳消しにしてしまいます。
お酒に呑まれないコツといえば、平凡なようでも、一諸にほどよく食べること。
それに、お酒の前後の新グロンサン錠が悪酔い・二日酔いを防ぎます。疲れもとるグロンサン効果を、お役立てください。

●適応症
疲労回復　二日酔　食欲不振　肝機能障害
妊娠悪阻　神経痛　リウマチ　脚気　湿疹
薬物中毒　自家中毒　耳鳴　夜尿症

疲労回復・二日酔に
新グロンサン®錠 内服液

中外製薬株式会社

古本の買入と販売

山岳書
動植物書
全集・叢書
錦絵・和本
名士の書簡
色紙・短冊

地方も出張します

〒101
東京都千代田区神田神保町一ノ三
(有)悠久堂書店
電話（二九一）〇七七三番
〇九二〇番

岩波新書

一冊二三〇円
このマークで表示

ヒマラヤ登攀史 第一版 深田久弥著
フランス隊のアンナプルナ征覇を皮切りに、神々の座ヒマラヤの黄金時代が始まる。本書は、この山と人との壮絶な闘いの歴史を綴る

パタゴニア探検記 高木正孝著
日本・チリ合同探検隊が友情に結ばれつつ南米の南端パタゴニアの前人未踏の大氷河地帯を突破し処女峰アレナーレスに登頂した記録

山の思想史 三田博雄著
かつての危機の時代のように、いま再び「自然にかえれ」と唱えられている。山に関わる様々な人物の心をたどる山の近代日本思想史

わたしの山旅 槇有恒著
文字通り山に生きた登山家の回想記。登山の経験を語る淡々たる筆の運びの中に自然や人生について鋭い洞察が示され深い感動をよぶ

南極越冬記 西堀栄三郎著
日本人として初の南極越冬をなしとげた西堀隊長の日記。現在も続いている越冬観測のパイオニアとしての喜こびと苦しみが語られる

東京千代田一ツ橋
振替〈東京〉二六〇
岩波書店

世界の「山」に関する資料でしたらぜひ丸善へ。本

世界各国における，あらゆる分野の最新の知識・情報を集めた丸善。山岳関係においても和・洋書に読物，写真集，地図，ガイドブック類を常時豊富に取揃えております。特に地図に関しては充実した品揃えで，《外国地図は丸善》とまで定評をいただいております。

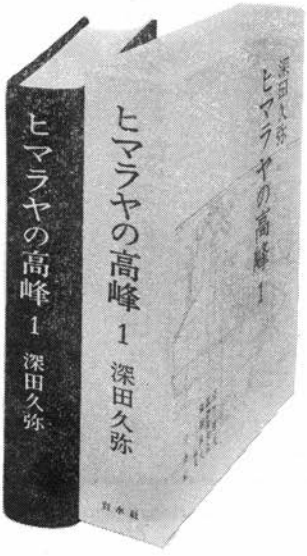
Ⓜ丸善
〔〒103〕東京都中央区日本橋2－3－10 ☎(03)272－7211／振替東京5番
支店・営業所－東京(お茶の水・丸の内・浜松町)・札幌・旭川・仙台・横浜・静岡・名古屋・金沢・京都
大阪(谷町筋五・梅田)・神戸・姫路・岡山・松山・広島・福岡・長崎・鹿児島・沖縄／ニューヨーク
■丸善洋書コーナー：東京駅大丸・新宿伊勢丹・池袋芳林堂・横浜高島屋

深田久弥

ヒマラヤの高峰 全3巻

望月達夫・諏訪多栄蔵・雁部貞夫／編集

A5判・総布装箱入／図版多数　各巻定価4800円



第1巻
エヴェレスト／カメット
ティリチ・ミール／アビ
ナンダ・デヴィ／ジャヌー
チョゴリザ／ヒマルチュリ
アンナプルナI峰
ゴザインタン／ドウナギリ
スターリン峰／ヌン
チョモラーリ／など

第2巻
ケー・トゥー(K2)
シニオルチュ／カイラス
ガネッシュ・ヒマール
バルトロ・カンリ／ナンパ
ビッグ・ホワイト・ピーク
ランタン・リルン
ナンダ・コット
ヒドゥン・ピーク／など

第3巻
カンチェンジュンガ
バルンツェ／チョモレンゾ
ボベーダ／カン・グル
ダウラギリI峰
カンチェンジャウ
ディラン／ヌンプール
ニルギリ／アララット
タルン・ピーク／など

エルゾーグ／近藤 等訳
処女峰アンナプルナ
最初の八〇〇〇米峰登頂
¥800

ボニントン／山崎安治訳
アンナプルナ南壁
¥1800

オッジョーニ／横川文雄訳
わが触れし岩膚
若きアルピニストの手記
¥1000

ボナッティ／近藤 等訳
わが山々へ
¥1500

レビュファ／近藤 等訳
星と嵐—六つの北壁登行—
¥900

スレッサー／坂下心一訳
レッド・ピーク
ソ連最高峰登頂記
¥1200

近藤 等著
アルプスの空の下で
¥2300

山崎安治著
日本登山史
¥1600

三田幸夫・近藤 等編
世界の山々 全2巻
各3500

日本山岳会編
登山技術 全3巻
各¥700

101
東京都千代田区神田小川町3 **白水社** 振替東京33228／電話291—7811

全冊A5判上製箱入

われわれはなぜ山に
登るのだろうか
都会の騒音の中で
ただ一人生命をみつ
めるとき
限りない山の魔力が

われわれの心に
呼びかけてくる
だから山男たちは
今日も山を想っている

ベースボール・マガジン社

書店にない場合でも注文されると取りよせてくれます。

垂直のかなた ある6級クライマーの手記

ジョルジュ・リヴァノス著／安川茂雄訳／一、四〇〇円／発売中／フランスの代表的クライマーの遅しい意志の軌跡

エヴェレストの魅惑

グャン・シン著／野間寛二郎訳／一、四〇〇円／発売中／インド第一次エヴェレスト遠征隊長の日記に基づいた長い困難な旅

プモ・リ 地上最美の山

ゲルハルト・レンザー著／織方郁映、橋本信共訳／一、六〇〇円／発売中／ドイツ・スイス合同ネパール・ヒマラヤ遠征隊の七一四五m峰初登頂記。登路選定までの苦心、氷壁と絶壁を前にした絶望と不安

未知の山へ

ウィルフリッド・ノイス著／野間寛二郎訳／九〇〇円／発売中／エヴェレスト初登頂に重要な役割を演じ、マチャプチャリの登攀隊長として活躍し、62年に惜しくも夏山で死んだ山の詩人ノイスが残したトリボル初登頂記！

雲の中の九ヵ月

サー・エドモンド・ヒラリー著／丹部節雄訳／一、二〇〇円／発売中／一九六〇年から六一年にかけて、著者が率いたヒマラヤ科学登山隊の越冬、高地生理学などの貴重なデータ

一九六三年 アメリカ隊 エヴェレスト登頂記

ジェームス・アルマン著／丹部節雄訳／発売中／三、八〇〇円／ディレンファース隊記録

チャムラン ヒマラヤの詩と真実

岡本丈夫、久木村久、安間荘、鈴木良博共著／一、四〇〇円／発売中／エヴェレストと並ぶ名峰チャムランに挑み初登頂を果たした北大ヒマラヤ遠征隊の人間的な記録！

ダウラギリ登頂

マックス・アイゼリン著／横川文雄訳／一、六〇〇円／発売中／地上に残された最高の未踏峰ダウラギリ…この山をめざす一九六〇年スイス隊はただひたすらに

伝統ある山と渓谷社の雑誌・図書

現代に自然を求める山仲間の月刊誌

山と渓谷 yama-kei

毎月15日発売〈普通号〉４５０円

ワイド判になった『ヤマケイ』は、あなたの山仲間。技術、用具、案内などすべての点で確実なリーダーです

山を真摯に考える本格派のための専門誌

岩と雪

隔月〈奇数月〉発売　６００円

つねに登山界の現状を冷静な眼で直視する《岩と雪》。号を追うごとに、ますますその評価は高まっています

登山者のための **地形図読本**
五百沢智也著　著者の広い見識と多数の図例で解説する地図入門書　定価 850円

登山者のための **気象学**
山本三郎著　多くの気象遭難例から考える山岳気象解説書の決定版　定価 480円

現代登山技術
H・フーバー著／横川文雄監訳　ヨーロッパの岩と氷の新技術を紹介する　近刊

増補 **日本の岩場**
第２次ＲＣＣ編　代表的な岩場 140ルートを図とグレード表で紹介　定価 700円

モン・ブラン山群 特選 100 コース
G・レビュファ著／近藤等訳　岩と雪のコースを写真と文でガイド　定価5300円

ヒマラヤ・トレッキング
五百沢智也著　詳細な地図と写真、絵で案内する夢あふれるヒマラヤの旅　近刊

佐貫亦男のアルプ日記
佐貫亦男著　無限の自由を求めて歩く、軽妙洒脱なアルプス一人旅　定価 800円

嵐の大地 パタゴニア探検 1958～1962
E・シプトン著／田村協子訳　未踏のパタゴニア氷陸探検行の記録　定価1200円

山と渓谷社／〒105 東京都港区芝大門1-1-33／図書目録『窓』進呈

茗渓堂の山の本

森林・草原・氷河　加藤泰安　1500円
すこし昔の話—千島・樺太・札幌・信濃—　初見一雄　1200円
原野から見た山　坂本直行　4200円
山の古典と共に　大島堅造　1500円
雪山・藪山　川崎精雄　1200円
雪原の足あと　坂本直行　2800円
日本の山旅　足立源一郎スケッチ帖　3600円
屋久島—美しい豊かな自然—　赤星　昌　480円
山に忘れたパイプ　藤島敏男　2500円
ブータン感傷旅行　小方全弘　980円
未踏の山河—シプトン自叙伝—　大賀二郎・倉知敬訳　1900円
登頂ゴジュンバ・カン　高橋　進　900円
南極新聞—1956・7年—　南極研究会　600円
日高山脈　北大山の会　2200円
山岳　日本山岳会　62年版2000円／63年版2200円／64年版2000円
65年版2000円／66年版2300円／67年版2500円
山岳総索引　日本山岳会　1000円
山日記—1975年版—日本山岳会　900円　（予価）
山　—日本山岳会々報—　一部100円
山で唄う歌—1集・2集—　戸野　昭・朝倉　宏
1集240円・2集280円
田中正造の人と生涯　雨宮義人　1900円
幻露抄　堀口大学　20000円
朱唇紅瞼抄　堀口大学　2600円
遙かなる未踏の尾根　マカルー登山隊報告書　4800円
いろりばた　南会津山の会　1900円
我がスキーシュプール　麻生武治　3400円

株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二—一電話（〇三）二九一—九四四二振替口座東京二四七二三
●ご希望の方に既刊解説総目録を送呈します

造園実務集成 全6巻

庭園篇 全3巻完結

編纂 斉藤勝雄〈日本造園士会副理事長〉

1、庭園設計の実際 価二、〇〇〇円

2、庭園施工の実際 価三、七〇〇円

3、庭園地被と植物病虫害 価二、五〇〇円

公共造園篇 全3巻

監修 北村信正〈日本造園学会副会長〉

1、計画と設計の実際 価三、〇〇〇円

2、造園施工の実際 価四、〇〇〇円

3、造園管理の実際 8月中旬刊

造園技術の真髄を解明！

●本書の特色

- 「庭園篇」「公共造園篇」ともに、設計・施工・監(管)理の3巻からなる造園実務についての初めての集成である。
- 理解しやすいように実例を多くあげ、写真・図版を豊富に挿入。
- 造園についての豊富な知識、技術を持つ各分野の第一人者を結集し、各執筆者の経験・理論をもとに詳述し、平易に説明することに留意した。
- 今後の都市計画、環境作りに欠くことのできない都市公園・自然公園・児童遊園など、また学校、工場、リクリエーション施設の造園実務の座右の書となる。

理工学書新刊

交通工学ハンドブック
同研究会編 A5・¥4800

構造実験と構造設計
梅村 魁 他著 B5・¥2800

上水道流量表
内藤幸穂 著 B5・¥2000

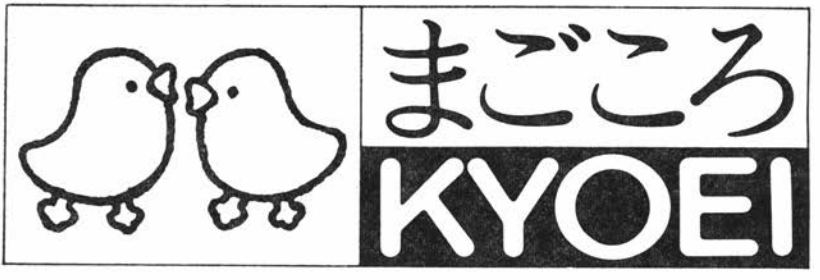
建築用セラミック材料
素木洋一著 A5・¥2500

フィルダムの設計および施工
山口柏樹／大根義男 共著 B5・¥6000

有機フッ素化学(II)
酒井温良著 A5・¥8000

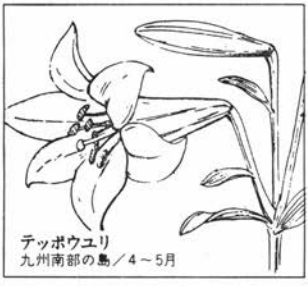
東京・港・赤坂1－3－6 **技報堂** (電) 585－0166・振替東京10

共栄火災は
まごころを
大切にします。

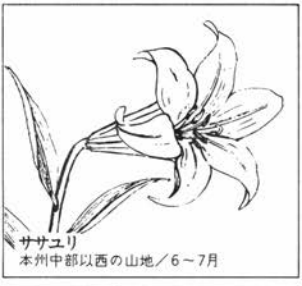


●「まごころ」は共栄火災の新しい企業スローガンです。
共栄火災海上保険相互会社

日本全国で
一年じゅう咲いている花



テッポウユリ
九州南部の島／4～5月



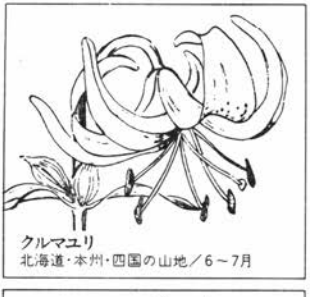
ササユリ
本州中部以西の山地／6～7月

オトメユリ
東北地方の山地／6～7月

ヤマユリ
近畿以北の山地／7～8月

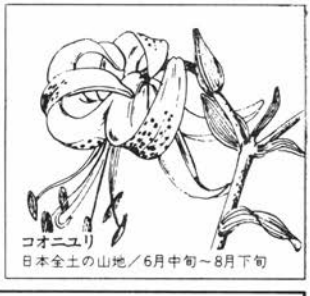
イワトユリ
紀伊半島以北の太平洋岸／7月上～下旬

ヒメユリ
本州・四国・九州／6～7月

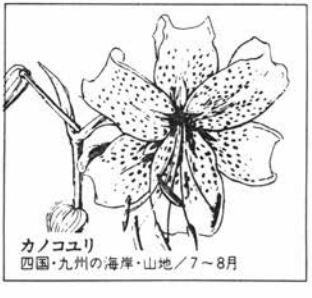


クルマユリ
北海道・本州・四国の山地／6～7月

オニユリ
日本全土／7月中・下旬



コオニユリ
日本全土の山地／6月中旬～8月下旬



カノコユリ
四国・九州の海岸・山地／7～8月

協和の支店は全国で220余ヵ店。
それぞれの地域で、みなさまのくらし、
みなさまの事業の
よきアシスタントとして、
いっしょうけんめい努力しています。
シンボルはユリの花。
協和は、清潔で明るい銀行を
めざしています。

協和銀行

●**お気軽な海外旅行を**

どんなに旅慣れたお方でも海外旅行はなにかとめんどうなもの。まして視察研究留学の旅はなおさらです。煩雑な手続や日程作成、手配などはすべて専門家におまかせください。

海外一流業者と提携した日通観光のサービス網は、団体はもちろん、あらゆる旅行のお世話をいたします。

お問合せはお近くの日通支店観光係または左記の日通東京航空支店へどうぞ。

東京都港区新橋一―五―二

（電）　五七一・八四八一

日本通運

「山岳」投稿規定

一、投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要はない。
一、原稿の採否は「山岳」編集委員会で決定する。
一、原稿は返却しない。
一、研究並びに紀行には、その概要を付けること。
一、紀行にはなるべく概念図を添付すること。
一、写真は光沢印画紙に焼付け必ず説明を付けること。
一、地名、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ずふり仮名を付けること。
一、編集者は原稿の一部を削除または訂正することがある。
一、校正は編集者に一任されたい。

送り先　東京都文京区湯島一―六―一
（さくらビル内）
日本山岳会「山岳」編集委員会

編集委員
望月達夫
中島寛
原真
近藤信行

山岳　第六十八年（通巻一二七号）
一九七四年四月三十日発行
定価三〇〇〇円
東京都文京区湯島一―六―一（さくらビル内）
発行所　社団法人　日本山岳会
電話東京八一三局二二八六
振替口座　東京　四八二九番
編集兼発行者　日本山岳会内　望月達夫
印刷　株式会社　技報堂
写真版　京橋原色版印刷所
製本　株式会社　鈴木製本
東京都千代田区神田駿河台二ノ一
発売所　株式会社　茗渓堂
電話東京二九一局九四四二番
振替東京二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁ずる。

豊かな
生活環境を築きあげる……

(オーダー建材)

カーテンウォール
アルミサッシ
スチールサッシ
クールサッシ
NKウォール
防音壁
アルミキャスト

(標準建材)

PA－60シリーズアルミサッシ
PA－70シリーズアルミサッシ
PS－80Aスチールサッシ
マルチパーティション

(産業機械)

熱交換器(アライトロン)
各種工業用精密涙過装置
(NKフィルター)
プール用循環浄化装置
各種浄水・廃水処理装置
精密金型

(電機製品)

電気洗濯機
冷凍ショーケース
業務用自動食器洗滌機
連続自動洗米機

日本建鐵株式会社

取締役相談役　早川種三
東京都千代田区大手町２－６－２
ＴＥＬ　東京（270)6511(大代表)

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. LXVIII 1973